

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 3 —

福岡県京都郡豊津町所在遺跡群の調査

皆 見 遺 跡
カワラケ田遺跡
下 原 遺 跡

1991

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 3 —

福岡県京都郡豊津町所在遺跡群の調査

皆 見 遺 跡
カワラケ田遺跡
下 原 遺 跡



豊前京都平野全景（豊前国府推定地を中心に）



1) 皆見遺跡全景（南から、上方の橋右側が徳水川の上遺跡）



2) 皆見遺跡全景（北から）



1) 菅見遺跡北半部堅穴住居跡及び掘立柱建物群(真上から)



2) カワラケ田遺跡全景(南西から、右側は菅見遺跡)

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、一般国道10号線椎田バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を昭和61年以降実施して来ました。そして、昨年度までにその調査を終えた京都郡豊津町徳永～築上郡椎田町上の河内間10.3kmの工事も順調に進捗し、一般供用が、平成3年3月15日に開始される運びとなりましたことは、私共にとりまして誠に慶賀の念に堪えないところであります。

本書は、昭和62年度に調査を実施した豊津町所在の皆見、カワラケ田、下原遺跡の調査結果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第3集として取りまとめたものです。

発掘調査の報告として、満足いくものではありませんが、本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、文化財愛護思想の普及、さらには学術研究における活用の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査にあたり数々のご協力を頂いた日本道路公団福岡建設局椎田工事事務所、豊津町教育委員会をはじめ地元関係各位に対して、心から感謝申し上げます。

平成3年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例 言

1. 福岡県教育委員会は、昭和61年度より平成元年度に至るまで、日本道路公団から委託を受けて、一般国道10椎田バイパス建設で破壊される埋蔵文化財を発掘調査した。
2. 本書は、昭和62年度に実施した福岡県京都郡豊津町所在の皆見（AZAMI）遺跡、カワラケ田（KAWARAKETA）遺跡、下原（SIMO BARU）遺跡の発掘調査報告書であり、「一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」の第3集目にあたる。
3. 遺構の実測図は、調査担当者の緒方泉の他、西田大輔、田村悟、長家伸、野田徹、犬塚カヲル、荒巻朋子、田原フジ子の各氏が、遺物の整理、図面の整理、作成には、担当者の緒方の他に、岩瀬正信、豊福弥生、江上佳子、福嶋育子、若松三枝子、原富子、鬼木つや子、平田春美、佐藤みゆき、関和江、森山シズ子の各氏が従事した。
4. 掲載写真のうち、遺構を緒方が撮影したが、遺物の撮影は九州歴史資料館学芸第一課技術主査石丸洋氏にお願いした。
5. 鉄製品の保存処理は、九州歴史資料館学芸第二課参事補佐横田義章氏にお願いした。
6. 本書の執筆、編集は、緒方が担当した。

本文目次

第1章 はじめに

第1節 調査経過と調査組織	1
1. 昭和62年度の皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡の調査経過と調査組織	1
2. 平成2年度の報告書作成の経過と関係組織	6
第2節 遺跡の位置と環境	8
1. 遺跡の位置	8
2. 周辺の遺跡	8

第2章 皆見遺跡の調査

第1節 はじめに	15
第2節 遺構と遺物	15
1) 堅穴住居跡	15
2) 掘立柱建物	28
3) 柱列状遺構	40
4) 門状遺構	42
5) 井戸	42
6) 土壇	44
7) 溝状遺構	46
8) その他の遺構と遺物	50
第3節 小結	63

第3章 カワラケ田遺跡の調査

第1節 はじめに	67
第2節 遺構と遺物	67
1) 堅穴住居跡	67
2) 掘立柱建物	70
3) 土壇墓	72
4) 貯蔵穴	76
5) 落とし穴状遺構	81
6) 土壇	81

7) 溝状遺構	82
8) その他の遺構と遺物	84
第3節 小結	87
第4章 下原遺跡の調査	
第1節 はじめに	89
第2節 遺構と遺物	89
第3節 小結	90
第5章 おわりに	91

図版目次

- 巻頭図版1 豊前京都平野全景（豊前国府推定地を中心に）
- 巻頭図版2 1) 皆見遺跡全景（南から、上方の橋右側が徳永川の上遺跡）
2) 皆見遺跡全景（北から）
- 巻頭図版3 1) 皆見遺跡北半部堅穴住居跡及び掘立柱建物群（真上から）
2) カワラケ田遺跡全景（南西から、右側は皆見遺跡）

皆見遺跡

- 図版1 豊前国府推定地と周辺の遺跡
- 図版2 1) 皆見遺跡全景（南から京都平野をみる）
2) 皆見遺跡全景（北から）
- 図版3 1) 皆見遺跡全景（真上から）
2) 皆見遺跡全景（真上から）
- 図版4 1) 皆見遺跡北半部（真上から）
2) 皆見遺跡北半部東側台地を囲繞する2号溝状遺構（北西から）
- 図版5 1) 皆見遺跡南半部発掘調査風景（1987年8月）
2) 皆見遺跡北半部発掘調査風景（1987年11月）
- 図版6 1) 調査区南半部発掘状況（南から）
2) 調査区北半部発掘状況（西から、後方の土山は反転した排土）
- 図版7 1) 皆見遺跡北半部住居跡群、掘立柱建物群（真上から）
2) 1号堅穴住居跡（南から）
- 図版8 1) 1号堅穴住居跡カマド検出前状況（南から）
2) 1号堅穴住居跡カマド検出後状況（南から）
- 図版9 1) 2号堅穴住居跡（真上から）
2) 2号堅穴住居跡（南から、2号堅穴住居跡→4号溝状遺構）
- 図版10 1) 2号堅穴住居跡（東から、4号溝状遺構掘削後）
2) 2号堅穴住居跡（東から、土器類取り上げ後）
- 図版11 1) 3号堅穴住居跡カマド検出前状況（真上から）
2) 3号堅穴住居跡カマド検出前状況（東から）
- 図版12 1) 3号堅穴住居跡カマド検出後状況（東から）

- 2) 3号堅穴住居跡カマド (東から)
- 図版13 1) 3号堅穴住居跡 (カマド周辺遺物除去後、東から)
2) 3号堅穴住居跡 (カマド周辺遺物除去後、東から)
- 図版14 1) 3号堅穴住居跡下層 (東から)
2) 3号堅穴住居跡発掘作業風景
- 図版15 1) 4号堅穴住居跡 (真上から)
2) 4号堅穴住居跡 (南東から)
- 図版16 1) 6号堅穴住居跡カマド (南東から)
2) 6号堅穴住居跡カマド (南東から)
- 図版17 1) 6号堅穴住居跡カマド検出前状況 (真上から)
2) 6号堅穴住居跡カマド検出後状況 (南東から)
- 図版18 1) 6号堅穴住居跡カマド (南東から)
2) 6号堅穴住居跡カマド (南東から)
- 図版19 1) 6号堅穴住居跡カマド (北東から)
2) 6号堅穴住居跡カマド (北西から)
- 図版20 1) 6号堅穴住居跡カマド (支脚等除去後、南東から)
2) 6号堅穴住居跡カマド (支脚等除去後、南東から)
- 図版21 1) 1号掘立柱建物 (真上から)
2) 1号掘立柱建物 (東から)
- 図版22 1) 2号掘立柱建物 (真上から)
2) 2号掘立柱建物 (東から)
- 図版23 1) 3号掘立柱建物 (真上から)
2) 3号掘立柱建物 (東から)
- 図版24 1) 3号掘立柱建物 (東から)
2) 3号掘立柱建物柱穴位置確認状況 (東から)
- 図版25 1) 4号掘立柱建物 (真上から)
2) 4号掘立柱建物 (南から)
- 図版26 1) 5号掘立柱建物 (柱根検出時、東から)
2) 5号掘立柱建物 (柱穴完掘後、東から)
- 図版27 1) 6号掘立柱建物 (真上から)
2) 6号掘立柱建物 (南東から)
- 図版28 1) 7号掘立柱建物 (真上から)
2) 7号掘立柱建物 (南西から)

- 図版29 1) 8号・9号掘立柱建物、7号堅穴住居跡及び1号柱列状遺構(真上から)
2) 8号・9号掘立柱建物7号堅穴住居跡(南東から)
- 図版30 1) 4号・7号掘立柱建物(南西から)
2) 1号柱列状遺構及び8号・9号掘立柱建物(南東から)
- 図版31 1) 1号井戸(南東から)
2) 調査区南半部全景(南から)
- 図版32 1) 調査区南半部2号・3号溝状遺構(南から)
2) 調査区南半部2号溝状遺構検出大甕(南西から)
- 図版33 皆見遺跡出土土器1
- 図版34 皆見遺跡出土土器2
- 図版35 皆見遺跡出土土器3
- 図版36 皆見遺跡出土土器4
- 図版37 皆見遺跡出土土器5
- 図版38 皆見遺跡出土土器6、石製品1
- 図版39 皆見遺跡出土石製品2
- 図版40 皆見遺跡出土石製品3、土製品1
- 図版41 皆見遺跡出土土製品2
- 図版42 皆見遺跡出土土製品3
- 図版43 皆見遺跡出土青銅製品、硯、製塩土器、陶器
- 図版44 1) 椎田バイパス建設に伴い破壊される皆見遺跡、神手遺跡(北東から)
2) 皆見遺跡の発掘調査に参加したみなさん

カワラケ田遺跡

- 図版45 1) カワラケ田遺跡全景(南から)
2) カワラケ田遺跡全景(真上から)
- 図版46 1) カワラケ田遺跡全景と皆見遺跡(南から)
2) カワラケ田遺跡近景と皆見遺跡(南から)
- 図版47 1) カワラケ田遺跡北半部(真上から)
2) カワラケ田遺跡南半部(真上から)
- 図版48 1) 2号堅穴住居跡(南から)
2) 3号堅穴住居跡下層(東から)
- 図版49 1) カワラケ田遺跡貯蔵穴群(東から)
2) 1号貯蔵穴(東から)

- 図版50 1) 2号貯蔵穴(西から)
2) 3号貯蔵穴(東から)
- 図版51 1) 4号貯蔵穴検出状況(東から)
2) 4号貯蔵穴(西から)
- 図版52 1) 5号貯蔵穴検出状況(東から)
2) 5号貯蔵穴(西から)
- 図版53 1) 1号土壌墓(東から)
2) 2号・3号土壌墓(南から)
- 図版54 1) 4号土壌墓遺物出土状況(南から)
2) 4号土壌墓遺物出土状況(東から)
- 図版55 1) 1号掘立柱建物(東から)
2) 8号溝状遺構とピット44(南から)
- 図版56 1) 1号溝状遺構近景(南東から)
2) 1号溝状遺構近景(南東から)
- 図版57 カワラケ田遺跡出土土器 1
- 図版58 カワラケ田遺跡出土土器 2
- 図版59 カワラケ田遺跡出土土器 3
- 図版60 カワラケ田遺跡出土土器 4
- 図版61 カワラケ田遺跡出土石製品
- 図版62 カワラケ田遺跡出土磨製石器、土錘、青磁

下原遺跡

- 図版63 1) 下原遺跡全景(北西から)
2) 下原遺跡全景(南東から)
- 図版64 1) 下原遺跡近景(北西から)
2) 下原遺跡近景(南東から)

挿 図 目 次

第1図	国道10号線椎田バイパス路線図 (1/20,000)	2
第2図	皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡と周辺の遺跡分布図 (1/50,000)	10
皆見遺跡		
第3図	1号堅穴住居跡実測図 (1/60)	16
第4図	2号堅穴住居跡実測図 (1/60)	17
第5図	1号、2号、3号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	18
第6図	3号堅穴住居跡カマド実測図 (1/30)	18
第7図	3号堅穴住居跡実測図 (1/60)	19
第8図	3号堅穴住居跡下層実測図 (1/60)	20
第9図	3号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	21
第10図	4号堅穴住居跡実測図 (1/60)	24
第11図	5号堅穴住居跡実測図 (1/60)	25
第12図	6号堅穴住居跡実測図 (1/60)	26
第13図	6号堅穴住居跡カマド実測図 (1/30)	26
第14図	7号堅穴住居跡実測図 (1/60)	27
第15図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	28
第16図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	29
第17図	3号掘立柱建物実測図 (1/60)	31
第18図	4号掘立柱建物実測図 (1/60)	32~33
第19図	5号掘立柱建物実測図 (1/60)	33
第20図	2号、3号、5号掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)	34
第21図	6号掘立柱建物実測図 (1/60)	34~35
第22図	7号掘立柱建物実測図 (1/60)	34~35
第23図	8号掘立柱建物実測図 (1/60)	35
第24図	9号掘立柱建物実測図 (1/60)	36
第25図	10号掘立柱建物実測図 (1/60)	37
第26図	11号掘立柱建物実測図 (1/60)	38
第27図	12号掘立柱建物実測図 (1/60)	39
第28図	13号掘立柱建物実測図 (1/60)	40

第29図	1号柱列状遺構実測図 (1/60)	41
第30図	2号柱列状遺構実測図 (1/60)	41
第31図	1号門状遺構実測図 (1/60)	42
第32図	1号井戸実測図 (1/40)	43
第33図	1号井戸出土土器実測図 (1/3)	43
第34図	1号、3号、7号土壙実測図 (1/60)	45
第35図	1号～3号土壙出土土器実測図 (1/3)	45
第36図	1号、2号、4号溝状遺構及びピット7、99、131、151出土土器実測図 (1/3)	47
第37図	2号溝状遺構出土土器実測図 (1/6)	48
第38図	包含層出土土器実測図 (1/3)	53
第39図	包含層出土土器実測図 (1/3)	54
第40図	2号堅穴住居跡埋土、3号堅穴住居跡下層、7号堅穴住居跡、7号土壙出土土器 実測図 (1/4)	54
第41図	6号堅穴住居跡、ピット及び包含層出土土器実測図 (1/4)	55
第42図	皆見遺跡出土青銅製品、石製品、土製品実測図 (1/2)	57
第43図	2号、3号、4号、6号堅穴住居跡出土土器実測図 (1/3)	59
第44図	皆見遺跡出土土製品実測図 (1/2)	60
第45図	皆見遺跡出土石製品実測図 (1/2)	61

カワラケ田遺跡

第46図	1号堅穴住居跡実測図 (1/60)	68
第47図	2号堅穴住居跡実測図 (1/60)	69
第48図	1号～3号堅穴住居跡及びピット44出土土器実測図 (1/3)	70
第49図	4号堅穴住居跡実測図 (1/60)	70
第50図	3号堅穴住居跡実測図 (1/60)	71
第51図	1号掘立柱建物実測図 (1/60)	72
第52図	2号掘立柱建物実測図 (1/60)	73
第53図	1号～3号土壙墓実測図 (1/20)	74
第54図	1号土壙墓出土土器実測図 (1/3)	75
第55図	4号土壙墓実測図 (1/20)	75
第56図	1号、2号貯蔵穴実測図 (1/40)	76
第57図	2号堅穴住居跡、1号、2号、4号、6号貯蔵穴及び1号溝状遺構出土土器	

	実測図 (1/4)	77
第58図	3号貯蔵穴実測図 (1/40)	78
第59図	4号貯蔵穴実測図 (1/40)	78
第60図	5号貯蔵穴実測図 (1/40)	79
第61図	6号貯蔵穴実測図 (1/40)	80
第62図	1号落とし穴状遺構実測図 (1/20)	81
第63図	1号落とし穴状遺構、及びピット54、56、77、92出土土器実測図 (1/4)	82
第64図	3号土壇墓出土土器実測図 (1/3)	82
第65図	4号、5号溝状遺構出土土器実測図 (1/3)	83
第66図	2号堅穴住居跡及び6号貯蔵穴出土石斧実測図 (1/3)	84
第67図	カワラケ田遺跡石製品、土製品実測図 (1/2)	85

表 目 次

表 1	一般国道10号線椎田バイパス関係埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表	5
表 2	周辺遺跡一覧表	11

付 図 目 次

付図 1	皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡発掘区地形図 (1/2,000)
付図 2	皆見遺跡遺構配置図 (1/250)
付図 3	カワラケ田遺跡遺構配置図 (1/200)
付図 4	下原遺跡遺構配置図 (1/200)

第1章

はじめに

第1節 調査経過と調査組織

第2節 遺跡の位置と環境

第1章 はじめに

第1節 調査経過と調査組織

1. 昭和62年度の皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡の調査経過と調査組織

福岡県教育委員会は、一般国道10号線椎田バイパス（豊津町～椎田町間、10.3km）に関係する埋蔵文化財調査を日本道路公団から委託され、昭和61年度より開始した。これらの調査は、築上郡椎田町所在の石堂中後ヶ谷古墳群に始まり、平成元年度の築上郡築城町所在の安武深田遺跡の調査をもって終了している。発掘調査箇所は、24カ所に及び、調査面積は175,862㎡になった。

昭和62年度は、京都郡豊津町に所在する第1、2地点の調査が実施された（本報告書では、第2地点のみ取り上げる）。

本調査に先立ち、昭和61年3月3日から3月25日まで椎田バイパス全体にわたって分布調査が実施され、第2地点の分布面積は、約46,800㎡とされた（STA.4+80～STA.18）。

第2地点の調査は、昭和62年8月8日から開始したが、事前に試掘調査（バックフォー使用）を実施し、調査面積を確定することとした。

昭和62年7月に実施した試掘調査では用地買収が未解決な部分があるものの、第2地点は、道路や水路により6カ所（第2-A、B、C、D、E、F地点）に細分され、その調査面積は28,900㎡となることがわかった。

福岡県教育委員会は、日本道路公団から第2地点部分の工事着手を昭和62年9月以降とした旨の要望を受けていたが、昭和62年7月当時、福岡県教育委員会では、同じく日本道路公団から委託された九州横断自動車道関係の発掘調査に文化課職員の主力がさかれており、椎田バイパス関係への投入は困難な状態にあり、担当者1人を置くのが精一杯であった。そこで、福岡県教育委員会は、豊津町へ第2地点の何カ所かを再委託する形で調査が遂行できないかを打診した。豊津町は、この要請を快諾され、第2地点のうちB地点（調査面積11,000㎡、八ッ重遺跡）、C地点（調査面積3,300㎡、弓田遺跡）の調査に入ることとなった。調査を担当することになった豊津町教育委員会は、昭和62年10月14日～昭和63年2月13日まで発掘調査を実施して、その成果については、昭和63年3月31日刊行の「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告(1)」にまとめられている。

さて、第2地点の残り部分を担当することになった福岡県教育委員会は、まずA地点（調査面



第 1 図 国道10号線椎田バイパス路線図 (1/200,000)

積9,000㎡、^{あざみ}皆見遺跡、STA. 4 + 80～STA. 7)の調査を昭和62年8月8日から実施した。^{はらい}祓川右岸の河岸段丘上(標高約30m)に立地する調査区内では竪穴住居跡6軒、掘立柱建物13棟、溝5条、井戸1基、土壌、ピット等を検出した。調査は12月7日をもって終了した。検出した遺構の時期は弥生時代から歴史時代に及ぶ。

また、県道節丸・新田原停車線をはさんで、西側に立地するF地点(調査面積3,000㎡、カワラケ田遺跡、非常駐車帯部分)の調査は、皆見遺跡の遺構検出が終了し、実測作業に入る段階の11月14日から開始し、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物2棟、貯蔵穴6基、落とし穴状遺構1基、土壌墓3基、溝8条、土壌、ピットなどを検出した。検出した遺構の時期は、弥生時代～奈良時代に及ぶ。調査は年を越した昭和63年1月25日に終了した。その間、E地点の調査も実施した。ここは、「福岡県遺跡分布地図(行橋市・京都郡編)」に掲載される「峰遺跡(遺跡番号920010)」であったので、試掘調査の際、家屋撤去が間に合わず、遺構の有無の確認が出来なかったにもかかわらず、E地点(調査面積650㎡)とし、調査対象地に挙げた。家屋撤去の完了した11月22日、バックフォアにより遺構検出を図ったが、旧祓郷村役場のコンクリート基礎が深く入りこみ、攪乱を甚大に受けており、遺構の検出は全くなかった。

D地点(調査面積2,000㎡、下原遺跡、STA.17+40～STA.18)の調査は、F地点(カワラケ田遺跡)の調査が終了した11月25日の翌日、26日から実施した。築城町との境界付近の低台地上に立地する下原遺跡の調査では、西側の小谷方向へ走る時期不詳の小溝5条とピットを検出するに止まった。

また、第1地点(調査面積2,000㎡神手<KOUDE>遺跡、STA.0～STA.1)の調査は、その後、引き続いて2月5日から始まり、竪穴住居跡8軒、貯蔵穴18基、土壌墓9基、石蓋土壌墓2基、土壌15基、溝5条、横穴式石室1基、ピット等を検出した。検出した遺構の時期は、弥生時代前期末から平安時代に及んだ。調査は3月31日をもって無事終了した。

以上が、昭和62年度実施した皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡の調査の経過である。

本年度の整理・報告書作成作業は、日本道路公団から、早期一般供用開始を目指して、発掘調査最優先の要望が出され、第2地点終了後、すぐに第1地点の調査に着手し、年度末までそれが継続したこともあり、来年度以降へ見送りとなった。

しかし、本年度に第2-B・C地点(八ッ重遺跡、弓田遺跡)の調査を再委託され、担当した豊津町教育委員会は、その成果を「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告」第1集として刊行している。

なお、発掘調査にあたっては、日本道路公団、豊津町教育委員会、福岡県教育庁京築教育事務所から多大なご援助・ご協力を得た。さらに、調査作業員として参加頂いた地元関係各位のご協力により、8月の暑い盛りから2月の雪模様の時期まで、大きな事故もなく無事調査を遂行できた。ここに記して感謝の意を表したい。

昭和62年度の調査関係者は下記の通りである。

日本道路公団福岡建設局

局 長	杉田 美昭	
次 長	菱刈 庄二 (前任)	吉岡 康行
総務部長	安元 富次	
管理課長	森 宏之 (前任)	副島 紀昭
管理課長代理	三野 徳博	

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所 長	山田 将博	
副所長 (事務担当)	淵脇 志水 (前任)	佐藤 健一郎
副所長 (技術担当)	坂牧 嵩三	
庶務課長	塩川 正基 (前任)	樫川 敏博
用地課長	二神 鉄男	
工務課長	佐々木 俊治	
築城工事区工事長	山口 宗雄	
椎田工事区工事長	黒田 義樹	

福岡県教育委員会

総 括	教育長	竹井 宏
	教育次長	大鶴 英雄
	指導第二部部長	大平 岩男
	文化課課長	窪田 康徳
	文化課課長補佐	平 聖峰
	文化課課長技術補佐	宮小路 賀宏
	文化課参事補佐	栗原 和彦
	文化課参事補佐	柳田 康雄
庶 務	文化課庶務係長	加藤 俊一
	文化課事務主査	竹内 洋征
調 査	文化課調査班総括(兼)	柳田 康雄
	同 技 師	緒方 泉 (現京築教育事務所主任技師)

調査補助 田村悟 (同志社大学、現直方市教育委員会)、西田大輔 (奈良大学、現新宮町教育委員会)、長家伸 (九州大学、現福岡市教育委員会)、野田徹 (佐賀大学)。

第1表 一般国道10号線権田バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内容	分布面積 (㎡)	調査地区と面積			備考	報告書
					61年度(㎡)	62	63		
1	神手遺跡	豊津町徳永	弥生・古墳集落、墓地	1,200	試掘(1,200)	1,000		完了	
2-A	皆見遺跡	" 皆見	弥生・古墳・奈良集落	9,600	試掘	9,600		完了	3集
2-B	八ツ重遺跡	" "	" "	11,000	"	11,000		豊津町委託完了	1集
2-C	弓田遺跡	" 下原	" "	3,300	"	3,300		"	1集
2-D	下原遺跡	" "	" "	2,000	"	2,000		完了	3集
2-E		" "	" "		"	2,000		遺構なし完了	—
2-F	カワラケ田遺跡	" 皆見	" "	3,000	"	2,900		完了	3集
3		築城町船迫	古墳溝	4,683			4,683	完了	
4		" "			試掘(3,600)			遺構なし完了	—
5	双子池遺跡	" 安武	弥生散布地	4,547	試掘	4,547		完了	
6-A	安武・土井の内遺跡	" "	弥生・古墳集落	5,300	"	800	4,500	完了	
6-B	安武・深田遺跡	" "	弥生・古墳集落、墓地	22,000	"	11,000	11,000	完了	5集
7-A	壱ノ神遺跡	" 赤幡	中世石積	450	"		450	完了	
7-B	赤幡・森ヶ坪遺跡	" "	古墳～平安集落	20,800	"		2,000	完了	
7-C	赤幡・十双遺跡	" 赤幡広末	弥生・古墳集落	9,500	"		7,500	完了	
8	広末・安武遺跡	" 広末	" "	5,900	"		4,900	完了	4集
9	広幡城遺跡	" "	弥生・中・近世城跡	13,800	"		13,800	完了	
10	山崎遺跡	椎田町水原	縄文・奈良集落	7,200	7,200			完了	
11	尾久保屋敷遺跡	" "	古墳集落	160	160			完了	
13	寺尾遺跡	" 日奈古	" "	5,800	5,800			完了	
16		" 山本			試掘			遺構なし完了	—
18		" 上り松			"			遺構なし完了	—
21	石堂中後ヶ谷古墳群	" 石堂	古墳墓地	19,500	19,500			完了	2集
22	菜切古墳群	" 福間	" "	11,000	11,000			完了	2集
23	頭無古墳群	" 山添	" "	15,000	15,000			完了	2集
24		" 石堂				422		遺構なし完了	—
			計	175,740	(4,800) 58,660	32,222	44,547	42,433	

発掘調査にあたっては、以下の方々の協力を得た。記して感謝の意を表したい。

加藤弘義、高見勳太、椎野鬼怒丸、杉野政一。

井手綾子、末永節子、三井恭子、田村キミ子、小池富久美、末松浅枝、松田美智江、末松エミ子、原田和江、上田スガ子、原田典子、樋口多美子、高橋由利子、秋吉カネ子、中島さえ子、奥村マツ子、仲律子、谷口八重子、池永なみ、荒巻朋子、西森ヒサ子、石川かつこ、石川たまえ、松本多貴子、森元なつこ、吉永奈緒美、石川早智恵、竹本美由紀、松尾チツ代、野田加代子、犬塚カヲル、田原フジ子。

発掘調査では、福岡県文化財保護指導委員である一川淳江、川本義継、宮本工、濱嶋三司の諸先生及び文化課の高橋章技術主査（当時京築教育事務所技術主査）、末永弥義（豊津町教育委員会）、長嶺正秀（苅田町教育委員会）の諸氏より、有益な御指導、御助言があった。

また、調査期間中、来跡され、太宰府史跡等での成果をもとに、掘立柱建物遺構の調査方法を適確にアドバイスして下さった故森田勉技術主査（当時九州歴史資料館調査課、平成元年6月7日逝去）の笑顔が今でも脳裏から離れない。ここに記して、氏のご冥福を祈りたい。

2. 平成2年度の報告書作成の経過と関係組織

発掘調査最優先のため、報告書作成作業が先送りになっていた椎田バイパス関係の報告書は、平成元年度刊行された第2集「石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群」に引き続き、平成2年度には、第3集「皆見遺跡・カワラケ田遺跡・下原遺跡」、第4集「広末・安永遺跡」そして第5集「安武・深田遺跡」が刊行された。

なお、平成元年度の発掘調査終了後、工事が急ピッチに進められ、平成3年3月15日には、豊津町徳永から椎田町上の河内間10.3kmが有料区間として一般供用された。

平成2年度の報告書作成にあたっての関係者は、下記の通りである。

日本道路公団福岡建設局

局 長	白井 信（前任）	中島 英治
次 長	進 哲美（前任）	高野 武
総務部長	堀 義任（前任）	岡本 房徳
管理課長	副島 紀昭（前任）	江良 信弘
管理課長代理	荒木 恒久（前任）	塚本 文康

日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所

所 長	大島 勲
副 所 長	国本 忠敬

庶務課長	樫川 敏博
用地課長	益岡 政夫 (平成2年11月1日付けで組織廃止)
工務課長	飯田 文夫
築城工事区工事長	山口 宗雄 (平成2年11月1日付けで組織廃止)
椎田工事区工事長	黒田 義樹 (平成2年7月1日付けで組織廃止)

福岡県教育委員会

総括	教育長	御手洗 康
	教育次長	濱地 甫伯
	指導第二部部長	月森 精三郎
	文化課課長	六本木 聖久
	文化課課長補佐	安野 義勝
	文化課課長技術補佐	石松 好雄
	文化課参事補佐	柳田 康雄
	文化課参事補佐	井上 裕弘
	文化課参事補佐	副島 邦弘
庶務	文化課管理係係長	池原 脩二
	文化課管理係主任主事	沢田 俊夫
整理	京築教育事務所主任技師	緒方 泉
整理補助	岩瀬正信、豊福弥生、江上佳子、福岡育子、森山シズ子、原富子、若松三枝子、 鬼木つや子、尾座本康子。	

最後に、報告書作成について、京築教育事務所の飯田昭所長、大尾勝美副所長、また所属課である社会教育課百留隆男課長、伊崎俊秋主任技師をはじめ社会教育課員の方々には格別のご配慮をいただいた。

また、報告書作成における事務処理等では、文化課の沢田俊夫主任主事ならびに日本道路公団福岡建設局椎田バイパス工事事務所庶務課の樫川敏博課長に多大なご迷惑をかけてしまった。

ここに記して感謝の意を表したい。

第2節 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置 (図版1、第1～2図)

皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡は、それぞれ福岡県京都郡豊津町大字皆見字峰、大字皆見字カワラケ田、大字下原に所在する。これを、日本道路公団椎田バイパス中心杭番号等で表せば、皆見遺跡がSTA5+40～7、カワラケ田遺跡が非常駐車帯部分、下原遺跡がSTA17+40～18となる。

これらは、祓川右岸の河岸段丘及び、英彦山彦山系から周防灘へ放射状にのびる舌状丘陵の先端部の低台地上に立地する。

豊津町は、人口10,000人弱で福岡県東部、京都平野南端に立地し、北東側に開口した平野部は周防灘に臨んでいる。町域には洪積台地が広く分布し、町中央部には、祓川が流れ、北西部には行橋駅－田川伊田駅間を往復する平成筑豊鉄道が通る。周囲には、行橋市、京都郡犀川町、築上郡築城町がある。

近年、復元修理が成された豊前国分寺三重塔は、九州に現存する木造の仏塔三宇（他は清水寺天台三重塔、大分県龍源寺浄鎮三重塔）の1つで、町のシンボルとなっている。

2. 周辺の遺跡 (第2図、第2表)

皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡は、祓川右岸河岸段丘及び英彦山系からのびる舌状丘陵の先端部の低台地に立地する。そこからは、北側に広がる京都平野を一望することが出来る。

豊津町は、肥沃な京都平野をかかえた自然環境に恵まれた場所に立地するため、古代より数多くの遺跡や史跡が残されている。中でも、古墳時代の数多くの古墳群、奈良～平安時代にかけての豊前国府、豊前国分寺等の史跡、明治時代初期の豊津藩関連の史跡は著名である。

この項では、周辺の遺跡について、既に「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第1集－弓田・ハツ重遺跡一」や「豊前国府」（豊津町文化財調査報告書第3～5集、第8～9集）に詳述されているため、近年椎田バイパス建設工事に伴い発掘調査が進められ、多大な調査成果をあげた「徳永川の上遺跡」を基軸としながら、周辺の遺跡の位置付けを行っていきたい。

徳永川の上遺跡は、皆見遺跡と同じ祓川右岸の河岸段丘上に位置し、豊津町大字徳永に所在する。福岡県教育委員会は、一般国道10号線椎田バイパス建設に伴い、その事前調査を1988年6月から1990年7月まで実施した。

その結果、この遺跡からは、縄文時代の落とし穴状遺構、井戸、土壇、弥生時代の竪穴住居

跡、貯蔵穴、墳墓群、古墳時代の方墳、円墳、小石室、中世の溝、土壇、地下式横穴、土壇墓、木棺墓などが検出され、隣接して、同じく椎田バイパス建設関係で事前発掘調査された神手(KOUDE)遺跡、鋤先(SUKISAKI)遺跡、居屋敷(IYASHIKI)遺跡を含む約15haの複合遺跡、いわゆる徳永遺跡群を構成することがわかった。

以下、徳永川の上遺跡の各時期の遺構をみていきたい。

旧石器、縄文時代では、ナイフ形石器、細石刃の出土もあるが、遺構としては、落とし穴状遺構41基、井戸15基が検出された。落とし穴状遺構からは、打製石鏃、井戸からは縄文時代後期の土器片、そして包含層からは押型土器片、石斧、石匕、石鏃等が出土しており、今後も河岸段丘上の調査では注意が必要であろう。また、祓川をさかのぼった節丸西遺跡では(1989年に県営圃場整備関係で発掘調査)、縄文時代後期の24軒の円形、方形2タイプの住居跡を検出している。周防灘沿岸の河川流域の扇状地上に発達する縄文時代後期の集落(築上郡大平村土佐井原遺跡^{註1}、同村原井三ツ江遺跡^{註2}、豊前市小石原泉遺跡^{註3}、同市中村石丸遺跡^{註4}、築上郡椎田町石町遺跡^{註5}、同町山崎遺跡^{註6}、築上郡築城町松丸遺跡^{註7}、京都郡苅田町浄土院遺跡^{註8}等)の1つに加えられた。

弥生時代の貯蔵穴は袋状になるもので、円形のものが前期後半、長方形のものが前期末～中期初頭であった。

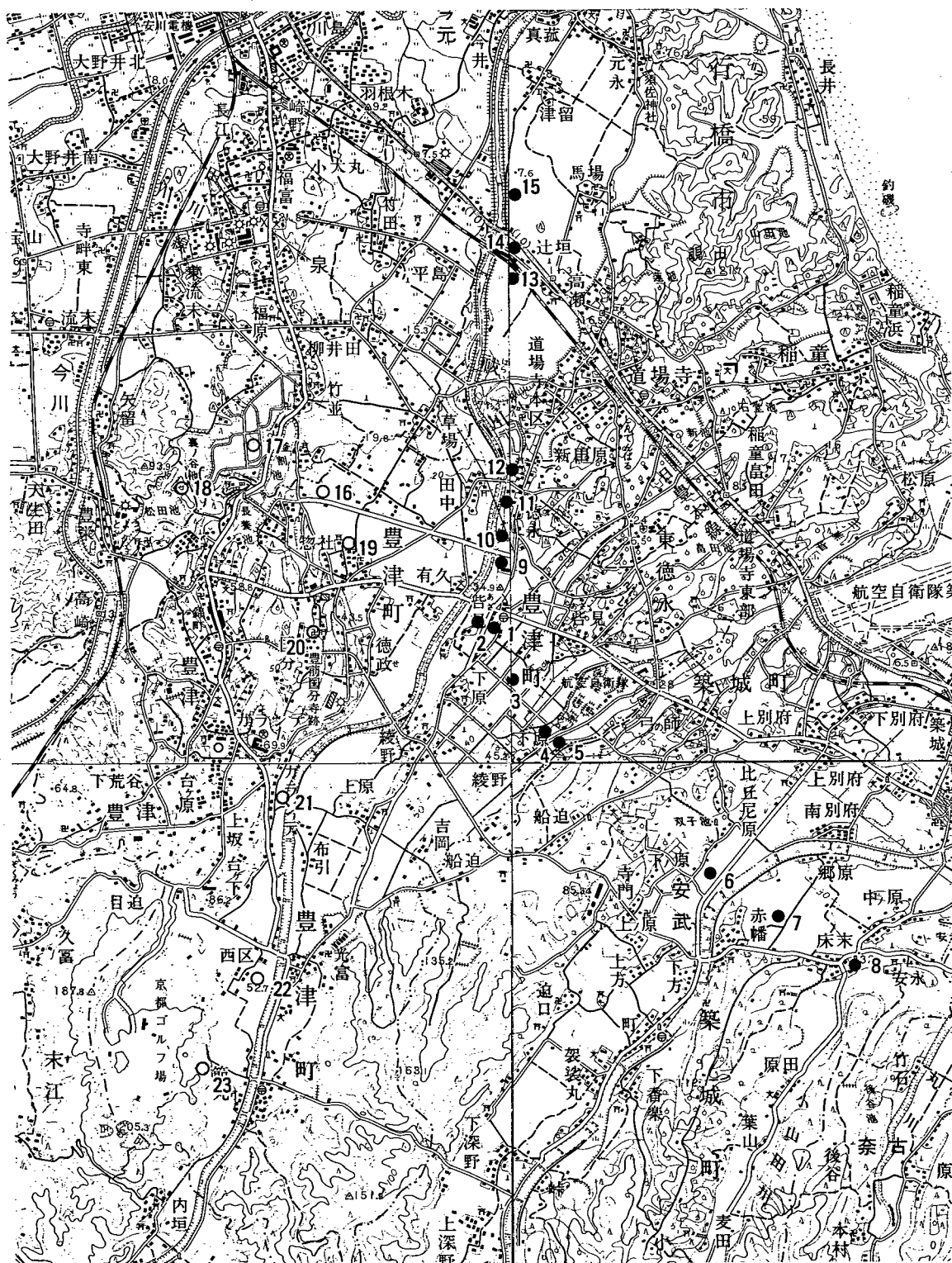
南側に隣接する神手遺跡からは、弥生時代前期末の円形の貯蔵穴20基程が卵形状のV字形環濠で区画されている。このような例は、苅田町葛川遺跡^{註9}でもみられる。また、皆見遺跡からは、弥生時代中期初頭の長方形の貯蔵穴6基も検出されている。

竪穴住居跡は、弥生時代中期と終末期のものである。中期のものは円形と方形の2タイプがあり、多量の土器と炭化米が出土している。終末期のものは方形でベッド状遺構を備えている。鉋、手鎌などの鉄製品や管玉が出土した。この終末期の竪穴住居跡16基は全部火災にあい、柱などが焼け落ちていた。

神手遺跡でも後期から終末期にかけての竪穴住居跡が検出されている。

墳墓群は、弥生時代終末期の竪穴住居跡を埋め戻した後に、分布地域を重複させて弥生時代終末期から古墳時代初期にかけて営造されている。墳墓群のうち、墳丘が残っているものは4基、周溝を残すものは6基あり、当時10基以上の墳丘基が存在していたことは確実であり、このような墳丘墓が群として確認されたのは、九州で初めてである。

墳丘墓は、円形、楕円形、隅丸長方形のものがあり、墳丘内には石棺、石蓋土壇、土壇、甕棺、木棺等の各種の墓制を5～12基含んでいる。1～4号墳丘墓のうち、最初に造られたのは3号墳丘墓で弥生時代後期に属する。最後期のものは1号墳丘墓と割竹木棺墓で、古墳時代初期に属する。しかし、大半は弥生時代終末期のものである。こうして、当該期の墳墓群の変遷過程が看取できる貴重な資料となった。



1. 皆見遺跡 2. カワラケ田遺跡 3. ハツ重遺跡 4. 弓田遺跡 5. 下原遺跡 6. 安武深田遺跡 7. 赤幡森ヶ坪遺跡
8. 安永広末遺跡 9. 神手遺跡 10. 徳永川の上遺跡 11. 鋤先遺跡 12. 居屋敷遺跡 13. 辻垣ヲサマル遺跡
14. 辻垣長通遺跡 15. 津留遺跡 (以上 国道10号線バイパス関係調査遺跡)
16. 幸木遺跡 17. 竹並遺跡 18. 矢留遺跡 19. 豊前国府推定地 20. 豊前国分寺 21. 上坂廃寺 22. 節丸西遺跡
23. 北垣古墳群

第2図 皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡と周辺の遺跡分布図 (縮尺1/50,000)

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	時代	文献
1	皆見遺跡	集落	京都府豊津町大字皆見	弥生～中世	椎田バイパス第3集
2	カワラケ田遺跡	〃	〃	〃	〃
3	ハツ重遺跡	〃	〃	〃	椎田バイパス第1集
4	弓田遺跡	〃	〃 大字下原	古墳～平安時代	〃
5	下原遺跡	〃	〃	—	椎田バイパス第3集
6	安武深田遺跡	〃	築上郡築城町大字安武	弥生～奈良時代	〃 第5集
7	赤幡森ヶ坪遺跡	〃	〃 大字赤幡	縄文～奈良時代	平成元年度調査
8	安永広末遺跡	墓地	〃 大字広末	縄文～弥生時代	椎田バイパス第4集
9	神手遺跡	集落・墓地	京都府豊津町大字徳永	弥生～古墳時代	昭和62年度調査
10	徳永川の上遺跡	〃	〃	縄文～中世	昭和63年度～平成2年度調査
11	鋤先遺跡	〃	〃	縄文～近世	平成2年度調査
12	居屋敷遺跡	窯跡・墓地	〃	弥生～古墳時代	平成元年度調査
13	辻垣ヲサマル遺跡	集落	行橋市大字辻垣	〃	昭和62年度調査
14	辻垣長通遺跡	〃	〃	〃	昭和63年度調査
15	津留遺跡	〃	〃 大字津留	〃	行橋バイパス第1集
16	幸木遺跡	散布地	京都府豊津町大字国作	奈良～平安時代	町報 第2集
17	竹並遺跡	集落・墓地	行橋市大字竹並	弥生～奈良時代	竹並遺跡調査会
18	矢留遺跡	集落	〃 大字矢留	弥生～古墳時代	県報 第85集
19	豊前国府推定地	官衙	京都府豊津町大字国作	奈良～平安時代	町報第3～5, 8～9集
20	豊前国分寺	寺院	〃 大字国分	〃	町報 第1集
21	上坂廃寺	〃	〃 大字上坂	〃	豊津町誌
22	節丸西遺跡	集落	〃 大字節丸	縄文時代	町報 第9集
23	北垣古墳群	墓地	〃	古墳時代	平成2年度調査

1号墳丘墓は、突出部、貼石を有する12×9mの長方形墳で、主体部は箱形木棺1基である。同時期の割竹木棺墓も同じように、副葬品が鉈、鉄斧等と極めて少ない。ところが、弥生時代の墳墓は、副葬品が鏡、装身具類、鉄製品、供献土器等豊富で、その保有率も高いのが特徴である。特に、石棺墓の大半が盗掘されていたにもかかわらず、石蓋土墳墓や土墳墓から6面の鏡が出土した意義は大きい。また、鉄製品では、弥生時代最大級（長さ11.6cm）、最多（5本）の鉄製釣針、また最大級（長さ15cm以上）の鉄鏃6本が出土している。

副葬品の総数は以下の通りである。

- 鏡 龍虎鏡、連弧文鏡、方格規距鏡片、画像鏡片、不明鏡片、小型仿製鏡片
- 玉類 勾玉4、管玉49、丸玉1、小玉200以上(それぞれの材質は、ガラス、ヒスイ、メノウ、碧玉がある)
- 鉄器 剣6、素環頭刀子3、鏃14、刀子17、鉈3、斧3、手鎌1、釣針5
- 供献土器等

さて、徳永川の上遺跡の所在する京都平野では、^{おぼせ}小波瀬川、^{ながお}長狭川、^{ほらい}今川、^{はらい}祓川の河川が周防灘に注いでいる。それぞれの河川には、弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての石棺墓、石蓋土墳墓群が存在し、そのうち、首長のシンボルである鏡を有する集団墓は、大きく7グループに分かれる。

Aグループ（長狭川中流域、吉田神社境内古墳、^{註10}前田山遺跡、^{註11}下稗田遺跡^{註12}）

Bグループ（長狭川上流域、^{註13}上所田遺跡）

Cグループ（今川上流域、^{註14}続命院遺跡、^{註15}山鹿石ヶ坪遺跡、^{註16}本庄遺跡）

Dグループ（祓川河口、周防灘海岸線、^{註17}石並遺跡）

Eグループ（祓川右岸中流域、徳永川の上遺跡）

Fグループ（祓川左岸上流域、^{註18}平遺跡）

Gグループ（祓川右岸上流域、^{註19}タカデ遺跡）

京都平野において、鏡六面が集中して保有される遺跡は、徳永川の上遺跡以外にはみられない。このことは、京都平野を貫流する祓川を中心とした特定集団の展開が想定され、今後、圃場整備事業等に伴う徳永地区の発掘調査では注意を要する。

また、墓制の中で、この徳永川の上遺跡では、長形状の墓壇の対角線上に棺が作られる特異墓制がみられる。このような例は、現在までのところ、周防灘沿岸を中心に展開している。北から、北九州市山崎八ヶ尻遺跡^{註20}、高津尾遺跡^{註21}、行橋市竹並遺跡^{註22}、築上郡大平村穴ヶ葉山墳墓群^{註23}、内陸部に入り田川郡赤村合田遺跡^{註24}、嘉穂郡嘉穂町原田遺跡^{註25}、そして大分県宇佐市京徳遺跡^{註26}、日田市草場第二遺跡^{註27}である。これらの墓制は、弥生時代終末期に出現し、古墳時代初期まで継続するものであるが、傾向としては、周防灘沿岸部から内陸部へと拡散していくようである。しかし、それらはそれぞれの遺跡の中で、主流を成していくことはないようである。

古墳時代では、4基の方墳と18基の円墳そして4基の小石室が検出された。

4基の方墳のうち、3号墳は、その周溝から仿製鏡1、勾玉4、小玉約450、鉄鋤先、鉄刀子、
竪櫛6が出土し、5世紀初頭に位置づけられる。

18基の円墳は、後世の開墾等で、ほとんど壊され、石室は腰石部を残すものが多数を占めた。
しかし、床面から出土する遺物はとても豊富で、金環、銀環、勾玉、切子玉、丸玉、小玉、鉄
鏃、馬具、須恵器、土師器などがある。出土した土器から、6世紀後半から8世紀前半にかけ
て造墓活動が行われていることがわかった。

石室形態は正方形、略正方形、縦長方形、T字形の4タイプ、羨道の形態は両袖、片袖、無
袖の3タイプ、石室入り口方向は、西、南、南西、南東の4タイプがある。

石材は祓川の河原石を使用する。

その他、いくつかの円墳では、墓道が長く祓川に伸びているものがあり、祓川を利用しての
葬送儀礼が推定される。

周辺では、神手遺跡で円墳1基が調査されている。また福岡県文化財分布地図（行橋市、京
都郡編）には、神手遺跡と同一の古墳群を構成すると思われる吹ヶ上古墳群（1～4号墳、豊
津町皆見字吹ヶ上）、また徳永地区には、京塚1～3号墳がある。さらに、現在の字名にも、八
十塚、四十塚などの名前が残っていることから、この地域には、7世紀代をピークに造墓活動
が進められる群集墳が存在していたことが推測される。

さて、これらの古墳群の存在は、7世紀末から、豊前地域に建立される古代寺院（田川市天
台寺、註28犀川町木山廃寺、註29勝山町菩提廃寺、註30行橋市椿市廃寺、註31豊津町上坂廃寺等）や豊前国府、
そして8世紀後半代の豊前国分寺の成立に何らかの関係をもつ集団が存在していたことを物語
る。特に、豊前地域の古代寺院から出土する古瓦は新羅、百濟、高句麗系のもものが集中する傾
向がある。この状況は、7世紀代からの渡来人集団の大量移入と軌を一にしている。

皆見遺跡では6世紀後半から7世紀前半にかけての集落が検出されている。また、1988年に
豊津町が調査した豊前国府推定地内では7世紀末を中心とする100軒程の竪穴住居跡が検出され
ている。さらに祓川右岸の居屋敷遺跡では6世紀後半～7世紀前半にかけての横穴墓10基が、
左岸の竹並遺跡では、5～8世紀の948基の横穴墓と6世紀前半から7世紀前半にかけての13基
横穴式石室が調査されている。7世紀後半代からの人口急増に伴う拠点集落域は、祓川右岸か
ら左岸へと移行したように思われる。

また、横穴式石室と横穴墓の同時期存在が認められる竹並遺跡や徳永遺跡群での両者の被葬
者の階層差の検討など課題は多い。

歴史時代では、鎌倉時代に古墳が再利用されるようになる。それらは、墓碑として五輪塔を
有するものが多い。また、これと共存する多数の溝、柱穴、長方形土壇、円形土壇、土壇墓、
木棺墓が検出された。出土した遺物には、青磁・白磁等の輸入陶磁器、土師器、鉄刀、鉄釘、

石臼、五輪塔、鉄滓などがある。

カワラケ田遺跡では、12世紀後半の1～4号土壌基が検出されている。また、豊前国府推定地内からは、10～12世紀の掘立柱建物が検出されている。

このようにみえてくると、祇川兩岸の沖積平野及び洪積台地には、旧石器・縄文時代から連続とした拠点集落が展開していたことがわかり、まさにこの地一帯が「豊津」（豊かな港）という名が示すような、海上交通の要衝として、周防灘文化圏に立脚したクニを形成していたことを窺わせるのである。

註)

1. 高橋章編「土佐井地区遺跡」『大平村文化財調査報告書』第6集、1990年。
2. 小池史哲編「原井三ツ江遺跡」『大平村文化財調査報告書』第5集、1989年。
3. 平成2年度、豊前市教育委員会調査、整理中。
4. 昭和63年度、福岡県教育委員会調査、整理中。
5. 高橋章編「石町遺跡」『椎田町文化財調査報告書』第2集、1988年。
6. 昭和61年度、福岡県教育委員会調査、整理中。
7. 平成2年度、築城町教育委員会調査、整理中。
8. 浄土院遺跡調査団編「浄土院遺跡」、1972年。
9. 酒井仁夫編「葛川遺跡」『苅田町文化財調査報告書』第4集、1984年。
10. 森貞次郎「福岡県粕屋町上大隈平塚古墳」『九州考古学』11・12、1961年。
11. 長嶺正秀編「前田山遺跡」『行橋市文化財調査報告書』第19集、1987年。
12. 長嶺正秀・末永弥義編「下稗田遺跡」『行橋市文化財調査報告書』第17集、1985年。
13. 定村貢二・渡辺正気「福岡県京都郡勝山町上所田の石蓋土壌墓」『九州考古学』7・8、1959年。
14. 長嶺正秀「豊前国における古鏡について」『亀田南遺跡』（勝山町文化財調査報告書第1集）、1981年。
15. 小田富士雄「豊前京都郡発見の三重墓」『古代学研究』20、1975年。
16. 行橋市教育委員会「行橋市の遺跡」1963年。
17. 註1に同じ。
18. 児玉真一「福岡県京都郡豊津町平遺跡発見の箱式石棺墓と副葬遺物」『九州考古学』55、1980年。
19. 平成2年度、犀川町教育委員会調査、整理中。
20. 平成元年度、(財)北九州市教育文化事業団調査、整理中。
21. (財)北九州教育文化事業団の柴尾俊介氏よりご教示を得た。
22. 竹並遺跡調査会編「竹並遺跡」1979年。
23. 緒方泉編「土佐井ミソソデ遺跡、穴ヶ葉山4号墳、穴ヶ葉山墳墓群」『大平村文化財調査報告書』第7集、1991年。
24. 井上裕弘編「合田遺跡」『赤村文化財調査報告書』第1集、1985年。
25. 福島日出海編「嘉穂地区遺跡群IV」『嘉穂町文化財調査報告書』第7集、1987年。
26. 宇佐市教育委員会の小倉正五氏よりご教示を得た。
27. 註26に同じ。
28. 横田賢次郎編「天台寺跡」『田川市文化財調査報告書』第6集、1990年。
29. 浜田信也編「木山廃寺跡」『犀川町文化財調査報告書』第1集、1975年。
30. 木下修、高橋章編「菩提廃寺」『勝山町文化財調査報告書』第2集、1985年。
31. 石松好雄、高橋章編「椿市廃寺」『行橋市文化財調査報告書』第8集、1980年。
32. 酒井仁夫・高橋章「豊前地方の8世紀代の軒瓦について」『九州考古学』59、1984年。

第2章

皆見遺跡の調査

第1節 はじめに

第2節 遺溝と遺物

第3節 小 結

第2章 皆見遺跡の調査

第1節 はじめに

皆見遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字皆見字峰、カワラケ田に所在する。

この遺跡は、第3章で報告するカワラケ田遺跡（皆見遺跡とは、県道節丸・新田原停車場を挟んで西側に位置する。）と同じく、祓川右岸の河岸段丘上（標高30m付近）に立地する。

調査地点は、従来、水田及び畑として耕作され、中央部に北東から南西に走る小谷があった。この小谷は、湧水が多く湿地帯状を呈していた。

調査期間は、昭和62年8月8日から昭和62年12月7日までの122日間で、調査面積は約9,000㎡であった。工事工程との関係から、調査区を、南・北に分け、まず南半部より開始した。

調査の結果、検出出来た遺構には、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物13棟、柱列状遺構2基、門状遺構1基、井戸1基、溝状遺構5条、土壇、ピット等があった。そして、それらより出土した土器等から、弥生時代から奈良時代の複合集落であることがわかった。

第2節 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

調査区内からは、計6軒の竪穴住居跡を検出した。

1号竪穴住居跡（図版6～8、第3図）

1号竪穴住居跡は、北東から南西に走る小谷部により分離される調査区南東側の台地に位置する。一部は調査区域外にのびる。

この住居跡は、壁体が15cm程しか遺存しておらず、かなりの削平があったと思われる。

その大きさは、一辺3m前後の方形プランで壁体高は15cmを測る。

壁体周囲には、壁小溝は見られない。しかし壁体崩落防止のために設置する側板固定用の直径10cm前後の小杭列が検出された。

支柱穴は、4本柱になると推定されるが、1本の柱穴は、調査区域外にある。

柱穴間の距離は、P1-P2間で1.8m、P1-P3間で1.4mと異なり、住居跡の平面プランの方形とは異なり、長方形配置になる。

柱根痕跡は比較的明瞭で、直径15cm程の柱根が確認された。

カマドは、北西側壁体に付設する突出型のものと推定されるが、ほとんど破壊され、両袖部も残存せず、直径10cm程の円柱状の支脚石が検出されたにすぎない。

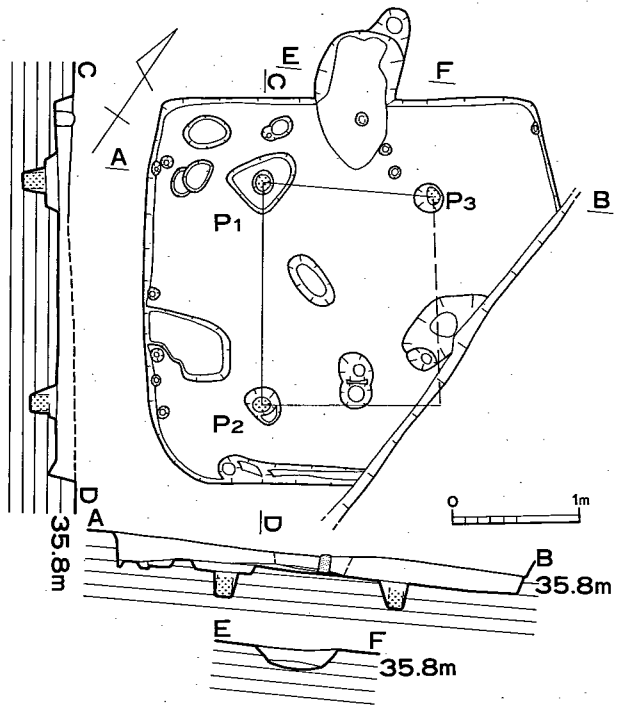
出土遺物（図版39、40、第5、42、45図）

第5図4は須恵器の杯身である。かえりは短く内傾度を増し、受け部は若干水平方向に突出するにとどまる。口径12.6cm、器高3.3cmを測る。

第42図9は滑石製紡錘車である。上面幅2.4~2.8cm、下面幅3.9~4.3cm、高1.5cmを測る。

第45図5は磨石である。2分の1程が残存する。安山岩製。

第45図4はカマド内安山岩支脚である。長13.2cmで隅丸三角形を呈する。



第3図 1号竪穴住居跡実測図 (1/60)

2号竪穴住居跡（図版9~10、第4図）

2号竪穴住居跡は、調査区北端側に位置し、北西から南東に走る4号溝により、その中心部を切られる。また、北東から南西に開析される小谷部へ向かって、斜めに削平が進捗し、東側の壁体部分はほとんど残っていない。

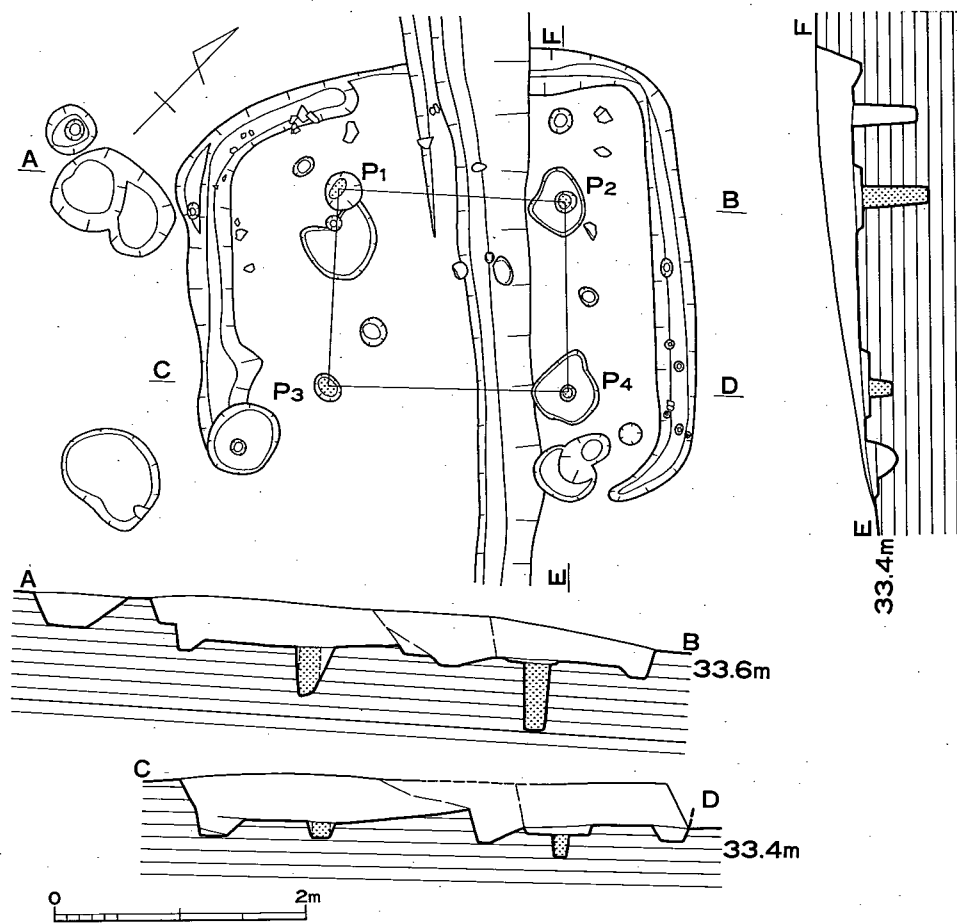
この住居跡は、部分的に削平を受け、その規模について、正確な数値を把握することができないが、長軸4m×短軸3.5mの長方形プランになると推定できる。

主柱穴は4本柱となる。柱穴間距離は、P1-P2間で1.8m、P2-P4間で1.5mを測り、住居跡平面プランと同じ長方形配置になる。

壁体は、残存状態の良い北西側で数値を取ると、高さ30cm程を測る。

壁体下には、幅20~40cm、深さ10cm程の小溝が巡る。北西側壁体下では、小溝の断絶が確認できた。

カマドは、住居跡覆土及び床面から、土玉、土製模造鏡、手づくね土器などが出土したことから、元来、付設されていたと思われるが、北西側壁体中央に4号溝が走るため、その詳細については不明である。



第4図 2号竪穴住居跡実測図 (1/60)

柱根痕跡は比較的明瞭で、直径20cm前後の柱根を確認した。

出土遺物 (図版36, 41, 42、第5, 40, 44図)

第5図5は須恵器の杯蓋である。体部中央に一条の凹線がめぐる。口径13.2cm、器高4.5cm程を測る。外面には砂粒の付着が著しい。

土製模造鏡は3点出土した。第44図14は径4cm程の不整円形を呈する。16は長軸5cm、短軸4.5cmの不整六角形を呈する。15は径4.6cmの不整円形を呈する。共に指で摘みあげた紐があり、16は一方からの穿孔がある。鏡面は反り上がる。

土玉は5点(第44図1~5)出土した。径2.3~2.6cm程の不整円形の玉で、穿孔は一方から行って貫通させている。また穿孔は、必ずしも玉の中央部に成されず、任意の位置にある。穿孔面は平坦になる。

手づくね土器は2点(第44図11~12)出土した。共に口径3.1cm。器高は2.3cmと3.1cmになる。

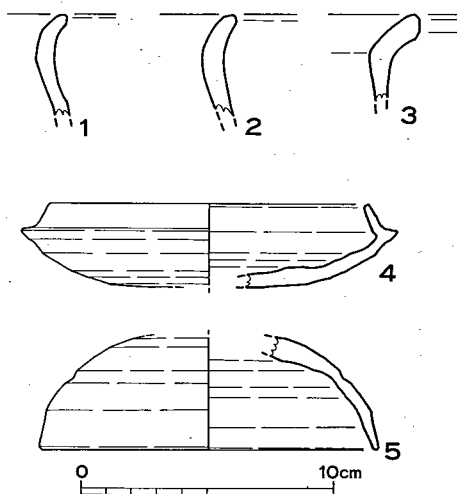
その他、2号竪穴住居跡埋土からは、弥生土器が3点(第40図)出土している。

74は長頸壺の口頸部片である。体部と頸部の境界から緩やかに外変しながら口縁部へ達する。端部は丸くおさまる。口径13cmを測る。

78は底部片である。底部は若干ふくらみ気味になる。内面全体は黒化している。底径7cmを測る。

80は高杯の口縁部片である。体部から立ち上がり気味に「く」の字に曲折させて、口縁部に達する。

これらの土器は、弥生時代後期前半に属するもので、付近に関連する遺構があったと推定される。



第5図 1号、2号、3号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)

3号竪穴住居跡(図版11~14、第6~8図)

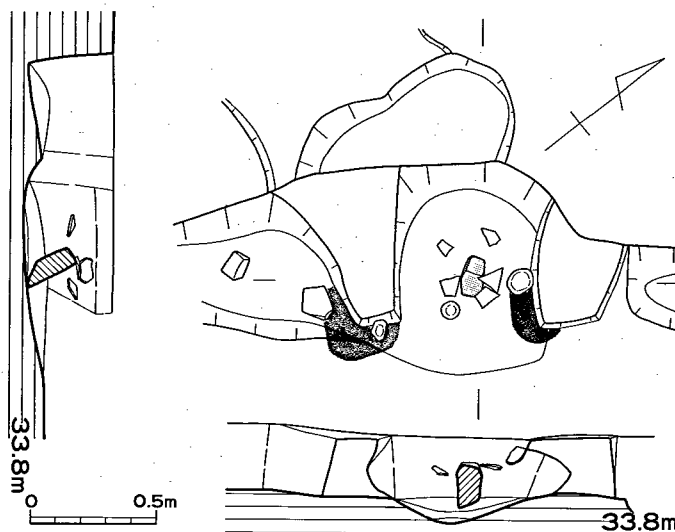
3号竪穴住居跡は、調査区北端側に位置し、東側5m離れて、2号竪穴住居跡があり、また西側10m離れて、4号竪穴住居跡がある。

この住居跡は、一辺5m程の隅丸方形プランで、支柱穴は4本柱である。西側壁体中央部に突出型カマドが付設する。

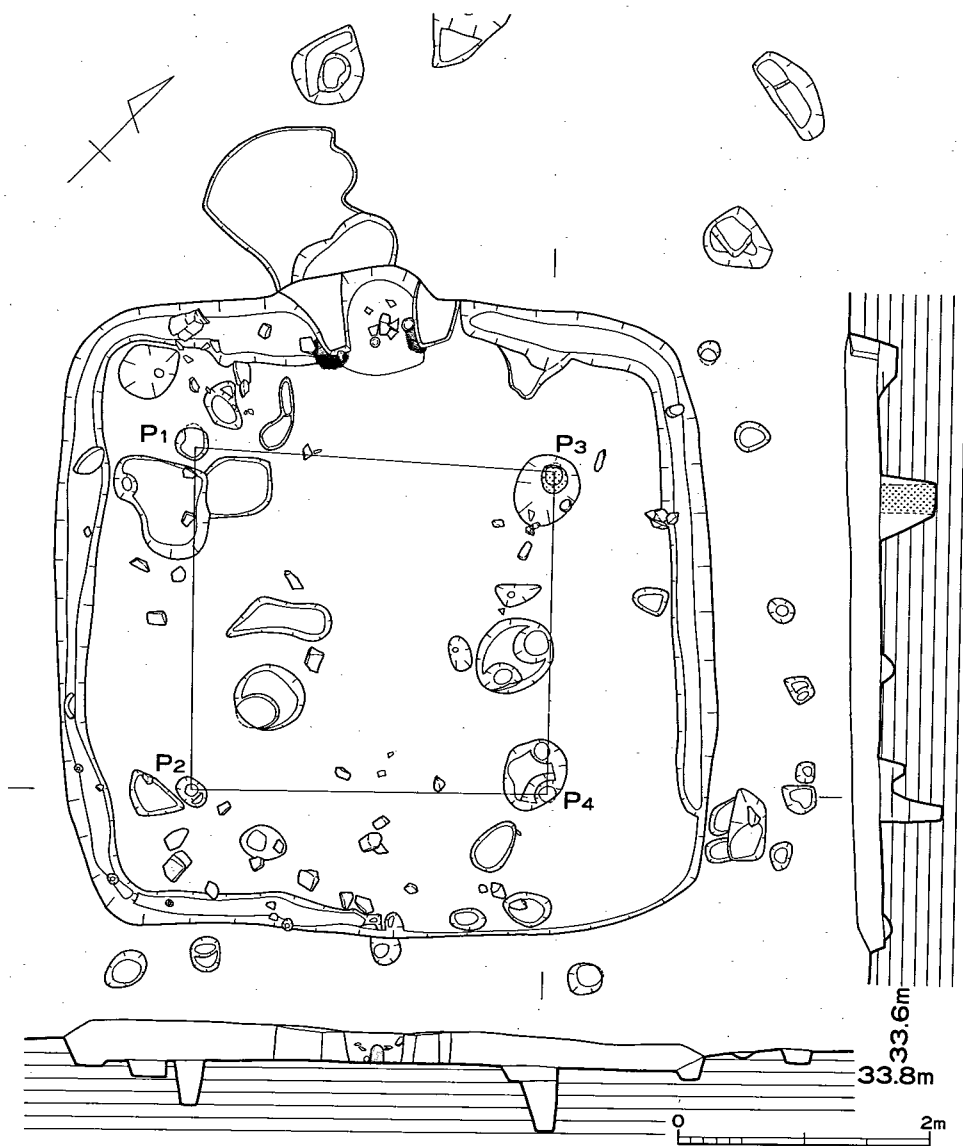
支柱穴は4本柱となるが、その柱穴間距離は、P1-P2間で2.7m、P1-P3間で2.7mを測り、住居跡平面プランと同じ方形配置になる。

壁体は、2号竪穴住居跡と同様に、北東から南西に走る小谷部側に向かって傾斜していくため、東側壁体は10cm程と浅いが、反対側の西側壁体では40cm程を測る。

壁体下は、幅20~30cm、深さ10~20cm程の小溝が巡る。しかし、西側壁体中央のカマド部分と東側壁体北側では、小溝が断絶している。なお、小溝内には、小杭列は検出さ



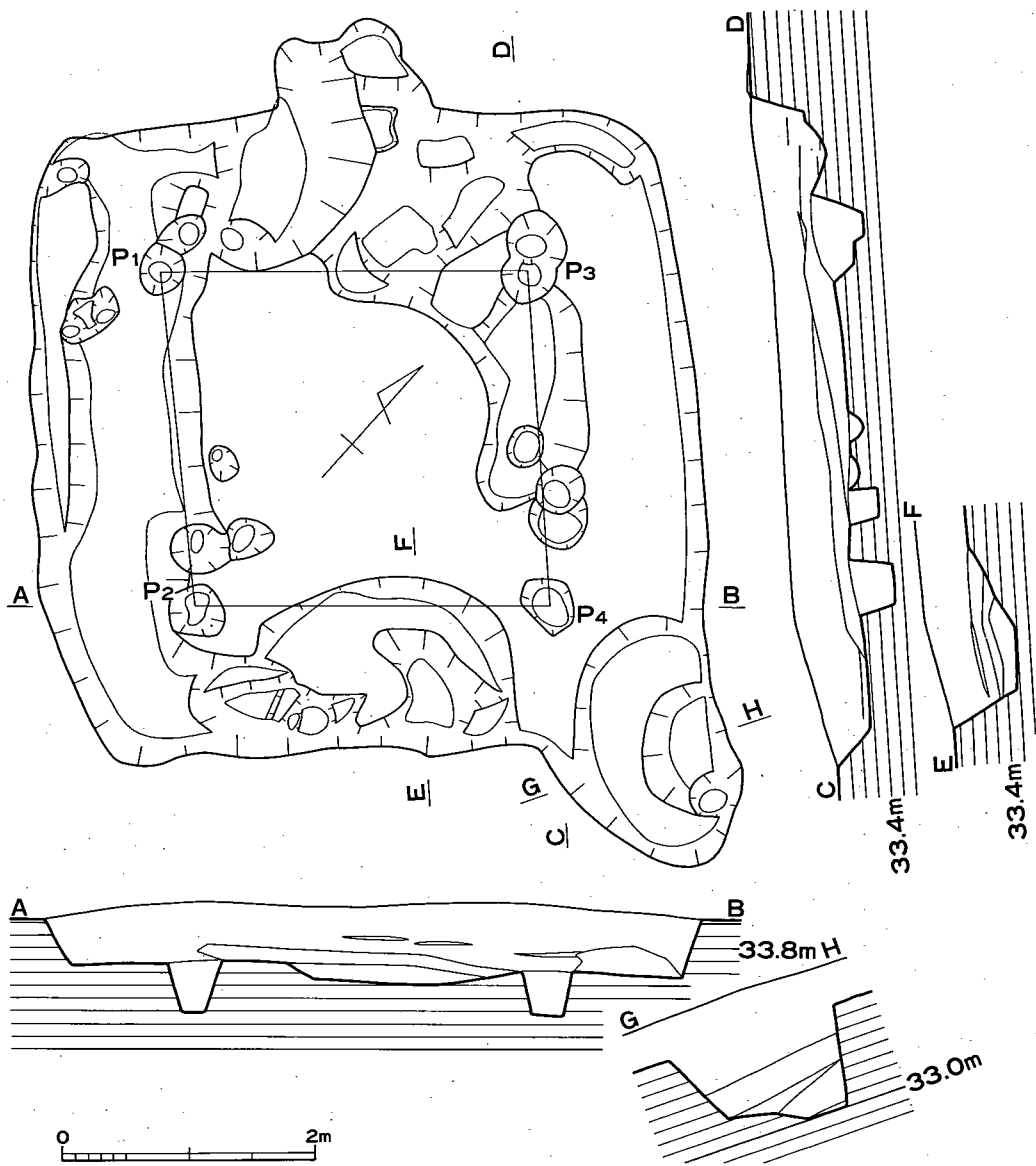
第6図 3号竪穴住居跡カマド実測図(1/60)



第 7 図 3号竪穴住居跡実測図 (1/60)

れなかった。

カマドは、西側壁体中央に付設される突出型のものである。中軸線はカマド内を通るが、カマドの軸線はやや北にずれる。カマドの両袖先端部が崩壊するものの、比較的残存状態は良い。

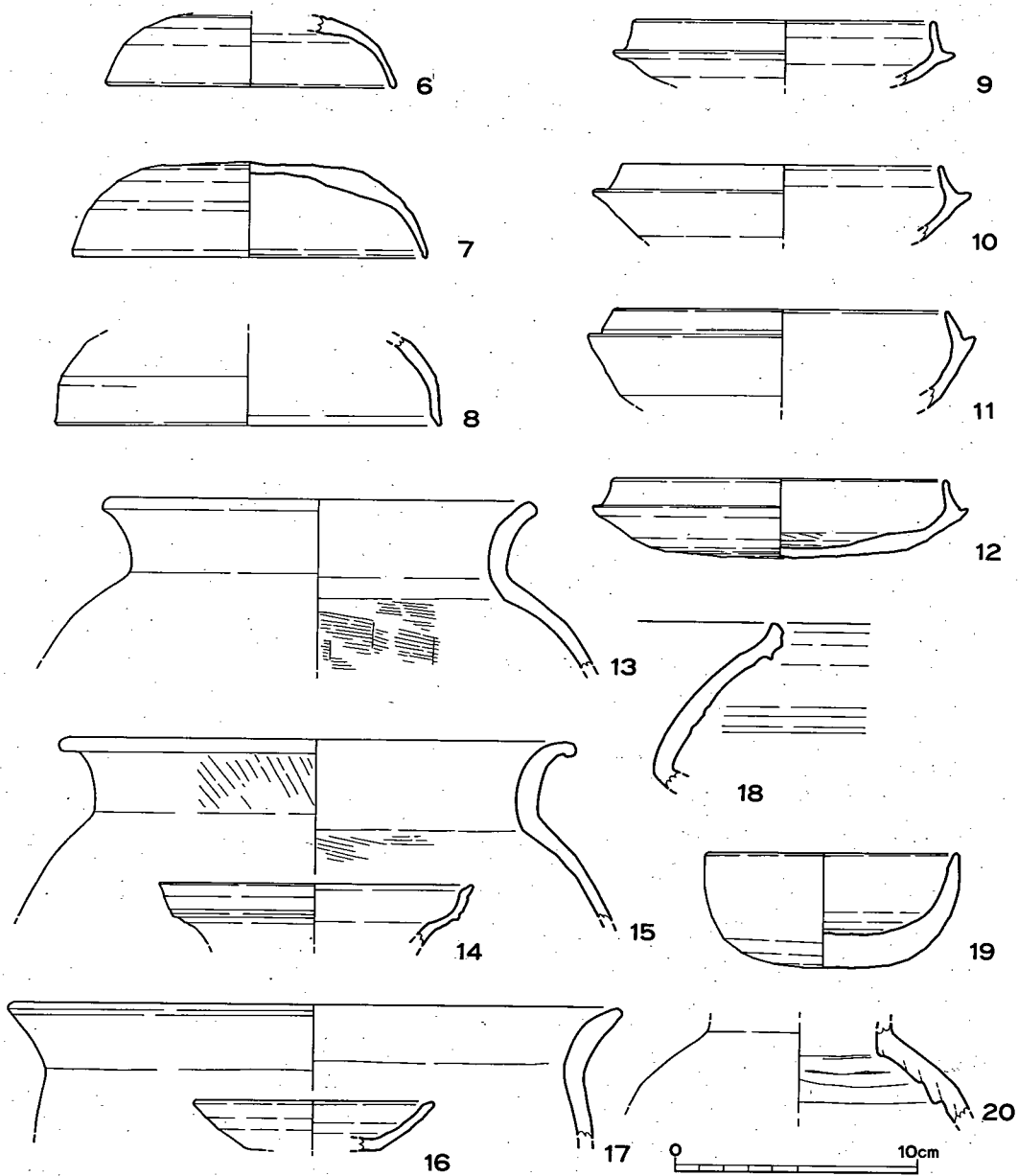


第 8 図 3号竪穴住居跡下層実測図 (1/60)

袖の高さは25cm程を測る。火床面は、楕円形を呈し、長軸70cm、短軸50cmであり、その中央には、円柱状の支脚石が立つ。

柱根痕跡は、4本の主柱穴のうち、P3で確認され、直径20cm前後のものであった。

床面下層の掘り込みは、南側で溝状を呈し、幅1m前後、深さ10~15cmを測る。



第 9 图 3号竖穴住居跡出土土器実測図 (1/3)

また、カマド対面及び東側隅角から、それぞれ1基の土壙を検出した。前者は長軸2m、短軸1.4m、深さ10cm、後者は、前者とほぼ同じで長軸2m、短軸1.4m、深さ25~60cmを測る。但し、後者については、切り合い関係から住居跡に先行することは確実であるが、果たして住居跡に伴うものかについては明らかにし得ない。

出土遺物は、他の遺構に比べ最も多い。カマド内からは、土製模造鏡と手づくね土器が出土している。

出土遺物 (図版33, 34, 39, 41, 42, 第9, 42, 44, 45図)

第9図6は須恵器の杯蓋である。天井部付近に一条の沈線がめぐる。口径12cmを測る。

7は須恵器の杯蓋である。内面天井部付近に同心口叩き丈が入る。口径14.7cm、器高4cmを測る。

6、7の天井部はほぼ平坦になるもので、天井部から口縁部はやや外方に開く。端部は丸くおさめる。

8は須恵器の杯蓋である。天井部から口縁部へほぼ垂直に立ち上がる。端部は外方に尖り気味になる。口径16cmを測る。

9~12は須恵器の杯身である。立ち上がりは短く、受け部が短く突出する点では相似するが、受け部の突出の仕方では2タイプに分けられる。9、10はほぼ水平方向に短く突出する受け部になる。11、12はやや上方にごく短く跳ね上がる受け部になる。それぞれの口径は、9が12.3cm、10が13cm、11が13.8cm、12が13.6cmを測る。

13、15、17は土師器の甕口縁部片である。

13は短く「く」の字に曲がる頸部から口縁部に達する。端部は丸くおさめる。体部最大径は口径を越える。口径18cmを測る。

15は短く「く」の字に曲がる頸部から口縁部に達するが、端部はやや垂下する。体部最大径は口径を越える。口径20.6cmを測る。

17は緩やかに外反して口縁部に達する。端部は丸くおさめる。体部最大径は口径を越えない。口径24.9cmを測る。

14は碗の口縁部片である。短く外方に立ち上がり、口縁部に達する。端部は外方に尖り気味になる。口径13cmを測る。

16は須恵器の杯身である。他のものに比べ口径が小さく、また器高も低い。端部はやや外方に尖り気味になる。底部は平坦に削られる。口径9.9cm、器高2cmを測る。

18は須恵器の壺口縁部片である。頸部から斜め外方に立ち上がり、口縁部では上下に肥厚する。端部は面をもち、二条の凹線がめぐる。口頸部上方には波状文が施される。

19は須恵器の埴である。底部は肥厚し、口縁部へは弯曲し、その後垂直に立ち上がる。端部は尖り気味になる。口径10.5cm、器高4.8cmを測る。

20は、土師器の異形土器である。内面には粘土巻き上げ痕が明瞭に残る。器形はいびつである。色調は明灰白色を呈する。第43図6は須恵質の硯脚部である。透し孔があり、径6.8cm

以上の土器は、6世紀後半～7世紀前半に属するものであるが、その型式には若干の差がある。新、古相に分けられそうで、住居跡床面から出土した8、11、13、14、15、17、18は古相に入る。新相の土器は覆土中から出土している。

第44図17～19の3点は土製模造鏡である。完形の1点は口径3.6cm程を測り、上面は鈕を指でつまみ上げてつくり出す。しかし、その鈕には穿孔がない。鏡面は丸味を帯びて反り上がる。破片の他の二点も鈕には穿孔が見られない。大きさは、6cm、5.2cm、3.6cmの大、中、小の3タイプに分けられる。

第44図6～8の3点は土玉である。その製作法は、これら土玉を、手のひらで丸めるのではなく、指頭部で圧力をかけて形づくるようである。穿孔する部分は、平坦面を作り出す。穿孔箇所は2号竪穴住居跡と異なり、ほぼ中央になる。それぞれの直径は1.3、1.5、1.7cmを測る。

この他に、3号竪穴住居跡覆土中からは、石製品（磨石1点、石鏃1点）と弥生土器1点が出土している。

第45図1は砂岩の磨石である。径7.1cmになる。

第42図1は現存長2.2cm、最大幅1.8cmを測る石鏃である。原材は黒曜石である。

4号竪穴住居跡（図版15、第10図）

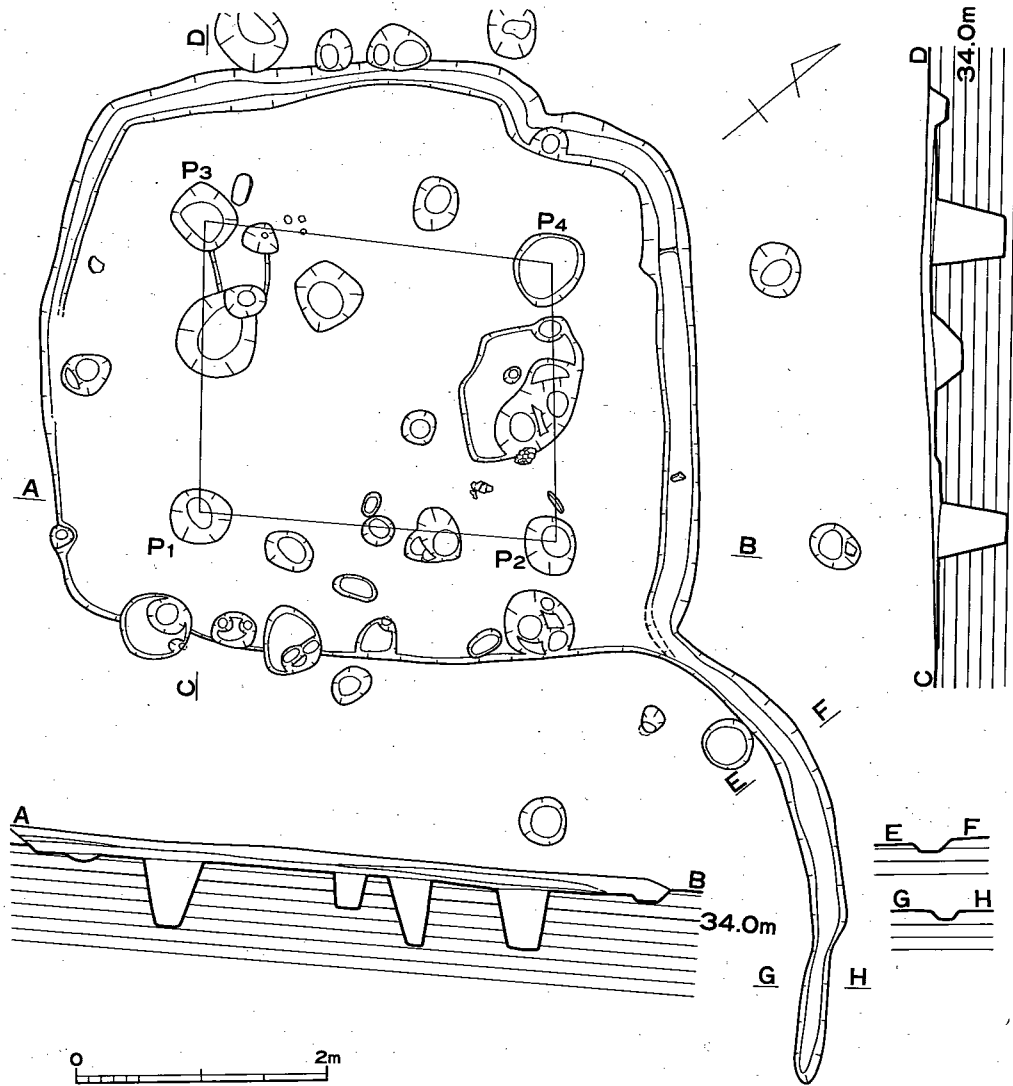
4号竪穴住居跡は、調査区北西側に位置し、東側5m離れて、3号竪穴住居跡がある。また、6号掘立柱建物とは重複関係にあるが、切合い関係からみて、4号竪穴住居跡が先行する。

この住居跡は、長軸5～5.2m、短軸4.2～4.7mの隅丸長方形プランを呈し、東側壁体隅角から、やや弯曲しながら排水用小溝が外部に伸びている。また、北側壁体が、やや外に膨らむ点は注意を要する。

支柱穴は4本柱となるが、その柱穴距離は、P1-P2間で2.8m、P1-P3間で2.25mを測り、住居跡平面プランと同じ長方形配置になる。

壁体は、住居跡上部の削平のため、ほとんど残っておらず、その高さは、10cm程を測るにすぎない。

壁小溝は、幅20～35cm、深さ5cm程である。この小溝は、西側壁体中央に始まり、北側壁体中央より東側でややカーブをもち、東側壁体へと続き、そのコーナーから外部へと伸びていく。南側壁体では、壁体が1～5cmほどしかのこっていないが、本来、この壁小溝は、住居跡周囲に巡り、排水機能を高めていたと考えたい。始点から終点までの高低差は20cm程あり、外部への排水を意識した小溝であることは明瞭である。そして、外部へ緩やかなカーブをとりながらのびる溝は、全長4.5m、幅20～30cm、深さ10cm程を測り、住居跡壁隅を始点として、外部小溝



第 10 図 4号竪穴住居跡実測図 (1/60)

終点までの高低差は10cmになる。

炉跡は、検出できなかった。

出土遺物 (図版33, 38, 40、第5, 42, 45図)

第5図1~3はすべて弥生土器である。短く緩やかに「く」の字に外反する口縁部になる。

1、2は端部は丸く取り、3は面をもつ。弥生時代後期前半に属する。

第42図8は滑石製紡錘車である。上面は欠失する。下面径4.1cm、残存高2cm、穿孔径0.6cm。

第45図10は粘板岩製砥石である。長13cm、幅3.3~4.5cm。断面略方形で、4面を使用。

5号竪穴住居跡 (図版27-1、第11図)

5号竪穴住居跡は、調査区北西側に位置し、その半分以上が区域外にのびている。

遺構検出時、西側と東側に直線的にのびるラインを確認したが、そのラインが南側で合流することなく、途中でなくなってしまうことから、その性格については、判断に苦しんだ。しかし、掘削していく中で、東側では、幅10cm程の小溝が遺構検出ラインに平行に走り、また直径25cm、深さ30cm程の支柱穴になると推定される柱穴も検出されたことから、上部の大半が削平された竪穴住居跡と認定した。

一辺は、東側で3m以上、西側で4.4m以上と推定される。平面プランは不明である。

壁体はかろうじて認められ、その高さは10cm程を残すにすぎない。

壁小溝は幅10cm、深さ5cmを測る。

出土遺物等の検出は全くなかった。

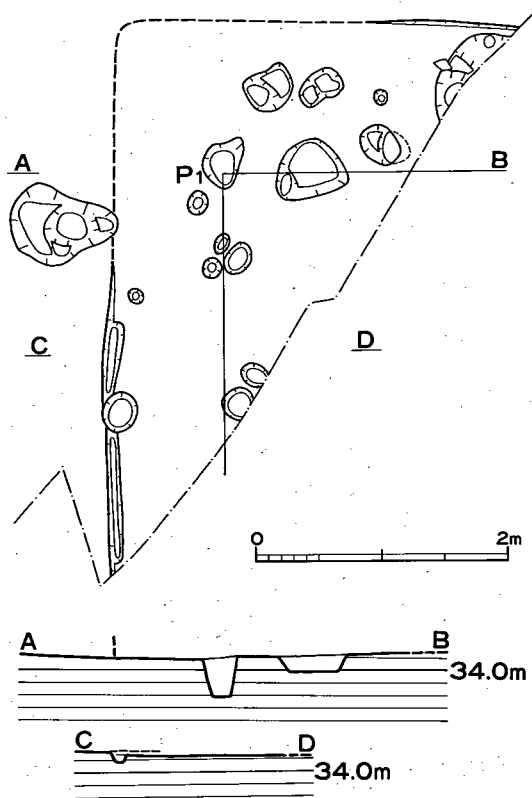
6号竪穴住居跡 (図版16~20、第12、13図)

6号竪穴住居跡は、調査区西側に位置し、東側2m離れて、8号、9号掘立柱建物がある。

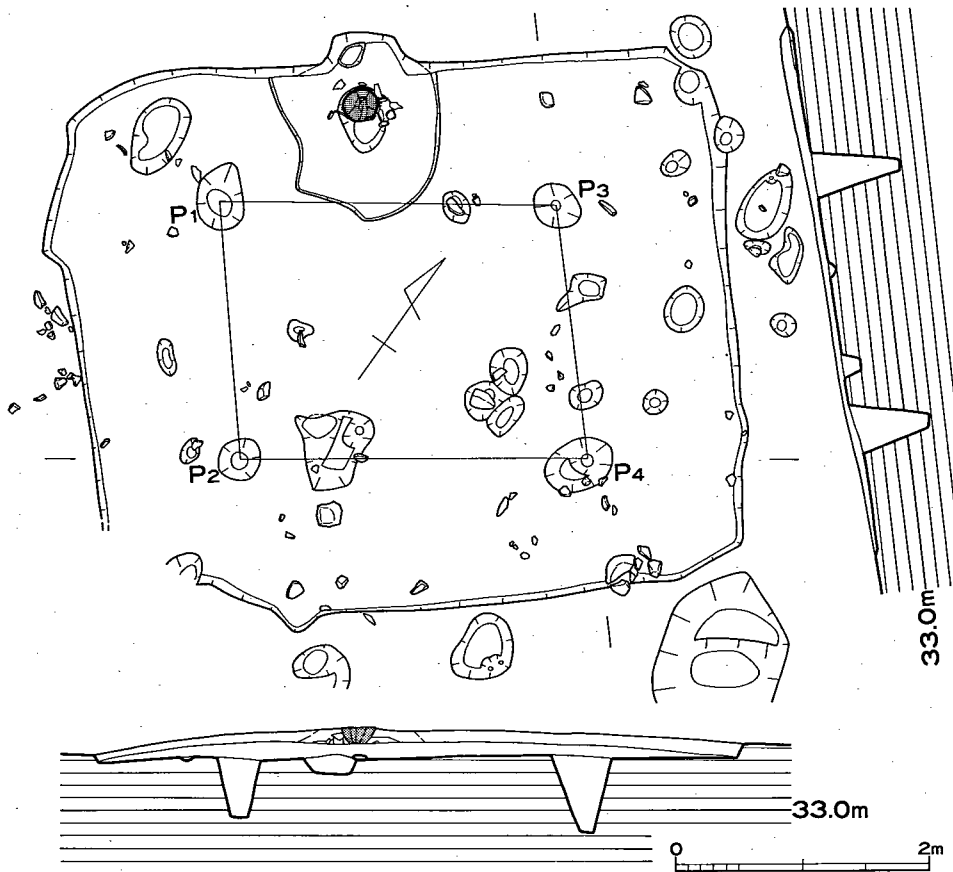
この建物は、長軸5.2m、短軸4.4mを測る隅丸長方形プランで、支柱穴は4本柱である。壁体は削平のため10cm程しか確認できなかったが、壁体西側に付設する突出型カマドは、支脚石及び上部にのせた煮たき用甕が遺存し、当時の生活習俗が看取できた。

支柱穴は4本柱となるが、その柱穴間距離は、P1-P2間で2m、P1-P3間で2.65mを測り、住居跡平面プランと同じ長方形配置になる。

壁体は先述したように、高さ10cm程と非常に浅い。これは、北東から南西に走る小谷部へ向けての傾斜面に立地することのみならず、台地上においても、その傾向が見られることから、後世の削平が顕著だったと思われる。



第11図 5号竪穴住居跡実測図 (1/60)

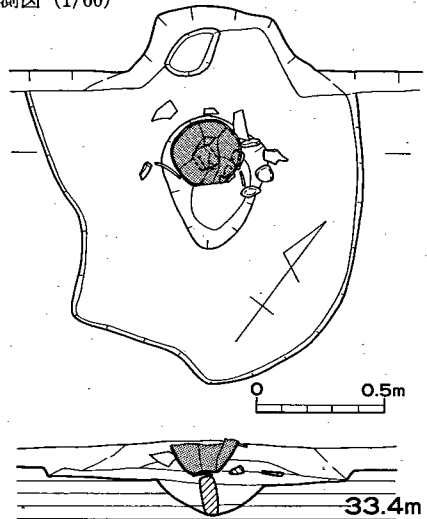


第 12 図 6号竪穴住居跡実測図 (1/60)

けての傾斜面に立地することのみならず、台地上においても、その傾向が見られることから、後世の削平が顕著だったと思われる。

6号竪穴住居跡は、2号、3号竪穴住居跡と異なり、壁体下には小溝が巡らない。

カマドは、西側壁体中央に付設される突出型のものである。上部が削平されているため、両袖部の痕跡すらなかった。だが、火床面と思われる若干の窪みの検出や、さらには支脚石及びその上に置かれた煮たき用甕の残存から、中軸線は、ほぼカマドの軸線と一致することが判明した。火床面は長軸1.4mの長楕円形プランを呈すると思われる。



第 13 図 6号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

火床面中央は、支脚石（長15cm、幅7cm）を埋置するため、直径40cm、深さ10cm程の小穴を掘る。埋置された支脚上には正対して甕が置かれる。

出土遺物（図版40、42、第42、44図）

6号竪穴住居跡は、先述したように上部をほとんど削平され、壁体も10cm程しか残っていないため、出土遺物がほとんど検出できなかった。しかし、カマド内及びその周辺においては、後述する手づくね土器、紡錘車各1点の他に、カマド支脚上にある煮炊用甕1点を検出したが、担当者の不注意で遺物取上げ後、消失してしまった。誠に不徳の極みである。

7号竪穴住居跡（図版29、30-2、第14図）

7号竪穴住居跡は、調査区西側に位置し、東側に隣接して、8号・9号掘立柱建物があ

る。この住居跡については、まず、長軸80cm、短軸65cm、深さ20cmの炭化物を含む土壌が検出されたため、これを炉跡と推定し、周辺での住居跡遺構の確認を行った結果、歪んでいながらも方形状プランの一部がみられた。そこで、7号竪穴住居跡とすることとした。しかし、先述しているように台地西側での削平が著しいため、壁体高も3～5cm程しかない。

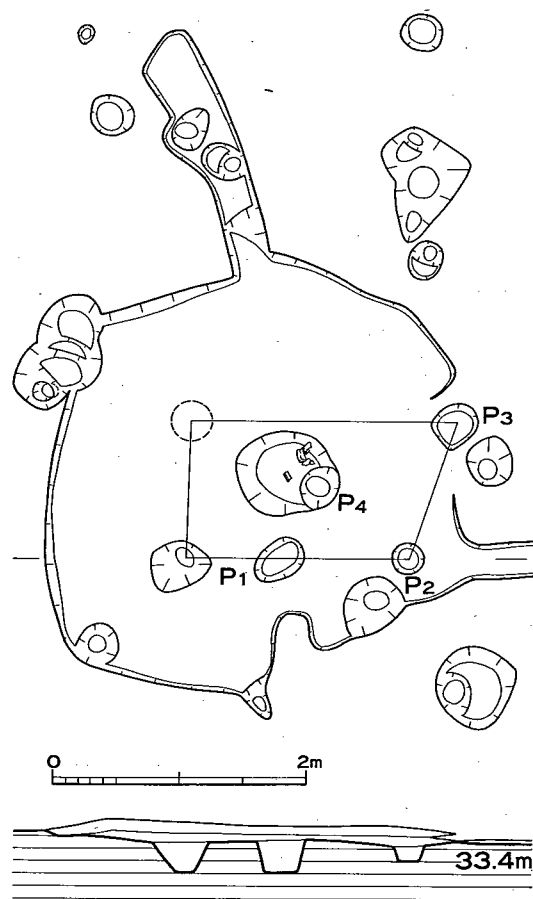
この住居跡は、長軸3m+ α の、短軸2.8mの隅丸長方形プランを呈すると思われる。

支柱穴は、4本柱になると考えられるが、3本しか検出できなかった。それぞれを結んでみると、不整長方形になり、かなり歪んでいる。

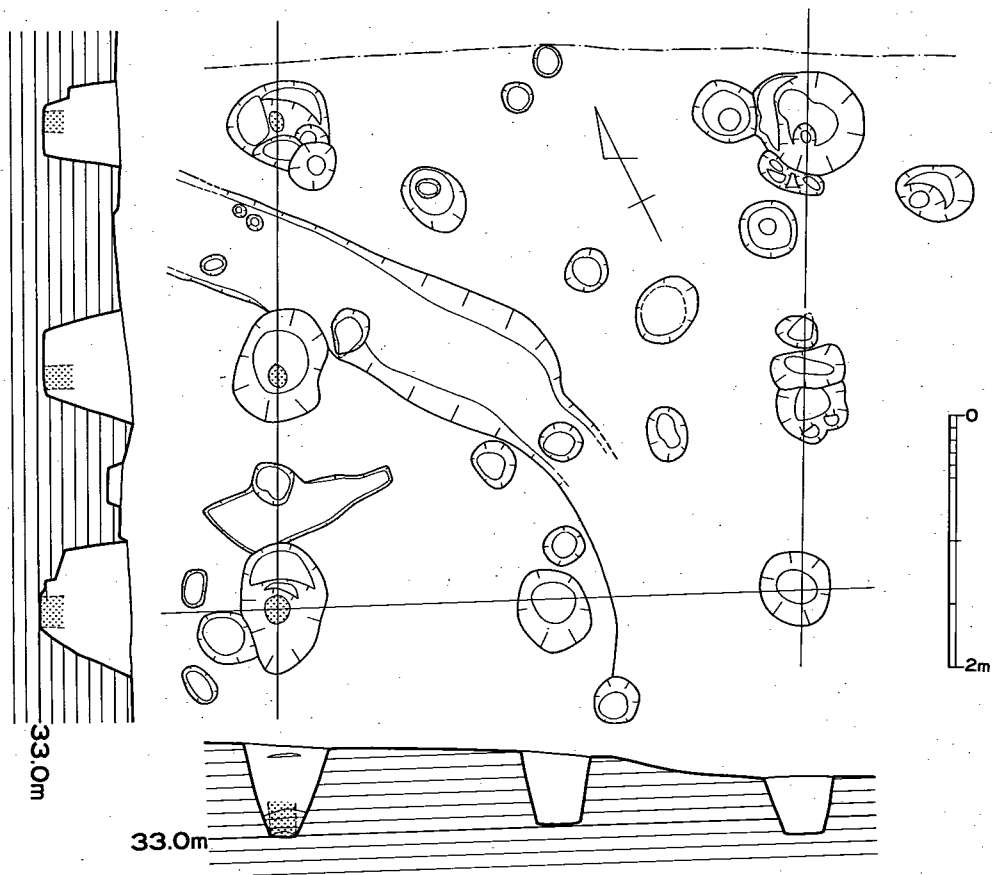
出土遺物（図版36、42、第40、44図）

柱穴と思われるP2より土玉1点が出土している。

第44図9の土玉は、表面に指痕圧痕がみられ、その製作法は、手のひらで丸めるのではなく、指頭で押しながら形づくるようである。穿孔部は上下共やや平坦面を作り、その中央に穴が開く。直径1.7cm程を測る。



第14図 7号竪穴住居跡実測図（1/60）



第 15 図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

またP 4からは弥生土器が出土している。79はやや内弯気味に立ち上がる口縁外端部に、やや肥厚した断面三角凸帯を貼付する。弥生時代中期初頭に属する。

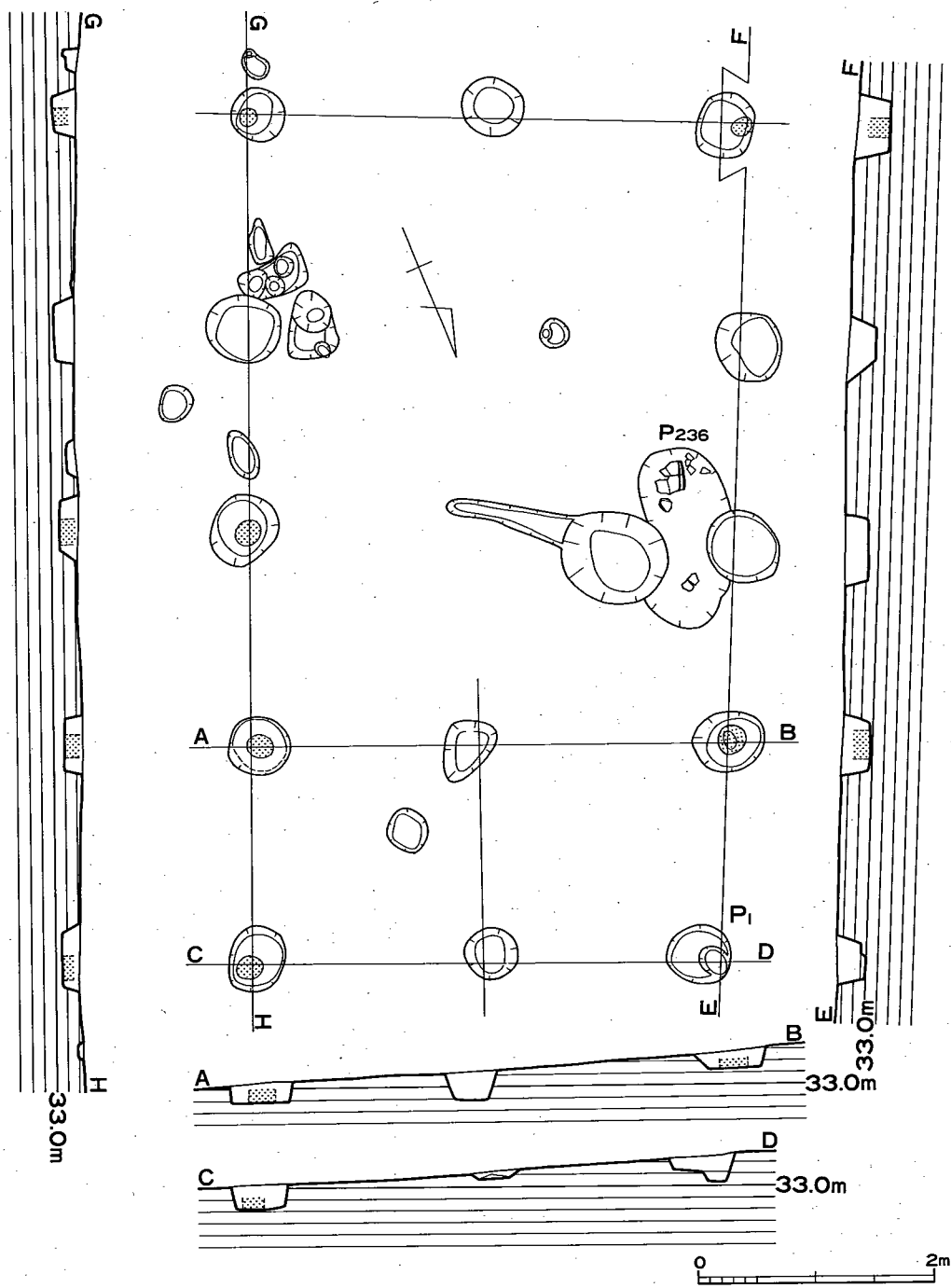
2) 掘立柱建物

調査区内からは、計13棟の掘立柱建物を検出した。2号、3号、5号、6号、7号、13号掘立柱建物の柱穴からは、出土土器の検出があった。時期決定の一資料となると思われる。

1号掘立柱建物 (図版21、第15図)

1号掘立柱建物は、調査区北端部に位置し、西側約5m離れて、2号掘立柱建物がある。

この建物の大きさは、北側が調査区域外となるため、正確な数値を得ることが出来ない。現存する柱穴からみると、桁行 $3.6+\alpha$ m (3間以上、6尺等間)、梁行4.2m (2間、7尺等間)



第 16 图 2号掘立柱建物实测图 (1/60)

を測る（一尺を約40cmとする）。

柱穴掘形の大きさは、直径70～90cmの不整円形を呈し、深さは60cm程である。

柱根痕跡は比較的明瞭で、残存する7本の柱穴のうち4本の柱穴で認められ、直径10cm程の柱が推定される。

桁行方位は、N-27°-Eである。

柱穴からの出土遺物は全くなかった。

2号掘立柱建物（図版22、第16図）

2号掘立柱建物は、調査区北端側に位置する。南側4m離れて、3号掘立柱建物がある。また、東側10m離れて、1号掘立柱建物がある。

この建物は、3間×2間の身舎に、1間×2間の廂が付く長方形のものである。その大きさは、身舎の桁行5.4m（3間、6尺等間）、梁行4m（2間、7尺等間）、北側に付設される廂の桁行1.8m（1間、6尺等間）、梁行4m（2間、7尺等間）を測る。

柱穴掘形の大きさは、直径60cm前後の不整円形で、深さは10～30cmとやや浅い。

柱根痕跡は、一部で確認できるが、柱根直径は20cm前後である。

桁行方位は、N-25°-Eである。

出土遺物（第20図）

21はP1出土。土師器の碗口縁部片である。内外面共磨滅が著しく、調整不明。口縁外端部に一条の凹線がめぐる。

3号掘立柱建物（図版23、24、第17図）

3号掘立柱建物は、調査区北端側に位置し、北側4m離れて、2号掘立柱建物が立地している。この建物は、2×2間の総柱の身舎に、1間×2間の廂が南西側につく正方形の建物である。その大きさは、身舎の桁行4.5m（2間、7尺等間）、梁行2.1m（2間、3尺等間）、南西側に付設される廂の桁行4.7m（2間、8尺等間）、梁行2.2m（1間、3尺等間）を測る。全体としては、約6.8×6.8mの建物になる。

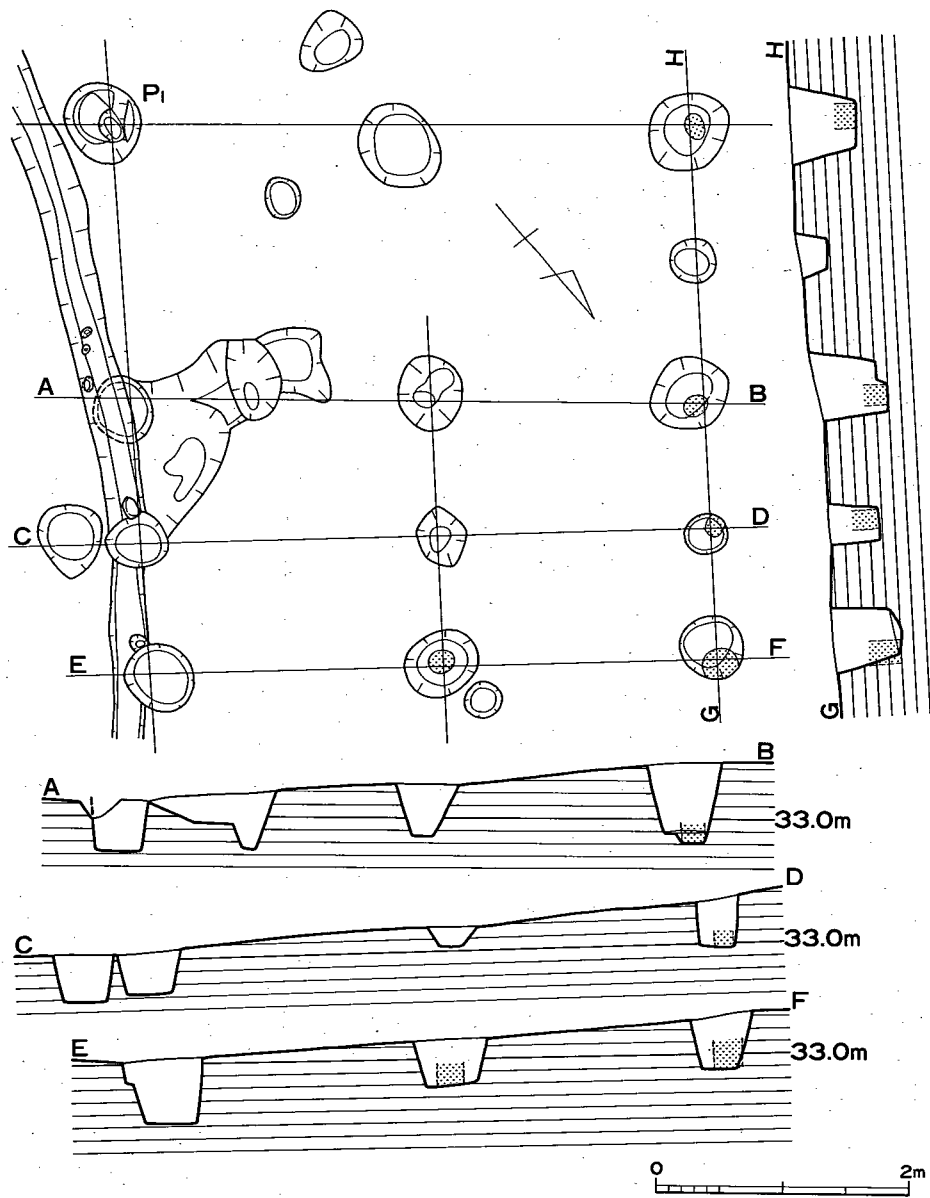
柱穴掘形の大きさは、直径40～65cmの不整円形で、深さは20～50cmを測る。廂部の柱穴の規模は身舎に比べ大きい。

柱根痕跡は、一部の柱穴で確認できた。柱根の直径は10～20cm程である。

桁行方位は、N-36°-Eである。

出土遺物（第20図）

23はP1出土。土師器の高杯脚部片である。外面は磨滅が著しく、調整不明で、脚部の面とりは確認できなかつた。脚部内側が屈曲するタイプの高杯である。脚端部は平らになる。7世紀後半～8世紀前半の土器と思われる。



第 17 图 3 号掘立柱建物实测图 (1/60)

紀後半～8世紀前半の土器と思われる。

4号掘立柱建物（図版25、第18図）

4号掘立柱建物は、調査区北東から南西に走る小谷部の西側に位置する。ほぼ谷と平行しており、南西側に近接して7号掘立柱建物がある。北西側に3m離れて、5号掘立柱建物がある。また、P4-P5間とP11-P12間に北西から南東方向に4号溝が走る。

この建物は、桁行18m（6間）×梁行3.6～4.2m（2間）と他の掘立柱建物に比べ、大型の長方形建物である。

この建物の構造については、若干検討を加える必要があるため、建物に関係すると思われる柱穴にP1～P30までの番号を付した。

まず、この建物は、大きく北東側の4間×2間の建物と南西側の2間×2間の総柱建物から成っている。桁行方位は、N-42°-Eである。

北東側の4間×2間の建物の大きさは、桁行6.3m（4間、7尺等間）、梁行3.6m（2間、7尺等間）を測る。

この4間×2間の建物の柱穴掘形規模は、すべて直径60cm前後の略円形を呈し、深さは60cm程である。

柱根痕跡は明瞭でない。出土遺物はなかった。

また、南西側の2間×2間の建物の大きさは、桁行4.2m（2間、6.5尺等間）、梁行3.8～4.2m（2間、6～7尺等間）を測り、9本柱の総柱となる。

この2間×2間の建物の柱穴掘形規模は、前者の建物と若干の差を見せる。つまり、P1～P3、P13～P16は、直径70cm前後の略円形で、深さは50cm前後を測る。しかし、P17とP18は、他の柱穴に比べ、規模が小さく、直径50cm前後の略円形で、深さは40cm程である。

この建物の機能については、豊前国府推定地に隣接する場所にあたるため、間仕切りをもった厨屋、間仕切りをした倉庫、また板張りの倉庫などが考えられる。

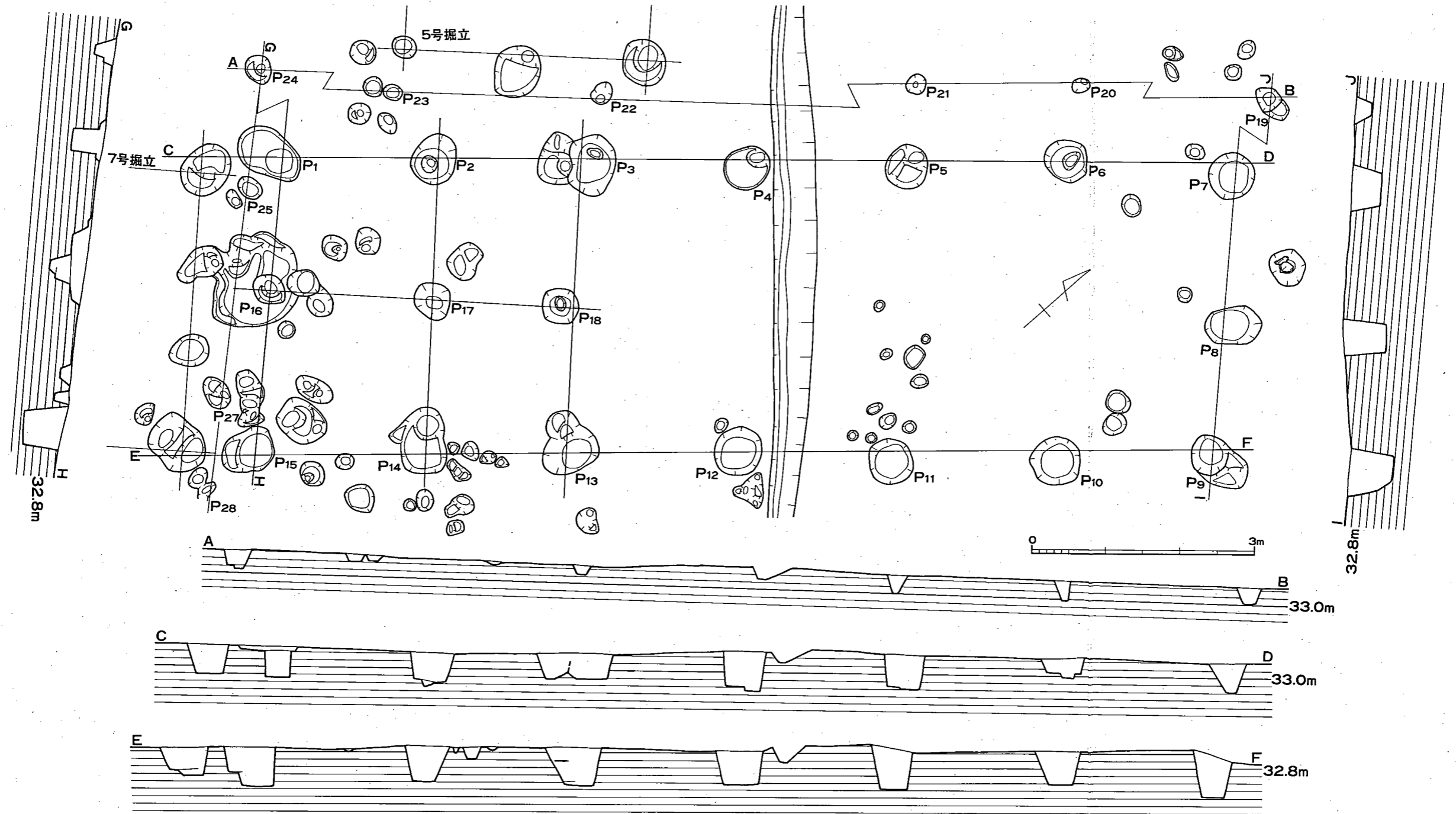
さらに、P3-P4間、P12-P13間は、他の柱穴の間隔に比べ、若干幅広くなる。これは、このP3-P4間及びP12-P13間が入り口部となっていたと推測される。

従って、この建物については、北東側の4間2間の身舎と南西側の2間×2間の倉庫からなり、その間に入り口部をもつものと考えたい。

なお、柱根痕跡については明瞭でなかった。

次に、この建物の周囲で検出された20～30cm程の小柱穴について考える。

この小柱穴は、当初、P1～P7の桁行柱穴に対応する廂柱穴と考えて検出に努めたが、それらはほぼ等間隔にあるものの、梁行センターラインと一致しなかったり（P19、P23、P24）、対応関係にないもの（P4に対応する小柱穴はない）の存在、また小柱穴の深さが浅く、一定



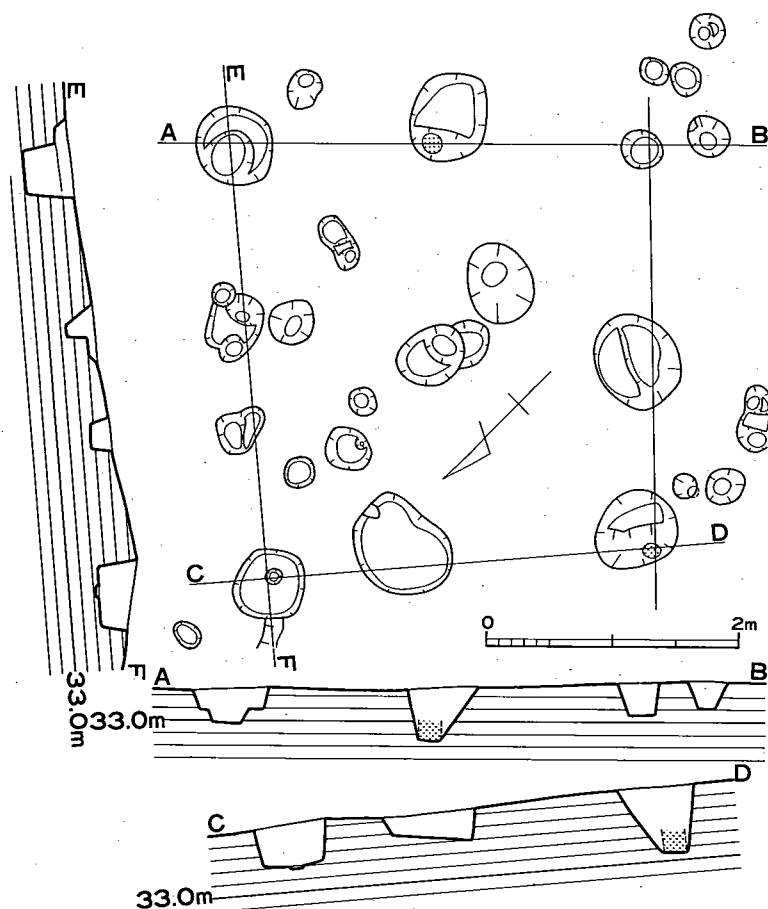
第 18 图 4 号掘立柱建物实测图 (1/60)

でないことを確認した。そこで、これらの小柱穴については、P 1からP 7の桁行からはりだす廂ではないと考えた。

そこで、この建物の周囲で同じような小柱穴がないかと、調査終了後、図面上で調べてみると、P 19～P 24の小柱穴の他に、P 25～P 30の小柱穴を見つけることが出来た。

以上のことから、この小柱穴の機能を考えると、現代でも、住宅等の建築現場でよく目にする足場工事用の杭を埋置したピットではないかと推測が導き出された。

このような事例については、太宰府市大野城跡や宗像市武丸大^{たけまるおおあ}上げ遺跡などでも確認されている。



第 19 図 5号掘立柱建物実測図 (1/60)

5号掘立柱建物（図版26、第19図）

5号掘立柱建物は、調査区北側に位置し、北側3m離れて、4号溝があり、南東側3m離れて4号掘立柱建物がある。

この建物は、2間×2間のやや歪んだ方形の建物で、その大きさは、桁間3.3m（2間、6尺等間）、梁行3.5m（2間、6尺等間）を測る。

柱数は9本で、総柱となる。

柱穴掘形の大きさは、直径30~70cmの不整形円で、深さ20~60

cmを測る。

柱根痕跡は明瞭でない。

桁行方位はN-46°-Eになる。

出土遺物（図版33、第20図）

22は土師器の口縁部片である。肥厚する口縁部は、ゆるやかに外反する。端部は丸くおさめる。P2出土。

6号掘立柱建物（図版27、第21図）

6号掘立柱建物は、調査区北西側に位置し、一部は区域外にのびる。東側8m離れて7号掘立柱建物があり、また南側8m離れて重複関係を示す8、9号掘立柱建物がある。また、この掘立柱建物は、4号堅穴住居跡を切って構築されている。

この建物は、6間+a×2間の長方形施設に東側桁行方向へのびる廂を付設したものである。その施設の大きさは、桁行13.6m（6間、7尺等間）、梁行4.2m（2間、7尺等間）を測る。廂部分は、桁行から約1m（2.5尺）離れ、柱穴はそれぞれ梁行中心線にのっている。

長方形施設の柱穴掘形の大きさは、直径60~70cm略円形で、深さは20~50cmとバラつきが目立つ。

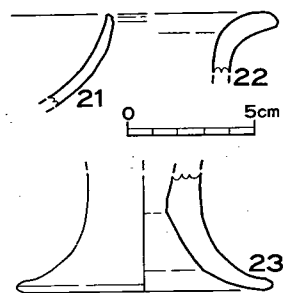
また、廂部の柱穴掘形の大きさは、直径50cm前後の略円形で、深さは30cm程と長方形施設の柱穴に比べ、規模が小さい。

柱根痕跡は明瞭なものが少ないが、確認できるものでは直径20cm程の柱根を検出した。

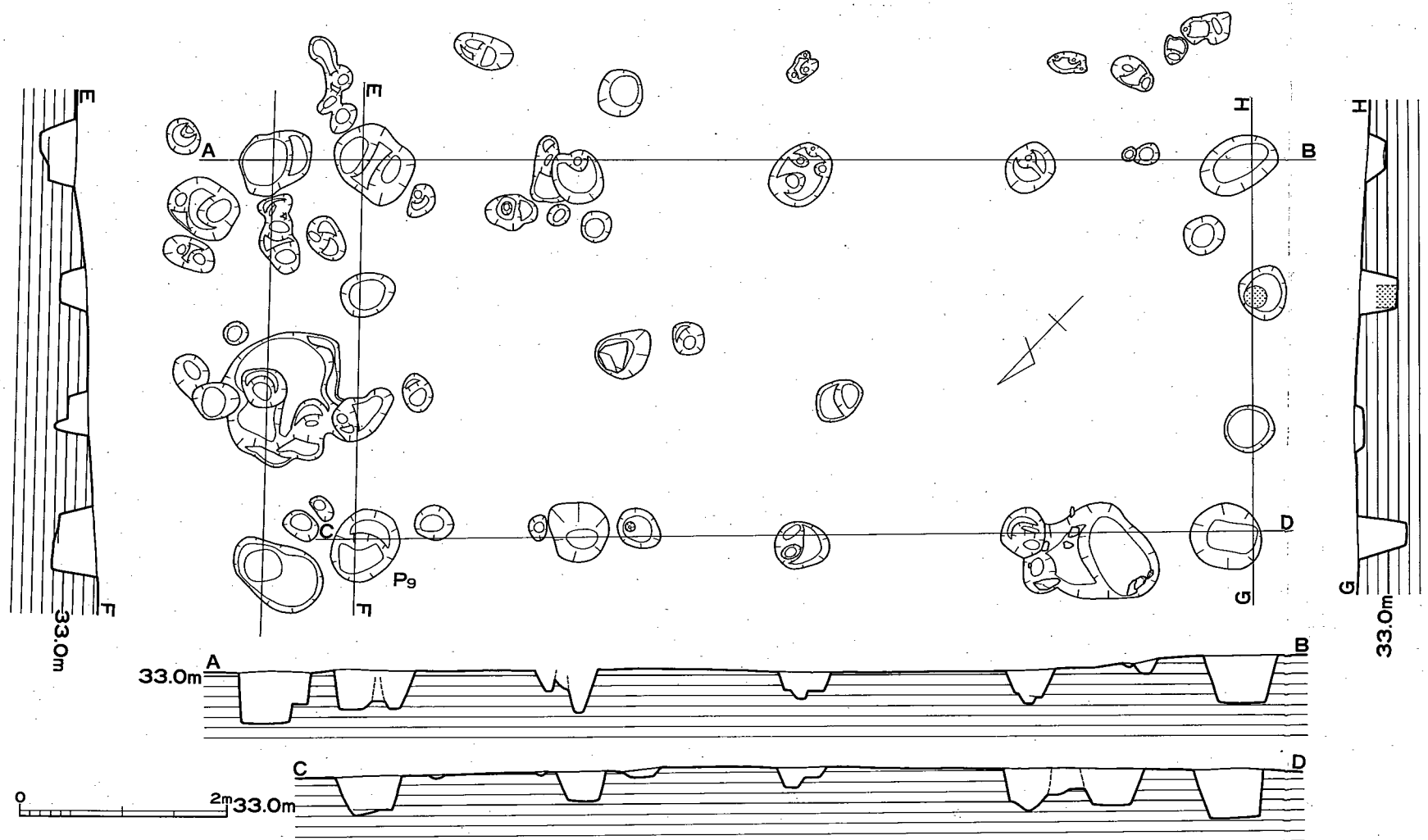
桁行方位は、N-42°-Wである。

出土遺物（第43図）

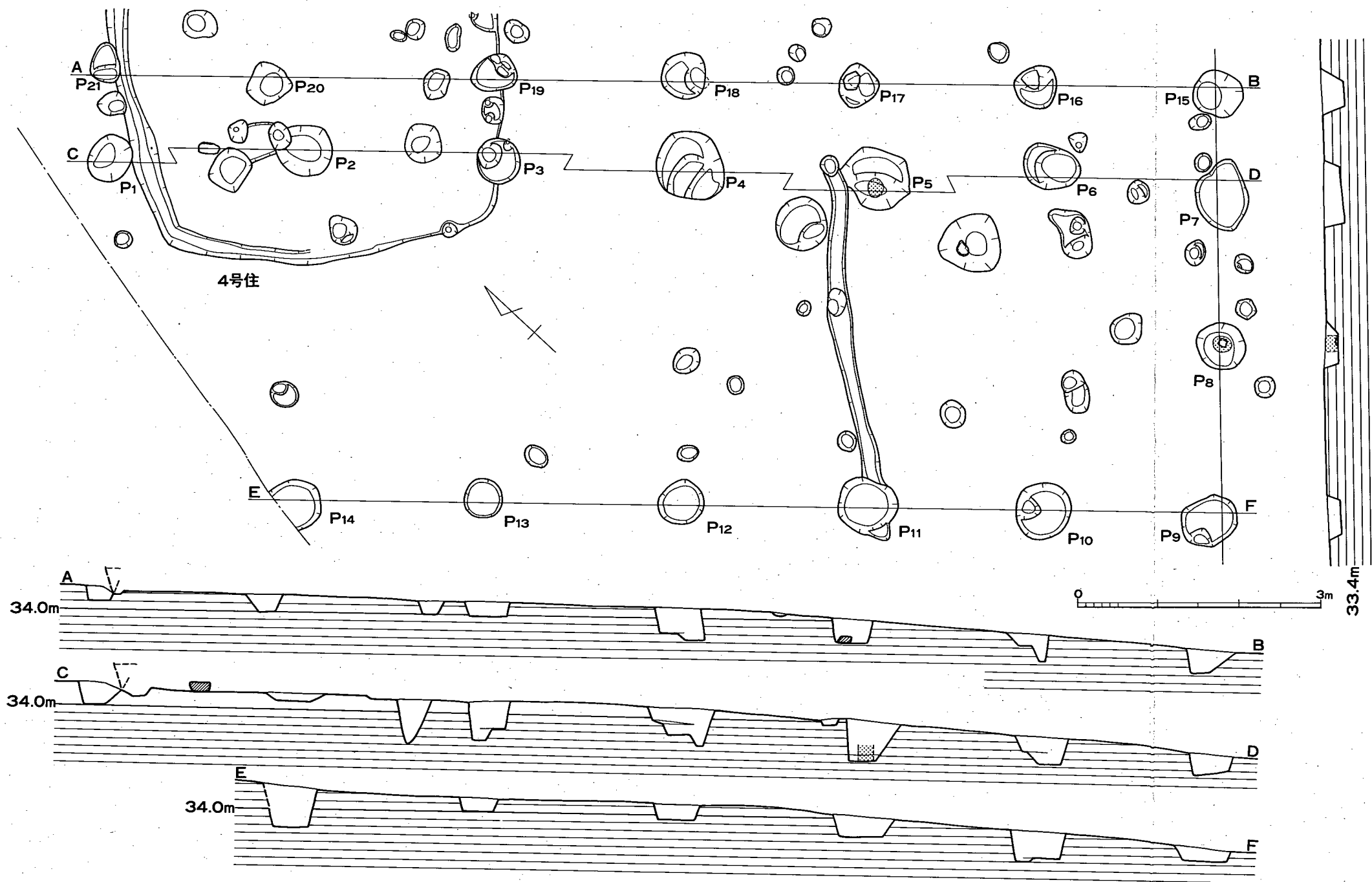
77は、P9から出土した底部片である。若干上げ底気味になり、底径6.2cmを測る。切り合い関係にある4号堅穴住居跡からも同時期（弥生時代後期前半）の土器が出土していることから、6号掘立柱建物構築時にピットへ混入したと思われる。



第20図 2号、3号、5号掘立柱建物出土土器実測図 (1/3)



第 21 图 6号掘立柱建物实测图 (1/60)



第 22 图 7号掘立柱建物实测图 (1/60)

7号掘立柱建物 (図版28、第22図)

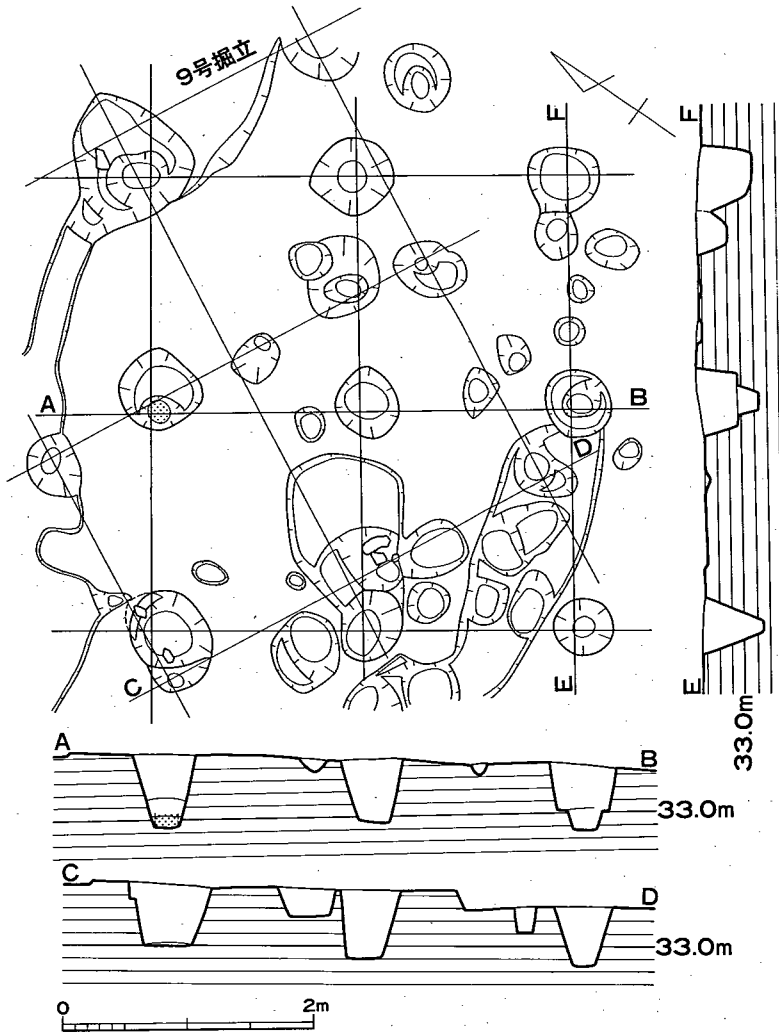
7号掘立柱建物は、調査区北東から南西に走る小谷部の西側に位置し、ほぼ谷と平行になる。北東側に近接して4号掘立柱建物がある。

この建物は、4間×3間の長方形のもので、その大きさは、桁行8.8m (4間、7尺等間)、梁行3.6m (3間、3尺等間) を測る。

柱穴掘形の大きさは、直径50~70cmの不整形円で、深さは30~50を測る。

柱根痕跡は、あまり明瞭でないが、一カ所で径20cmの柱根を確認した。

桁行方位は、N-46.5°-Eである。



第 23 図 8号掘立柱建物実測図 (1/60)

ピットからの出土遺物は全くなかった。

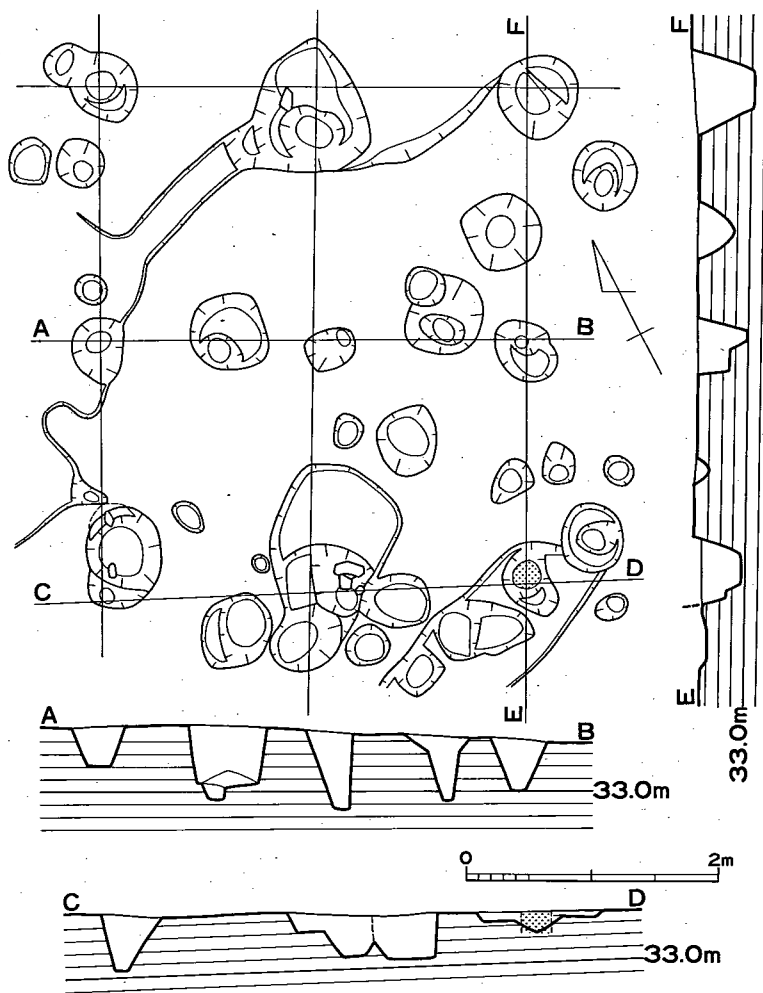
8号掘立柱建物 (図版29、第23図)

8号掘立柱建物は、調査区西側に位置し、9号掘立柱建物と重複関係にある。柱穴の切り合い関係から9号掘立柱建物が先行する。北側8m離れて、7号掘立柱建物がある。

この建物は、2間×2間の方形のもので、その大きさは、桁行3.6m (2間、6尺等間)、梁行3.6m (2間、6尺等間) を測る。

柱穴は、9本の総柱となる。

柱穴掘形の大きさは、直径60cm前後の略円形で、深さは40~60cmを測る。



第 24 図 9号掘立柱建物実測図 (1/60)

柱根痕跡は明瞭でなかった。

桁行方位は、N-34.5°-Wである。ピットからの出土遺物の検出は全くなかった。

9号掘立柱建物（図版29、第24図）

9号掘立柱建物は、調査区西側に位置し、先述したように、8号掘立柱建物とは重複関係を示す。柱穴の切り合い関係から、9号掘立柱建物が先行する。

この建物は、8号掘立柱建物と同様に、2間×2間の方形のものである。その大きさは、桁行3.4m（2間、5.5尺等間）、梁行4m（2間、6.5尺等間）を測る。

柱穴掘形の大きさは、直径30~50cmの不整円形で、深さは30~40cmを測る。

柱根痕跡は、明瞭でなかった。

桁行方位は、N-28°-Eである。

ピットからの出土遺物の検出は全くなかった。

10号掘立柱建物（第25図）

10号掘立柱建物は、調査区北西側に位置し、東側約5m離れて、4号掘立柱建物がある。

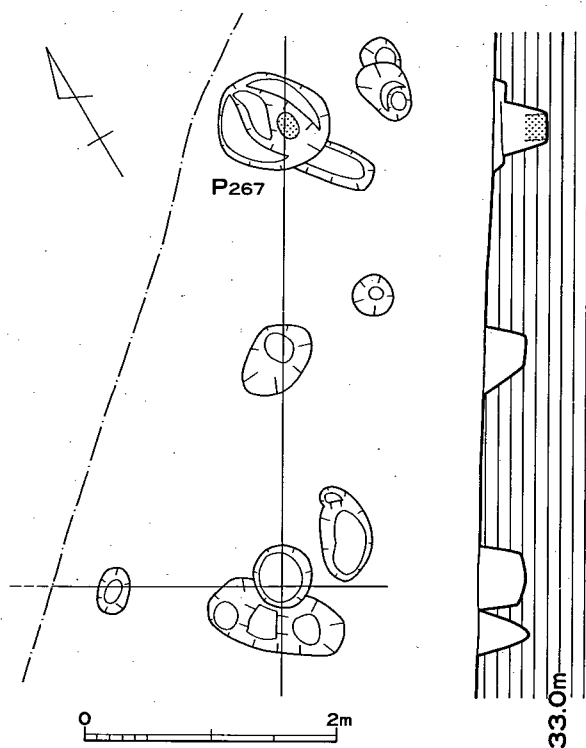
この建物の大きさは、北西側が調査区域外になるため、正確な数値を得ることが出来ない。現存する柱穴からみると、桁行 $3.7+\alpha$ m（2間以上、6尺等間）、梁行 $1.3+\alpha$ m（1間以上、6尺等間）を測る。

柱穴掘形の大きさは、30~90cmと不揃いの不整円形を呈し、深さは40cm程である。

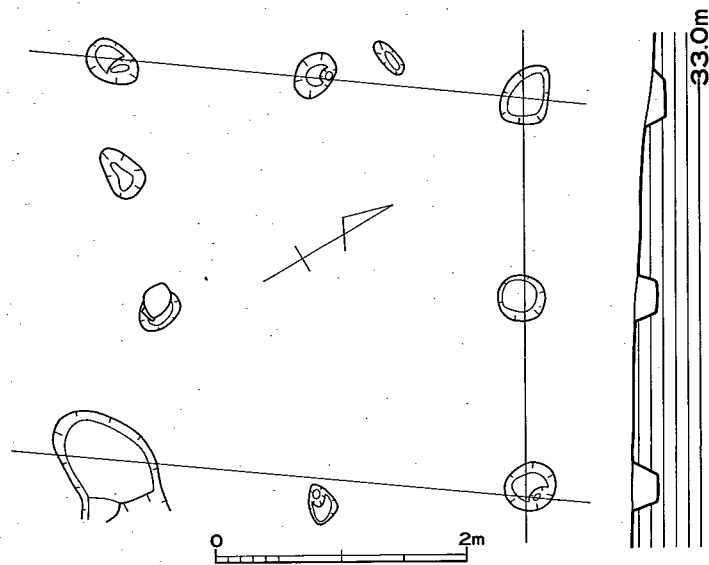
柱根痕跡はあまり明瞭でないが、残存する4本の柱穴のうち1本の柱穴では、直径10cm程の柱が推定される。

桁行方位は、N-30°-Eである。

柱穴からの出土遺物をピット267として取りあげたため、その項で説明する。



第 25 図 10号掘立柱建物実測図 (1/60)



第 26 図 11号掘立柱建物実測図 (1/60)

11号掘立柱建物 (第26図)

11号掘立柱建物は、溝2によって囲繞される区画内に立地する。溝2の陸橋部から約7m入ったほぼ正面のところにあり、南西約7mのところには12号掘立柱建物がある。

この建物の大きさは、南西部側での柱穴掘形が不明だったため、正確な数値を得ることが出来ない。現存する柱穴からみると、桁行 $3.5 + a$ m (2間以上、6尺等間)、梁行3m (2間、5尺等間) を測る。

柱穴掘形の大きさは、35~40cmの不整円形を呈し、深さは30cmを測る。

柱根痕跡は明瞭でない。

桁行方位は、 $N-37^{\circ}-E$ である。ピットからの出土遺物の検出は全くなかった。

12号掘立柱建物 (第27図)

12号掘立柱建物は、溝2によって囲繞される区画内に立地する。北東約7mのところには11号掘立柱建物がある。

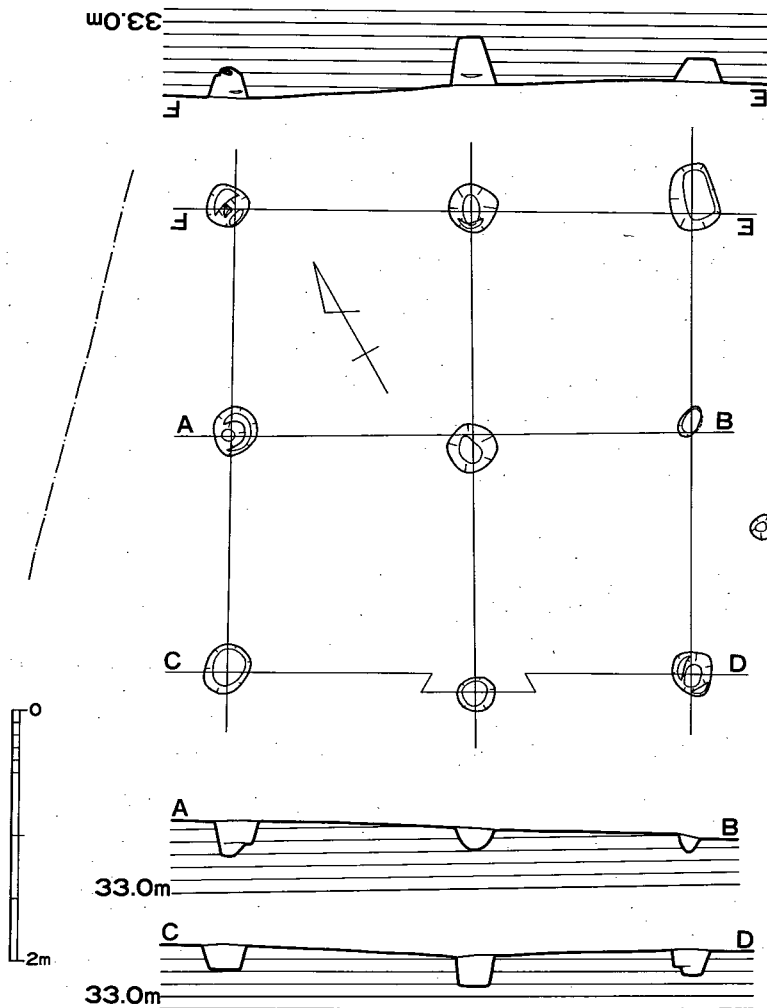
この建物は、2間×2間の方形の建物で、その大きさは、桁行3.7m (2間、6尺等間)、梁行3.7m (2間、6尺等間) を測る。

柱数は9本で、総柱となる。

柱穴掘形の大きさは、直径35cm程の不整円形を呈し、深さ20~30cm程を測る。

柱根痕跡は明瞭でなかった。

桁行方位は、 $N-30^{\circ}-E$ である。ピットからの出土遺物の検出は全くなかった。



第 27 図 12号掘立柱建物実測図 (1/60)

13号掘立柱建物 (第28図)

13号掘立柱建物は、調査区北端側に位置し、柱穴の一部は区域外にのびる東側3m離れて、3号掘立柱建物がある。

この建物の大きさは、西側が区域外にのびるため、正確な数値を得ることが出来ない。現存する柱穴からみると、柱穴間長3.5m (2間、6尺等間) を測る。

柱穴掘形の大きさは、直径50~70cmの不整形で、深さは30~50cmを測る。

柱根痕跡は、あまり明瞭でないが、残存する3本の柱穴のうち1本で、直径20cm程の柱根を

確認した。

桁穴列方位は、 $N-35^{\circ}-E$ である。

柱穴からの出土遺物は全くなかった。

3) 柱列状遺構

調査区内からは、2基の柱列状遺構を検出した。

この柱列状遺構については、当初、掘立柱建物を想定し、対応する柱穴の検出に努めたが、対応する柱穴がなく掘立柱建物の存在は否定された。しかし、直線的に並ぶ柱列は何らかの遺構と考えざるを得ず(棚状遺構、足場杭列遺構etc.)、ここに報告することとした。

1号柱列状遺構(図版27-1、第29図)

1号柱列状遺構は、調査区北西端側に位置し、柱列の一部は区域外にのびるようである。6号掘立柱建物と8、9号掘立柱建物の間にある。掘立柱建物の一部とも考えられるが、現状では対応する柱穴は検出できない。

計6本の柱穴が確認された。柱穴列の方位は $N-29^{\circ}-W$ にとり、その長さは、約 $10.5m + \alpha$ (5間以上、7尺等間)を測る。

柱穴掘形の大きさは、直径 $35\sim 50cm$ の不整円形で、深さは、 $30\sim 50cm$ を測る。

柱根痕跡は明瞭でない。

1号柱列状遺構周辺には、先述したように6、8、9号掘立柱建物があるが、それぞれの方位は6号掘立柱建物($N-42^{\circ}-W$)、8号掘立柱建物($N-28^{\circ}-E$)、9号掘立柱建物($N-34.5^{\circ}-W$)であり、1号柱列状遺構($N-29^{\circ}-W$)とは方位を異にし、また位置関係からも、それらの建物に伴う付属施設とは考えられない。

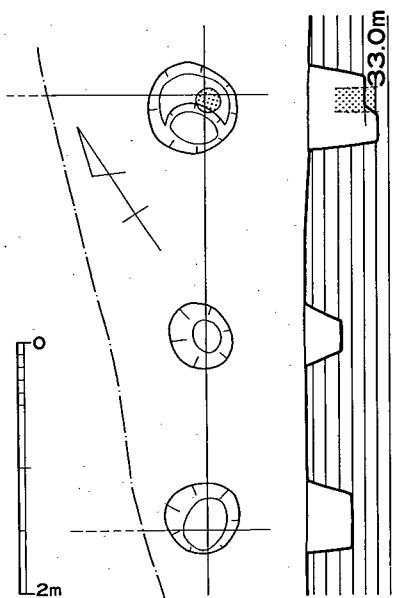
柱穴内からは、出土遺物の検出は全くなかった。

2号柱列状遺構(第30図)

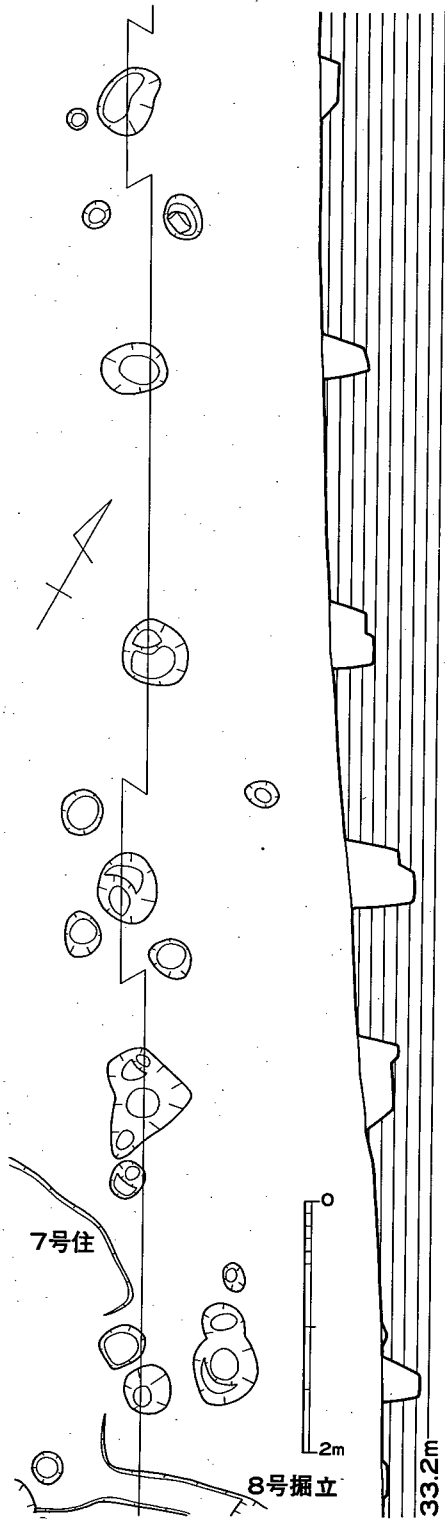
2号柱列状遺構は、2号溝により囲繞される区画内の北側端付近に位置する。北側に $10m$ 離れて、2号溝がある。

計7本の柱穴が確認された。その方位は $N-38^{\circ}-W$ にとり、その大きさは、約 $10.6m$ (6間、6尺等間)を測る。

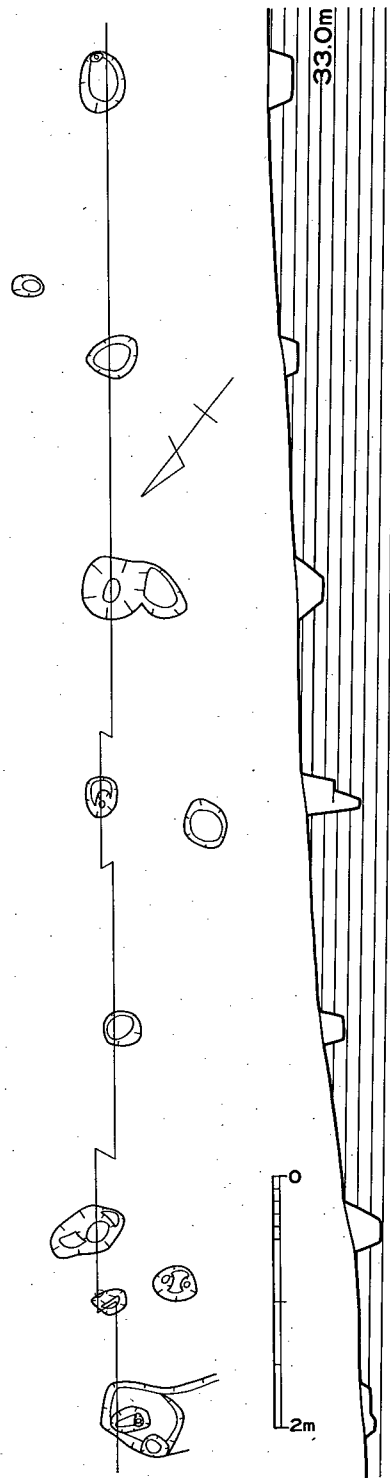
柱穴掘形の大きさは、直径 $30\sim 50cm$ の不整円形で、深さは、 $10\sim 40cm$ を測る。



第28図 13号掘立柱建物実測図(1/60)



第 29 图 1号柱列状遺構実測図 (1/60)



第 30 图 2号柱列状遺構実測図 (1/60)

柱根痕跡は明瞭でない。

2号柱列状遺構の機能については、当初、2号溝内側の棚状遺構を推定したが、溝と平行に柱穴列が並ばないこと、また溝内側端部より10mも離れるということから、その推定を撤回せざるを得ない。

柱穴内からは、出土遺物の検出が全くなかった。

4) 門状遺構

調査区内では、1基の門状遺構を検出した。

1号門状遺構 (第31図)

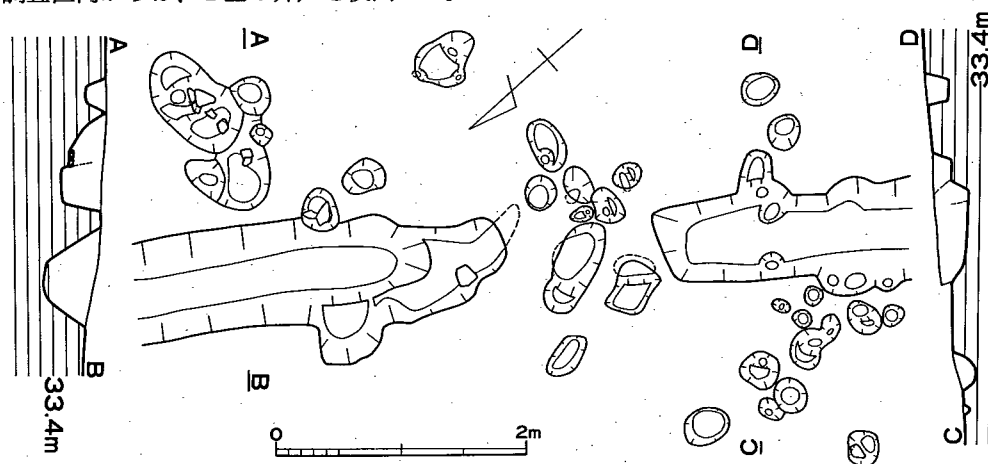
1号門状遺構は、北東から南西に走る小谷部の東側、11号、12号掘立柱建物を方形状に囲繞する2号溝状遺構の北西部で、一部溝が長さ1.2mにわたって中断する部分(陸橋部分)がある。この部分を注視すると、切断された溝のそれぞれの内側には、溝に直角に並ぶ2本の柱穴が幅4.2mの間隔で存在することが確認できる。4本の柱穴は、ほぼ直径25~30cm、深さ20~30cm程を測る。

柱根痕跡はないが、この陸橋部分(=入口)に付設された門状遺構であったと推定される。こうした施設を推定するには、2号溝状遺構内端部に4~6m間隔でめぐる棚列状遺構と一体になると考えるためでもある。

柱穴内及び周辺からの出土遺物の検出は全くなかった。

5) 井戸

調査区内からは、1基の井戸を検出した。



第 31 図 1号門状遺構実測図 (1/60)

1号井戸（図版31-1、第32図）

1号井戸は、調査区西側、北東から南西に走る小谷部の西側10m離れて位置する。また、北側5m離れて、8号、9号掘立柱建物がある。

1号井戸は、その機能が廃棄され、15~20cmの拳大の礫が上層に投げこまれていた。

埋土は、黒灰色粘質土で、粘性がとても強かった。掘削作業にあたっては、湧水が激しく、壁面からの崩壊の危険性が高く、遺構面より約1m掘り下げた時点で、作業を断念せざるを得なかった。長軸200cm、短軸160cm、深さ100cm+ α を測る。

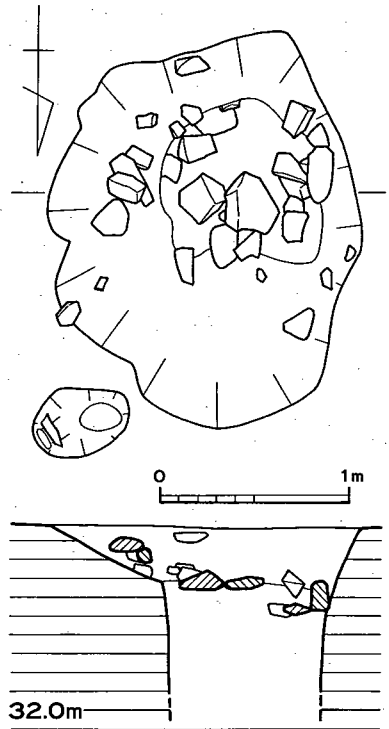
出土遺物（図版34、40、第33、42図）

24は須恵器の鉢口縁部片である。端部はやや外方に尖り気味になる。内外面共ヨコナデを施す。口径17.2cmを測る。

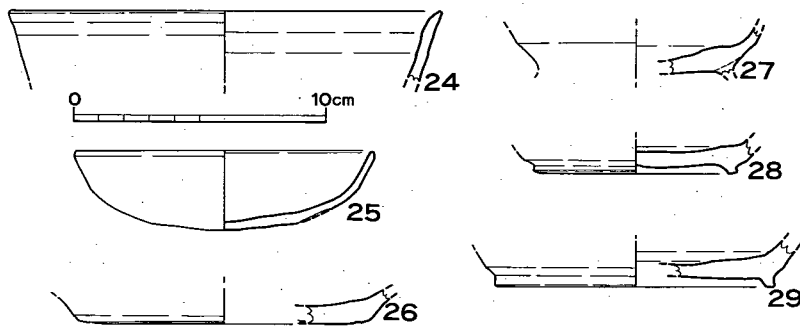
25は土師器の杯身である。口径13.2cm、器高3.2cmを測る。

26は須恵器の底部片である。底径11.5cmを測る。

27~29は須恵器の杯身片である。共に体部下半で、屈曲部を持たず、緩やかに弯曲しながら立ち上がる。高台は底部と体部の境界付近に付く。これらの須恵器は、8世紀中葉~後半のものだが、25の杯身は7世紀後半頃のものであるため、1号井戸の廃棄時期は、8世紀中葉~後半ということになる。この他、長さ3.7cm、幅1.2cmの土錘1点（第42図-11）も出土している。



第32図 1号井戸実測図（1/40）



第33図 1号井戸出土土器実測図（1/3）

6) 土壌

調査区内からは、計7基の土壌を検出した。遺物取り上げ時、ピット（直径40cm以下）と区別するため、土壌と呼称した。従って、形状的には、不整円形、不整方形、溝状を呈する細長い形等バラエティに富んでいる。

この項では、そのうち、遺物検出のあった1号、2号、3号、7号土壌について説明を加えてみたい。

1号土壌（第34図）

1号土壌は、調査区南端部、1号堅穴住居跡北側2mの所に位置する。

この土壌は、長方形プランを呈するが、一部は東側調査区域外にのびる。長軸2.2m+ α 、短軸1.6m、深さ5～10cmを測る。

土壌内には、径20cm、深さ10cm程の小ピットが4基あるが、その配置には規格性を見い出せない。

出土遺物（図版35、第35図）

31は須恵器の杯身である。立ち上がりは内傾度を増し、受け部はほぼ水平方向に短く突出する。口径12.5cm、器高42cmを測る。

さて、31の杯身を近接する1号堅穴住居跡出土の4の杯身と比較すると、4は口径12.5cm、器高3.4cmを測り、31とは器高に差をもつ。また4は立ち上がり部の長さ1.2cm、器壁厚0.3cmであるのに対して、31は長さ1.4cm、器壁厚0.2cmとここでも若干の差をみせる。

しかし、共に6世紀後半の所産であると推定される。

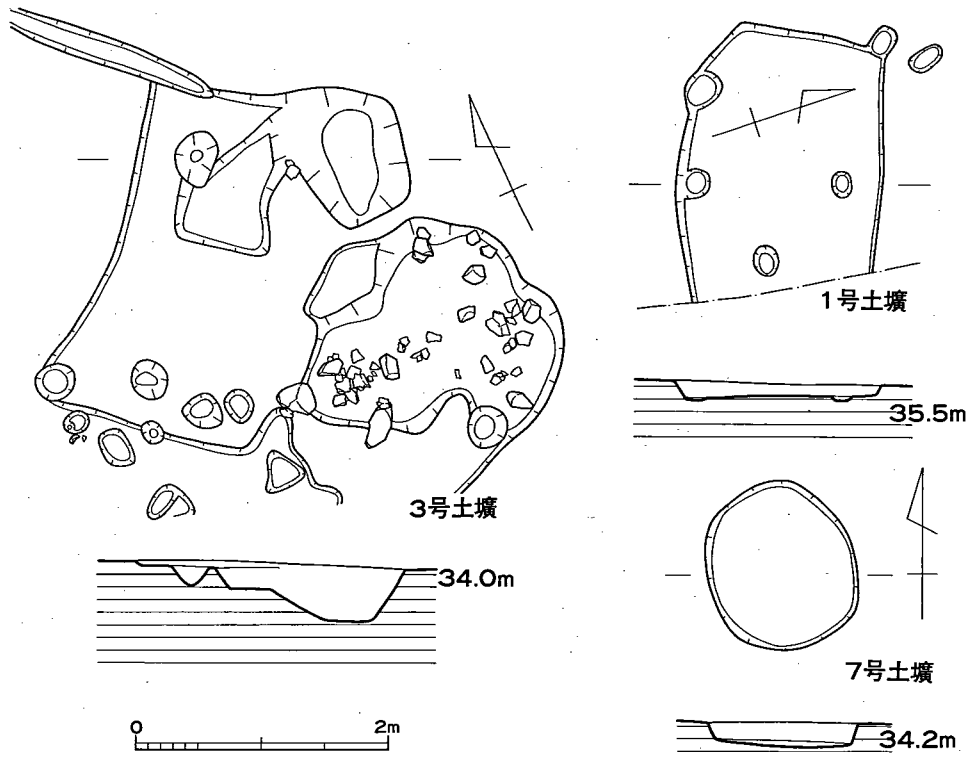
2号土壌（第10図）

2号土壌は、調査区北半部、4号堅穴住居跡排水溝に相当するものである。遺物取り上げ時に、周囲の遺構との関連を考えずに（特に遺構図は $S = 1/20$ で取るため、方眼紙タテ35×ヨコ50cmの中には、タテ7m×ヨコ10mの範囲が収まる。しかし、遺構が2枚の方眼紙に分かれる場合、こうしたミスが起きる可能性がある。担当者が調査補助の方々に周知徹底を図れば、あり得ないミスである。担当者の力不足を痛感する次第である）、機械的な遺物回収をしたことから起きた遺構の混乱である。

2号土壌は、4号堅穴住居跡東隅角から、弯曲しながら伸びる排水溝である。長さ5m、幅20～30cm、深さ10cmを測る。

出土遺物（図版34、第35図）

34は土師器の把手片である。径3cm、長さ5cm程を測り、先端部が上方に跳ね上がる。全体



第 34 図 1号、3号、7号土壌実測図 (1/60)

に作りは雑である。

3号土壌 (第34図)

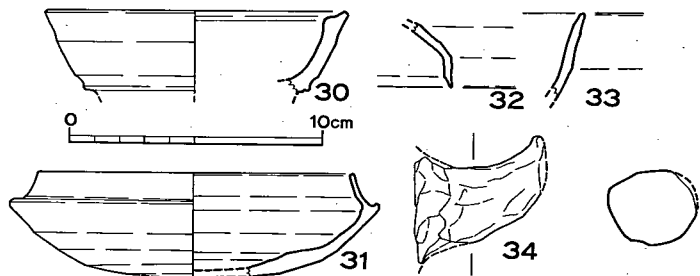
3号土壌は、4号堅穴住居跡に付設する排水溝 (= 2号土壌) の先端部にほぼ接して位置する。

この土壌は、長軸3.1m、短軸2.2m、深さ10cmの不整形プランになる。当初、堅穴住居跡を想定したが、柱穴等の検出はなかった。

出土遺物 (第35図)

30は須恵器の口縁部片である。自然釉が口縁端部全体にはまわらない。口縁部と反対の欠失部は、二重口縁状になる。臆となる可能性がある。口径12cmを測る。

32は須恵器の杯蓋である。口縁端部は外方にやや尖り



第 35 図 1号～3号土壌出土土器実測図 (1/3)

気味となる。

33は土師器の口縁部片である。外面は二次加熱を受け、黒化している。

7号土壇（第34図）

7号土壇は、調査区北端、4号堅穴住居跡北側約2mの所に位置する。

この土壇は、長径1.34m、短径1.17mの不整形円形プランを呈する。貯蔵穴になると思われるが、上部は削平され、深さは5～10cm程を測るに過ぎなかった。

出土遺物（図版36、第40図）

75、76は弥生土器である。

75は壺の口縁部片である。あまり胴が張らない体部から斜め上方に緩やかに短く伸びて口縁部に達する。口縁端部は若干下方に垂下し、丸味をもつ。短頸壺になると思われる。

76は壺の口縁部片である。朝顔状に外弯する口縁部端に粘土帯を貼付して、平坦口縁をつくっている。端部は面をもつ。

7) 溝状遺構

調査区内からは、5条の溝状遺構を検出した。

皆見遺跡の調査では、バイパス建設工事工程から、調査区を南、北に大きく分け、南半部より実施し、その後、表土を半転させて北半部へと移行した。1号溝状遺構は、南半部の調査時に検出された遺構であり、北半部の調査時に検出された2号溝状遺構とは同一になるものである。調査時には、両者が連続した状況での検出が不可能であったため、混乱を防ぐ意味で、あえて1号、2号溝状遺構と区別して、遺物を取り上げている。従って、皆見遺跡の調査区で検出された溝状遺構は正確には4条となる。

1号・2号溝状遺構（図版2-2、3-2、4、付図2）

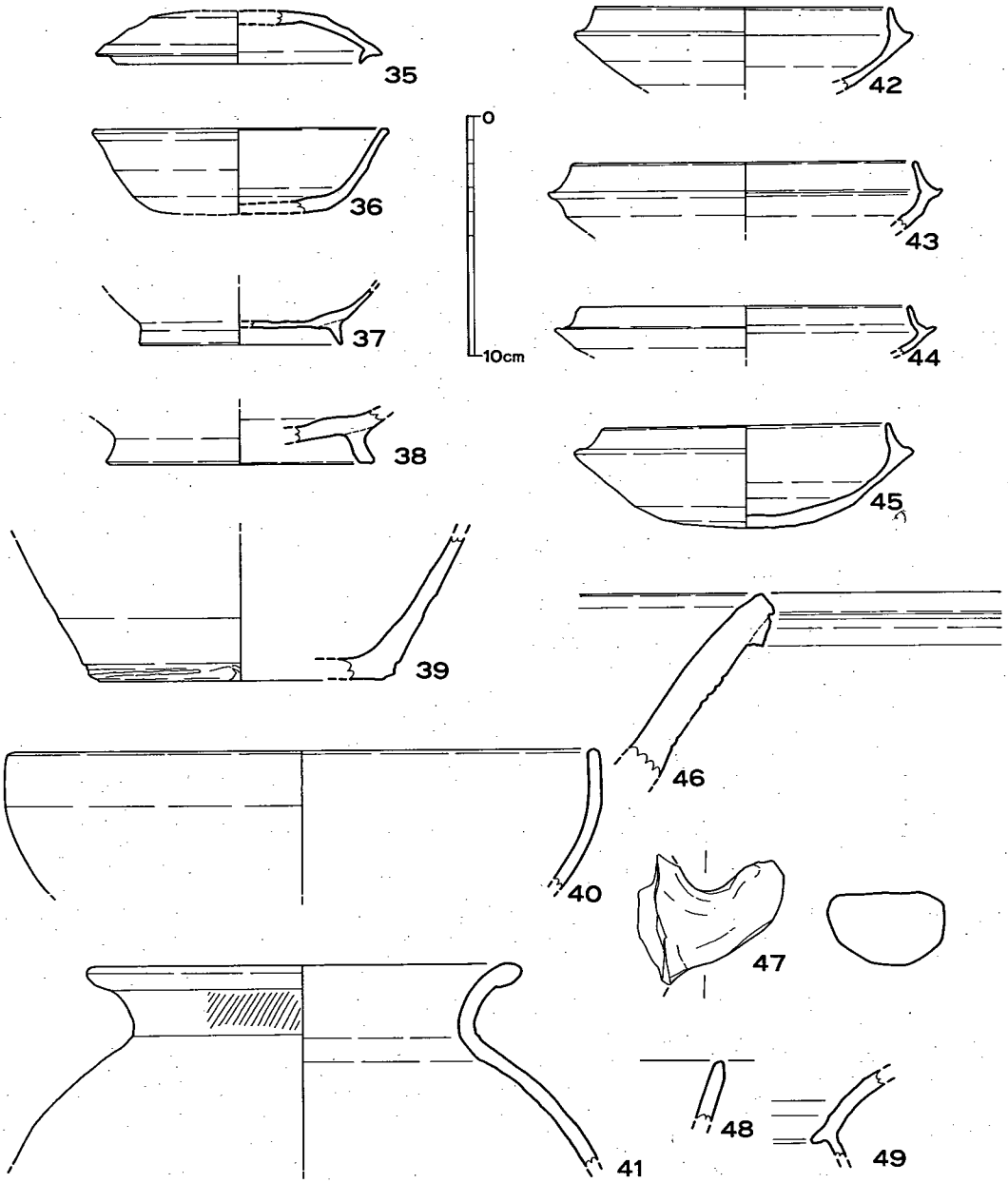
先述したように1号・2号溝状遺構は同一の遺構である。

この遺構は、堅穴住居跡、掘立柱建物が集中する北側台地とは、北東から南西に走る小谷を挟んで反対側の南側台地上にある。

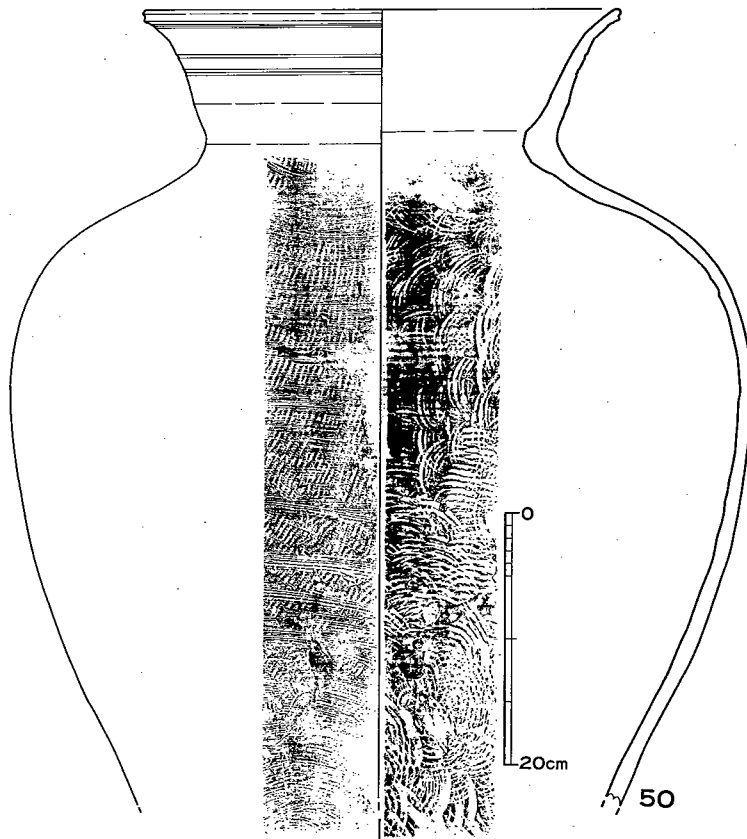
この溝状遺構は、南側台地を隅丸「コ」の字状に囲繞して巡るもので、南北側は調査区域外にのびる。

小谷とほぼ平行に走る南北直線距離は50～60m、幅80cm、深さ40cmを測る。また北側では残存長9m、幅50cm、南側では残存長30m、幅50cm、深さ40cmを測る。

この溝状遺構を検出した際には、平行する小谷は湿田状態にあった。従って、この溝状遺構も、そのほとんどが湿田に埋没していた。しかし、調査を進める中で、この小谷は、元来滞水状態になく、流水を保っていたことがわかった。それについては、小谷西側外端部から6m程



第 36 図 1号、2号、4号溝状遺構及びピット7、99、131、151出土土器実測図 (1/3)



第 37 図 2号溝状遺構出土土器実測図 (1/6)

離れる4号・7号掘立柱建物の東側の柱穴が、湿田下にあったことから看取できる。

つまり、この1号・2号溝状遺構は、南・北の台地を分かち、北東から南西に流れる小谷があったにもかかわらず、あえて南側台地を区画する、何らかの意味をもつ溝であったことが推測される。

この溝状遺構の両側には無数のピット群が存在する。このうち、内側のピット群の中には、溝の外端部(=上場)上に並ぶピットが存在していることが認められる。これらのピットを抽出していくと、2.5~3.5mの間隔にほぼ2個1組で、隅丸「コ」の字状の溝状遺構を巡る杭列になる。これらのピットは直径30cm、深さ20~30cmを測り、柵列状遺構の存在を窺わせる。これについては、先述した1号門状遺構の存在とも符合してくる。

ところで、こうした区画を設けた内部には、今回の調査で、11号、12号掘立柱建物、2号柱列状遺構を検出したのみで、その他顕著な遺構の検出はない。調査区域外での遺構の展開は十分に考えられるが、どのような機能をもつ区画溝であるかについては不明である。

出土遺物(図版34, 35, 第36, 37図)

第36図42、43、45は須恵器の杯身である。共に立ち上がりは内傾し、短く伸び、受けはほぼ水平方向に短く突出する。

第36図41は須恵器の甕口縁部片である。口径18.2cmを測り、口縁部は短く外反し、端部は丸味を帯び肥厚する。体部外面は平行タタキの後、カキ目を施す。また内面には同心円文タタキが残る。口径は、胴部最大径より小さい。

第36図48は土師器の口縁部片である。

第37図50は須恵器の大甕である。やや肩部が張る体部から短く「く」の字に外反して口縁部に達する。端部は面をもち、一条の凹線が巡る。また、短い頸部には三条の沈線が巡る。体部外面平行タタキ、内面は同心円タタキが施される。

共に、6世紀後半～7世紀前半のものである。

このことから、1号・2号溝状遺構の下限は、上記の年代であり、北側台地の遺構の展開から考えても、短期間のうちに埋没したことがわかる。

3号溝状遺構（付図2）

3号溝状遺構は、調査区南半部で、1号・2号溝状遺構に連結するものである。

この遺構は南北に走り、残存長28m、幅1.2m、深さ50～80cm程を測る。南側から1号・2号溝状遺構に流れ込む。

出土遺物の検出は全くなかった。

4号溝状遺構（図版9、10、付図2）

4号溝状遺構は、調査区北半部、2号竪穴住居跡を切っている。残存長26m、幅85cm、深さ70cm程を測り、東側小谷へ向かい、北西から南東に走る。

出土遺物（第36図）

38は須恵器の高台付碗片である。高台は短く外傾し、底部と体部境界より内側に貼付される。高台端部は平坦になる。7世紀後半頃に属する。

40は土師器の高杯口縁部片である。やや内弯気味の深いタイプのもので、口径24.6cmを測る。7世紀後半頃に属する。

44は須恵器の杯身片である。先述した42、43、45より立ち上がりが短い。7世紀中葉頃に属する。

46は須恵器の口縁部片である。口縁端部は外傾し、面をもつ。外端部下には一条の突帯が貼付され、その下には3条を一組とする波状文が2組残る。

47は土師器の把手である。

こうした出土土器から、4号溝状遺構は、7世紀中葉から後半にかけて開削され、埋没した

ことがわかる。

5号溝状遺構（付図2）

5号溝状遺構は、1号掘立柱建物を横切り、小谷に北から南へ流れ込むものである。一部は北側の調査区域外にのびる。残存長22m、幅1m、深さ10～20cm程を測る。

出土遺物の検出は全くなかった。

8) その他の遺構と遺物

1) から7) までの項目では、調査区内から検出された竪穴住居跡6軒、竪穴柱建物13棟、柱列状遺構2基、門状遺構1基、井戸1基、土壇7基、溝状遺構5条の報告を行ってきた。

この頃では、その他の遺構（ピット、包含層）から検出した資料及び表採資料を中心に説明を加えてみたい。

①ピット

ピット4（図版43、付図2）

調査区内中央より西側、6号竪穴住居跡の南側に位置する。付近には、後述するピット7、8がある。ピット内からは、陶磁器碗片1点が出土した。ピットは径25cm、深さ20cm程を測る。

図版43の碗片は、内外面褐色釉を施すが、外側の釉まわりは非常に悪い。胎土は細砂を含むが比較的精良である。

ピット7（図版33、第36図、付図2）

先述したピット4から、南側へ2m程離れて立地する。ピットは、長軸50cm、短軸25cm、深さ20cm程の楕円形プランを呈する。ピット内からは、1点の土師器の杯身が出土した。

36は径12.4cm、器高3.5cmを測る。内外面共に二次加熱を受け、黒化している。底部は完全に平坦化せず、若干丸味をもつ。また口縁外端部下辺は強いヨコナデが施され、凹線状のくぼみが出る。調整は磨滅が著しく不明である。8世紀中葉に属する。

ピット8（図版40、第42図、付図2）

先述したピット7のすぐ南に位置し、一部は調査区域外にのびる。ピットは、長軸145cm、残存短軸50～70cm、深さ50cm程を測る長楕円形プランを呈する。

ピット内からは、須恵質の三足土器の脚部（第42図16）が出土した。形状は円錐状を呈し、残存長8.2cm、最大径2.2cm、先端部径0.7cmを測る。外面には、形状を整えるための指頭圧痕が

残るが、その上からタテ方向へのヘラ削りも行っている。

ピット99 (第36図、付図2)

ピット99は7号掘立柱建物の柱穴であるP4にあたる。柱穴は長軸75cm、短軸55cm、深さ15cm程の楕円形プランを呈する。柱穴内からは、須恵器杯身片が出土した。

49は立ち上がりが内傾し、受けは若干外方に突出する。6世紀後半～7世紀前半頃のものである。

ピット131 (図版34、第36図、付図2)

ピット131は、1号柱列状遺構の最北端の柱穴にあたる。長軸55cm、短軸40cm、深さ15cm程の楕円形プランを呈する。柱穴内からは土師器の高台付碗片が出土した。

37は、器壁が薄く、高台は底部と体部との境界付近に貼付される。10世紀代のものと思われる。

ピット151 (図版33、第36図、付図2)

調査区中央部、7号掘立柱建物東側に位置する。長軸50cm、短軸40cm、深さ10～20cm程の楕円形を呈する。ピット内からは土師器の甕底部片が出土した。

39は、外面暗灰色、内面黄灰色を呈する。調整は内外面共ヨコナデを施す。外面には指頭痕が残る。体部最下辺、底部との境界付近には、工具等による二条の凹線を施した後、底部方向からのヘラ押し上げによる調整がみられる。

ピット206 (図版41、42、第44図、付図2)

調査区中央部東側、2号柱列状遺構の南側に位置する。ピットは径50cm、深さ10cm程の不整形を呈する。ピット内からは、手づくね土器、土製模造鏡各1点が出土した。

10の手づくね土器は、径3cm、器高2.3cm程を測る。器表面は著しく磨滅している。二次加熱は受けていない。

20の土製模造鏡は破片であるが、摘み出した鈕には3mm程の穿孔がある。径6.5cm程を測り、鏡面はやや彎曲する。

これら土製品は祭祀具等の用途が考えられるが、周辺には2号柱列状遺構や11号掘立柱建物があるが、ピット206と関連する遺構の存在は見出されない。

ピット236 (図版38、第41図、付図2)

ピット236は2号掘立柱建物の柱穴により切られる。長軸150cm、短軸70cm、深さ10cm程の楕

円形プランを呈する。ピット内からは弥生土器が出土した。

89は甕底部片である。外面は刷毛目がタテ方向に施される。底部中央には穿孔がある。弥生時代中期初頭に属する。

ピット237 (図版38、第41図、付図2)

ピット237は、5号溝状遺構により切られる。長軸70cm、短軸55cm、深さ45cm程の楕円形プランを呈する。ピット内からは弥生土器が出土した。

81は口縁部片である。端部は若干垂下する。

92は底部片である。底径7.5cmを測る。

共に弥生時代中期初頭に属する。

ピット250 (図版36, 38、第41図、付図2)

ピット250は4号掘立柱建物の北側に隣接する。径50cm、深さ20cm程の円形プランを呈する。ピット内からは、弥生土器が出土した。

86、93は壺底部片である。前者の底径は8cm、後者の底径は12cmを測る。

85は鉢口縁部片である。口径23cmを測る。如意形口縁外端部下に指頭圧痕が残る。

共に弥生時代中期初頭に属する。

ピット267 (図版40、第42図、付図2)

10号掘立柱建物の北端の柱穴である。直径90cm、深さ40cm程を測る。ピット内からは、断面半円形の分銅状土製品1点(第42図14)が出土した。平面は長方形になり、一方の小口は完存して、二次加熱を受けるが、他方は破面となる。完存する小口端部近くに、径5mm程の孔がある。残存長3.7cm、幅1.5~1.8cmを測る。

ピット329 (図版35, 38、第41図、付図2)

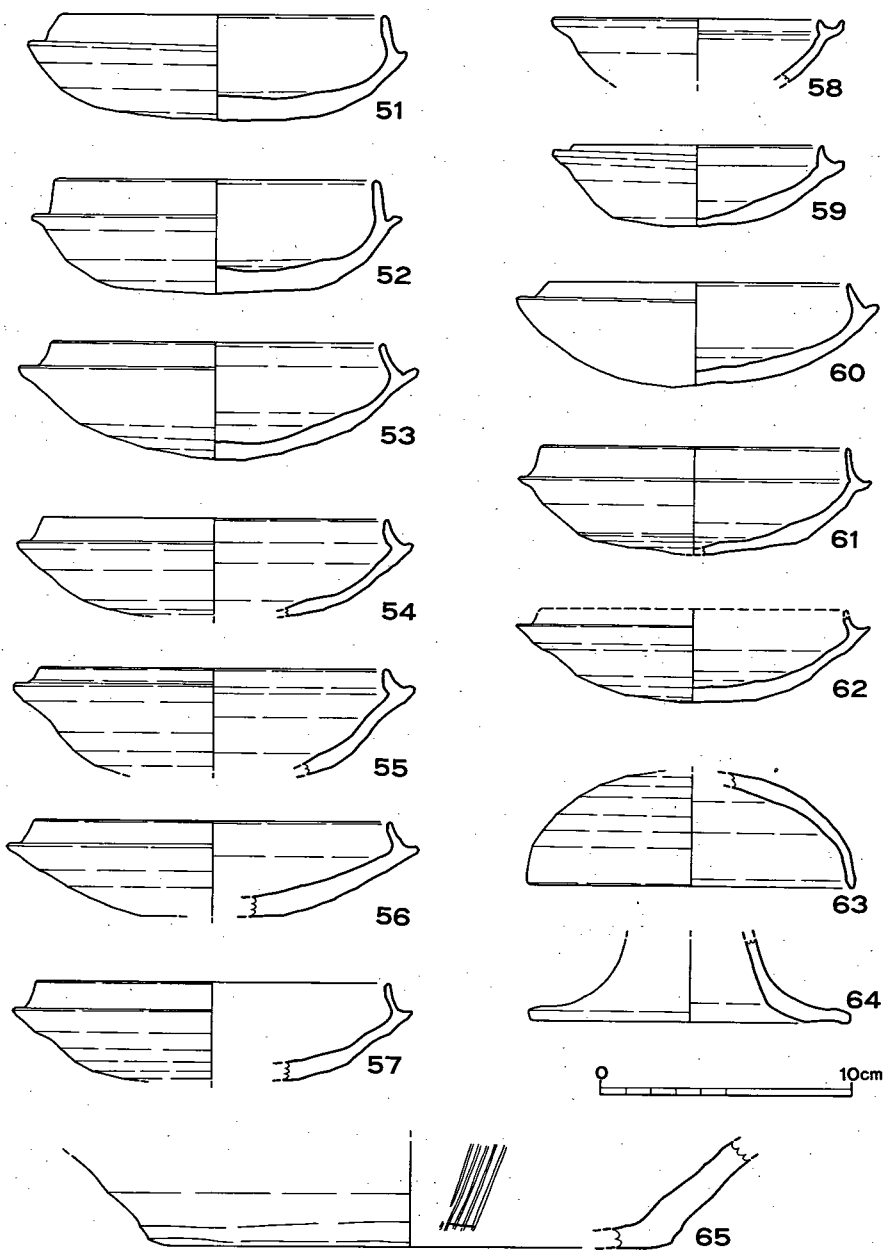
ピット329は5号溝状遺構に隣接する。径30cm、深さ10cm程の円形プランを呈する。ピット内からは弥生土器が出土した。

90は甕底部片である。底径7cmを測り、上げ底状になる。

⑥包含層

包含層からは、土器、土製品、石製品が出土している。

土器 (図版35, 38、第38、39、41図)

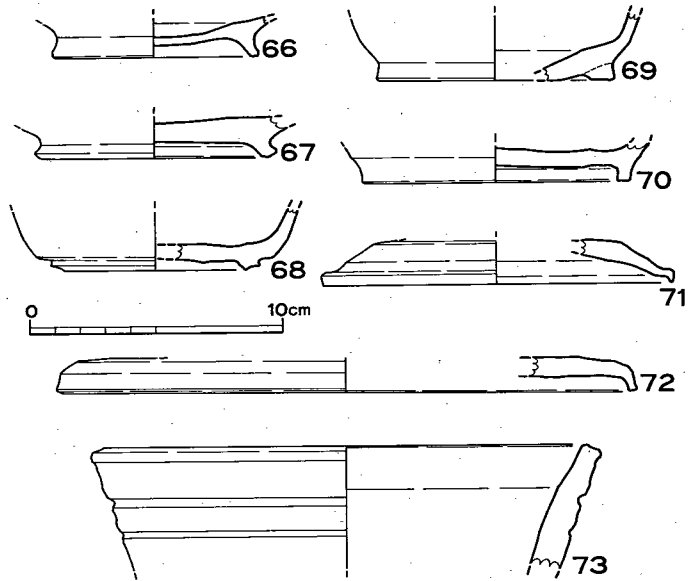


第 38 图 包含层出土土器实测图 (1/3)

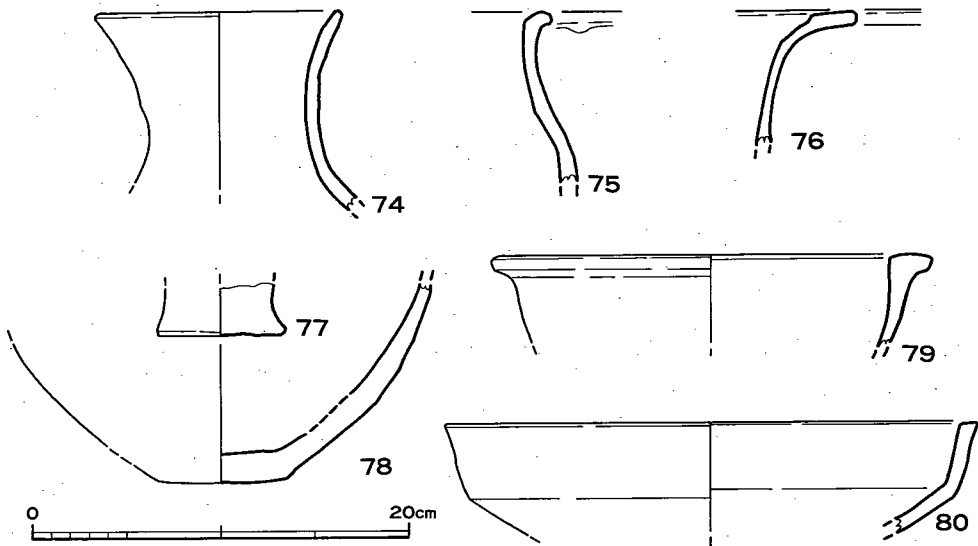
51から61は須恵器の杯身である。これらの杯身は、立ち上がりの内傾度が増し、受け部が外方に短く突出するものであるが、立ち上がりの外傾度、長さ及び器形から3タイプに細分可能である。

Aタイプ…51、52、60。51は口径12.8cm、器高4.2cm、52は口径12.8cm、器高4.6cm、60は口径12.2cm、器高4.4cmを測る。体部内面から内傾度を増さず、直線的に立ち上がりに達する。受け部は短く、やや跳ね上がる。底部は平坦化する。器壁が他の2タイプに比べ、肥厚する。

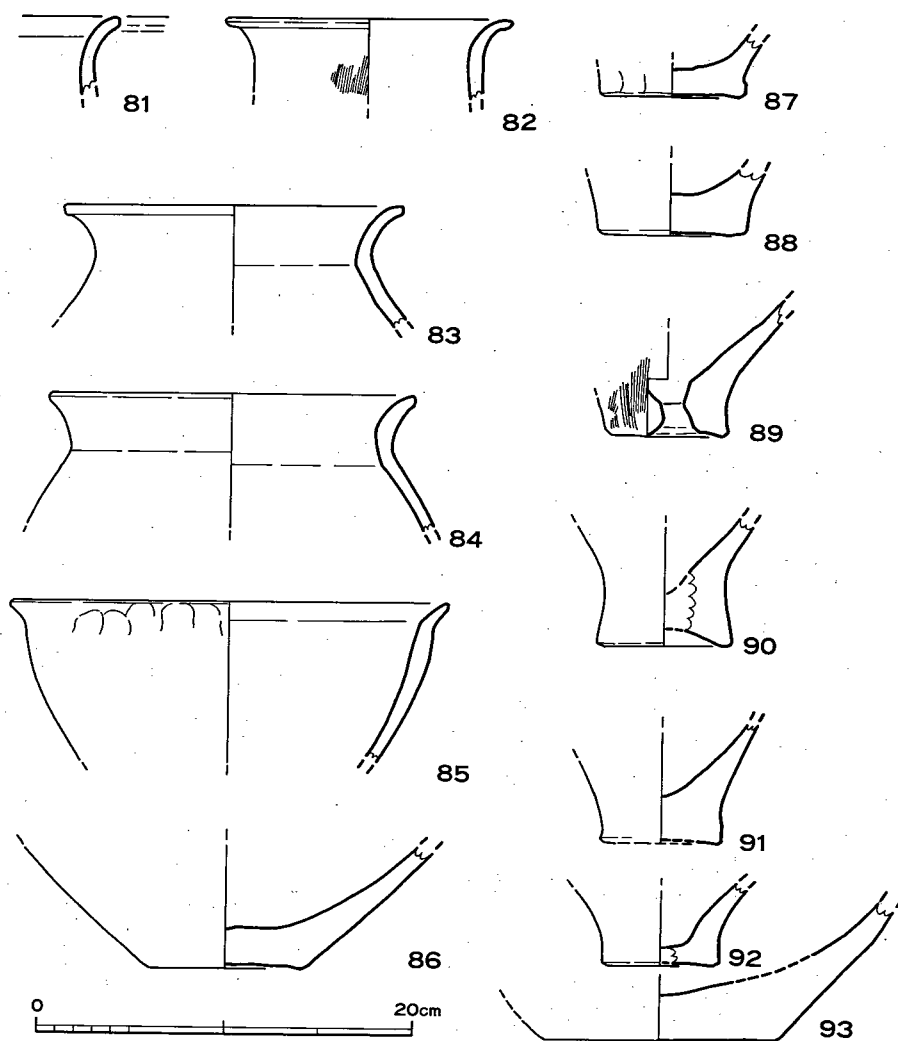
Bタイプ…53、56、57、59。53は口径13.3cm、器高4.7cm、56は口径14.2cm、57は口径14.2cm、59は口径11.8cm、そして、それぞれ器高4cmを測る。体部内面から内弯気味に立ち上がりに達する。立ち上がりは、Aタイプより内傾度を増し、やや反り気味になる。受け



第39図 包含層出土土器実測図(1/3)



第40図 2号竖穴住居跡埋土、3号竖穴住居跡下層、6号竖穴住居跡、7号土壙出土土器実測図(1/4)



第 41 図 6号竪穴住居跡、ピット及び包含層出土土器実測図 (1/4)

部は短く、やや跳ね上がる。底部は丸くなる。

Cタイプ…54、55、58、61。54は口径13.8cm、55は口径13.8cm、58は口径9.8cm、そして、それぞれ器高3.3cm、61は口径12.3cm、器高3.7cmを測る。体部内面から「く」の字に立ち上がりに達する。立ち上がりは短く、やや反り気味になる。受け部は短くほぼ水平方向に突出する。

共に、6世紀後半～7世紀前半に属する。

62、63は須恵器の杯蓋である。62は口径11.6cmを測り、立ち上がりと受け部の長さが等しいものである。

63は口径13cmを測る。天井部は丸味をもつ。

64は土師器の高杯の脚部である。脚底径12.8cmを測る。脚部外反しながら端部へ達する。裾部は平坦で、端部は面をもつ。

65は、須恵器の底部片である。底径20.8cmを測る。すべて7世紀後半に属する。

66～70は須恵器の杯身底部片である。すべて高台が付く。高台の付き方で大きく2タイプに分かれる。

Aタイプ…66、67、69、70。底部から体部は丸味をもって立ち上がる。高台は底部と体部の境界付近に付く。これらは高台の形でさらに細分できる。高台が外方を向くもの(66、67)と垂直に立つもの(69、70)に分かれる。8世紀中葉に属する。

Bタイプ…68。底部から体部への屈曲が明瞭で、高台は底部外周より内側につく。8世紀後半に属する。

71は、須恵器の杯蓋である。口径13.8cmを測る。天井部は平坦で、口縁端部で屈曲し、鳥嘴状を呈する。

72は須恵器の皿である。口径22.7cm、器高1.4cmを測る。71、72は8世紀中葉頃に属する。

73は須恵器の口縁部片である。口径20.2cmを測る。斜め上方に立ち上がる体部には三条の沈線がめぐる。口縁端部は外傾して、面をもつ。

その他、包含層からは弥生土器が出土している(図版38、第41図)。

82は壺口縁部片である。直立する頸部から、短く外反する口縁部に達する。端部は丸くなり、若干垂下する。口径15cmを測る。

83は甕の口縁部片である。如意形口縁になり、端部は面をもつ。口径18cmを測る。

84は甕の口縁部片である。83よりも短く開く如意形口縁になり、端部は丸くおさめる。口径19.4cmを測る。

88は甕の底部片である。底径7.7cmを測る。

91は甕の底部片である。底径6cmを測る。88よりも底部は肥厚になる。

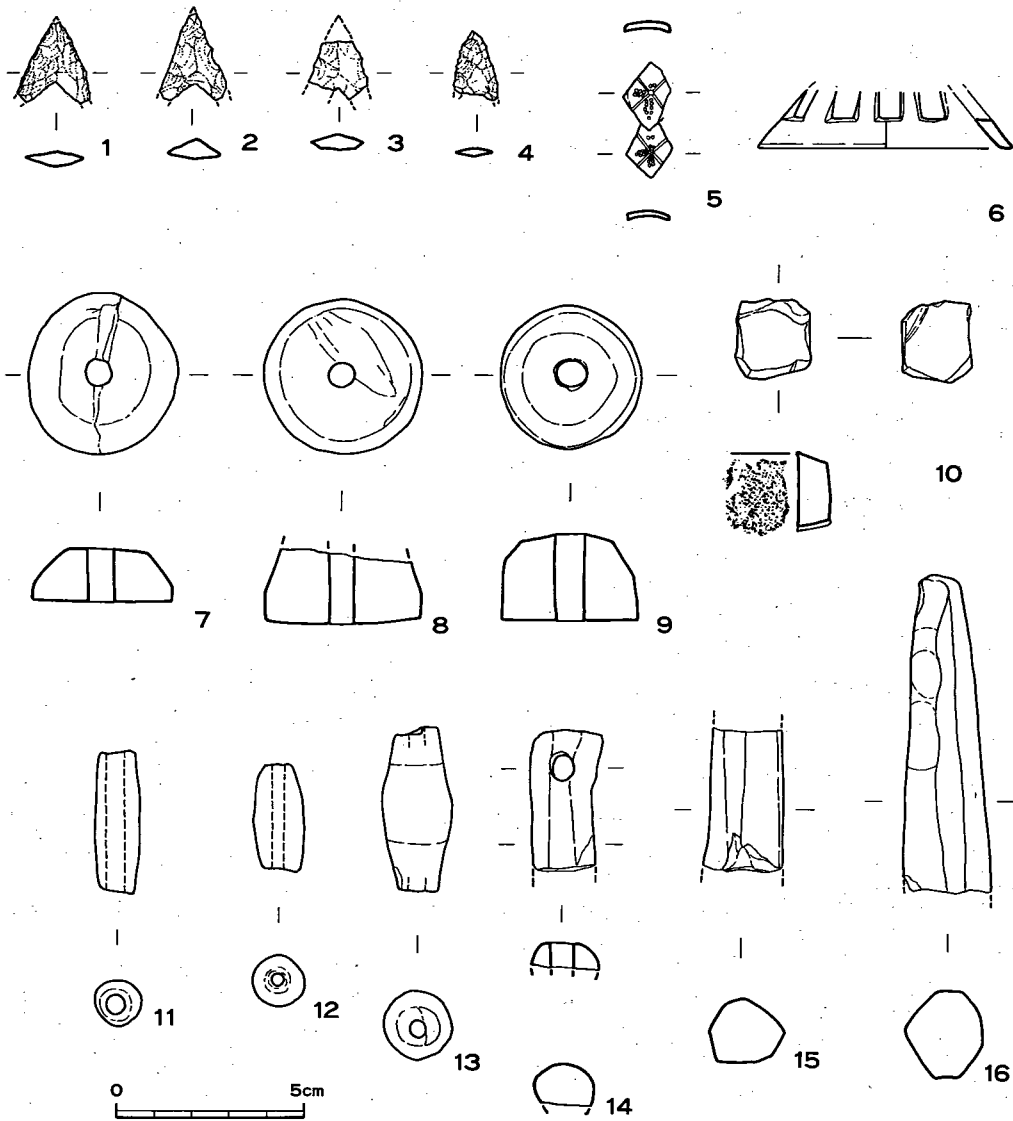
すべて、弥生時代中期初頭に属する。

青銅製品(図版43、第42図)

5は青銅製の装飾品である。弯曲する二つの菱形製品を3mm程重ね合わせて連結させる。二つの菱形製品表面には「×」字の刻線が入り、交点に円形の刻印がある。また、「×」字の刻線で4分割された部分にも円形の刻印がみられる。腐植が著しいが残りの良い所では、2個一組の刻印が4列とその頂点に1個、計9個の刻印がみられる。

土製品(図版40、42、43、第42、43図)

第42図10は製塩土器である。口縁部片になる。胎土中に砂粒を含み、色調は赤褐色で、焼成



第 42 図 皆見遺跡出土青銅製品、石製品、土製品実測図 (1/2)

は硬質である。口縁端部は、外方に傾斜する。型造りで、外面に指押えの凹凸が残り、内面は粗い布目を有する。

第42図12は土錘である。二次加熱を受け、黒化している。長2.7cm、幅1.4cm、穿孔径0.4cmを測る。焼成は軟質である。第42図13は土錘である。両端から摘まみあげられ、中央部が膨らむ。長4.4cm、幅1.8cm、穿孔径0.45cmを測る。孔には鉄が腐植してつまる。焼成はやや硬質で、色調は灰白色を呈する。

第42図15は須恵質の三足土器脚部片である。不整七角形状を呈し、そのうち四面が二次加熱を受け、黒化している。この部分が内側となる。焼成は硬質で、色調は暗灰色である。幅2cmを測る。

第43図13は手づくね土器である。口径3cm、器高3.1cmを測る。

石製品（図版38～40、第42、44、45図）

第42図2～4は石鏃である。2は残存長2.3cm、抉りが深い。姫島産黒曜石製。3は残存長1.6cm、抉りが深い。石英製。4は残存長1.8cm、抉りが浅い。断面は扁平である。姫島産黒曜石製。

第45図2は叩き石である。砂岩質でポロポロしている。側面は使用頻度の高い敲打痕を残している。長さ10.2cm、幅7.9cm、厚さ3.6cmを測る。

第45図3は、砂岩質の叩き石である。ボール状を呈する。径8.1cm、厚さ6.4cmを測る。敲打痕は一箇所に集中する。

第45図7は磨石である。安山岩製。

第45図8、9は片岩質の打製石斧である。

その他、前項で説明が加えられなかった土製品と石製品がある。

第42図9は6号竪穴住居跡カマド内出土の滑石製紡錘車である。上面径2.6cm、下面径3.6cm、高さ2.3cm、穿孔径0.8cmを測る。上面は平坦にならず、外方に傾斜する。

第44図21も6号竪穴住居跡カマド内出土の手づくねの器台である。受け部と脚部、そしてそれらを接続する断面不整五角形の柱状部からなる。受け部、脚部共外面はヨコナデを施す。柱状部には指頭圧痕がみられる。残存高4cmを測る。

第45図6は1号（=2号）溝状遺構出土の石斧である。断面は扁平であるが、刃部を作り出している。

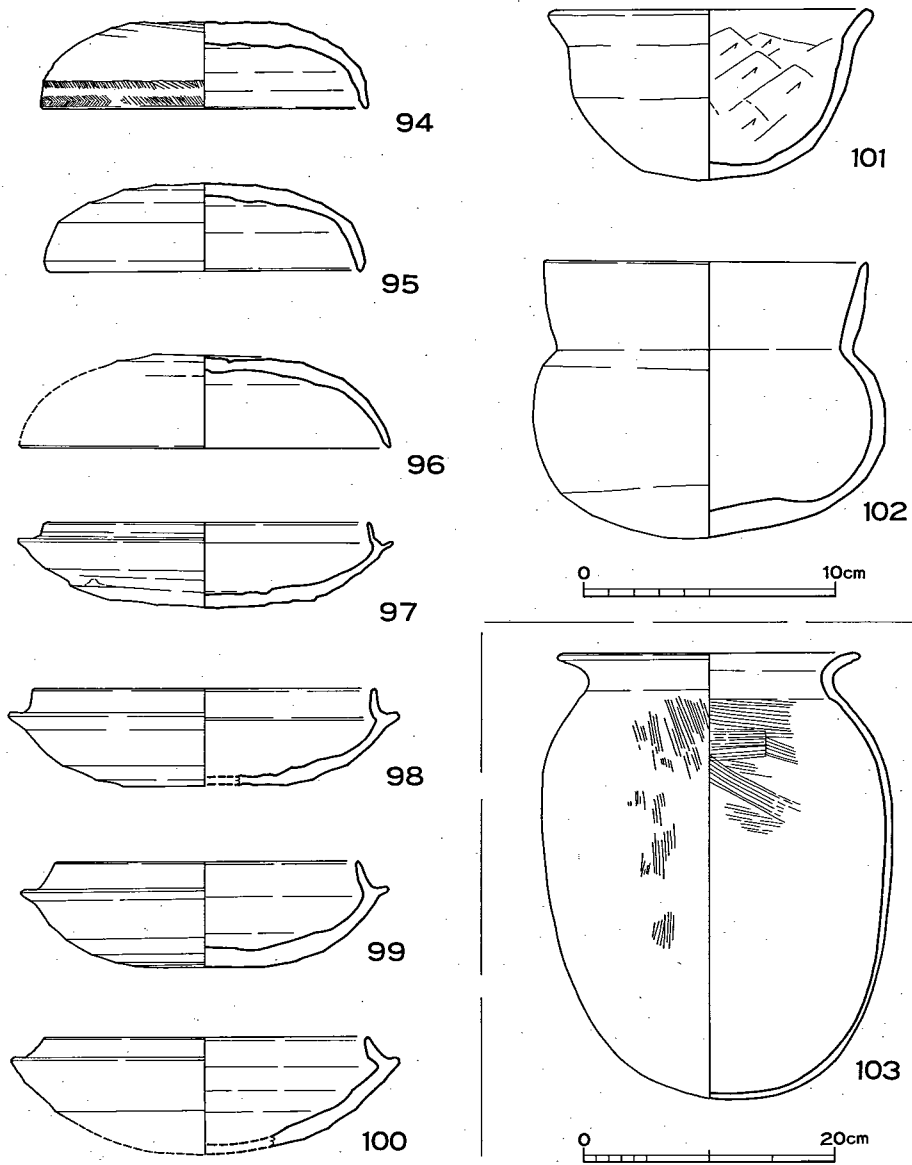
第45図11はピット21出土の支脚(?)である。長16cmで、隅丸三角形を呈する。両面共平滑である。底辺部は若干の凹味をもつ。輝緑岩製。

（補遺）

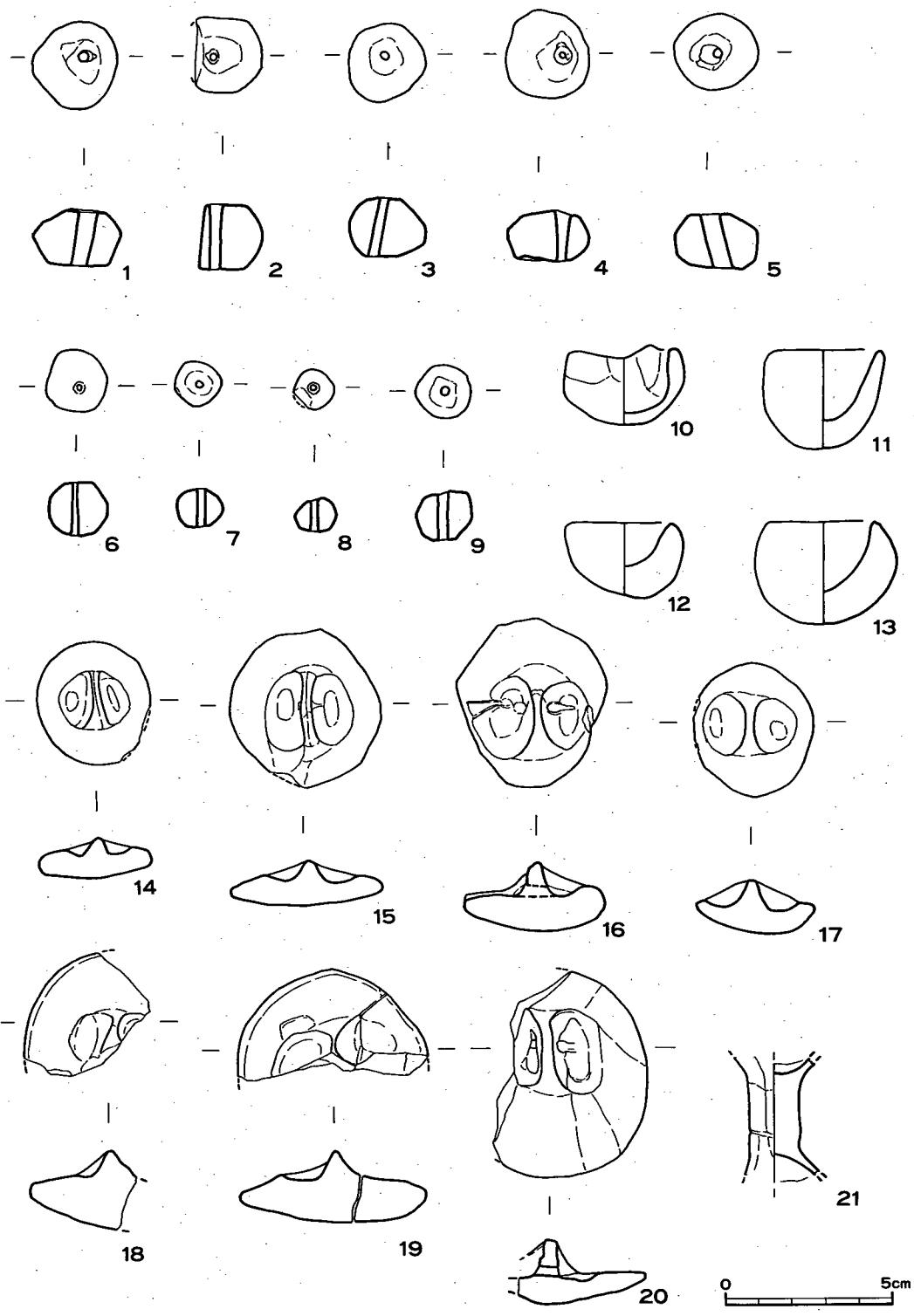
上記の他に、竪穴住居跡から出土した土器が10点ある（図版37、第43図）。これらは、担当者の不注意で整理過程で一時、消失していたものである。

97、102は2号竪穴住居跡から出土した。97は須恵器の杯身である。立ち上がり部は短く、内傾度を増し、受け部は外方に突出する。口径12.8cm、器高3.4cm。102は土師器の埴である。球形の体部から直線的に伸びて口縁部に達する。口径12.9cm、器高10.9cmを測る。

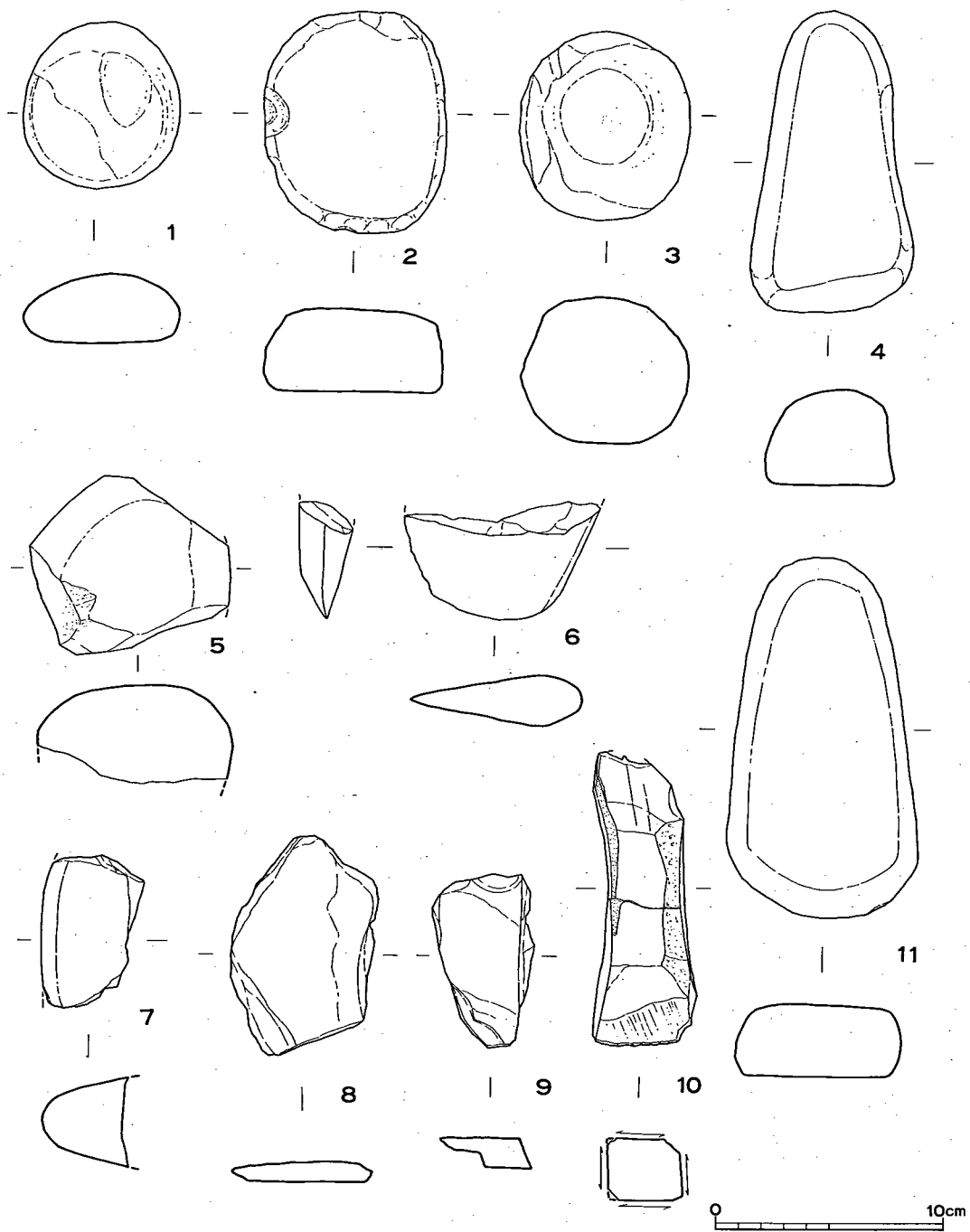
98、99、101、103は3号竪穴住居跡から出土した。98、99は須恵器の杯身である。98は立ち上がり部が短く反り気味になり、受け部はほぼ水平方向に突出する。体部に粘土を付着する。



第 43 图 2号、3号、4号、6号竖穴住居迹出土土器实测图 (1/3)



第 44 图 皆見遺跡出土土製品実測图 (1/2)

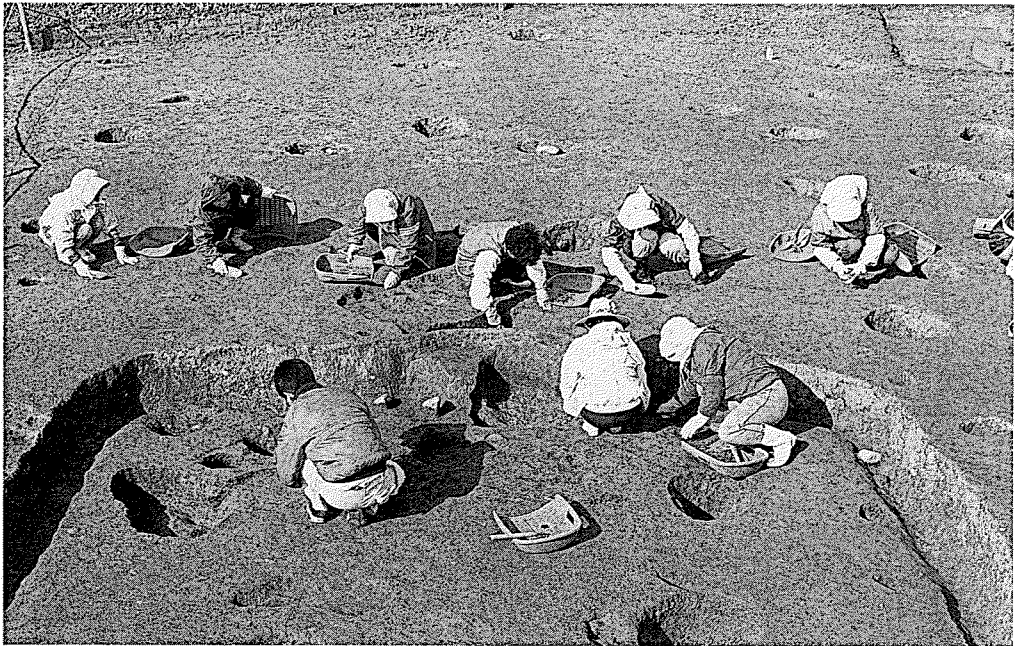


第 45 图 皆見遺跡出土石製品実測図 (1/3)

口径13.8cm、器高3.9cm。99は98より立ち上がりが内傾し、受け部は水平方向に短く突出する。口径12.1cm、器高4.2cm。101は土師器の鉢である。丸底の底部から斜め外方に立ち上がり、緩やかに「く」の字に外反して口縁部に達する。口径12.9cm、器高6.8cm。

94、95は4号竪穴住居跡から出土した。94、95は須恵器の杯蓋である。94は口縁部がやや外方に向く。口縁部下辺には、綾杉文状の文様が施される。口径13cm、器高3.4cm。95は94よりやや内弯して口縁部に達する。口径12.6cm、器高3.5cm。

96、100は6号竪穴住居跡から出土した。96は須恵器の杯蓋である。94、95より口縁部は外方に流れる。口径14.8cm、器高3.6cm。100は土師器の甕である。長胴化した体部から短く「く」の字に外反する口縁部に達する。内外面刷毛目調整を施す。



皆見遺跡発掘作業風景（3号竪穴住居跡）

第3節 小 結

以上のように、皆見遺跡の発掘調査では、竪穴住居跡6軒、掘立柱建物13棟、柱列状遺構2基、門状遺構1基、井戸1基、溝状遺構5条、土壙7基等を検出した。そして、各遺構からは、弥生時代中期初頭から12世紀後半頃までの遺物が出土した。

以下では、これらの遺構と遺物について、若干のまとめをしてみたい。

1・各遺構の時期と共存関係

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡から出土した須恵器の杯身は、6世紀後半から7世紀前半に属する。

2号竪穴住居跡から出土した須恵器の杯蓋、杯身等は、7世紀前半に属する。埋土中からは弥生時代中期後半の土器も出土している。

3号竪穴住居跡から出土した須恵器の杯蓋、杯身、甕等は、6世紀後半から7世紀前半に属する。

4号竪穴住居跡から出土した須恵器の杯蓋は、7世紀前半に属する。埋土からは弥生時代中期後半の弥生土器も出土している。

5号竪穴住居跡からは、出土遺物がなかった。

6号竪穴住居跡から出土した須恵器の杯蓋や土師器の甕やカマド内等から出土した手づくね土器や紡錘車の形態は、2号竪穴住居跡出土のものと同様であることから、7世紀前半に属すると推定できる。

7号竪穴住居跡は、その形態から住居跡として成立するか、疑問視されるが、ピットから出土した土器は、弥生時代中期初頭のものである。

こうして、竪穴住居跡は、大きく3時期に分かれる。つまり弥生時代中期初頭、弥生時代中期後半、6世紀後半～7世紀前半である。

掘立柱建物

2号、3号、5号、6号、7号、10号掘立柱建物の柱穴からは、土器等が出土した。

1号掘立柱建物の柱穴からは、遺物の出土がなかった。桁行方位はN-27°-Eである。

2号掘立柱建物の柱穴1からは、土師器の碗の出土があった。8世紀代のものと思われる。桁行方位はN-25°-Eである。

3号竪穴柱建物の柱穴1からは、7世紀後半から8世紀前半の土師器の高杯が出土している。桁行方位はN-36°-Eである。

4号掘立柱建物の柱穴からは、遺物の出土がなかった。桁行方位はN-42°-Eである。

5号掘立柱建物の柱穴2からは、7世紀後半頃の土師器の口縁部片が出土している。桁行方位はN-46°-Eである。

6号掘立柱建物の柱穴9からは、弥生時代後期前半の底部片が出土している。柱穴掘削時の混入と思われる。桁行方位はN-42°-Eである。

7号掘立柱建物の柱穴(=ピット99)からは、6世紀後半から7世紀前半の須恵器杯身片が出土している。桁行方位はN-46.5°-Eである。

8号掘立柱建物の柱穴からは、遺物の出土がなかった。桁行方位はN-34.5°-Wである。

9号掘立柱建物の柱穴からも、遺物の出土がなかった。桁行方位はN-28°-Eである。

10号掘立柱建物の柱穴(=ピット267)からは、分銅型土製品が出土した。桁行方位はN-30°-Eである。

11号掘立柱建物の柱穴からは、遺物の出土がなかった。桁行方位はN-37°-Eである。

12号掘立柱建物の柱穴からは、遺物の出土がなかった。桁行方位はN-30°-Eである。

13号掘立柱建物の柱穴からも、遺物の出土がなかった。桁行方位はN-35°-Eである。

掘立柱建物の時期は、出土土器からみて、大きく2時期に区分される。つまり、6世紀後半～7世紀前半と7世紀後半～8世紀前半のものである。

柱列状遺構

1号、2号柱列状遺構の柱穴からは、遺物の出土がなかった。柱列の方位は、前者がN-29°-W、後者がN-38°-Wである。

門状遺構

柱穴からの出土遺物はなかった。

井戸

井戸からは、7世紀後半頃の須恵器の杯身と8世紀中葉から後半の須恵器の杯身が出土している。

土壌

7基の土壌を検出したが、土器が出土しているのは、1号、2号、3号、7号土壌である。

1号土壌からは、6世紀後半～7世紀前半の須恵器の杯身が出土している。

2号土壌からは、土師器の把手片が出土している。

3号土壌からは、6世紀後半～7世紀前半の須恵器杯蓋が出土している。

7号土壌からは、弥生時代中期初頭の土器が出土している。

土壌は、大きく2時期に分かれる。つまり、弥生時代中期初頭と6世紀後半～7世紀前半である。

溝状遺構

1号・2号溝状遺構からは、6世紀後半～7世紀前半の土器が出土している。

3号溝状遺構からは、遺物の出土はない。

4号溝状遺構からは、7世紀中葉から後半にかけての土器が出土した。

5号溝状遺構からは、出土遺物の検出がなかった。

ピット

ピットから出土した遺物の時期は大きく4時期に分かれる。つまり、弥生時代中期初頭、8世紀中葉、10世紀代、12世紀代である。

包含層

包含層から出土した遺物の時期は大きく4時期に分かれる。つまり、弥生時代中期初頭、6世紀後半～7世紀前半、8世紀中葉、8世紀後半である。

こうして、皆見遺跡の各遺構より出土した遺物から、それぞれの時期を見てきたわけだが、その時期にはいくつかのまとまりを看取することができる。

㉑ 弥生時代中期初頭グループ

7号竪穴住居跡、7号土壇、ピット236、237、250

㉒ 6世紀後半～7世紀前半グループ

1号・2号・3号、4号、6号竪穴住居跡、7号掘立柱建物、1号・3号土壇、1号・2号溝状遺構。

㉓ 7世紀中葉～7世紀後半グループ

5号掘立柱建物、1号井戸、4号溝状遺構。

㉔ 7世紀後半～8世紀前半グループ

3号掘立柱建物。

㉕ 8世紀中葉～8世紀後半グループ

ピット7。

㉖ 10世紀代グループ

ピット131。

㉗ 12世紀代グループ

ピット151。以上の7時期に大別できる。

これらを見ると、皆見遺跡の集落構成は、竪穴住居跡が、弥生時代中期初頭、中期後半～後期前半、6世紀後半～7世紀前半にそのピークをもつ。

また、掘立柱建物は、6世紀後半～7世紀前半の竪穴住居跡と一部重複関係にあり、その後、8世紀前半頃まで継続し、この集落の主流を成す。これは、この集落が従来の農業基盤型の集落から、豊前国府建設と軌を一にした「和名抄」所載の「皆見郷」へと変貌していったことを如実に物語る資料である。これは、硯や製塩土器の出土などからも追認できよう。

2. 掘立柱建物の方位と年代

皆見遺跡から検出された掘立柱建物は13棟であるが、その桁行方位から、大きく5つのグループに分類できる。

①Aグループ（桁行方位N-25°~30°-E）

1号、2号、9号、10号、12号掘立柱建物。

2号、10号掘立柱建物の柱穴からは8世紀代の土器が出土している。

②Bグループ（桁行方位N-35°~40°-E）

3号、11号、13号掘立柱建物。

3号掘立柱建物の柱穴からは、7世紀後半~8世紀前半の土器が出土している。

③Cグループ（桁行方位N-45°-M前後）

4号、5号、7号掘立柱建物。

5号掘立柱建物の柱穴からは7世紀後半の土器が、7号掘立柱建物の柱穴からは、6世紀後半~7世紀前半の土器が出土している。

④Dグループ（桁行方位N-30°-W前後）

8号掘立柱建物。

8号、9号掘立柱建物は重複関係にあり、その柱穴の切り合い関係から、9号掘立柱建物が先行する。

⑤Eグループ（桁行方位N-40°-W前後）

6号掘立柱建物。

7号掘立柱建物の桁行方位とは、ほぼ直角の位置関係にある。

このようにみえてくると、上記の掘立柱建物の変遷は以下ようになる。

Cグループ

→Bグループ→Aグループ

Eグループ

これらの掘立柱建物は、7世紀前後頃から建設を始め、8世紀代にかけて营造されている。ピットや包含層中からは、10世紀代や12世紀代の遺物の出土はあるが、ピークはあくまでも7世紀~8世紀にかけてであり、掘立柱建物の時期も上記の時期から大きく逸脱することはないと思われる。

3. 製塩土器（焼塩壺）の出土について

製塩土器は包含層から出土した。この土器の出土は、ある地域から皆見地域へ焼塩壺のまま運搬された後、堅塩として取り出され、廃棄されたことを推定させる。この付近に厨的性格の施設または、国府関連の倉庫的性格の施設があったと思われる。また、官道沿いに発達した「和名抄」記載の「皆見郷」の建物がこの地に存在していたことを窺わせる。

第3章

カワラケ田遺跡の調査

第1節 はじめに

第2節 遺溝と遺物

第3節 小 結

第3章 カワラケ田遺跡の調査

第1節 はじめに

カワラケ田遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字皆見字峰、カワラケ田に所在する。

この遺跡は、祇川右岸の河岸段丘上（標高30m付近）に立地し、東側には県道節丸・新田原停車場線を挟んで先述した皆見遺跡がある。（図版45～47、付図3）

調査期間は、昭和62年11月14日から昭和63年1月25日までの73日間で、調査面積は、約3,000㎡であった。

調査の結果、検出出来た遺構には、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物2棟、土壇墓4基、貯蔵穴6基、落とし穴状遺構1基、溝状遺構8条があり、弥生時代から歴史時代に及ぶ複合遺跡になることがわかった。

第2節 遺構と遺物

1) 竪穴住居跡

調査区内では、計4軒の竪穴住居跡を検出した。

1号竪穴住居跡（図版47、第46図）

1号竪穴住居跡は、調査区南側、西側区域外に伸びる。住居跡東側、壁体を切って7号溝が南北に走る。

1号竪穴住居跡は、既に西半分を削平され、原状を留めず、また、住居跡内にピットが多数あり、支柱穴を求めるのが困難であった。さらに支柱穴と思われるピットの掘り方、深さが一致せず、果たして、竪穴住居跡と呼称するのが適当かどうか、やや疑問を持つが、一応、方形ないし、長方形に平面プランを作り、壁体と思われる段落ちがあること、そして床面が一定していることから、竪穴住居跡として挙げることにした。

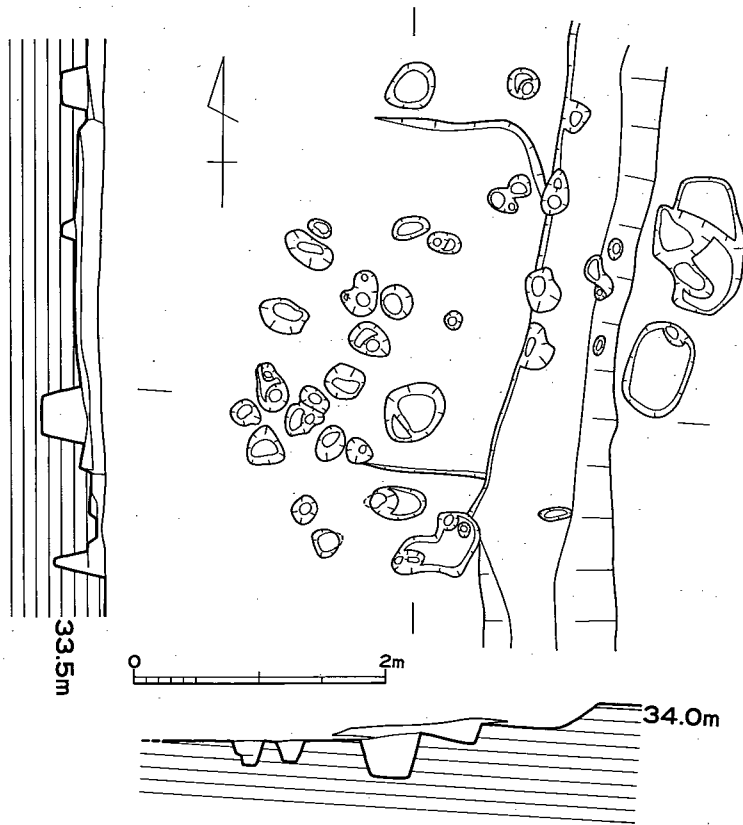
辺長2.8m、壁高15～20cmを残す。

出土遺物（第48図）

須恵器、土師器各1点が埋土から出土した。

1は須恵器の口縁部破片で、端部が若干つまみ上がる。

2は土師器の口縁部破片で、端部は丸くおさまる。



第 46 図 1号堅穴住居跡実測図 (1/60)

2号堅穴住居跡 (図版47-1, 48-1, 第47図)

2号堅穴住居跡は、調査区中央よりやや北側に偏し、西側区域外に住居跡のほぼ半分がのびている。東側4.5m離れて、5号貯蔵穴がある。

2号堅穴住居跡は、先述したように、西側半分を区域外にのびるため、その全容を把握することは出来なかった。しかし、壁溝をめぐる大型の住居跡であることがわかった。

辺長6m、壁高20~25cmを測り、壁体に沿って、幅25~35cm、深さ5~10cm程の壁溝が巡る。この壁溝は、北東隅角でとぎれるが、そこを基点として、西側と南側の二方向へレベルが低くなっていく(現状で2~15cmの高低差)ことから、壁体に沿いながらの水抜き溝としての機能を看取することが出来る。

主柱穴は、4本柱になると思われるが、2本しか検出できなかった。径40cm、深さ45~70cm程の柱穴で、両方に径15cm程の柱根痕が認められた。

尚、住居跡南側は、南東から西側へ弯曲しながら走る小溝に切られる。

出土遺物 (図版57, 59, 61, 第48, 57, 66図)

3は土師器の口縁部破片である。端部は肥厚し、丸くおさまる。

5は須恵器の杯身である。口径8.8cm、器高3.4cmを測る。

6は土師質の口縁部破片である。端部は若干面をもつ。

7は土師器の埴である。器高5.3程になる。器壁は薄手で、口縁端部はやや上方につまみ上がる。これらの遺物は、7世紀中葉頃に属する。

この他にも埋土からは、弥生土器(第57図17)と石斧1点(第66図1)が出土した。

17は壺の口縁部破片である。

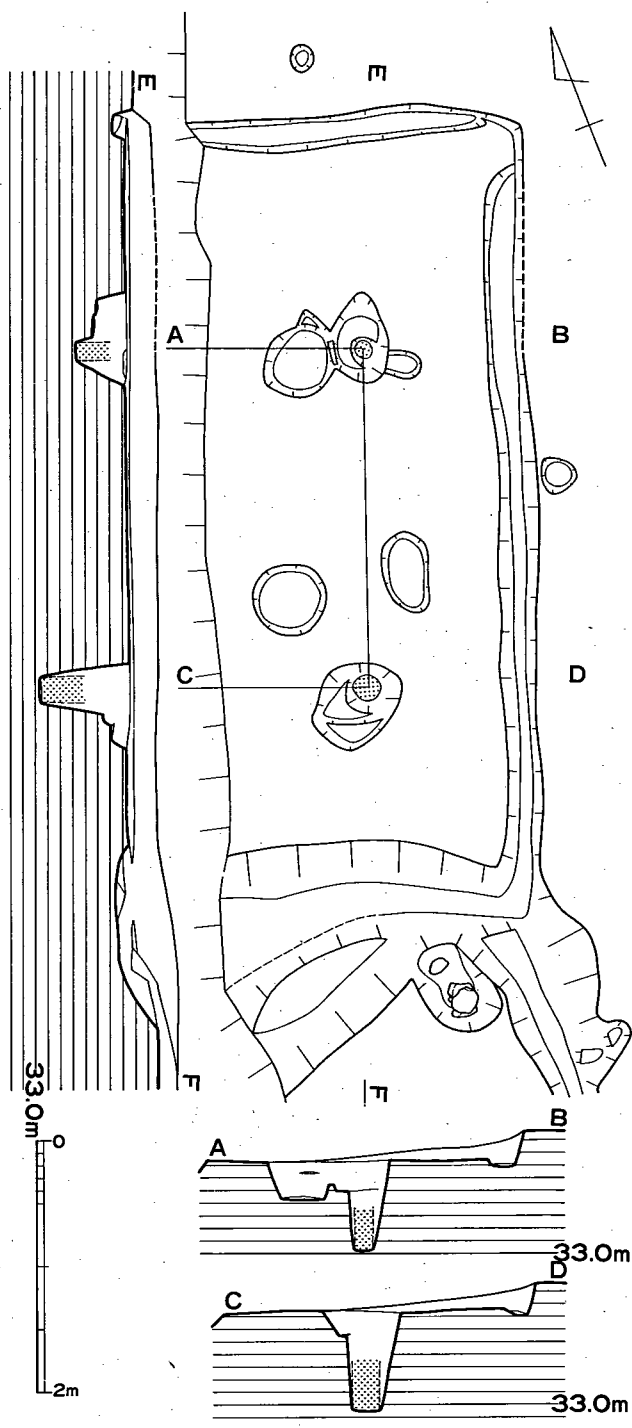
石斧は、片岩製の打製石斧である。一方のみに使用痕が認められる。

3号堅穴住居跡 (図版47-1, 48-2, 第48, 50図)

3号堅穴住居跡は、調査区南端に位置し、それ以下の遺構ののびは認められない。7号溝に住居跡北側、カマド付近を削平される。北側5m離れて、1号堅穴住居跡がある。

3号堅穴住居跡は、カマド付近が7号溝により、削平を受けるものの、他の1、2号堅穴住居跡と異なり、全体状況を把握することが可能であった。

この住居跡は、北西部壁体中央にカマドを付設する方形プラ



第47図 2号堅穴住居跡実測図 (1/60)

ンのもので、主柱穴は4本ある。

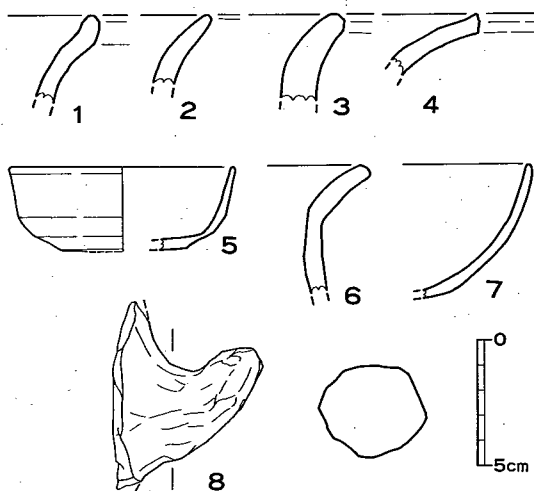
辺長6m、壁高10~20cmを測る。

カマドは、ほとんど破壊され、焼土部分を残すのみであったが、大略主軸長60cm、幅80cmの大きさと推定される。

主柱穴は、直径25~40cm、深さ35cm程の不整円形のものである。その配置は、ほぼ壁体に平行になる。

出土遺物 (図版57、第48図)

4は須恵器の口縁部破片である。端部は若干つまみ上げながら、ヨコナデを施し、面を作る。



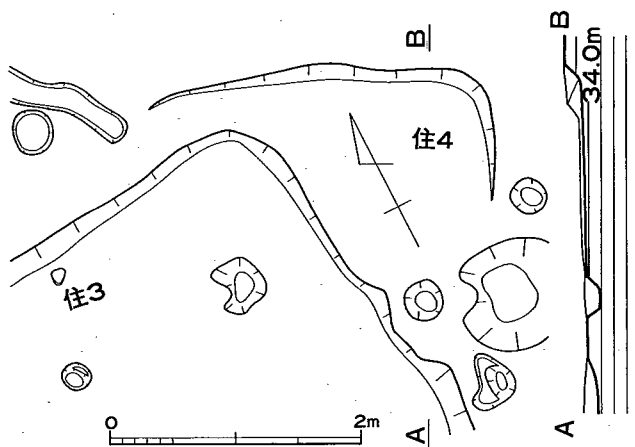
第48図 1号~3号堅穴住居跡及びピット44出土土器実測図 (1/3)

4号堅穴住居跡 (図版47-2、第49図)

4号堅穴住居跡は、3号堅穴住居跡の北側に位置する。現状は、北側と東側の壁体の一部を残すのみで、残りは全て消失している。位置関係からみて、3号堅穴住居跡に切られたものと思われる。

現存長は、北側で2.6m、東側で1.05mを測り、現存壁体高は、16cm程である。

出土遺物はない。



第49図 4号堅穴住居跡実測図 (1/60)

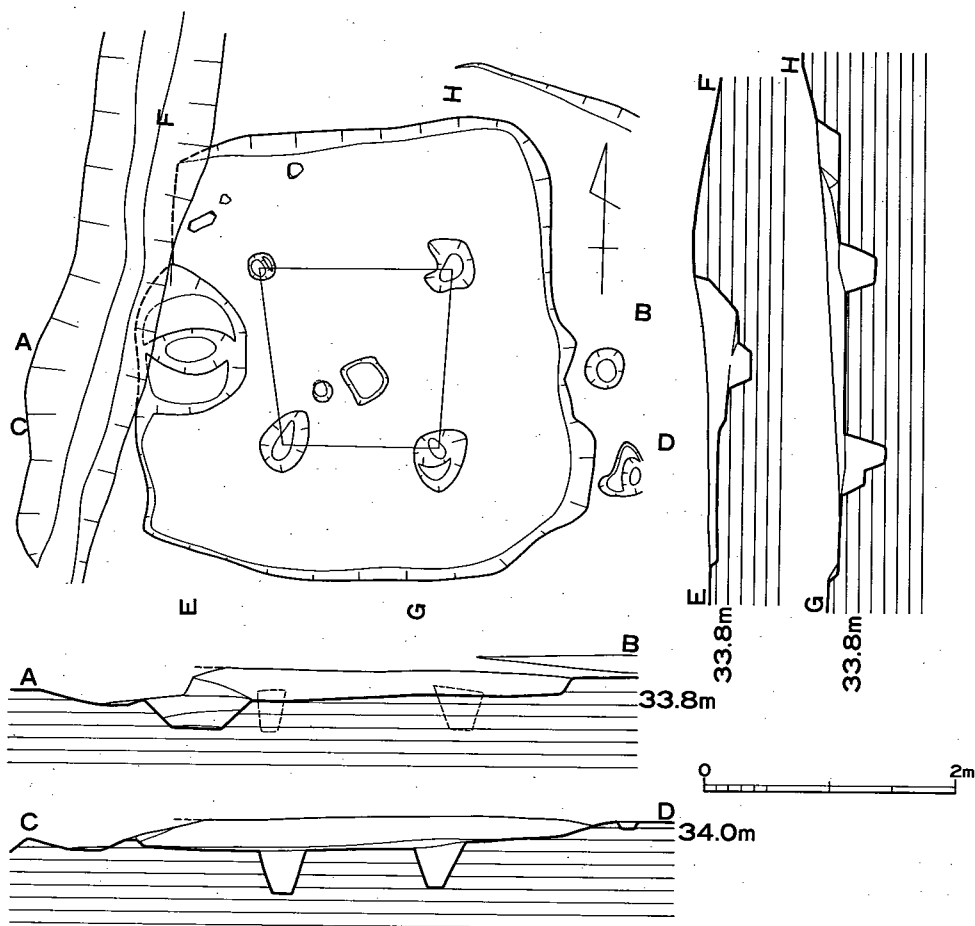
2) 掘立柱建物

調査区内では、計2棟の掘立柱建物を検出した。

1号掘立柱建物 (図版55-1、第51図)

1号掘立柱建物は、調査区北側に位置し、南西側を1号溝に削平されている。東側に近接して1号貯蔵穴がある。

この建物の大きさは、南西側で1号溝に削平されているため、柱穴掘形が不明で、正確な数



第 50 図 3号竖穴住居跡実測図 (1/60)

値を得ることが出来ない。現存する柱穴からみると、桁行5.6m(3間、7尺等間)、梁行4.6m(2間、7尺等間)を測る。

柱穴掘形の大きさは、直径40~70cmの不整円形を呈し、深さは25~30cmを測る。

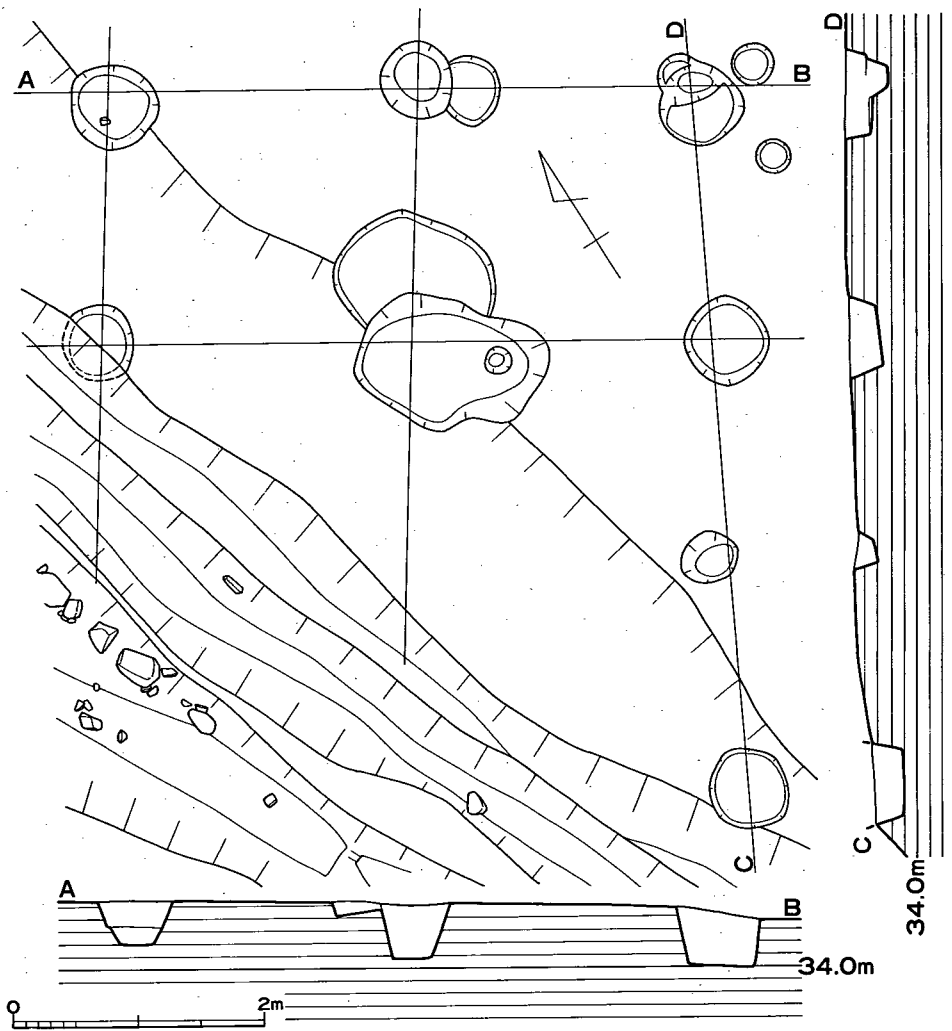
柱根痕跡は明瞭でない。

桁行方位は、N-28°-Eである。

出土遺物はなかった。

2号掘立柱建物 (図版47-2、第52図)

2号掘立柱建物は、調査区中央よりやや南側に偏し、西側6m離れて、7号溝がある。



第 51 図 1号掘立柱建物実測図 (1/60)

2号掘立柱建物 2間×2間の方形の建物である。その大きさは、桁行3.3m(2間、6尺等間)、梁行3.3m(2間、6尺等間)を測る。北西隅角の柱穴は、ややずれている。

柱穴掘形の大きさは、直径35~50cmの不整形円で、深さ40cm程を測る。

柱根痕跡は明瞭でない。

桁行方位は、N-30°-Eである。

出土遺物はなかった。

3) 土墳墓

調査区内では、計4基の土墳墓を検出した。

1号土墳墓 (図版47-2, 54、第53図)

1号土墳墓は、調査区中央よりやや南側に下がった区域外ラインぎりぎりで見出された。4号溝を切って作られる。

1号土墳墓は、主軸方位をN-25°-Eにとり、長軸1.1m、短軸0.63m、深さ0.15mを測る。

平面形プランは、長台形を呈する。

頭位部が足位部に比べ、幅広くなるが、頭位部中央よりやや右側で、土師器の大・中・小皿が各1点ずつの3点、また、長軸に沿った左側端上方で、土師質皿2点が検出された。

出土遺物 (図版58、第54図)

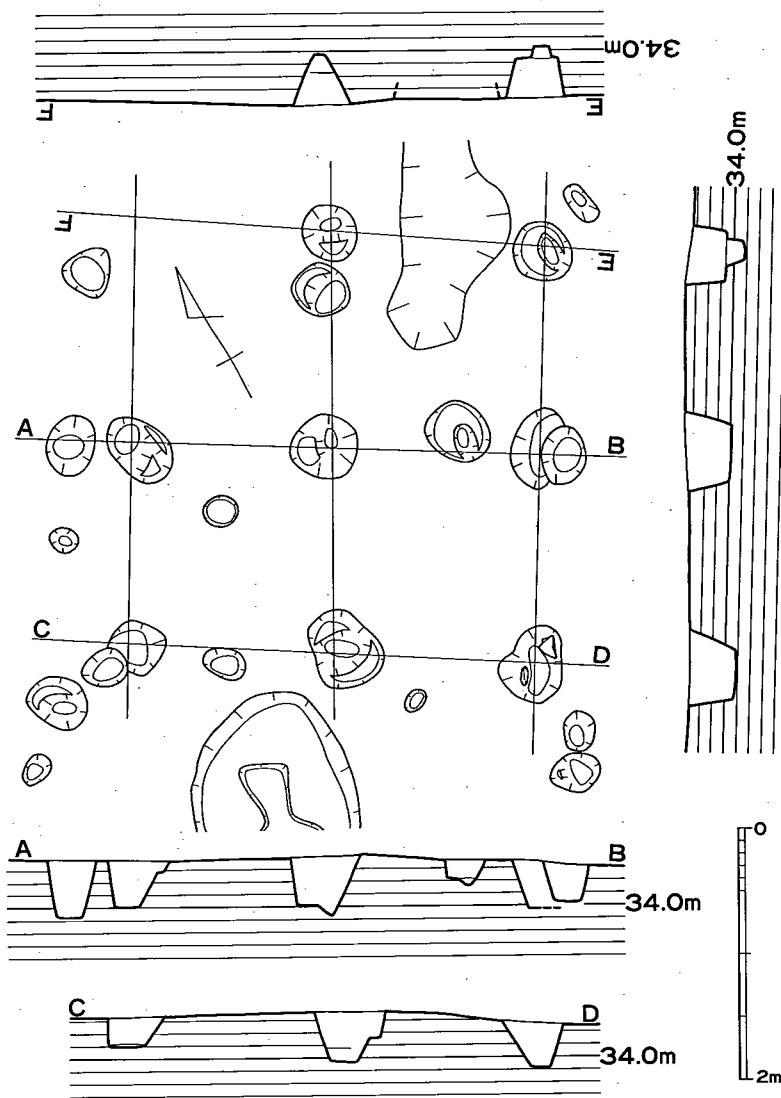
遺物取り上げ時には、5点の土師皿を確認したが、担当者の不注意からその中の1点を消失している。

9は口径7.2cm、器高1.2cm、10は口径7.8cm、器高1.2cm、11は口径7.6cm、器高1.1cm、12は口径11.8cm、器高3cmを測る。共に底部は糸切り技法で仕上げられる。内外面は、ヨコナデを施す。

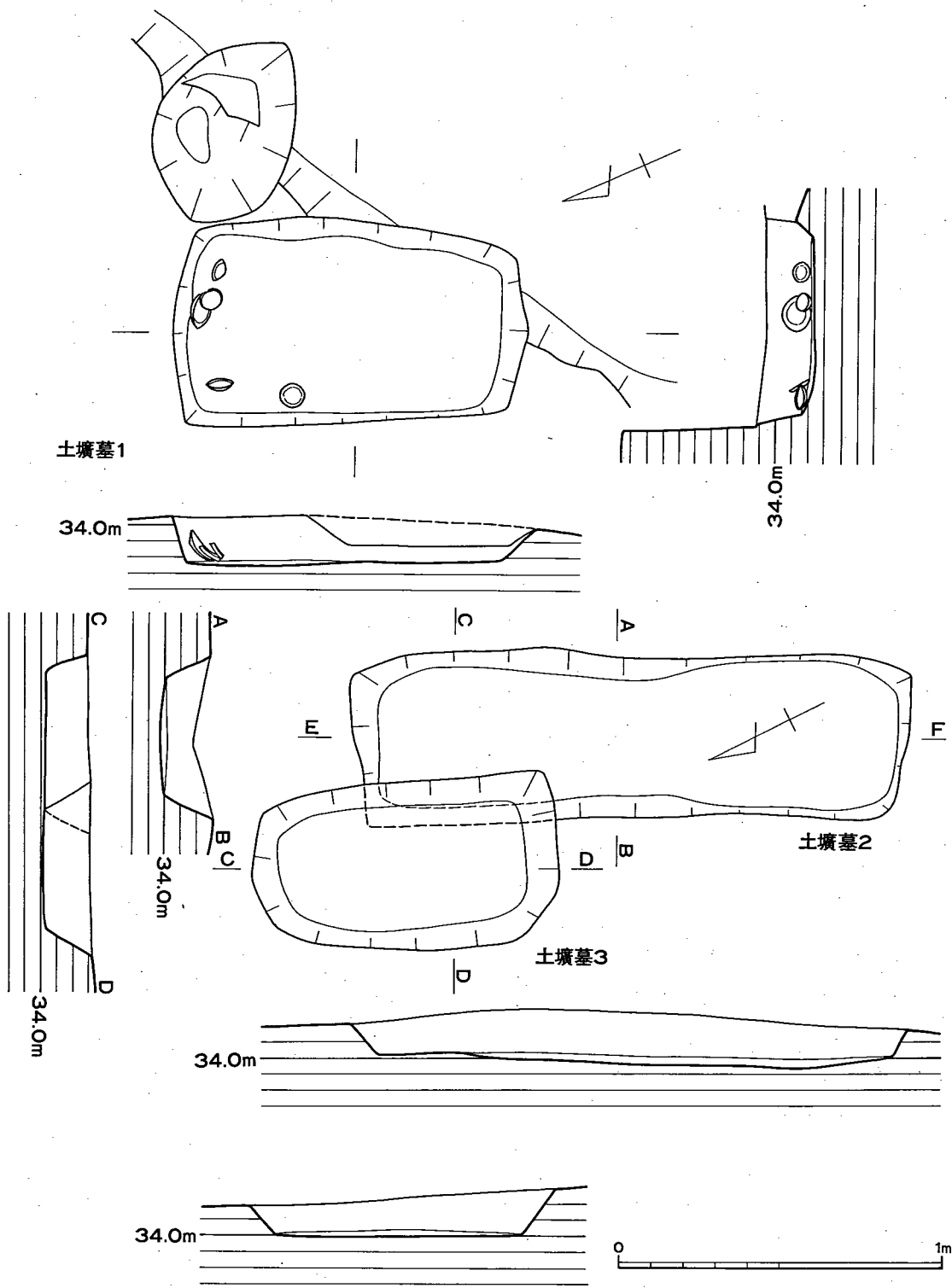
以上の出土土器は、12世紀後半頃に属する。

2号土墳墓 (図版47-1, 53-2、第53図)

2号土墳墓は、調査区略中央よりやや北西側に偏し、北側1.5m離れて、2号堅穴住居跡、南



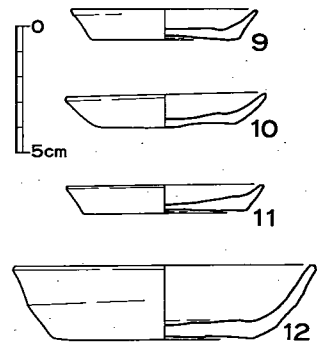
第52図 2号掘立柱建物実測図 (1/60)



第 53 图 1 号~3 号土墳墓实测图 (1/20)

側1.5m離れて、6号貯蔵穴がある。2号土墳墓は、3号土墳墓と重複関係にあるが、前者が後者に切られている。

2号土墳墓は、主軸方位をN-27°-Eにとり、長軸1.73m、短軸0.5m、深さ0.16mを測る。他の土墳墓に比べ、頭位部と足位部の幅広の差がない。しかし、北東隅角付近で検出された耳環の存在から、北側に頭位があったと推定できる。なお、他方の耳環については、3号土墳墓築造時に、消失したものと思われる。



第54図 1号土墳墓出土土器実測図 (1/3)

平面形プランは、隅丸長方形を呈する。

出土遺物は、耳環1点があった。腐植が甚しく、図示し得ない。

3号土墳墓 (図版53-2、第53図)

3号土墳墓は、2号土墳墓を切って築造している。

3号土墳墓は、主軸方位をN-27°-Eにとり、長軸0.94m、短軸0.52m、深さ0.12mを測る。

平面形プランは、頭位部側がやや広い長台形を呈する。

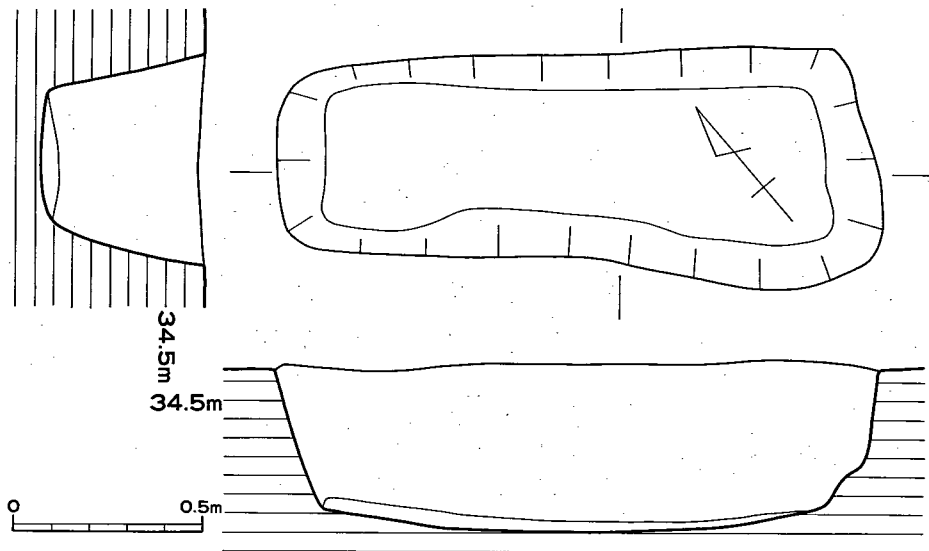
出土遺物等の検出は全くなかった。

4号土墳墓 (図版53-1、第55図)

4号土墳墓は、調査区北東隅に位置する。北西側5.5m離れて、1号貯蔵穴がある。

4号土墳墓は、主軸方位をN-50°-Wにとり、長軸1.58m、短軸0.56m、深さ0.45mを測る。

頭位部が足位部に比べ、14cm程幅広くなる。



第55図 4号土墳墓実測図 (1/20)

平面形プランは、不整長台形を呈する。

出土遺物等の検出は、全くなかった。

4) 貯蔵穴

調査区内では、計6基の貯蔵穴を検出した。

1号貯蔵穴 (図版47-1, 49-2, 第56図)

1号貯蔵穴は、調査区北東側に位置する。南西側3.5m離れて、1号溝が、北東側5.5m離れて、1号土墳墓がある。2号貯蔵穴は南西側6.5m離れる。

1号貯蔵穴は、主軸方位をN-51°-Wにとり、長軸1.56m、短軸8.8m、深さ4.3~5.5mを測る。

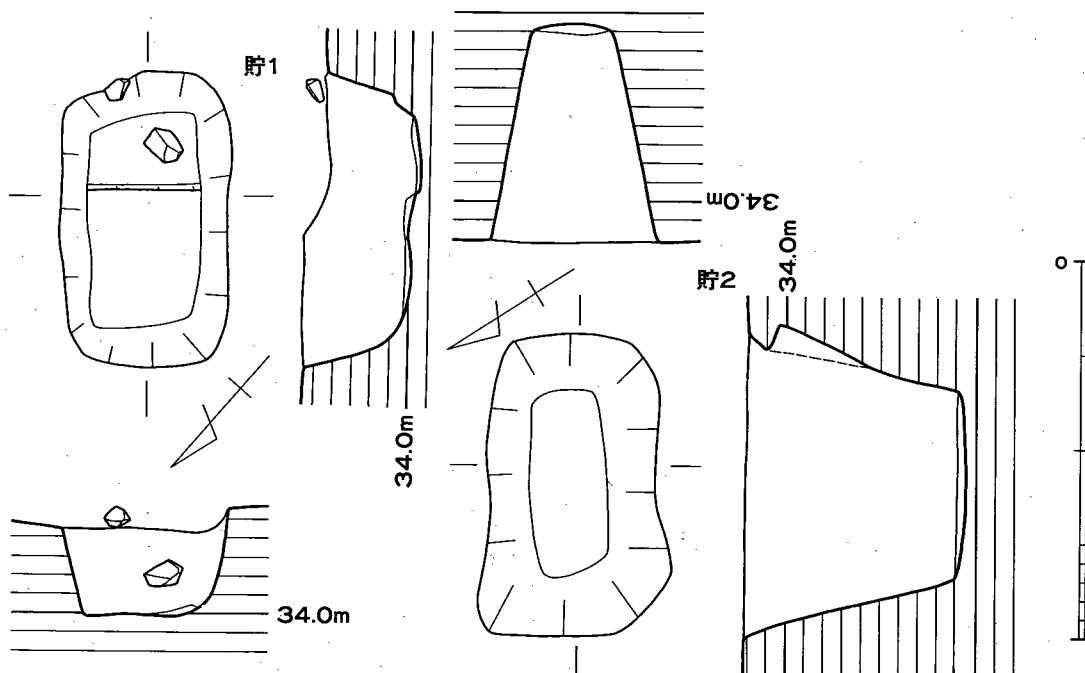
平面形プランは、略長方形を呈する。

埋土中には、15~20cm程の礫が2個検出されたが、その用途については不明である。

出土遺物には、弥生土器片があった。

出土遺物 (図版59, 第57図)

20は上げ底の底部である。底径5cmを測る。



第56図 1号、2号貯蔵穴実測図 (1/40)

2号貯蔵穴 (図版47-1, 49-1, 第56図)

2号貯蔵穴は、調査区中央部よりやや北東側に偏し、北東側1m離れて、1号溝が、南西側4.5m離れて、3号貯蔵穴がある。

2号貯蔵穴は、主軸方位をN-57°-Wにとり、長軸1.55m、短軸0.88m、深さ1.17mを測る。平面形プランは、略長方形を呈する。

埋土は、大きく4層に分かれる。最上層は茶褐色粘質土、上層は暗灰褐色粘質土、中層は黄灰褐色粘質土、最下層は黒灰色粘質土となる。

出土遺物には、第1～3層及び埋土から弥生土器片が検出された。

出土遺物 (図版59, 第57図)

13は埋土出土。口縁端部に太目の三角凸帯を貼付する。

14は第1層出土。如意形口縁の甕の破片である。

18は第3層出土。体部から口頸部に緩やかに外反する壺の破片である。口径18cmを測る。

19は埋土出土。肉厚の上げ底の底部になる。底径5cmを測る

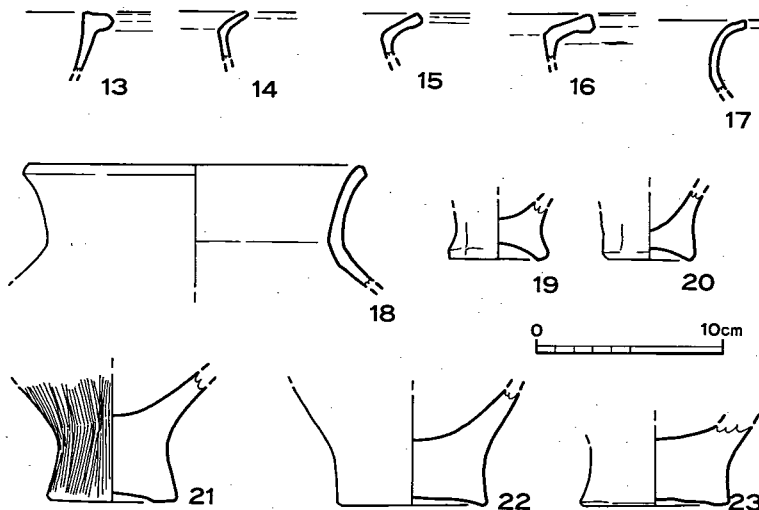
21は第2層出土。肉厚の上げ底の底部になる。外面には上下方向への刷毛目が残る。底径6.8cmを測る。

これら2号貯蔵穴から出土した土器は、弥生時代中期初頭に属する。

3号貯蔵穴 (図版50-2, 第58図)

3号貯蔵穴は、調査区中央部よりやや北東側に位置する。北東側9m離れて、2号貯蔵穴が、南西側9m離れて、4号貯蔵穴がある。

3号貯蔵穴は、主軸方位をN-52°-Wにとり、長軸1.45m、短軸0.77m、深さ1mを測る。



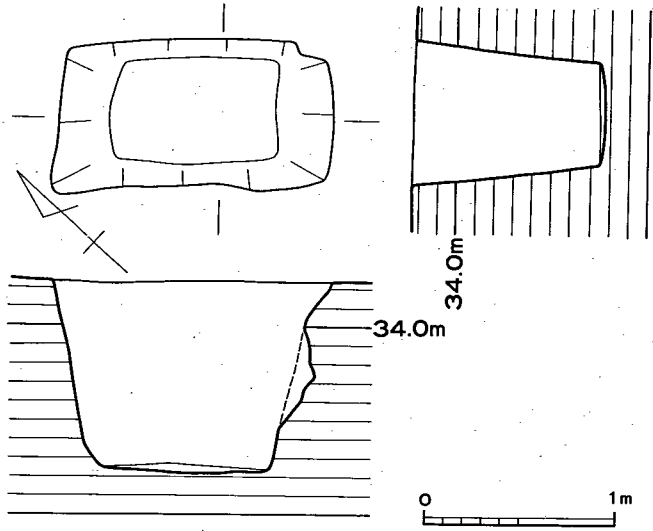
第57図 2号貯蔵穴住居跡、1号、2号、4号、6号貯蔵穴及び1号溝状遺構出土土器実測図 (1/4)

頭位部が足位部に比べ、14cm程幅広くなる。

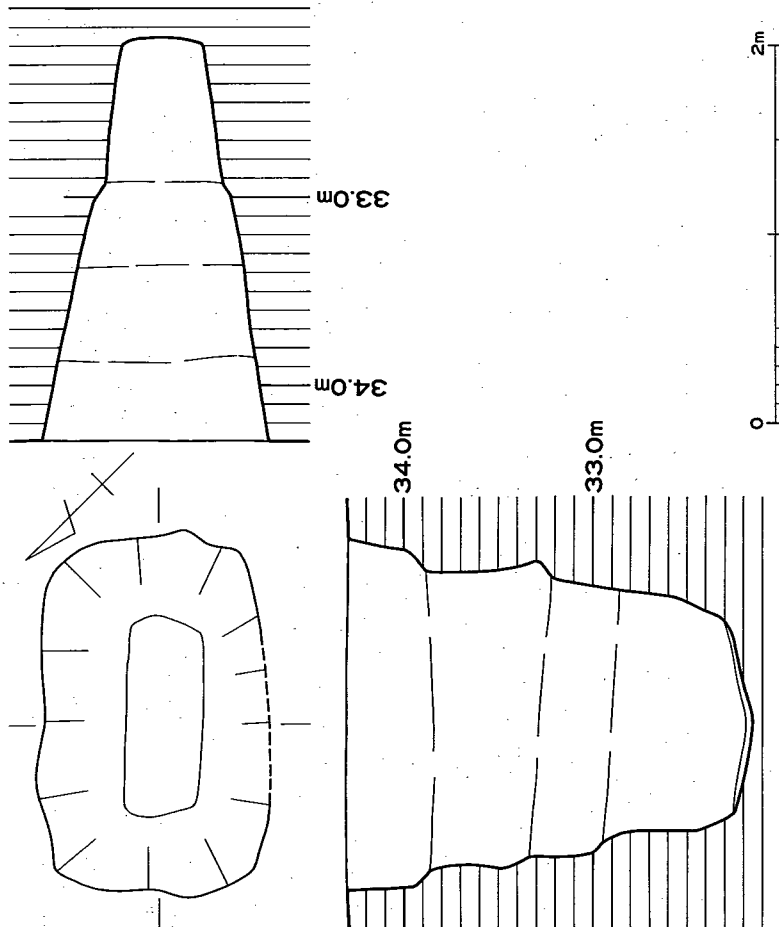
平面形プランは、略長方形を呈する。

埋土は、大きく6層に分かれる。ほぼレンズ状に堆積している。第1層は茶褐色粘質土、第2層は黄褐色粘質土、第3層は黒褐色粘質土、第4層は暗灰褐色粘質土、第5層は黄褐色粘質土と茶褐色粘質土の互層、第6層は灰褐色粘質土となる。

出土遺物は、全くなかった。



第 58 図 3号貯蔵穴実測図 (1/40)



第 59 図 4号貯蔵穴実測図 (1/40)

4号貯蔵穴 (図版51、第59図)

4号貯蔵穴は、調査区略中央部に位置する。西側4m離れて、2号堅穴住居跡が、北東側5m離れて、3号貯蔵穴がある。

4号貯蔵穴は、主軸方位をN-45°-Wにとり、長軸1.88m、短軸1.2m、深さ2.15mを測る。他の貯蔵穴と比べ、規模が大きい。

平面形プランは、不整長方形を呈する。

埋土は、大きく6層に分かれる。第1層は茶褐色粘質土、第2層は黄褐色粘質土、第3層は黒灰色粘質土、第4層は暗黄褐色粘質土、第5層は暗灰色粘質土、第6層は暗黒色粘質土となる。

掘り方は3段式となり、昇降に際してのとりつきとしていたと推定できる。

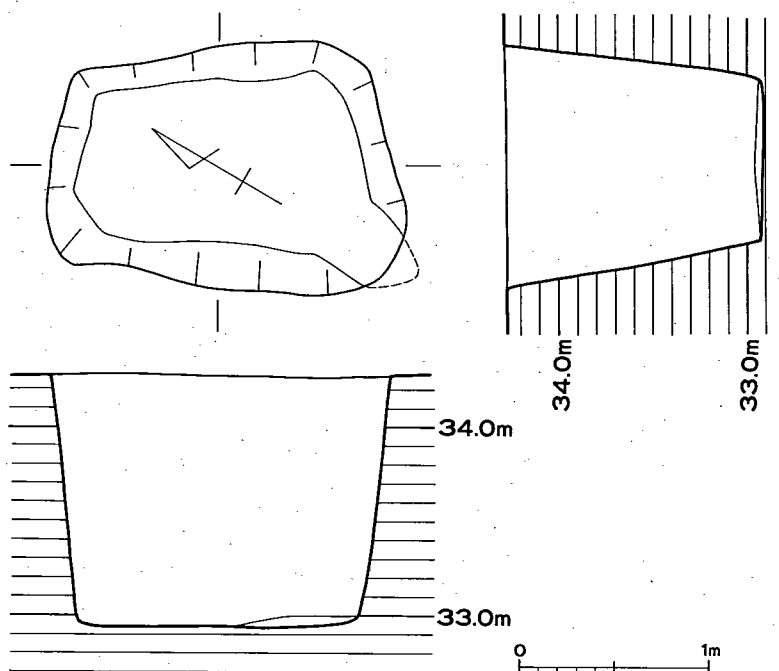
出土遺物には、弥生土器片及び石器があった。

出土遺物 (図版59, 61、第57, 66図)

15は埋土出土。如意形口縁の甕の破片である。

22は第1層出土。やや上げ底の肉厚の底部になる。底径7.7cmを測る。

第66図2は磨製石斧片で、上面は丸く、下面は平坦になる。刃部に使用痕が認められる。



第60図 5号貯蔵穴実測図 (1/40)

5号貯蔵穴 (図版49-1, 52, 第60図)

5号貯蔵穴は、調査区略中央部に位置する。北側4.5m離れて、2号堅穴住居跡が、北東側4.5m離れて、4号貯蔵穴がある。

5号貯蔵穴は、主軸方位をN-30°-Wにとり、長軸1.81m、短軸1.3m、深さ1.37mを測る。平面形プランは、不整長方形を呈する。

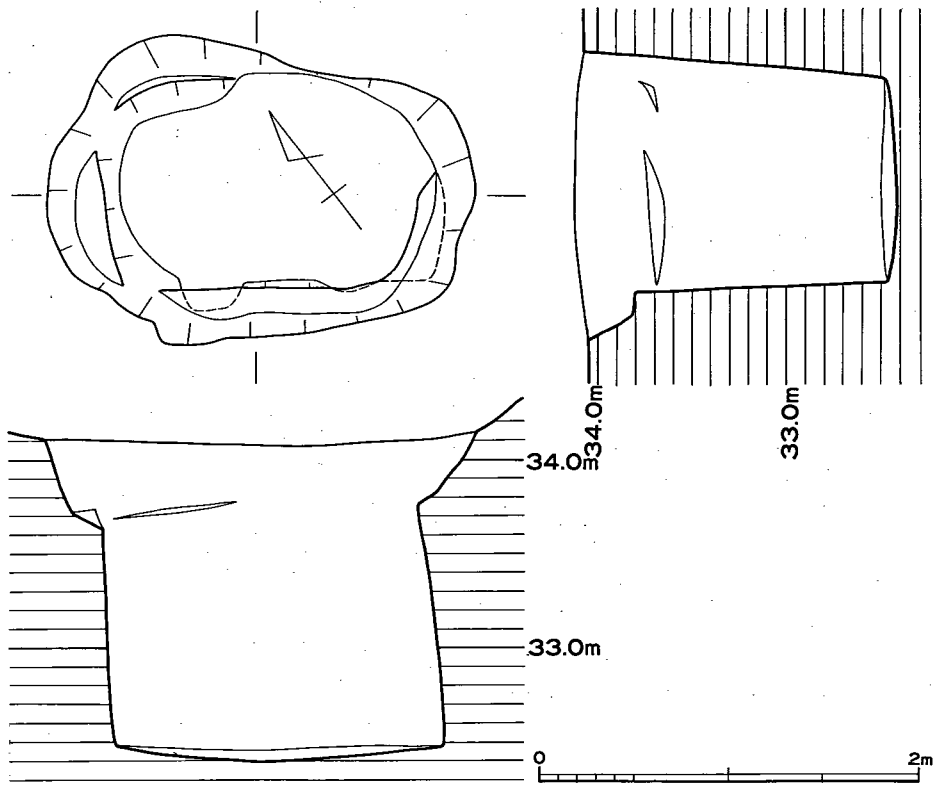
出土遺物は、全く検出できなかった。拳大状の礫が底部より5つ見つかった。しかし、この用途については、不明である。

6号貯蔵穴 (図版49-1, 第61図)

6号貯蔵穴は、調査区略中央部よりやや北西側に偏し、北東側2.5m離れて、5号貯蔵穴がある。

6号貯蔵穴は、主軸方位をN-52°-Wにとり、長軸2.26m、短軸1.53m、深さ1.68mを測る。平面形プランは、不整長方形を呈する。

埋土は、大きく5層に分かれる。ほぼレンズ状に堆積している。最上層は暗茶褐色粘質土、



第 60 図 5号貯蔵穴実測図 (1/40)

上層は茶褐色粘質土、中層は地山の黄褐色粘質土ブロックを含む灰褐色粘質土、下層は黒色粘質土、最下層は茶灰色粘質土となる。

出土遺物は、最上層より石剣片、下層より土器片があった。

出土遺物（図版59、62、第57、67図）

最下層から、磨製石剣片（図版62、第67図1）が出土した。この説明は8）の項で行う。

16は第10層出土。如意形口縁を示すが、他の弥生土器に比べその屈曲が大きい。

5) 落とし穴状遺構

調査区内では、計1基の落とし穴状遺構を検出した。

1号落とし穴状遺構（図版47、第62図）

1号落とし穴状遺構は、調査区中央よりやや南側に位置する。北東側0.5m離れて、2号溝がある。

1号落とし穴状遺構は、主軸方位をN-55°-Wにとり、長軸0.96m、短軸0.9m、深さ0.39mを測り、袋状形態をとる。底部中央には、径18cm、深さ4cm程の凹みがある。

平面形プランは、略円形を呈する。

出土遺物は、中央ピットから弥生土器片が検出された。

出土遺物（第63図）

27は平底の底部である。復元底径は3.2cmを測る。

6) 土壌

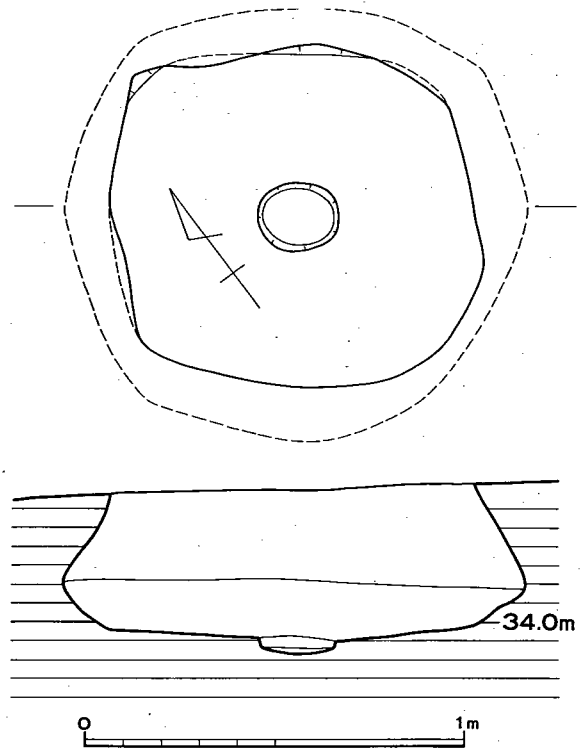
調査区内では、いくつかの土壌が検出されたが、ここでは、出土遺物のあった3号土壌のみを報告する。

3号土壌（付図3）

3号土壌は1号溝状遺構の北側に位置し、それに切られる。

この遺構は、長径110cm、短径65cm、最深部20cmを長卵形を呈する土壌である。

出土遺物には、土師器と須恵器があった。



第 62 図 1号落とし穴状遺構実測図 (1/20)

出土遺物（図版57、60、第64図）

29は土師器の甕の破片である。体部はあまり張らず、緩やかに外反して口縁部に至る、口縁端部は丸く、若干垂下する。胴最大径は22cm程を測り、口径20cmを上回る。

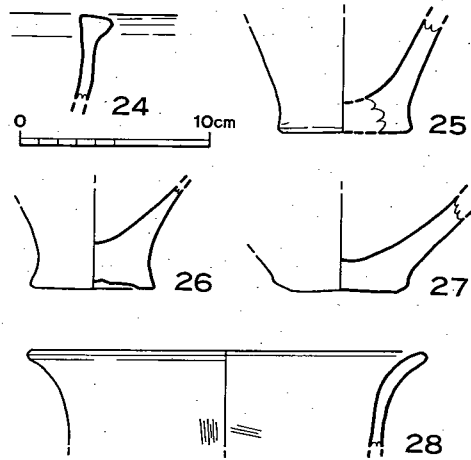
30は土師器の高杯の脚部である。脚部は短く斜目に広がり、端部付近で水平に外反し、端部は面をもつ。底径10cmを測る。

31は須恵器の口縁部片である

32は土師器の椀の破片である。底部からやや弯曲しながら口縁部に至る。端部は丸くおさめる。

33は須恵器の杯蓋の破片である。口縁部の口端部より内面のかえりが上回る。口径9.4cm。

これら3号土壌出土土器は7世紀後半に属する。



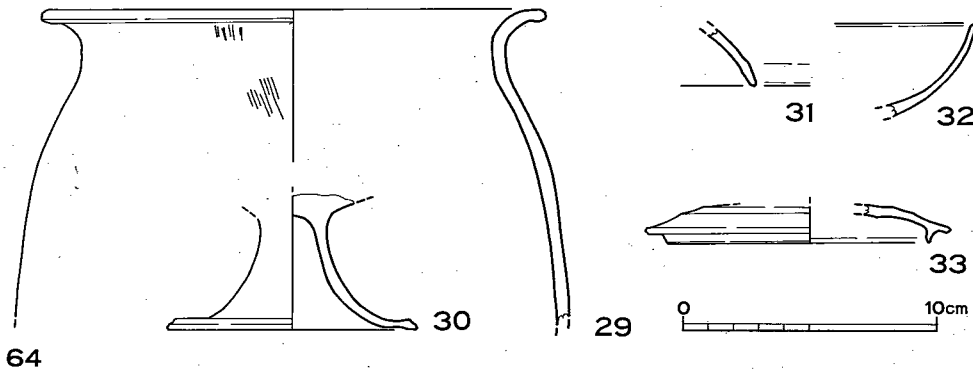
第63図 1号落とし穴遺構、及びピット54、56、77、92出土土器実測図（1/4）

7) 溝状遺構

調査区内では、計8条の溝状遺構を検出した。

1号溝状遺構（図版47-1、56、付図3）

1号溝状遺構は、調査区北端から東側調査区域外へ弯曲しながら走る溝である。何回かの掘り直しが認められ、最後期には、南側へ小溝を切っている。幅2.5m、深さ40cm程を測る。出土遺物は時期不詳の土器小片が出土している。



第64図 3号土壌出土土器実測図（1/3）

2号溝状遺構（図版47、付図3）

2号溝状遺構は、調査区中央を東西に走る溝である。この溝も何回かの掘り直しが認められる。幅2～2.5m、深さ20～60cm程を測る。出土遺物には土錘、三足土器脚部、磨製石剣片がある。出土遺物の説明は8）の項で行う。

3号溝状遺構（付図3）

3号溝状遺構は、2号溝状遺構の北側に接続し、北側方向へ走る。幅40～80cm、深さ20cm程を測る。出土遺物は全くなかった。

4号溝状遺構（付図3）

4号溝状遺構は、2号溝状遺構の南側に接続し、西側調査区域外へ抜ける溝である。幅70cm、深さ20cm程を測る。出土遺物のうち図示できるものに須恵器片があった。

出土遺物（第65図）

37は須恵器の杯身片である。立ちあがりは短く、緩やかに内傾し、端部を丸く収める。受け部は短く水平方向にのびる。39は須恵器の坩の破片である。

5号溝状遺構（付図3）

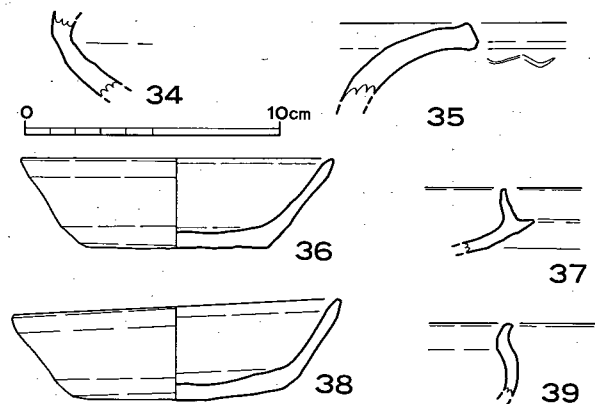
5号溝状遺構は、2号溝状遺構の西側で接続し、北側にのびる。平行して6号溝状遺構がある。幅50cm、深さ70cm程を測る。出土遺物のうち、図示できるものに土師器、須恵器各2点があった。

出土遺物（図版57、58、第65図）

34は須恵器の甕の体上半部破片である。頸部はヨコナデを施し、その下方に格子目文が残る。

35は須恵器の壺口縁部破片である。口縁端部は、やや摘み上げながらヨコナデを施し、面をつくる。外面には「W」の刻印がある。

36、38は土師器の杯である。36は口径12.2cm、器高3.6cm、38は口径12.7cm、器高3.7cmを測る。底部はヘラ切り離しである。



第65図 4号、5号溝状遺構出土土器実測図（1/3）

6号溝状遺構（付図3）

6号溝状遺構は、2号溝状遺構の西側で接続し、5号溝状遺構と平行しながら北へ走る。幅40cm、深さ10cm程を測る。出土遺物は全くなかった。

7号溝状遺構（付図3）

7号溝状遺構は、3号竪穴住居跡のカマド付近を切り、北から南へ走る溝である。幅1m、深さ20cm程を測る。出土遺物はない。

8号溝状遺構（付図3）

8号溝状遺構は1号溝状遺構の南側を南北に走る溝である。幅40cm、深さ10cm程を測る。出土遺物はない。

8) その他の遺構と遺物(図版60、第48、63図、付図3)

この頃では、まず上記した遺構以外のピットの中で、出土遺物があったものを取り上げる。

ピット44、54、56、77、92から弥生時代、古墳時代の土器が出土している。

24はピット77出土。ピット77は、3号竪穴住居跡東側にある。甕の口縁端部に太目の三角突帯を貼付する。

25はピット56出土。ピット56は、4号溝状遺構東側にある。やや上げ底の厚手の底部である。

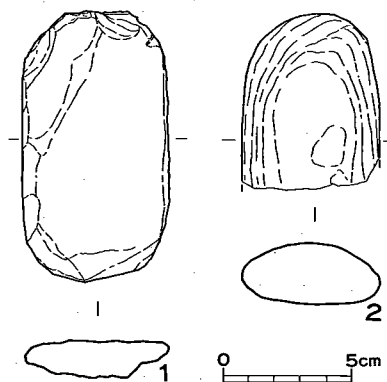
26はピット54出土。ピット54は、4号溝状遺構北側側壁に切られる。平底で、斜め上方にやや大きく広がる。

28はピット92出土。ピット92は、7号溝状遺構東側にある。やや直立気味に立ち上がり、外反する壺の口縁部である。口縁端部は丸くおさめる。口径21cmを測る。

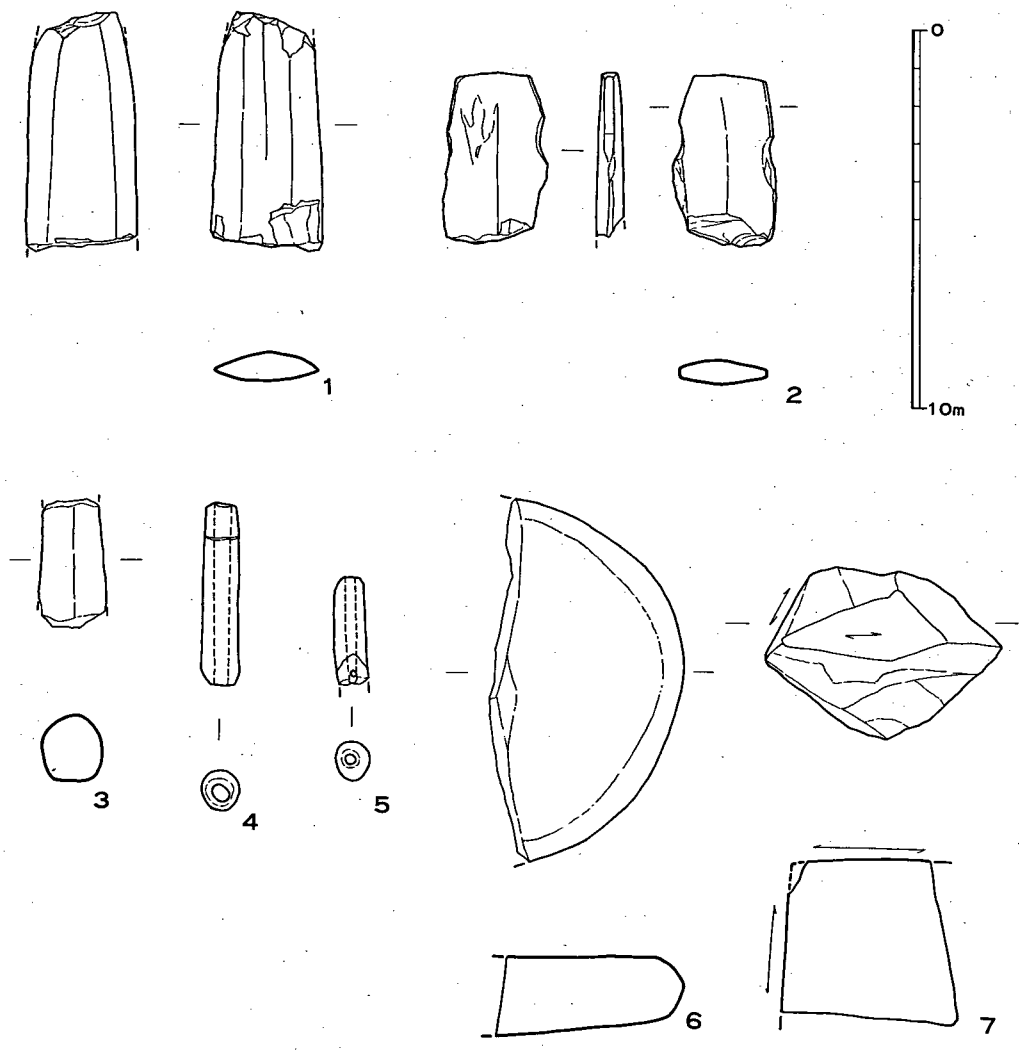
以上は、ピット54、56、77、96から出土した弥生土器である。これらは、弥生時代中期初頭に属する。

第48図8はピット44出土。ピット44は、2号竪穴住居跡北側、8号溝状遺構内にある。

断面が不整円形の土師質把手である。把手は、上方に短く跳ね上がる。7世紀代に属すると思われる。



第66図 2号竪穴住居跡及び6号貯蔵穴出土石斧実測図(1/3)



第 67 図 カワラケ田遺跡石製品、土製品実測図 (1/2)

以上、出土遺物のあったピットを説明してきた。

次に、その他の土製品、石製品などについて述べてみたい(図版61、62、第67図)。

1は磨製石剣片である。両端は欠失する。両刃で、共に鋭く研ぎ出される。明瞭な鑄はみられないが、片面にかすかに鑄状の稜が見られる。6号貯蔵穴黒色粘質土(最下層)出土。粘板岩製。

2は磨製石剣の柄または石戈の柄部分、転用品である。両面中央に縞をもつ。径1cm程のえぐりが両側にある。このえぐりの位置は平行にはならない。両側面は、刃部をもたず、平滑な面をもつ。また、縞方向の端部も、やや弯曲した平滑な面をもつ。縞はこの端部まで走っていない。えぐりには、上下方向の擦過痕が残る。2号溝状遺構出土。粘板岩製。

3は、土師質の三足土器脚部片である。両端は欠失する。断面は隅丸不整五角形状を呈する。一面を除き、五面は二次加熱を受けており、火床部での使用方法が確認できる。2号溝状遺構出土。

4、5は、土錘である。4は長4.8cm、幅0.8~1cmを測る。5は、一方が欠失する。残存長2.9cm、幅0.8cmを測る。共に2号溝状遺構出土。

6は、磨石(?)である。中央から半折している。上下面及び側面は平滑であり、敲打痕などはみられない。安山岩製。

7は、砥石(?)である。残存する二面は共に若干凸レンズ状にふくらみ、平滑である。石材は凝灰岩であり、鑄型にもよく使用されるため注意を要する。

図版62-a、bは青磁片である。aは碗になる。濃綠色釉をかけ、胎土は暗灰色の精選された粘土である。外面には、蓮弁が施される。bは蓋である。身受けのかえりを持ち、先述したaと同様に濃綠色釉をかけ、胎土は精選されている。天井部には蓮弁が施される。

第3節 小 結

以上のように、カワラケ田遺跡の発掘調査では、竪穴住居跡4軒、掘立柱建物2棟、土壇基4基、貯蔵穴6基、落とし穴状遺構1基、溝状遺構8条、土壇等を検出した。そして、各遺構からは、弥生時代中期初頭から10世紀後半頃までの遺物が出土した。

以下では、これらの遺構と遺物について若干のまとめをしてみたい。

1. 各遺構の時期と共存関係

まず、各遺構毎にその時期をみていく。

竪穴住居跡

1号竪穴住居跡は、住居跡として成立するか、やや疑問であるが、出土した須恵器、土師器から7世紀代のものと推定される。

2号竪穴住居跡は、出土した須恵器、土師器から7世紀中葉頃のものとして推定される。この住居跡の埋土からは、弥生土器と打製石斧も出土している。

3号竪穴住居跡は、須恵器を出土しているが、時期は推定できない。

4号竪穴住居跡からは出土遺物がなかった。

掘立柱建物

2棟の掘立柱建物を検出したが、柱穴からの出土遺物がなく、時期を特定できない。しかし、ここで、豊前国府推定地や皆見遺跡の掘立柱建物の桁行方位と比較してみると、カワラケ田遺跡の1号掘立柱建物の桁行方位は、 $N-33.5^{\circ}-E$ 、2号掘立柱建物の桁行方位は、 $N-28.5^{\circ}-E$ である。これは、皆見遺跡検出の掘立柱建物Aグループ（8世紀代）に属し、さらに当地域の条里方位 $N-33.5^{\circ}-E$ にほぼ一致している。また、豊前国府推定地の発掘調査では、8～9世紀の掘立柱建物の方位が $N-5^{\circ}\sim 10^{\circ}-W$ 、10～12世紀の掘立柱建物等の方位は $N-10^{\circ}\sim 15^{\circ}-W$ にとることがわかってきた。しかし、この結果はカワラケ田遺跡の掘立柱建物の方位とは結びつかない。

こうして、カワラケ田遺跡の掘立柱建物の方位は、当地域の条里方位とほぼ一致することが確認できた。条里については、その成立時期が不明であったが、今回の調査で8世紀代の建物の桁行方位と一致することが判明し、その成立時期を検討する一資料となった。

土壇基

1号土壇基は、出土した土師皿から10世紀後半頃のものとして推定される。

2～4号土壇基は、出土土器の検出がないため、時期は特定できないが、主軸方位や形状から

1号土壇基とほぼ同時期のものと思われる。

こうした土壇基は、皆見遺跡では検出されず、段丘縁辺上のみ配置されたのかもしれない。

貯蔵穴

1号、2号、4号、6号貯蔵穴から弥生土器や石剣が出土した。共に弥生時代中期初頭に属する。出土遺物のなかった3号、5号貯蔵穴も主軸方位や形状からほぼ同時期のものと思われる。

落とし穴状遺構

出土した土器は弥生土器片であるが、他の弥生土器よりやや時期が下がり、弥生時代中期後半頃のものである。

土壇

3号土壇は、出土した須恵器や土師器から7世紀後半頃のものとして推定される。

溝状遺構

2号溝状遺構からは、磨製石剣、三足土器脚部、土錘が出土している。

4号溝状遺構から7世紀前半の須恵器が出土している。

5号溝状遺構からは10世紀後半頃の土師器の杯が出土している。

その他、ピットからも土器等が検出された。それらは、大きく、弥生時代中期初頭と7世紀代の2時期に分かれる。

こうして、カワラケ田遺跡の遺構の時期は大きく、弥生時代中期初頭、弥生時代中期後半、7世紀代、10世紀後半の4時期に分かれることがわかった。

この時期は、隣接する皆見遺跡の遺構の時期にも符号し、両遺跡が現在、県道により分断されているが、当時は同一集落であったことを推定させる。

第4章

下原遺跡の調査

第1節 はじめに

第2節 遺溝と遺物

第3節 小 結

第4章 下原遺跡の調査

第1節 はじめに

下原遺跡は、福岡県京都郡豊津町大字下原に所在する。北側は、築上郡築城町と境を接する。また、谷を挟んだ北側丘陵上には、航空自衛隊築城基地送信所がある（図版63、64、付図4）。遺跡は、舌状丘陵頂部（標高39.25m）から北側斜面（37m）の間に立地している。調査期間は昭和63年1月26日から2月4日までの10日間であった。調査面積は、約2,000㎡である。検出した遺構には、溝状遺構5条、土壇1基、ピット3基程があった。出土遺物等はなく、時期不詳である。

第2節 遺構と遺物

1) 1号溝状遺構（図版64-2、付図4）

1号溝状遺構は、調査区内にある5条の溝状遺物の中で、もっとも東側に位置する。この遺構は、北側の小谷へ走る小溝であり、幅1m、深さ10cm程を測る。南端は、標高38m付近で検出され、北端は調査区域外へのびる。

2) 2号溝状遺構（図版64-2、付図4）

2号溝状遺構は、1号溝状遺構の西側2.5m離れている。この遺構は、北側の小谷へ走る小溝であり、幅80cm、深さ10cm程を測る。南端は、1号溝状遺構と同様、標高38m付近で検出され、北端は調査区域外へのびる。

3) 3号溝状遺構（図版64-1、付図4）

3号溝状遺構は、調査区西側、3号～5号溝状遺構のまとまりの1つである。東側の2号溝状遺構とは、17m程離れている。この遺構は、北側の小谷へ走る小溝であり、幅90cm、深さ10cm程を測る。南端は、標高38.75m付近で検出され、北端は標高37m付近で消える。

4) 4号溝状遺構 (図版64-1、付図4)

4号溝状遺構は、3号、5号溝状遺構の間に位置し、前者とは東側に3m、後者とは西側に3.5m程離れている。

この遺構は、北側の小谷走る小溝であり、幅1~1.2m、深さ10cm程を測る。

南端は、調査区域外から始まり、北端は標高38m付近で消える。

この溝状遺構の北側、標高38.25m付近には、一号土壌がある。

5) 5号溝状遺構 (図版64-1、付図4)

5号溝状遺構は、調査区内にある5条の溝状遺構のうち、最も西側に位置する。

この遺構は、北側の小谷へ走る小溝であり、幅80cm、深さ10cm程を測る。

南端は、標高39m付近の調査区域境界に始まり、北端は標高38.25m付近で消える。

6) 1号土壌 (図版64-1、付図4)

1号土壌は、北側の小谷へ走る4号溝状遺構の北端付近、標高38.25mに位置する。

長さ1.1m、幅0.5m、深さ0.2m程を測る。

第3節 小 結

下原遺跡では、5条の溝状遺構と1基の土壌を検出したわけだが、検出遺構から全く出土物がなかったため、その時期については不詳である。

但し、溝状遺構は2ヵ所にまとまり、その間隔が2.5~3mとほぼ均一になることから、畑のうねになる可能性も考えられる。

下原遺跡と同じく、一般国道椎田バイパス関係の発掘調査で、豊津町教育委員会が実施した弓田遺跡は、北側の小谷を挟んで対峙している。

弓田遺跡の調査では、円形周溝状遺構2基、溝状遺構1条のほか不整形土壌、ピットなどが検出された。上限は、円形周溝状遺構から出土した土師器(杯)により、8世紀代と推定される。

また、下原遺跡とは町境を挟んで南側でも椎田バイパス関係で、発掘調査が実施されたが、下原遺跡と同様に顕著な遺構の検出はなかった。

古代の主要道路である大宰府と宇佐を結ぶ官道は、豊前国府推定地の南辺を北西から南東方向に走り、丁度、下原遺跡を貫けるようになると推定されるわけだが、今回の調査及び南北に位置する周辺の遺跡においても、それらに関連する遺構の検出はなかった。

第5章

おわりに

第5章 おわりに

以上が、一般国道10号線椎田バイパス建設に伴う発掘調査で判明した福岡県京都郡豊津町所在皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡の調査記録である。

全体を通じてのまとめを若干記してみたい。

皆見遺跡は大きく8時期の遺構と遺物が検出された。それらは、

- ㊸ 弥生時代中期初頭グループ
- ㊹ 6世紀後半～7世紀前半グループ
- ㊺ 7世紀中葉～7世紀後半グループ
- ㊻ 7世紀後半～8世紀前半グループ
- ㊼ 8世紀中葉～8世紀後半グループ
- ㊽ 10世紀代グループ
- ㊾ 12世紀代グループ

に分かれる。

さて、県道新田原・節丸停車場線を挟んで西側に位置するカワラケ田遺跡では、大きく4時期に分かれる。それらは、

- ㊸ 弥生時代中期初頭グループ
- ㊹ 弥生時代中期後半グループ
- ㊺ 7世紀代グループ
- ㊾ 12世紀代グループ

に分かれる。

こうしてみると、両遺跡では、遺構の存在時期に重複する部分が窺える。つまり、弥生時代中期初頭、7世紀代、そして12世紀代である。

弥生時代中期初頭では、貯蔵穴群を中心にするように、周辺の徳永川の上遺跡、神手遺跡と共に、祓川河岸段丘上に大規模な集落があったことが推定される。

7世紀代では、「和名抄」にいう「皆見郷」集落の存在が推定される。この時期の墓域は、徳永川の上遺跡や神手遺跡、居屋敷遺跡周辺に集中する。

12世紀代は、祓川河岸段丘縁辺上は墓域に変容するようである。徳永川の上遺跡では、土墳墓と共に、古墳を再利用した中世墓が検出されている。

本来、両遺跡は一体の時期変遷を辿っていたことがわかる。

また、特に7世紀代以降、常に両遺跡から眼下に広がる沖積平野に位置する豊前国府の成立様

相と軌を一にしながら推移していったことは想像に難くない。

豊前国府の時期的変遷について、末永弥義氏は、以下の4期に区分している。^{註33}

I期 7世紀後半代

惣社地区丘陵に竪穴住居跡約100軒からなる大規模な拠点集落が展開する。

II期 8世紀～9世紀後代

国作地区（字宮の下）丘陵に瓦葺き建物が建設され、惣社地区においても大形柱掘方を有する掘立柱建物が整備され始める。

III期 10世紀～11世紀代

国作地区において大規模な整地が行なわれ、惣社地区では掘立柱建物の建設がピークを迎える。

IV期 12世紀～13世紀

国作・惣社地区を通じて掘立柱建物の建設は続くが、大形の建物は少なくなる。

但し、皆見遺跡、カワラケ田遺跡では、竪穴住居跡は7世紀前半までであることから、末永氏のI期以前、プレI期がこの河岸段丘上に展開していったことがわかる。

最後に、本報告書を作成するにあたって、常に適切な助言と指導を賜った、九州歴史資料館の横田義章氏、橋口達也氏、横田賢次郎、赤司善彦氏、南筑後教育事務所の佐々木隆彦氏、京築教育事務所の伊崎俊秋氏、そして、挿図清書で多大な迷惑をかけた豊福弥生氏に改めて深甚の謝意を表したい。

註)

33. 末永弥義編「豊前国府」『豊津町文化財調査報告書』第9集、1990年。

版 图



豊前国府推定地と周辺の遺跡（昭和50年当時）

- | | | | |
|----------|-----------|------------|----------------|
| 1. 居屋敷遺跡 | 2. 鋤先遺跡 | 3. 徳永川の上遺跡 | 4. 辻垣長通遺跡 |
| 5. 津留遺跡 | 6. 惣社八幡神社 | 7. 幸木遺跡 | 8. 惣社古墳(前方後円墳) |



2) 皆見遺跡全景 (北から)



1) 皆見遺跡全景 (南から京都平野をみる)



2) 菅見遺跡全景 (真上から)



1) 菅見遺跡全景 (真上から)



1) 皆見遺跡北半部（真上から）



2) 皆見遺跡北半部東側台地を圍繞する2号溝状遺構（北西から）



1) 砦見遺跡発掘作業風景 (1987年 8月)



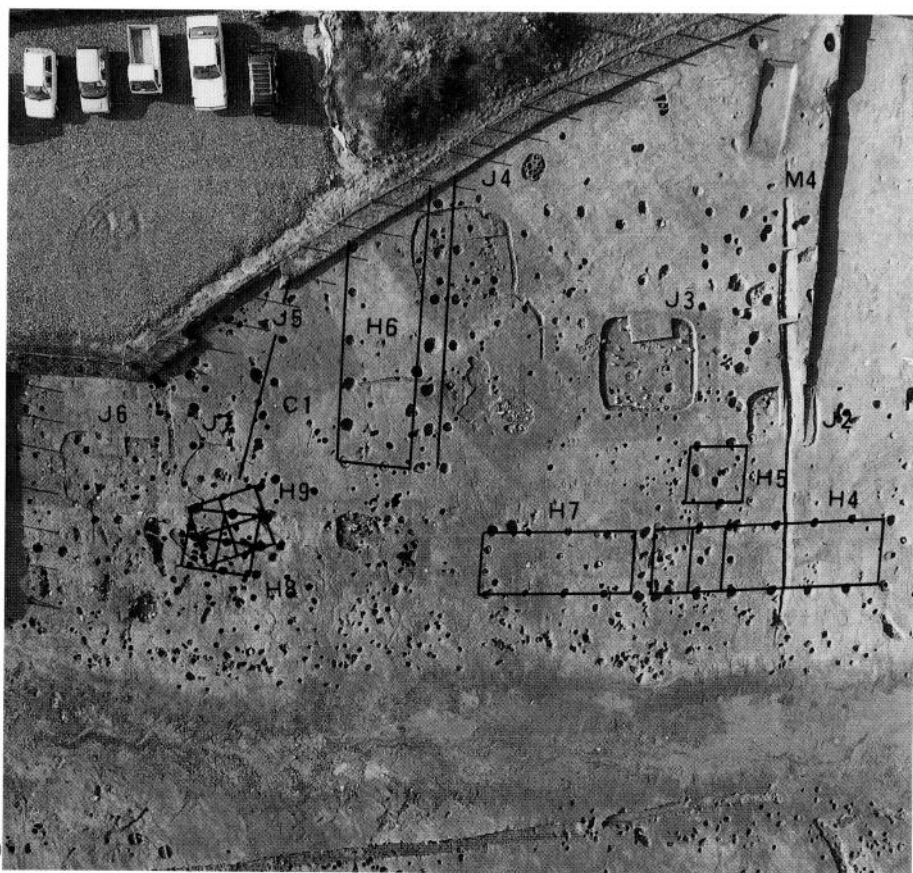
2) 砦見遺跡発掘作業風景 (1987年11月)



1) 調査区南半部発掘状況 (南から)



2) 調査区北半部発掘状況 (西から) (後方の土山は半転した排土)



1) 菅見遺跡北半部住居跡群、掘立柱建物群（真上から）

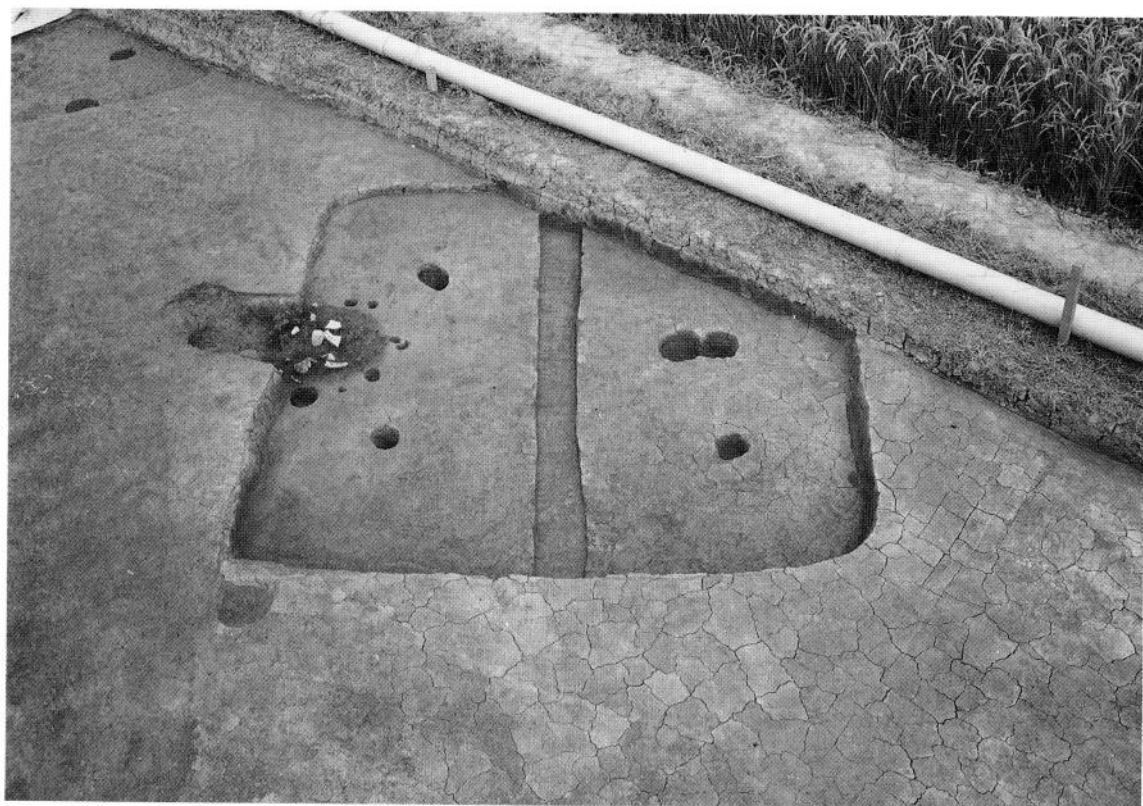
(J2=2号竖穴住居跡
H4=4号掘立柱建物
M4=4号溝状遺構
C1=1号柱列状遺構)



2) 1号竖穴住居跡（南から）

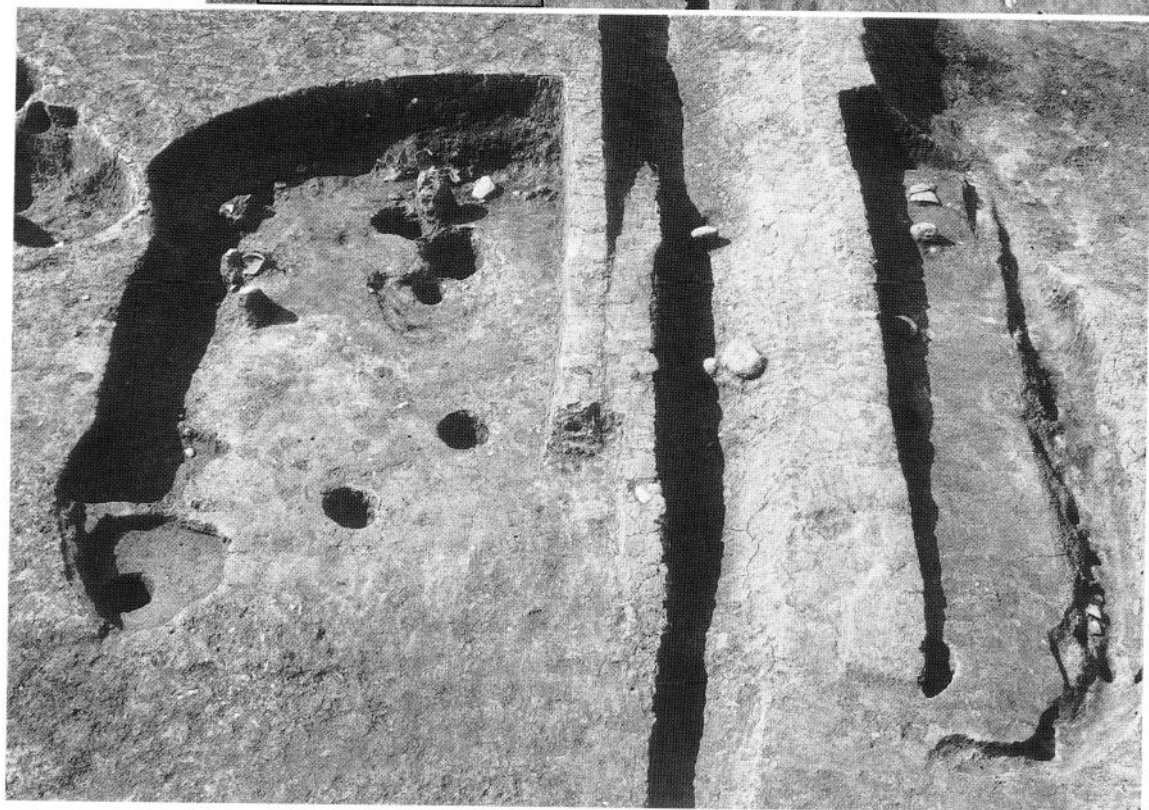


1) 1号竖穴住居跡カマド検出前状況（南から）

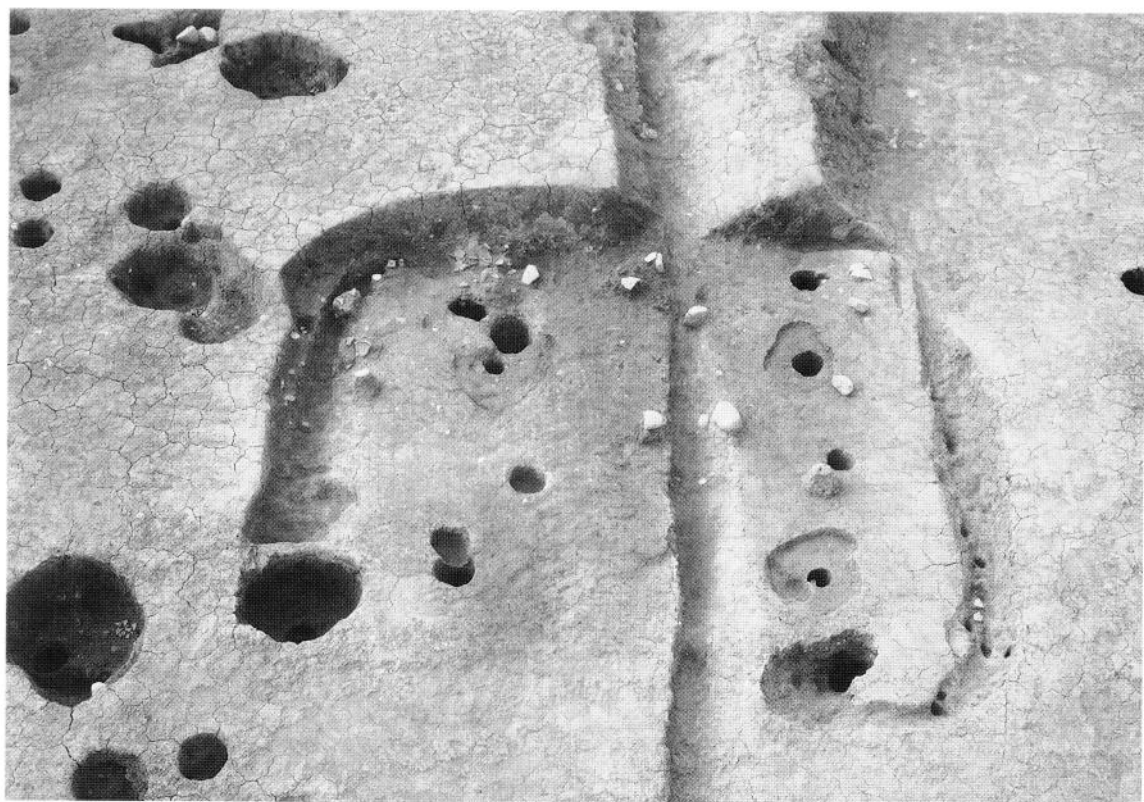


2) 1号竖穴住居跡カマド検出後状況（南から）

1) 2号竖穴住居跡 (真上から)



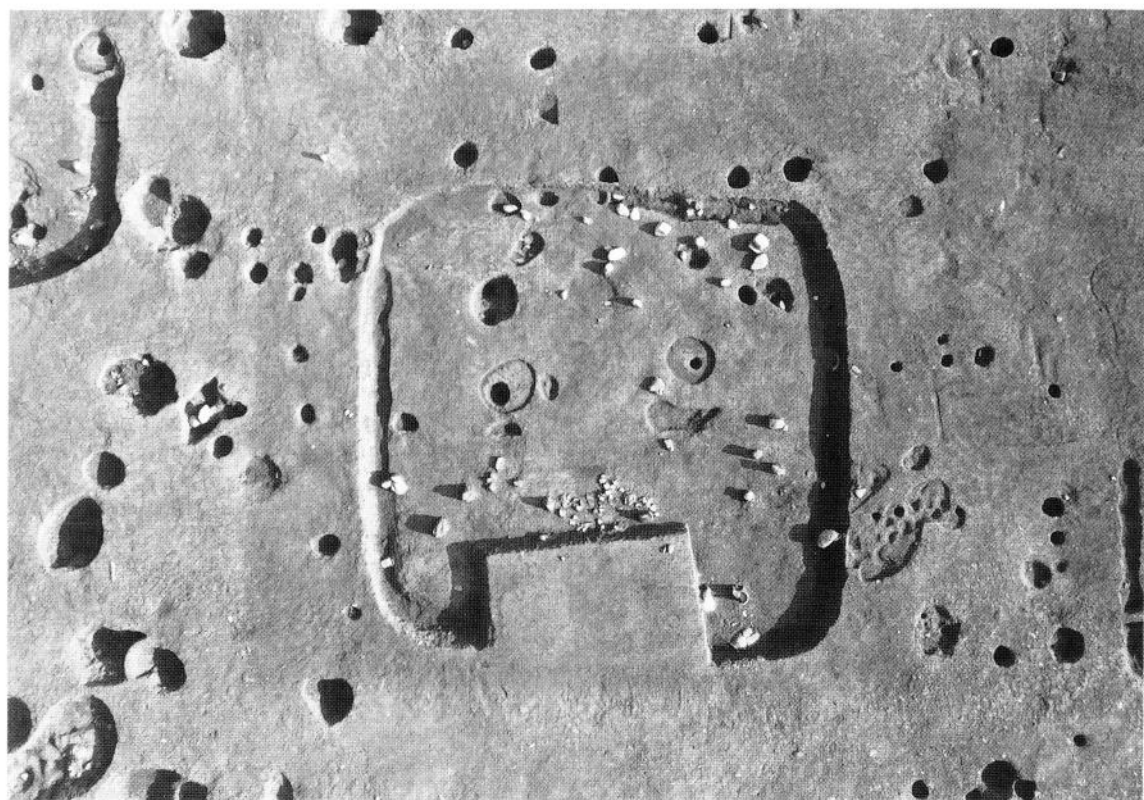
2) 2号竖穴住居跡 (南から、4号溝状遺構←2号竖穴住居跡)



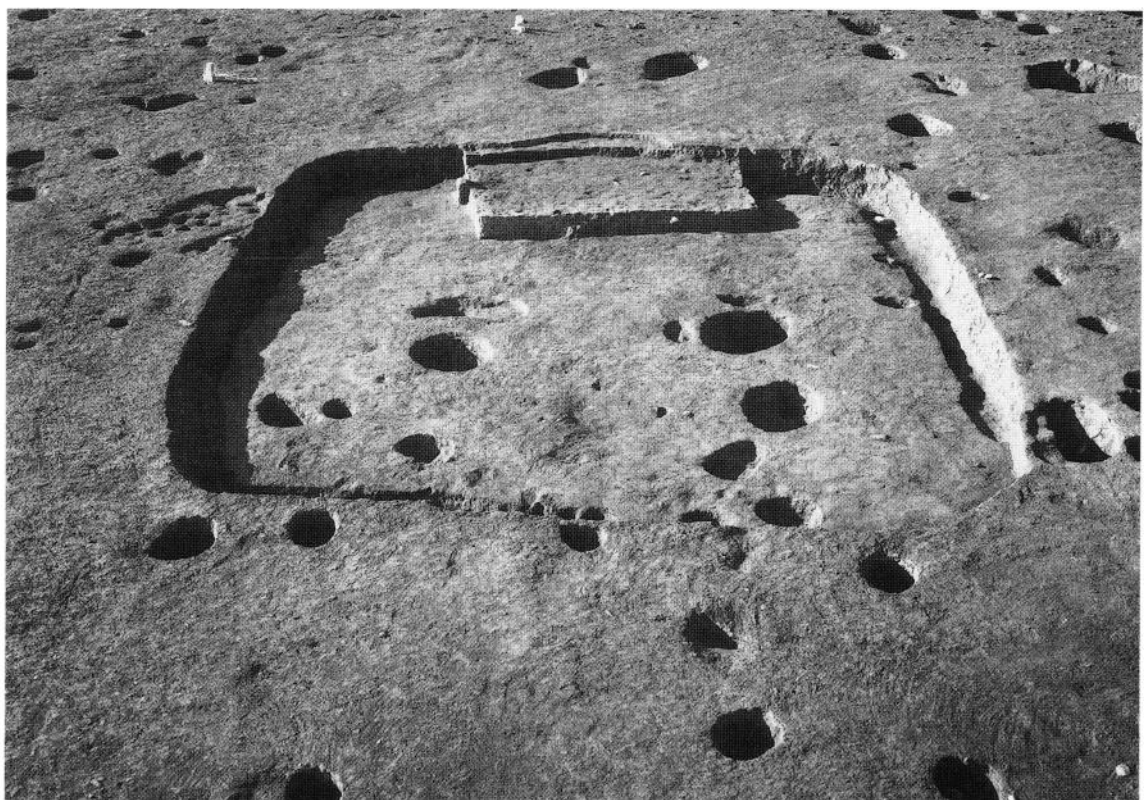
1) 1、2号竖穴住居跡（東から、4号溝状遺構掘削後）



2) 2号竖穴住居跡（東から、土器類取り上げ後）



1) 3号竖穴住居跡カマド検出前状況(真上から)



2) 3号竖穴住居跡カマド(東から)



1) 3号竖穴住居跡カマド検出後状況(東から)



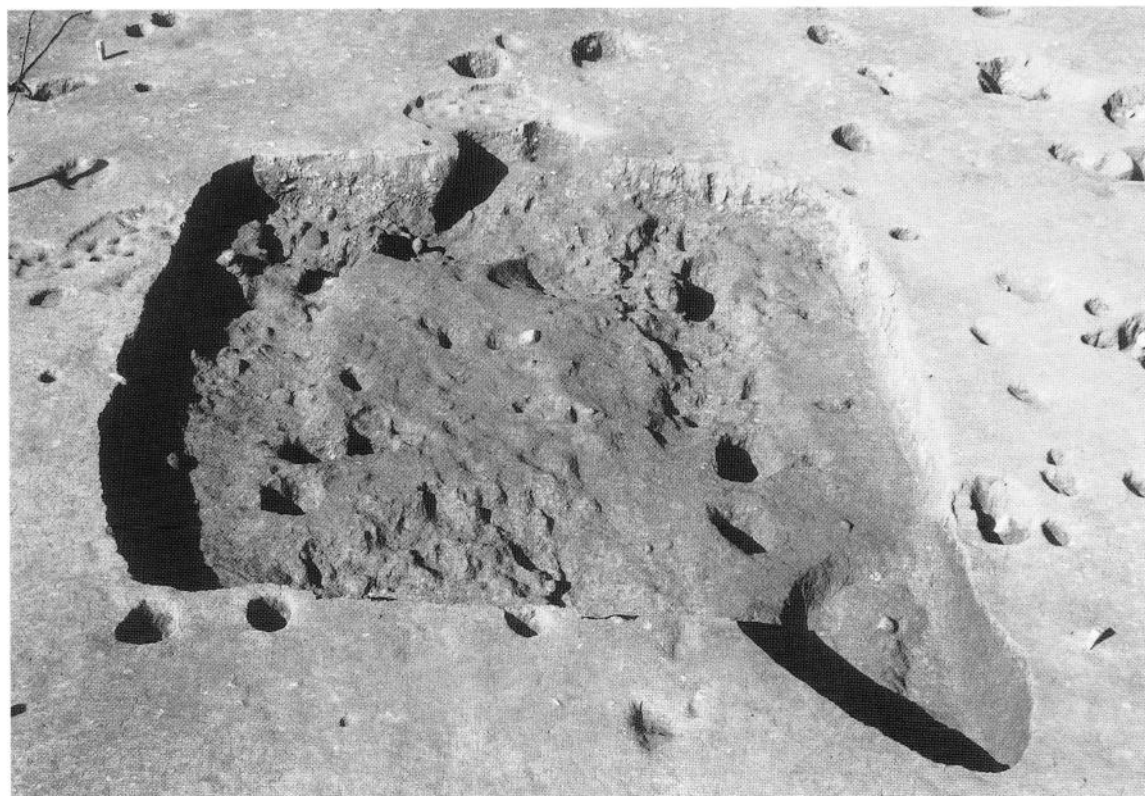
2) 3号竖穴住居跡カマド(東から)



1) 3号竪穴住居跡（カマド周辺遺物除去後、東から）



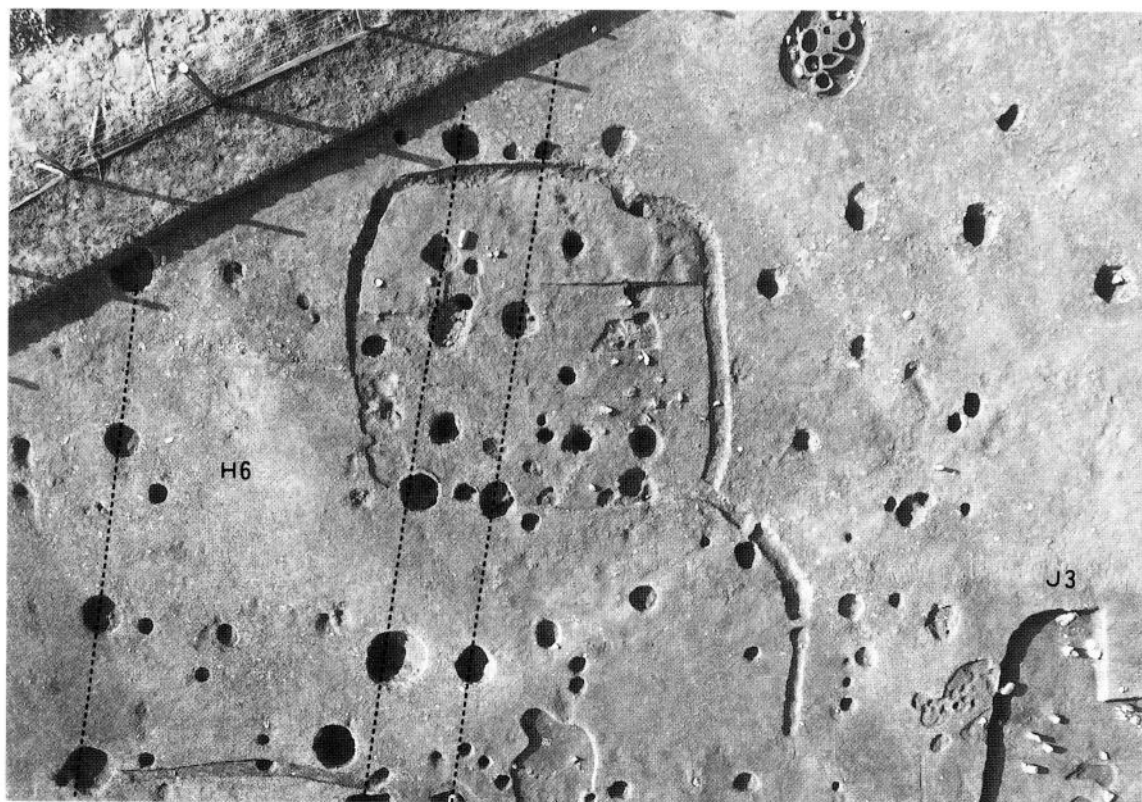
2) 3号竪穴住居跡（カマド周辺遺物除去後、東から）



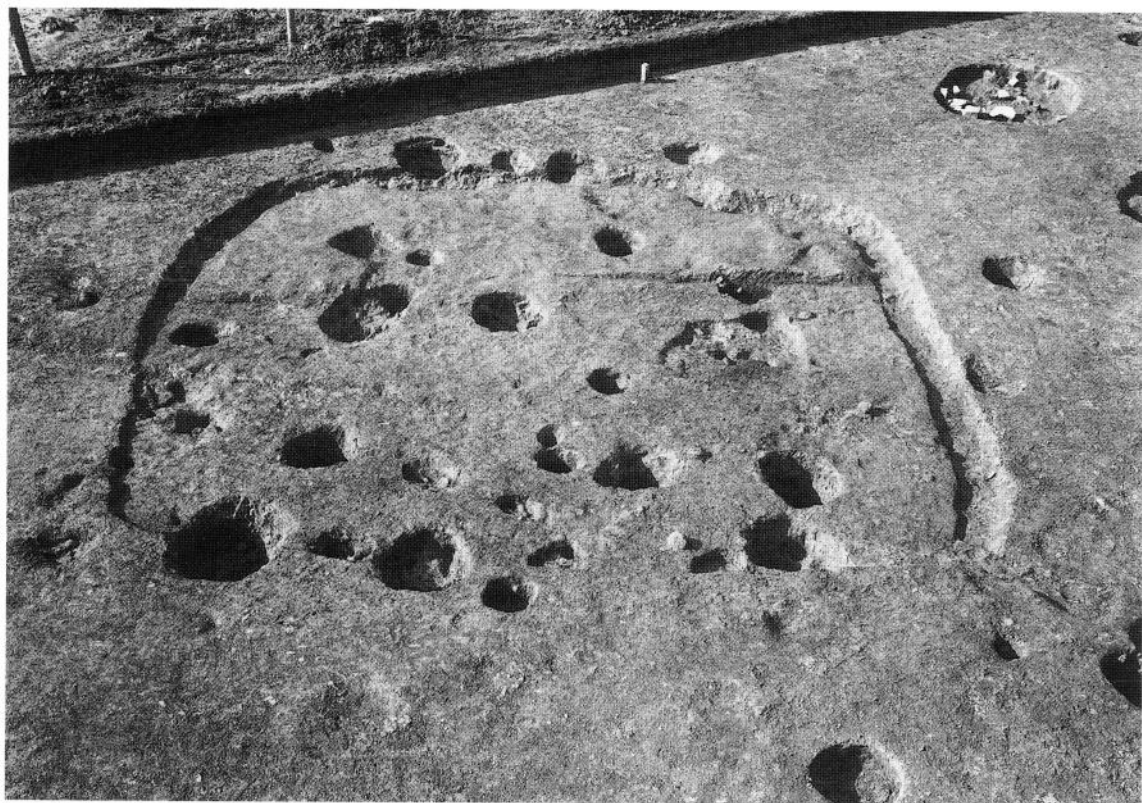
1) 3号竖穴住居跡下層(東から)



2) 3号竖穴住居跡発掘作業風景



1) 4号竖穴住居跡（真上から）



2) 4号竖穴住居跡（南東から）



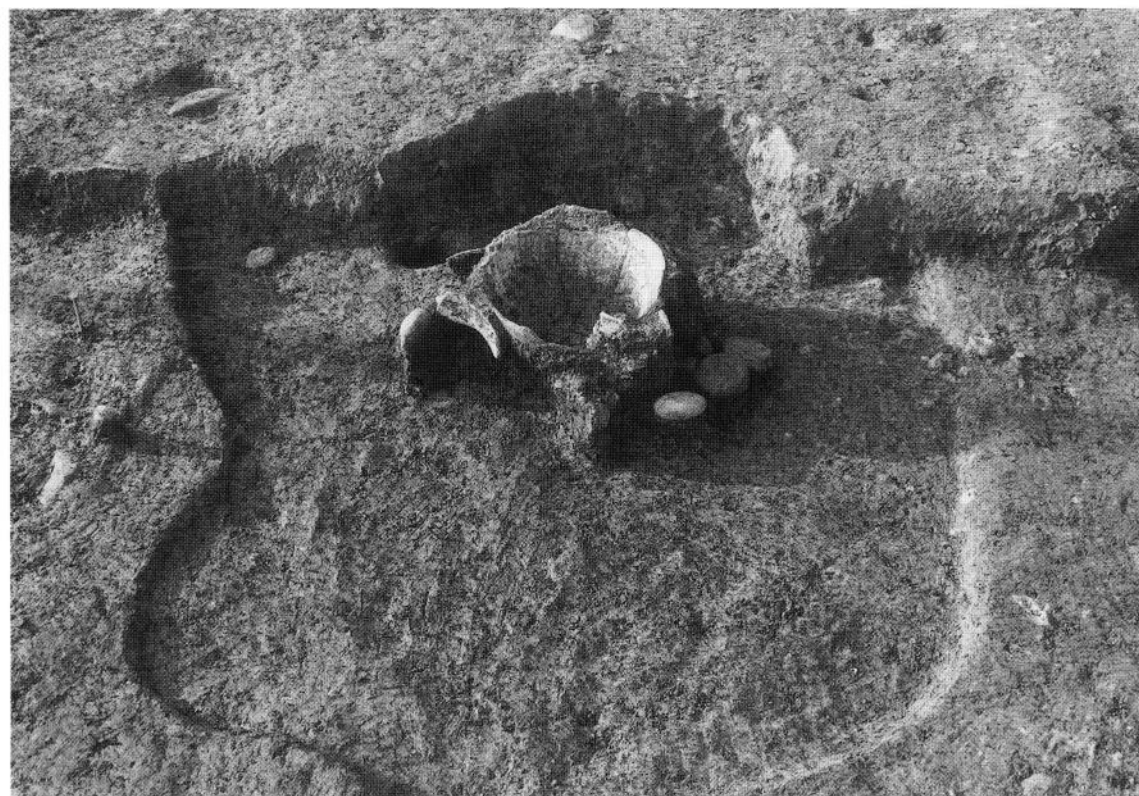
1) 6号竖穴住居跡カマド(南東から)



2) 6号竖穴住居跡カマド(南東から)



1) 6号竪穴住居跡カマド検出前状況(真上から)



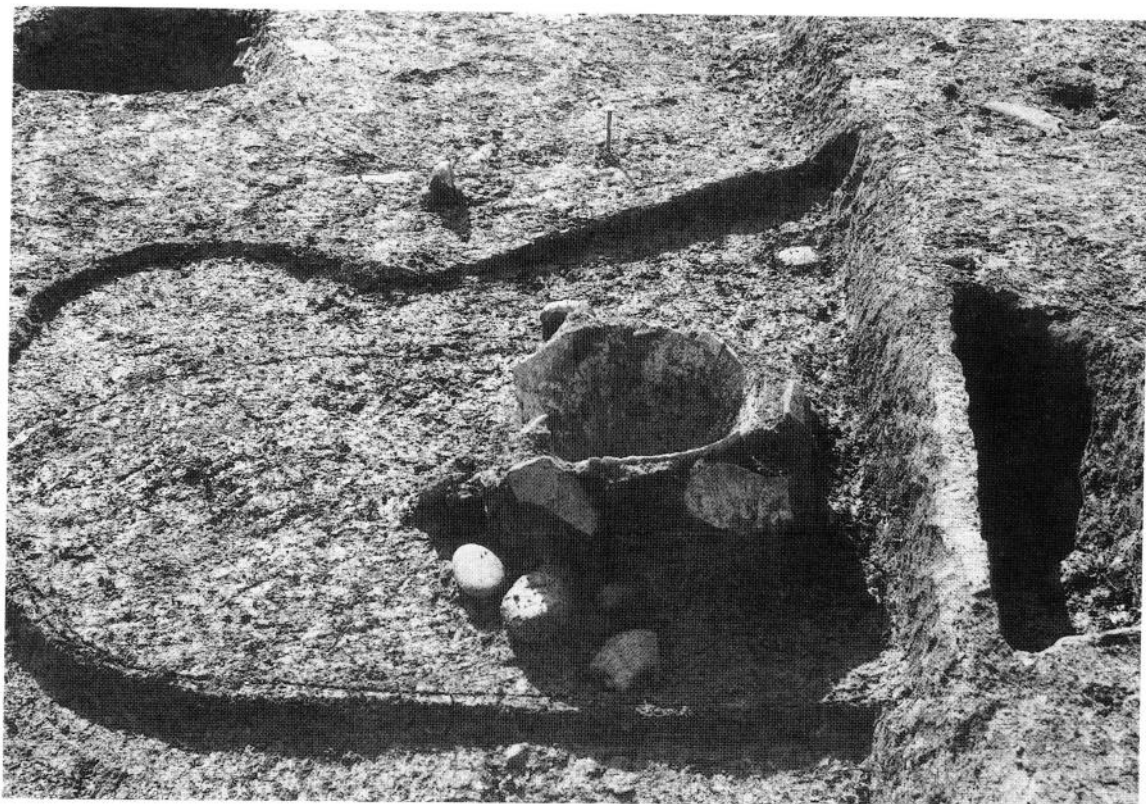
2) 6号竪穴住居跡カマド検出後状況(南東から)



1) 6号竪穴住居跡カマド（南東から）



2) 6号竪穴住居跡カマド（南東から）



1) 6号竖穴住居跡カマド(北東から)



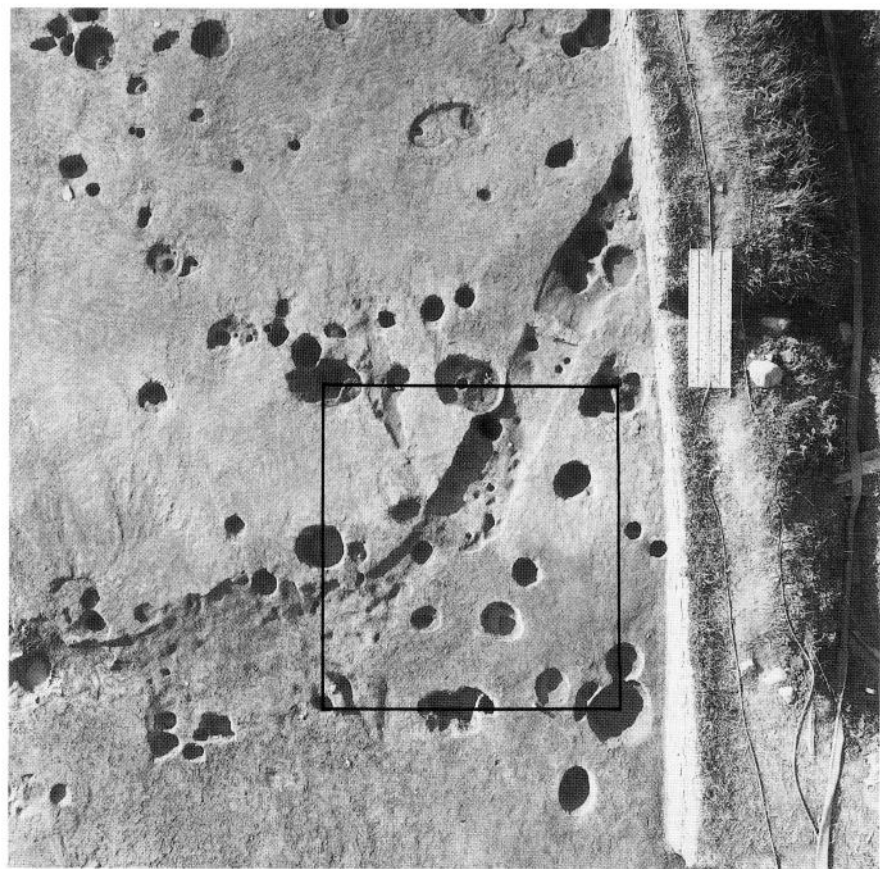
2) 6号竖穴住居跡カマド(北西から)



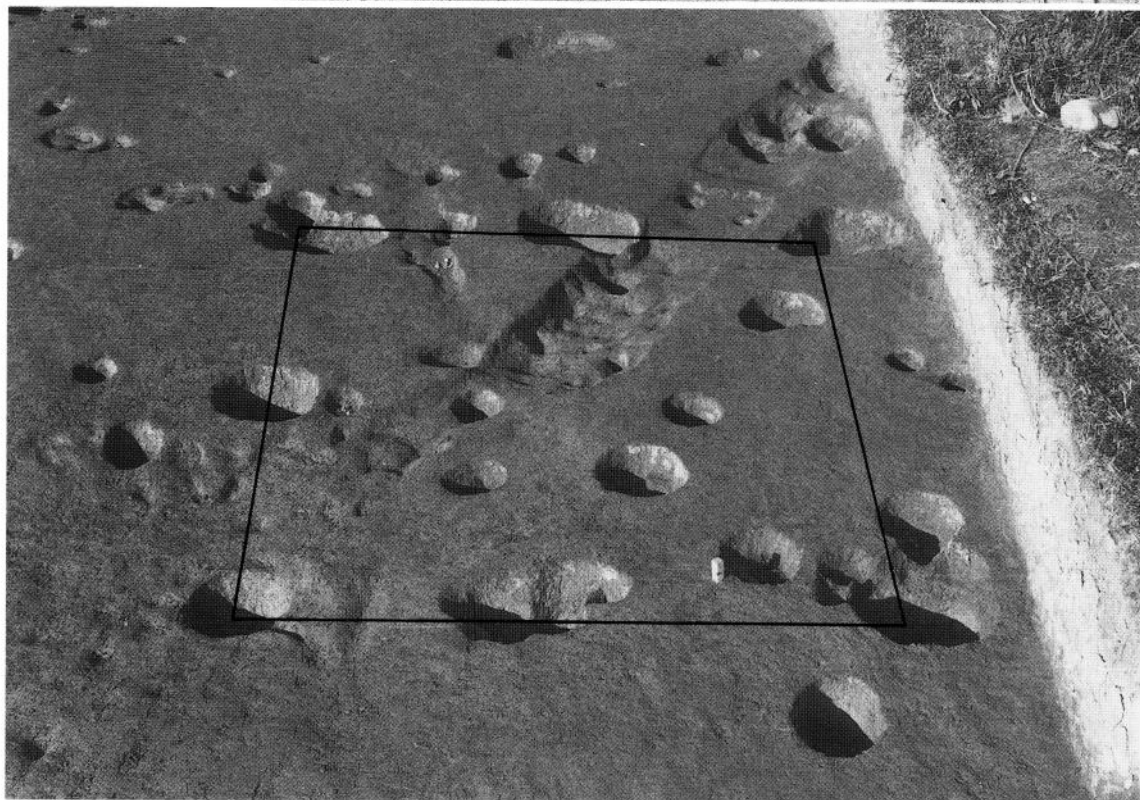
1) 6号竪穴住居跡カマド (支脚等除去後、南東から)



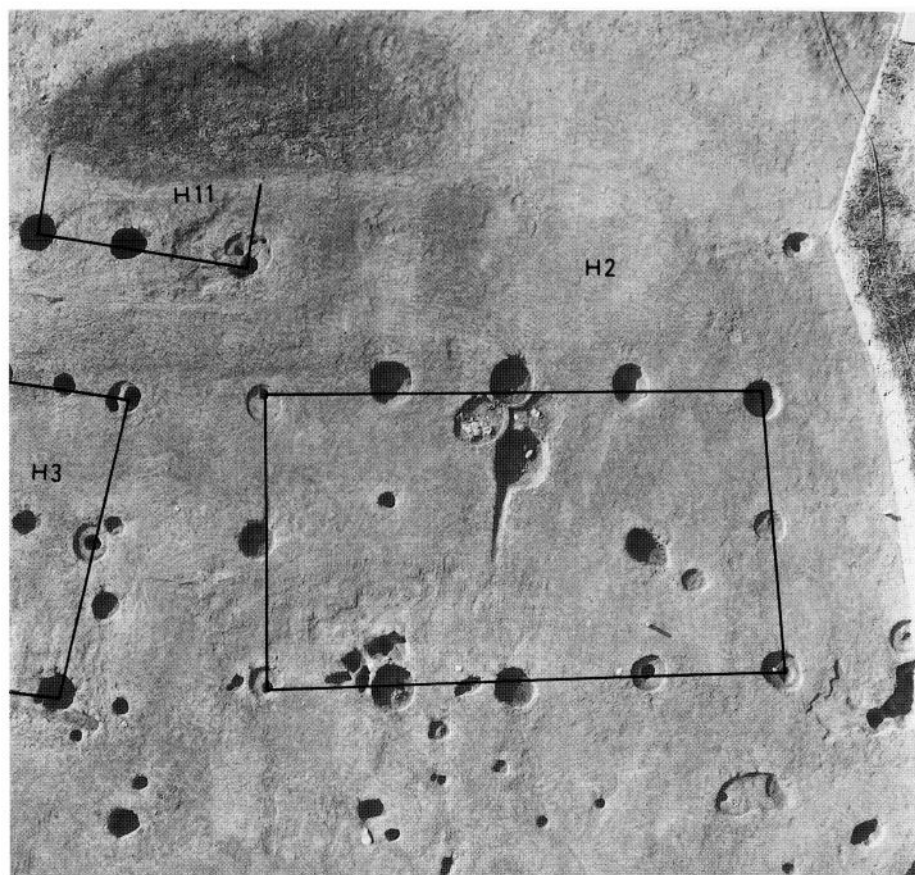
2) 6号竪穴住居跡カマド (支脚等除去後、南東から)



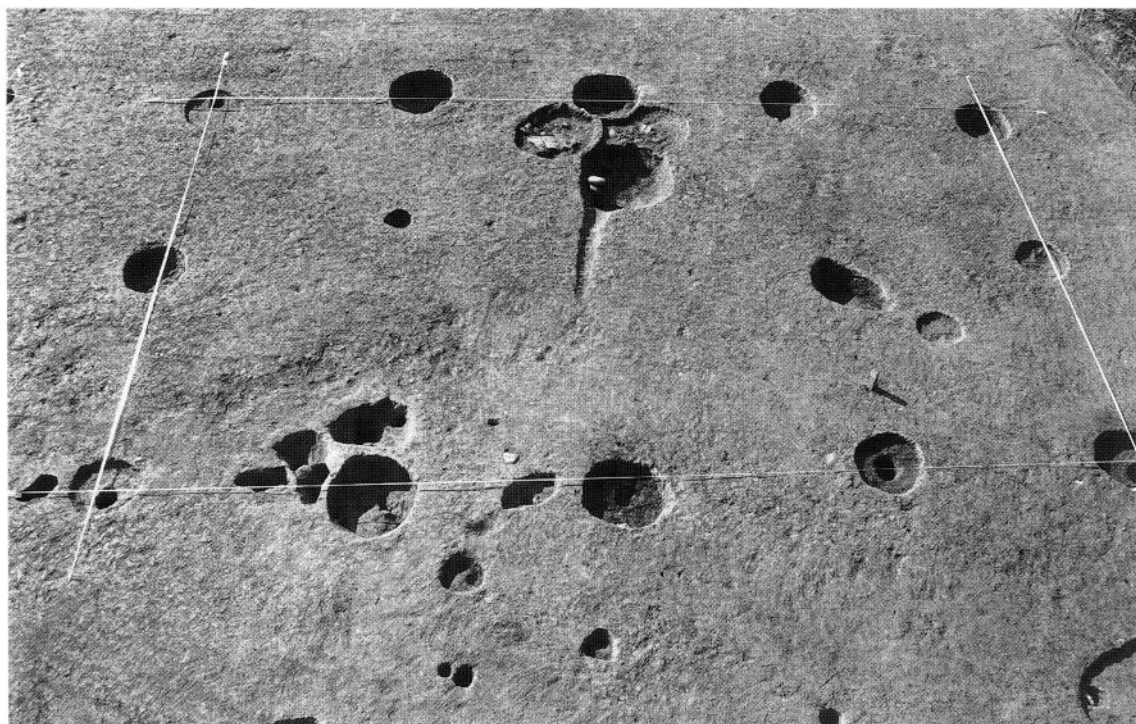
1) 1号掘立柱建物(真上から)



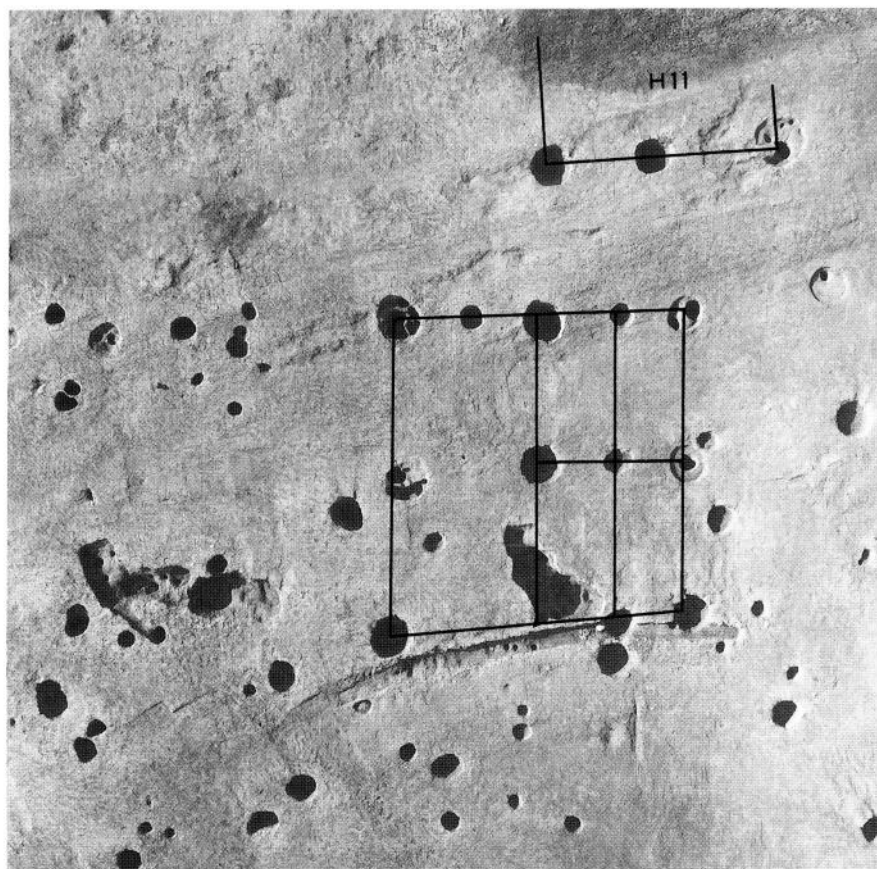
2) 1号掘立柱建物(東から)



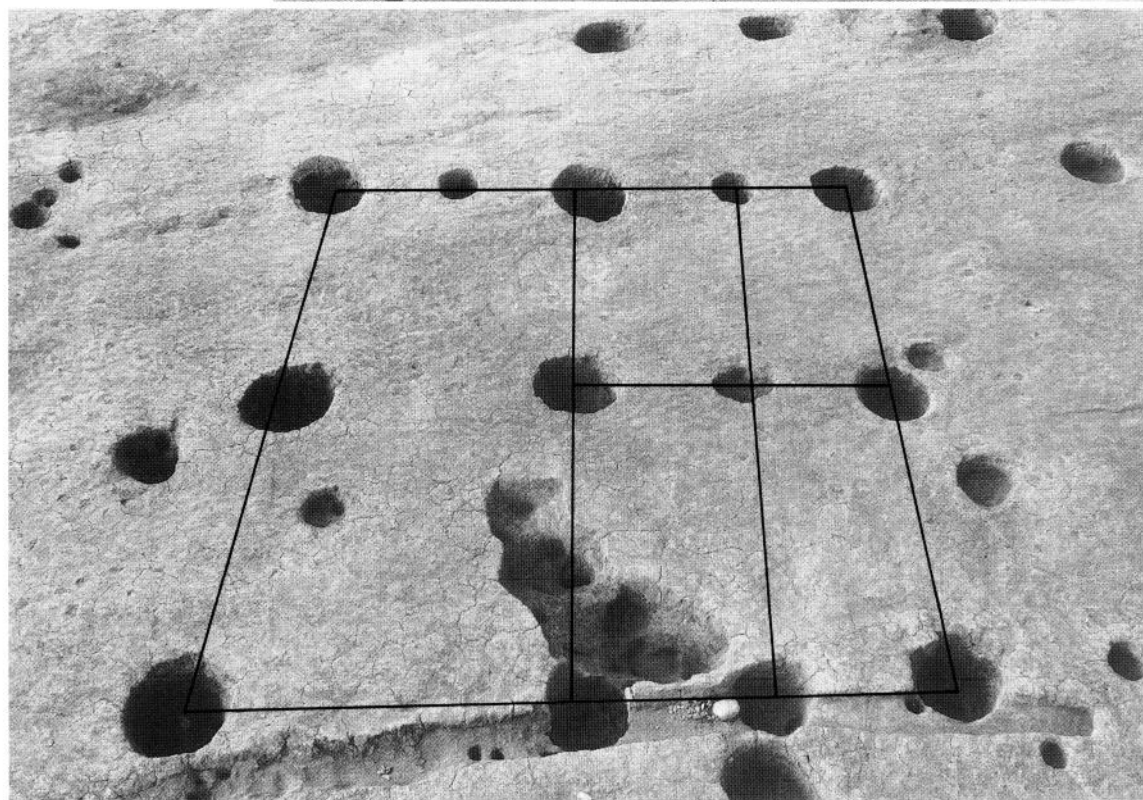
1) 2号掘立柱建物(真上から)



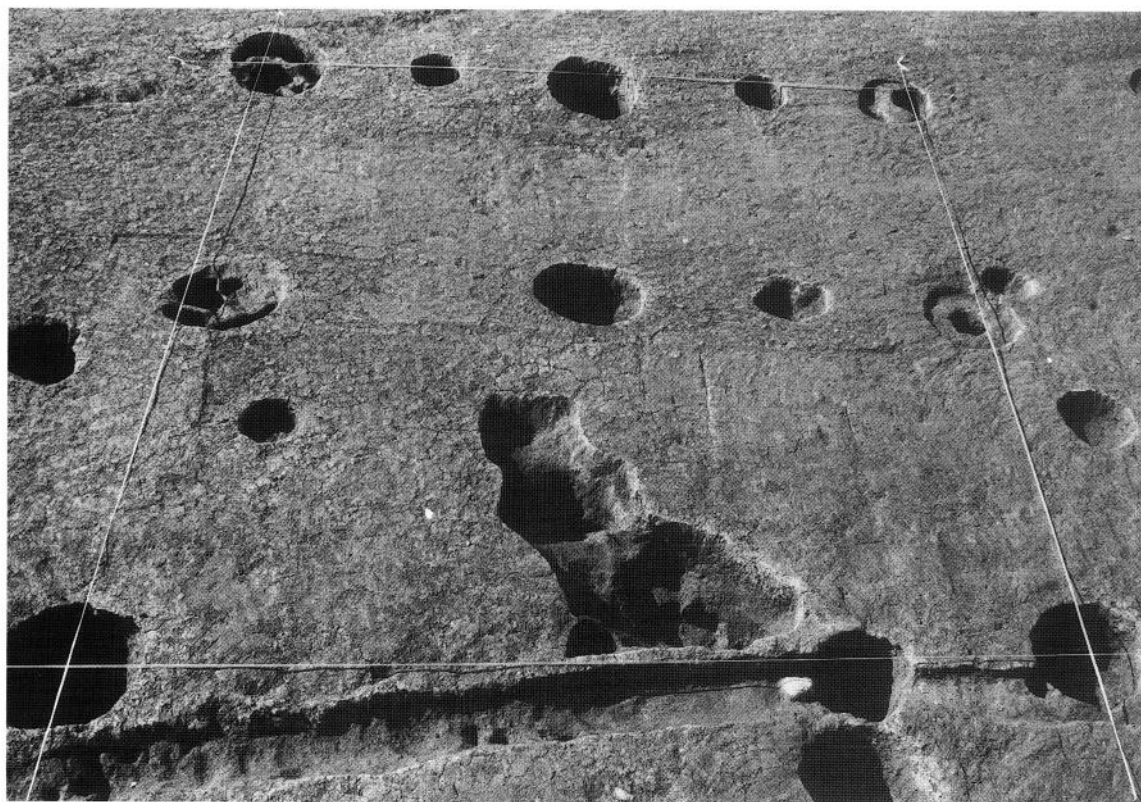
2) 2号掘立柱建物(東から)



1) 3号掘立柱建物(真上から)



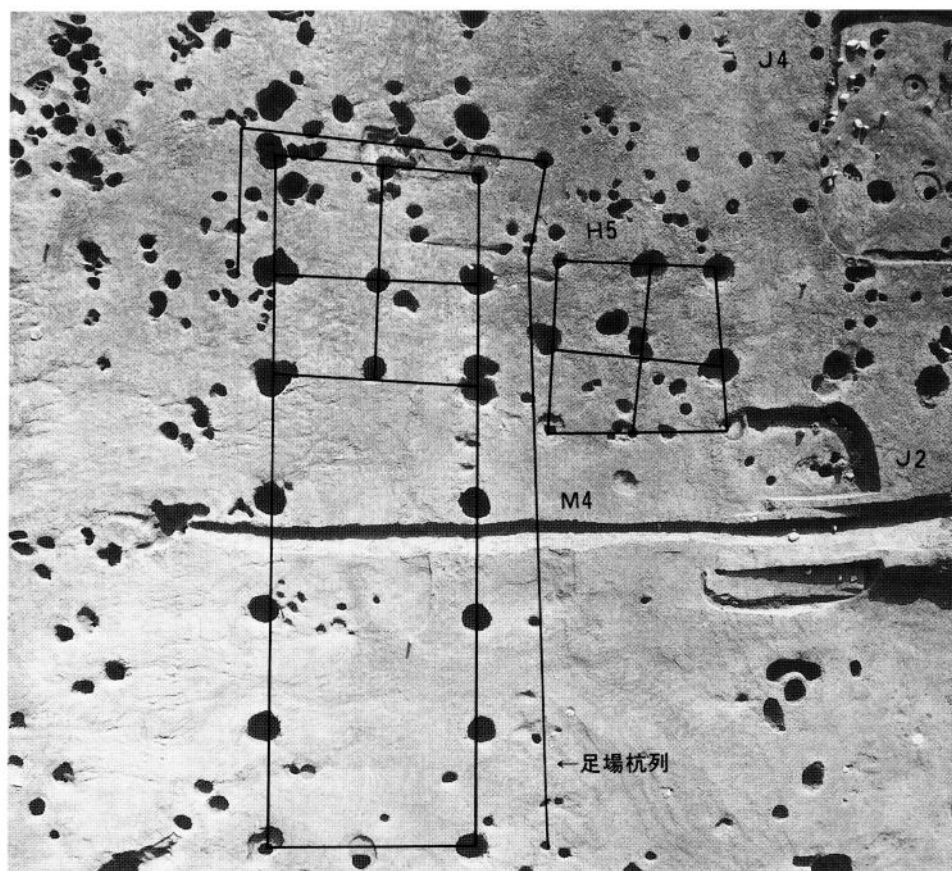
2) 3号掘立柱建物(東から)



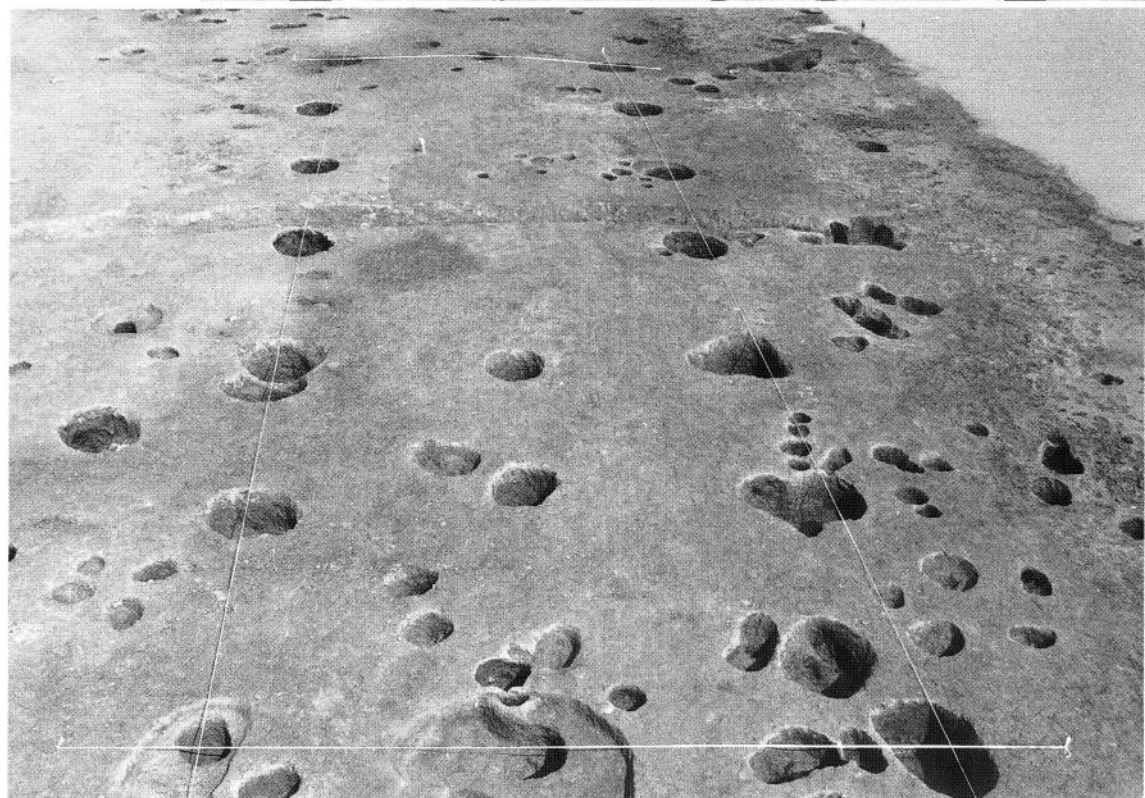
1) 3号掘立柱建物（東から）



2) 3号掘立柱建物柱穴位置確認状況（東から）



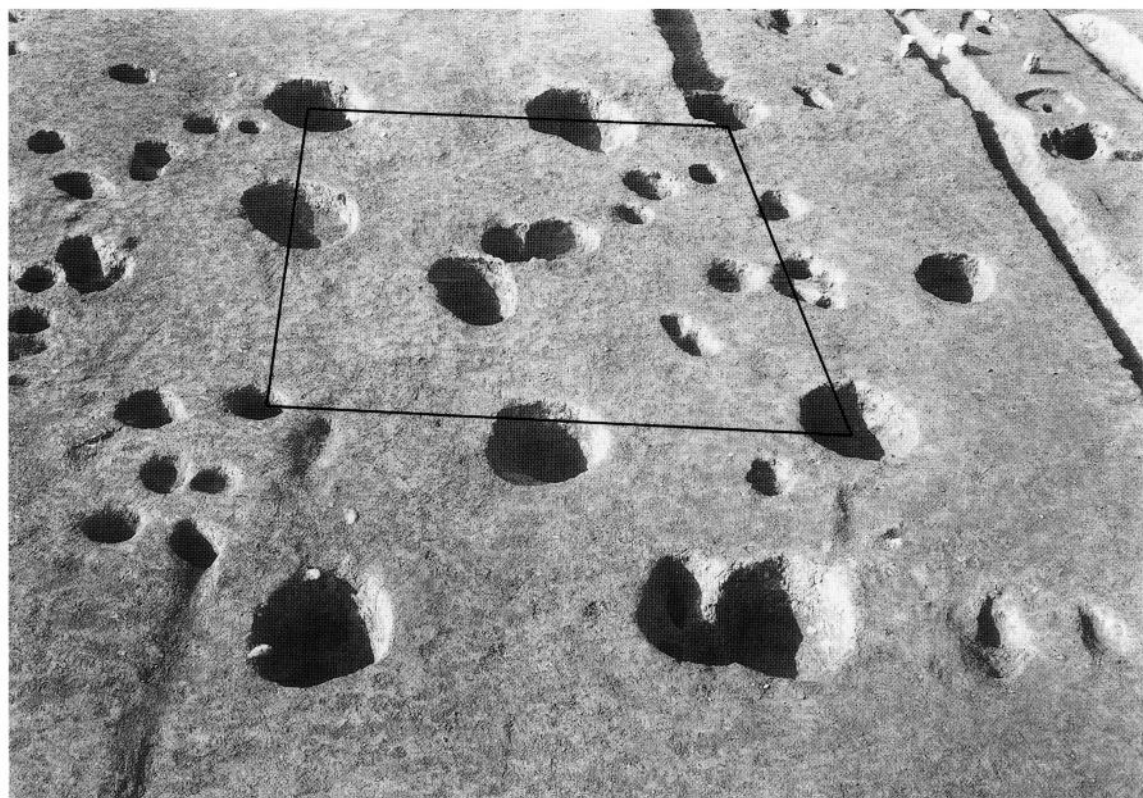
1) 4号掘立柱建物(真上から)



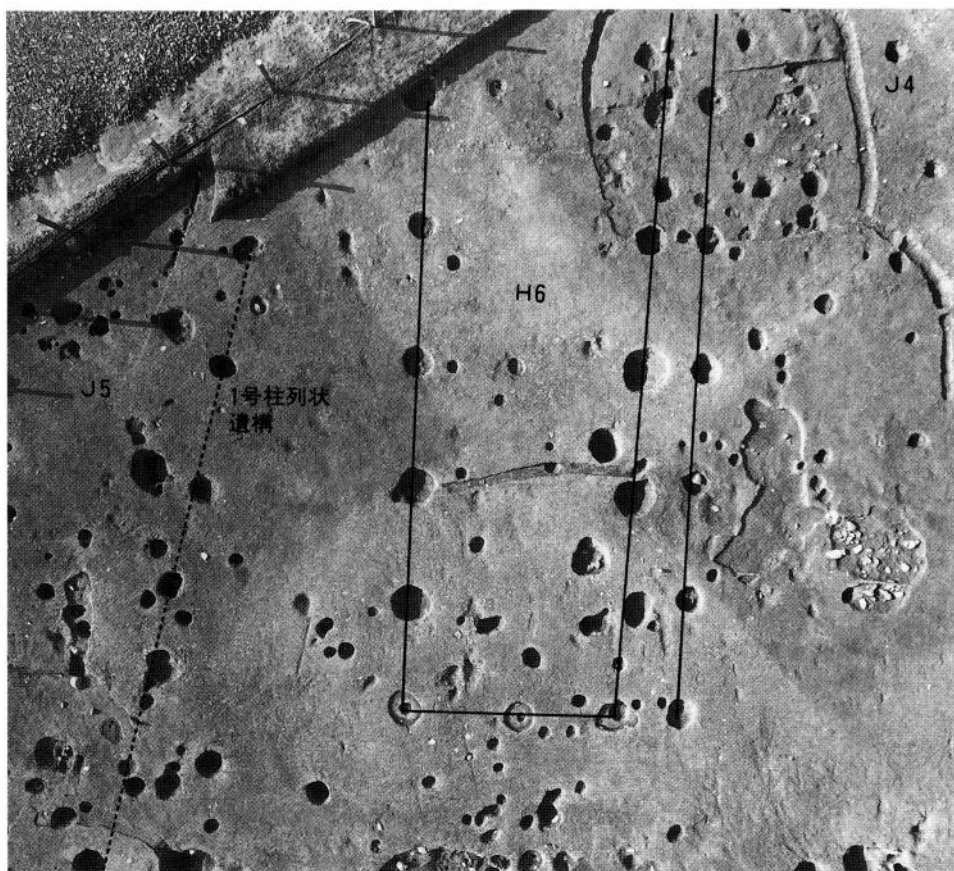
2) 4号掘立柱建物(南東から)



1) 5号掘立柱建物（柱根検出時、東から）



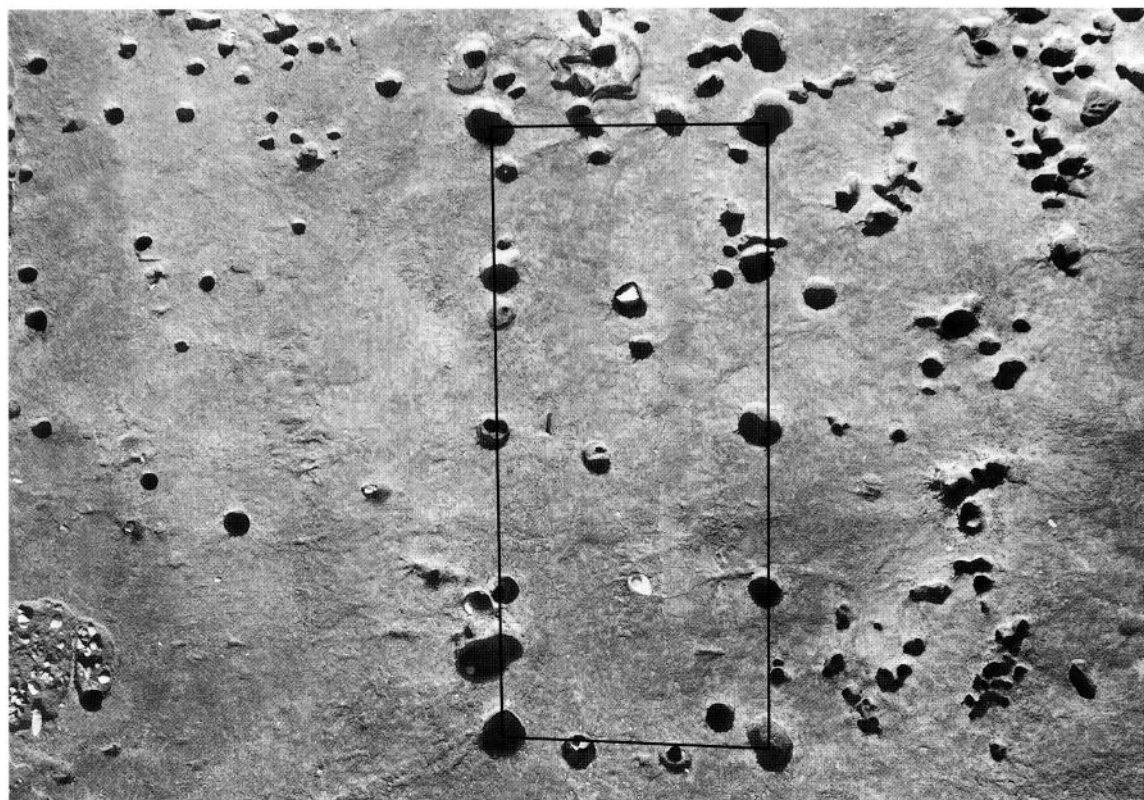
2) 5号掘立柱建物（柱穴完掘後、東から）



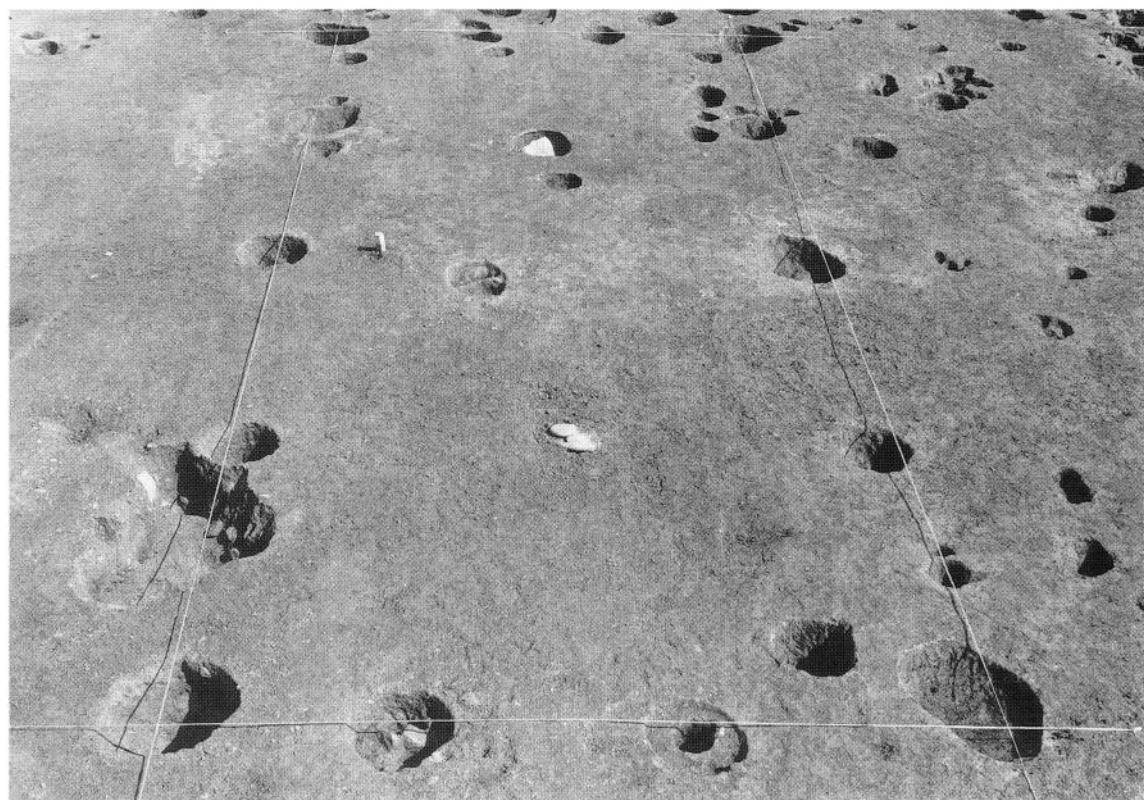
1) 6号掘立柱建物(真上から)



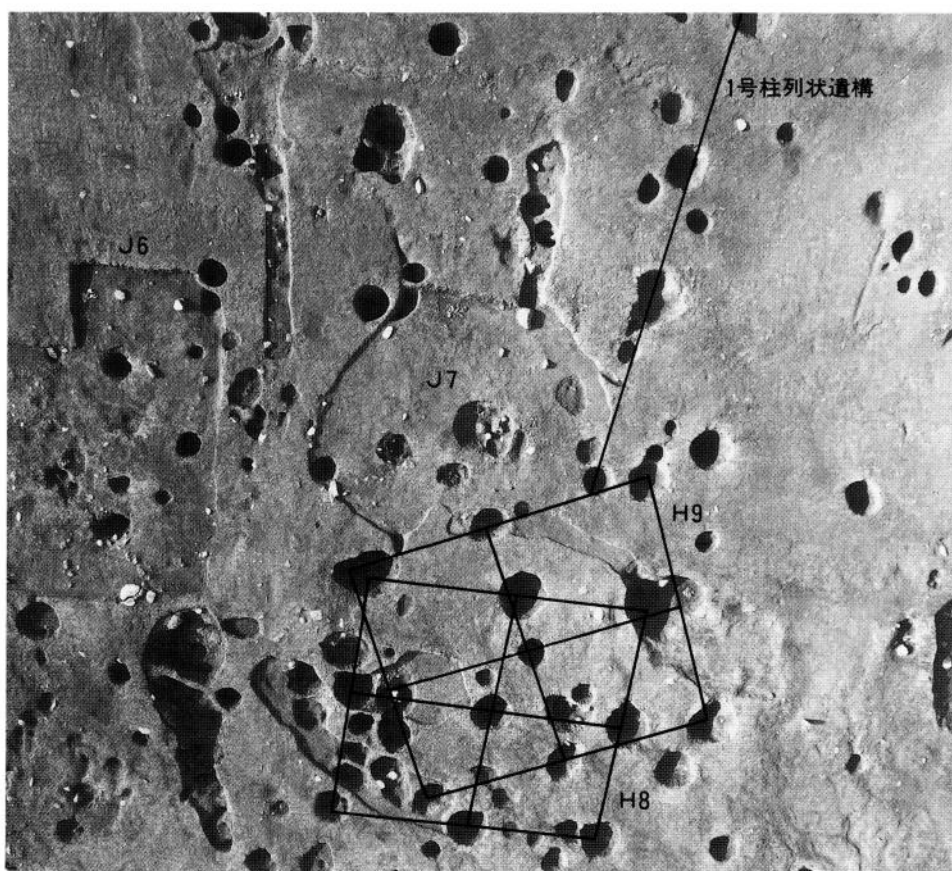
2) 6号掘立柱建物(南東から)



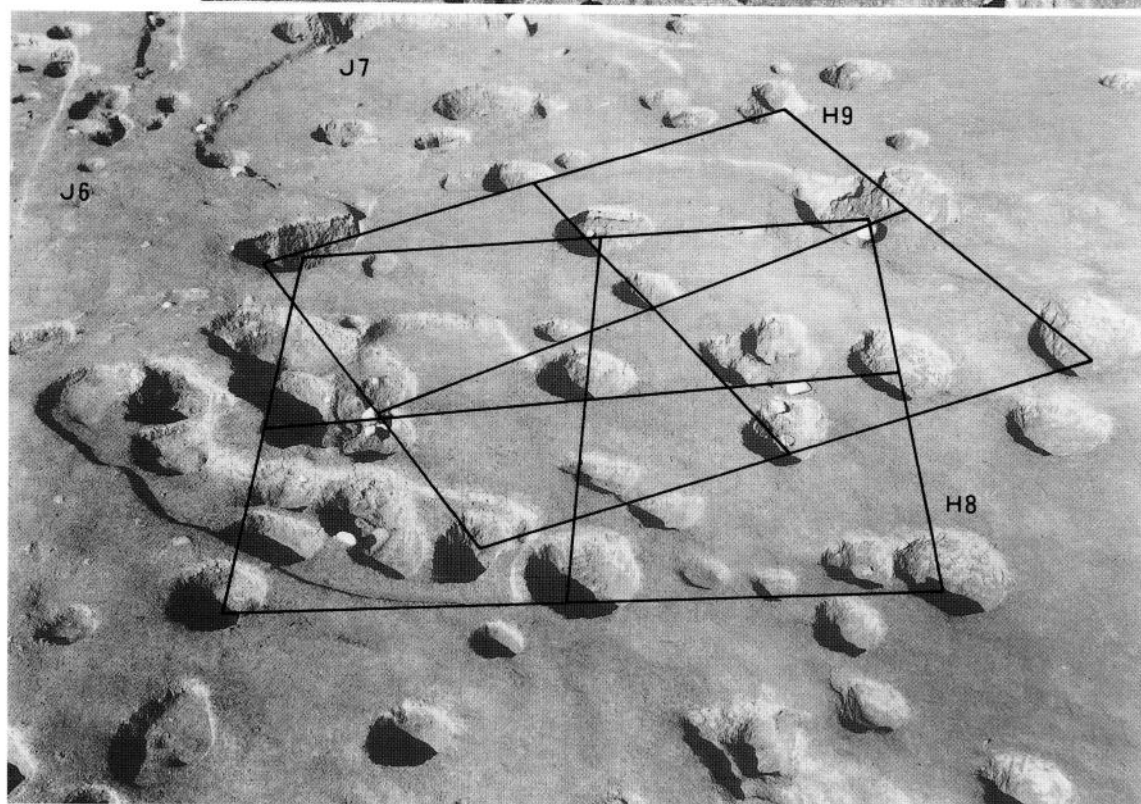
1) 7号掘立柱建物（真上から）



2) 7号掘立柱建物（南西から）

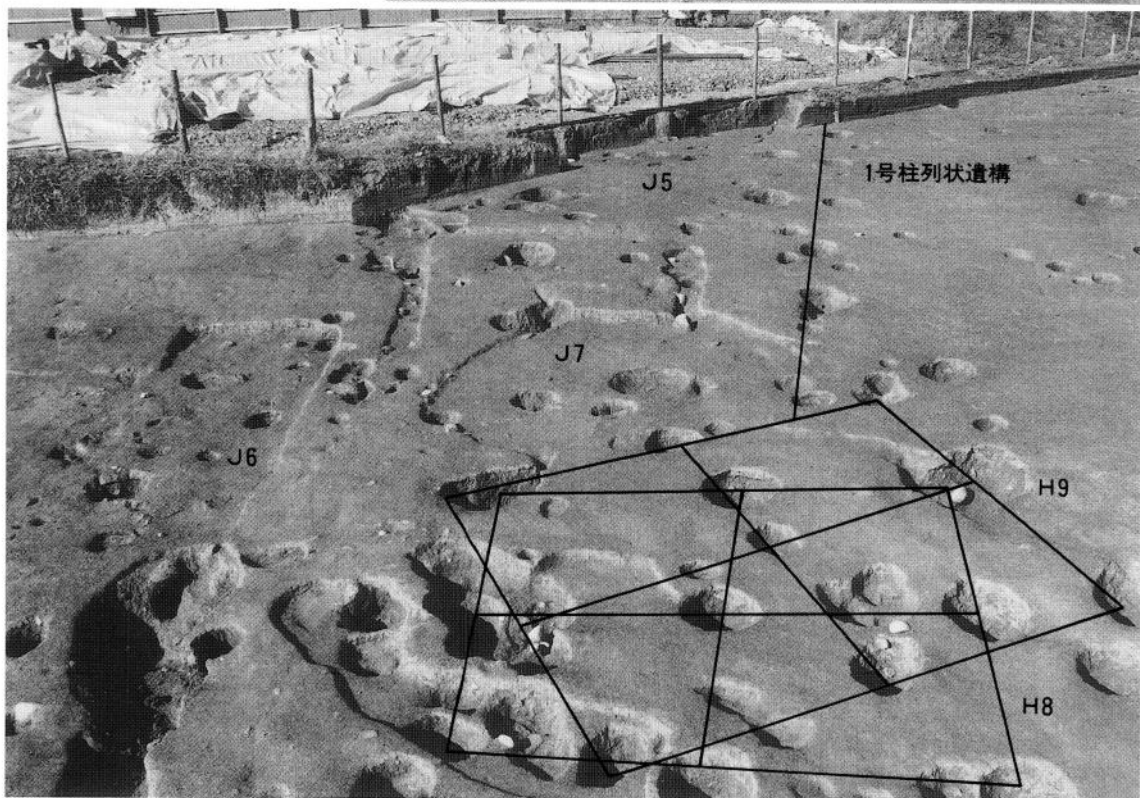
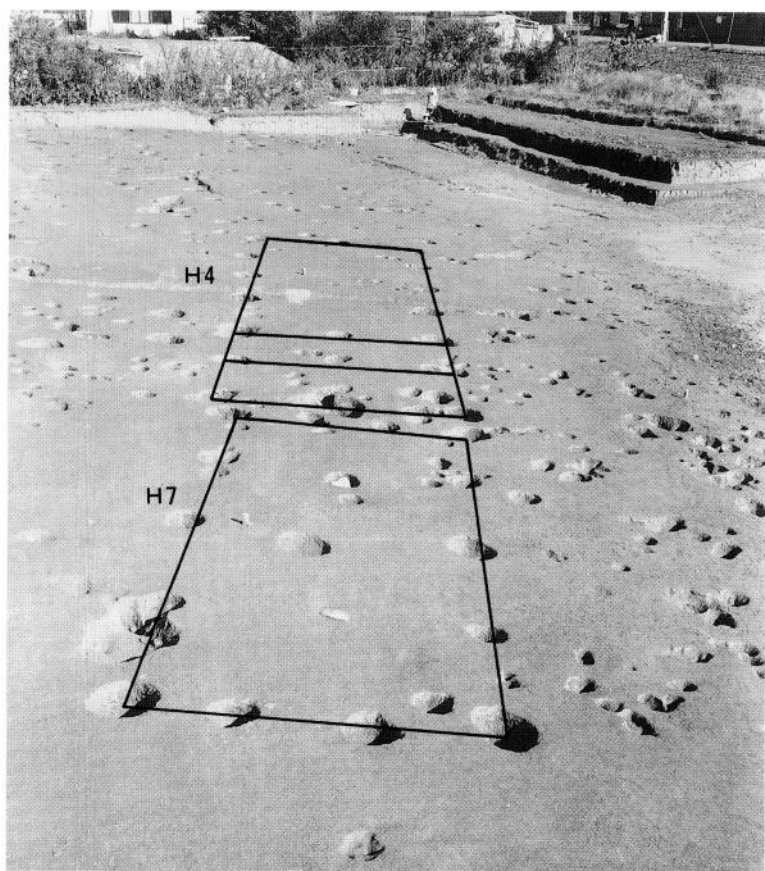


1) 8号・9号掘立柱建物、7号竖穴住居跡及び1号柱列状遺構(真上から)



2) 8号・9号掘立柱建物及び7号竖穴住居跡(南東から)

1) 4号・7号掘立柱建物(南西から)



2) 1号柱列状遺構及び8号、9号掘立柱建物(南東から)



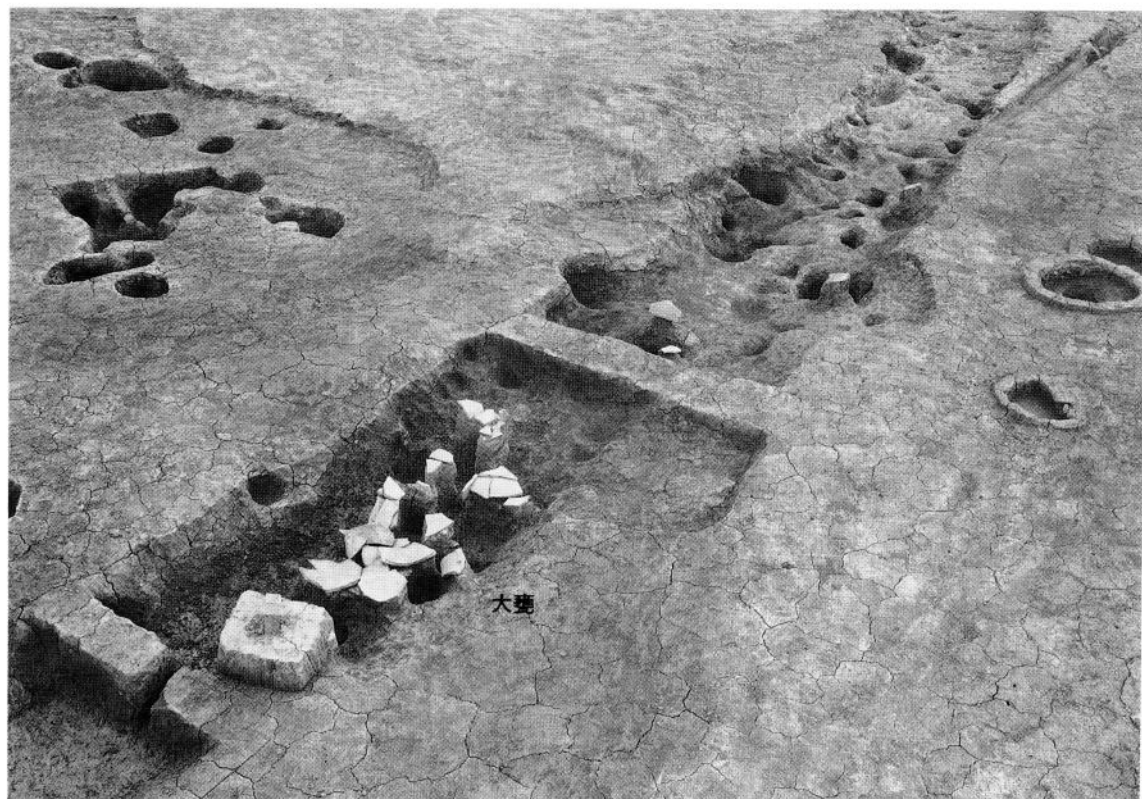
1) 1号井戸 (南東から)



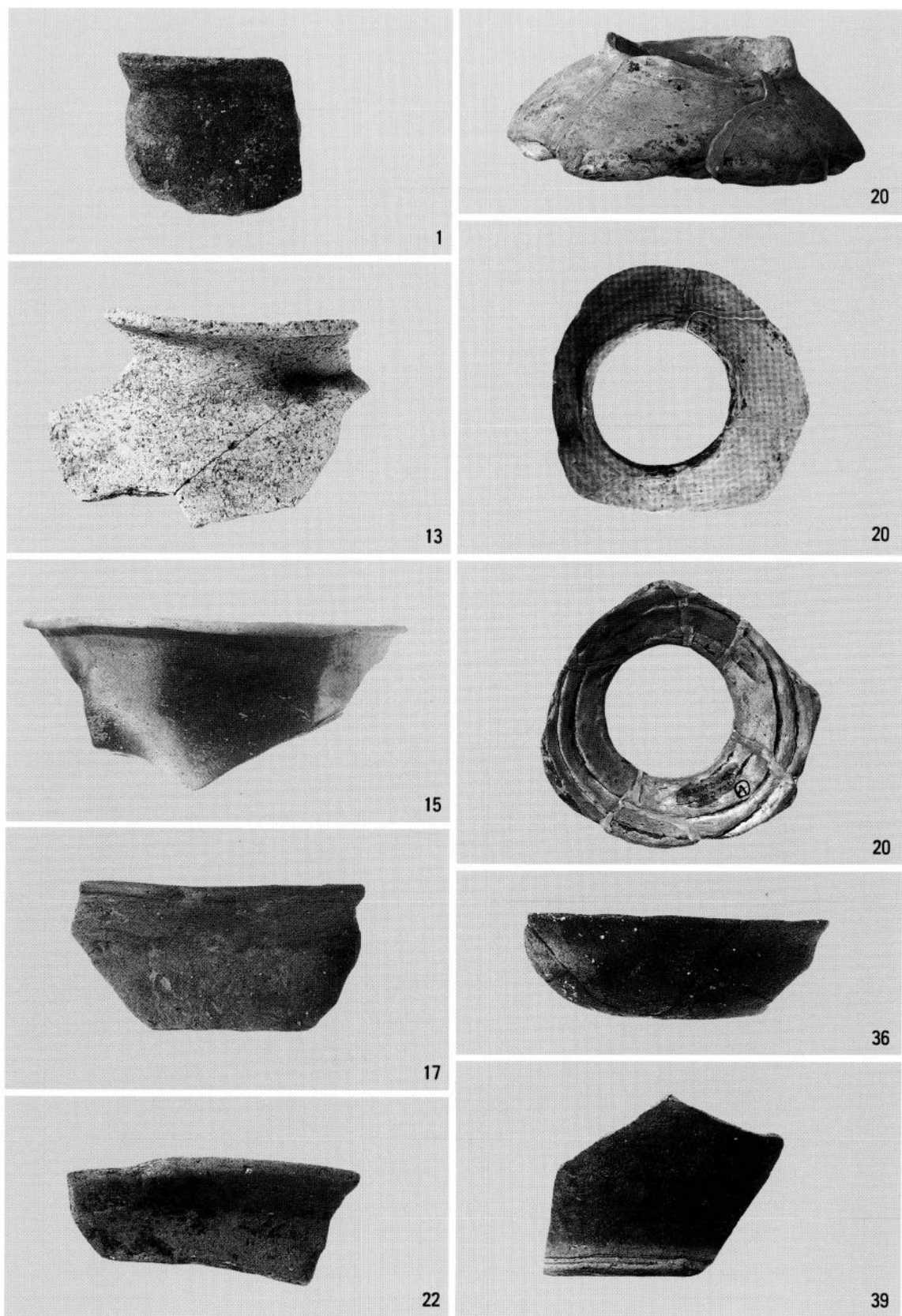
2) 調査区南半部全景 (南から)



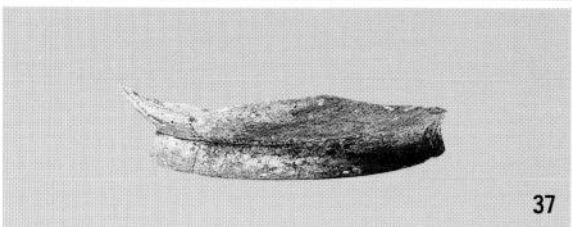
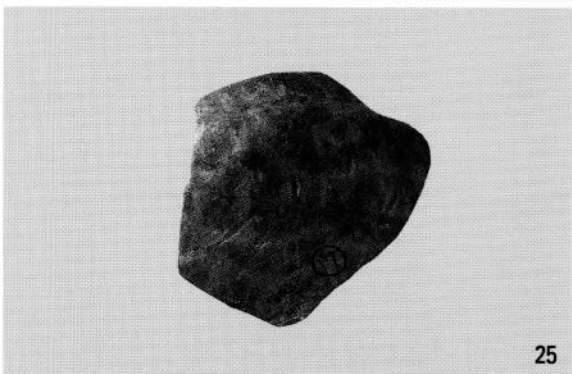
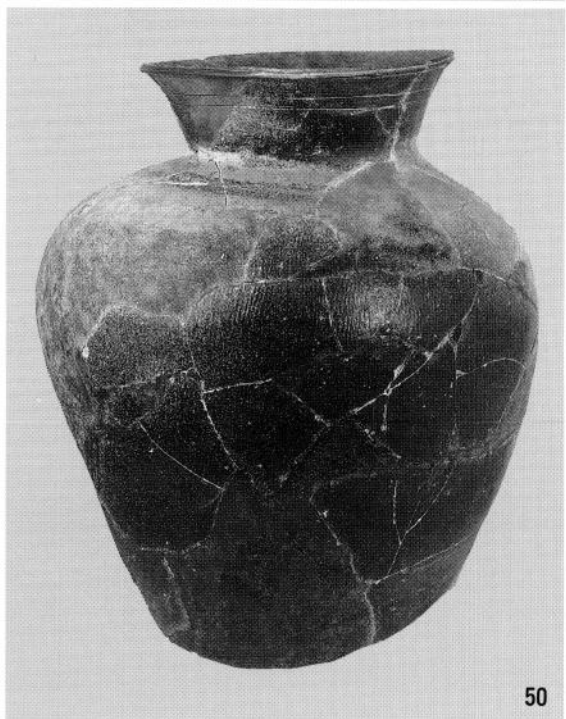
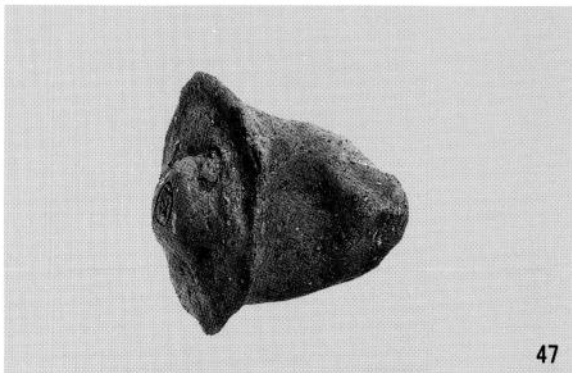
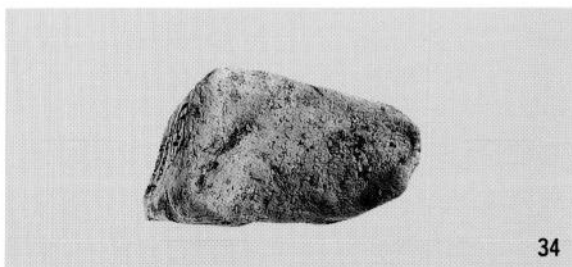
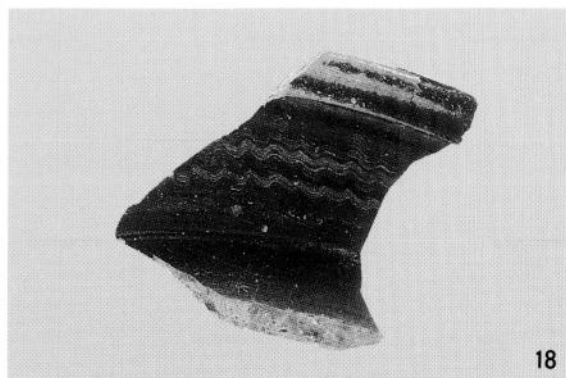
1) 調査区南半部2号・3号溝状遺構(南から)



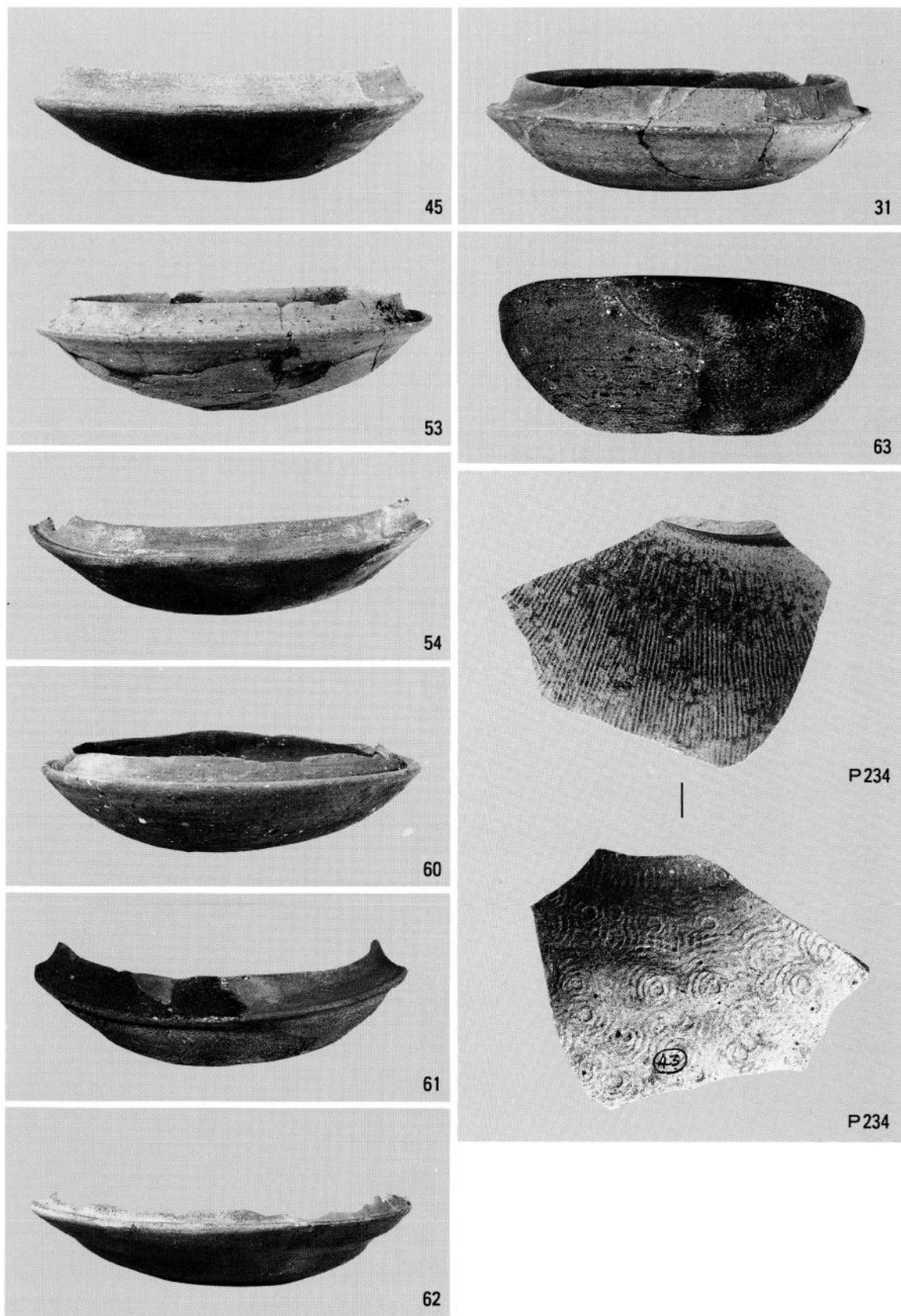
2) 調査区南半部2号溝状遺構検出大甕(南西から)



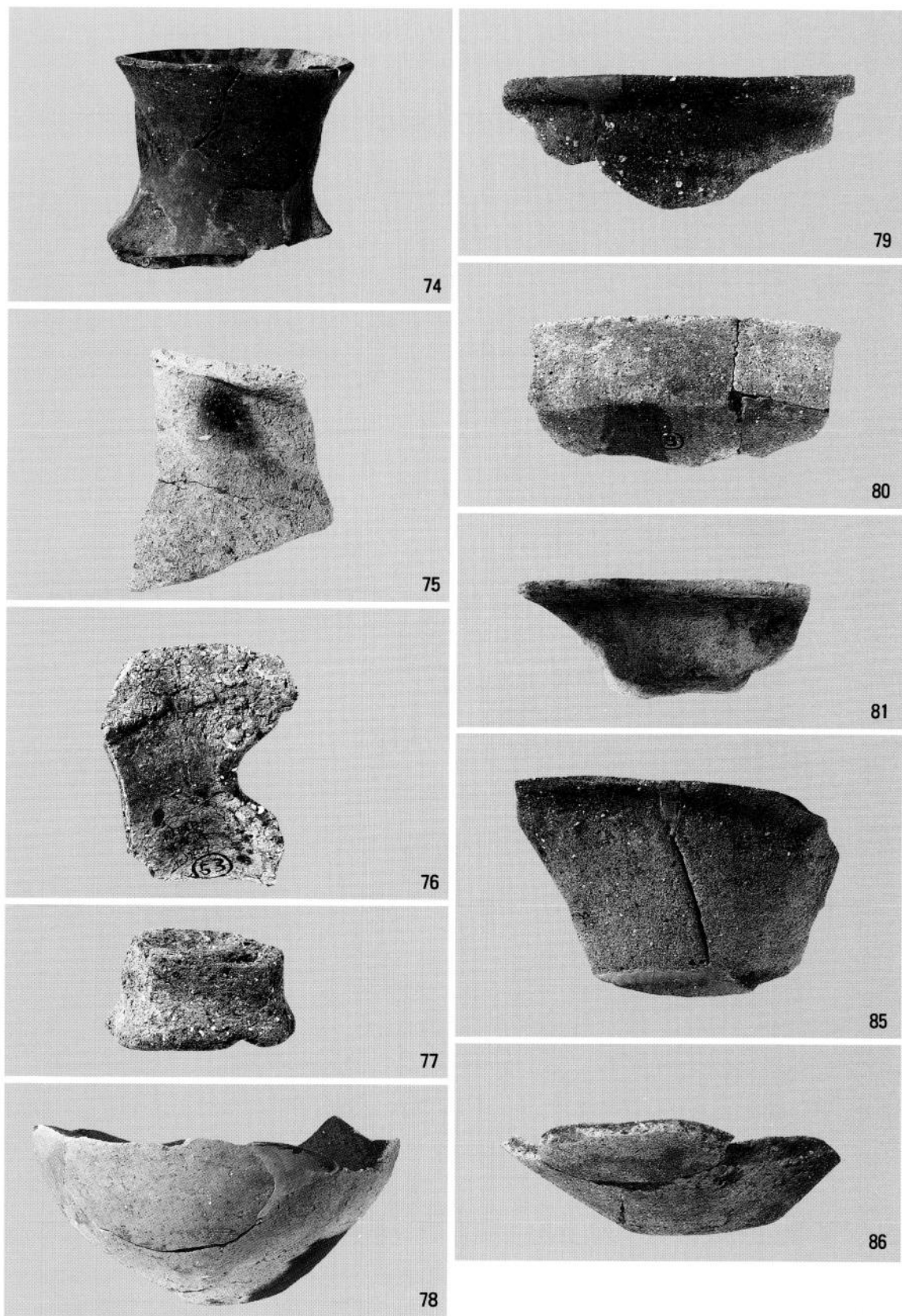
皆見遺跡出土土器 1 (番号は土器通し番号)



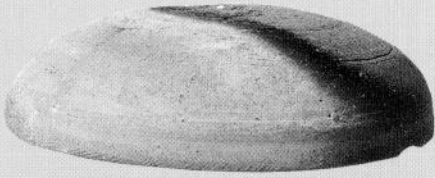
皆見遺跡出土土器 2 (番号は土器通し番号)



皆見遺跡出土土器3 (番号は土器通し番号)



皆見遺跡出土土器4 (番号は土器通し番号)



94



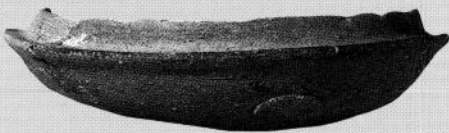
95



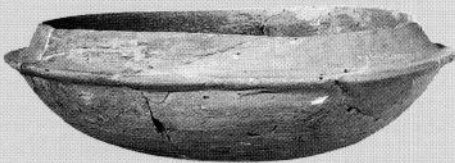
96



97



98



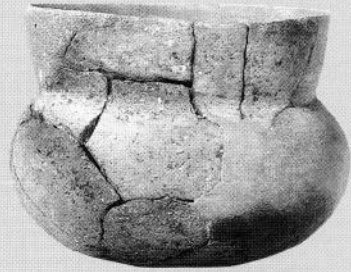
99



100



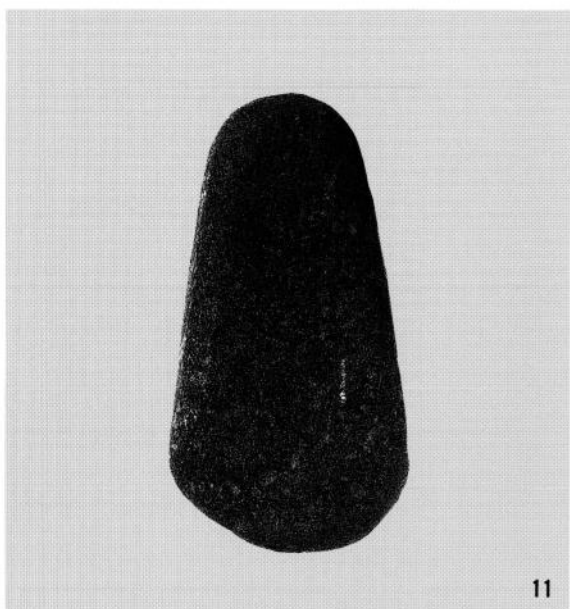
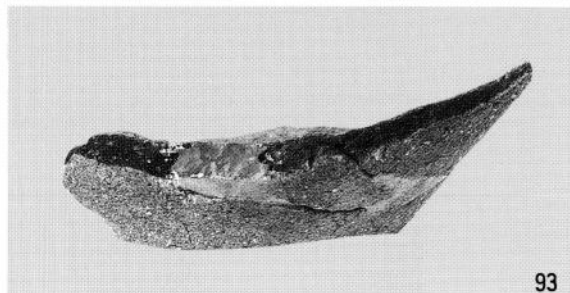
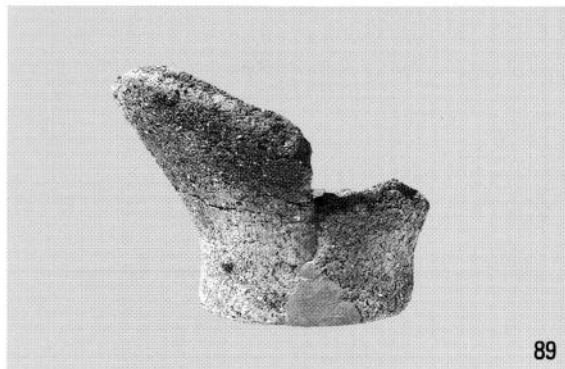
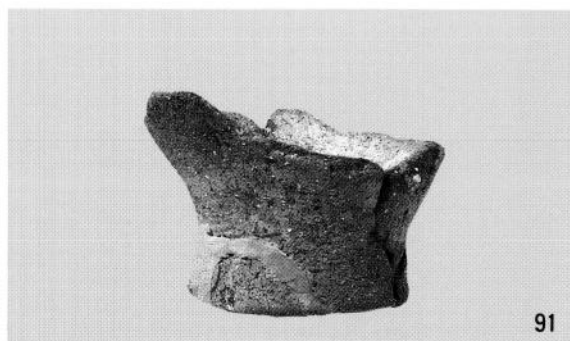
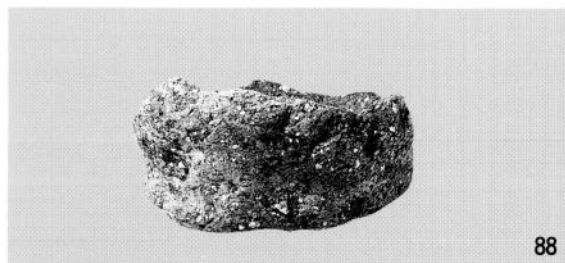
101



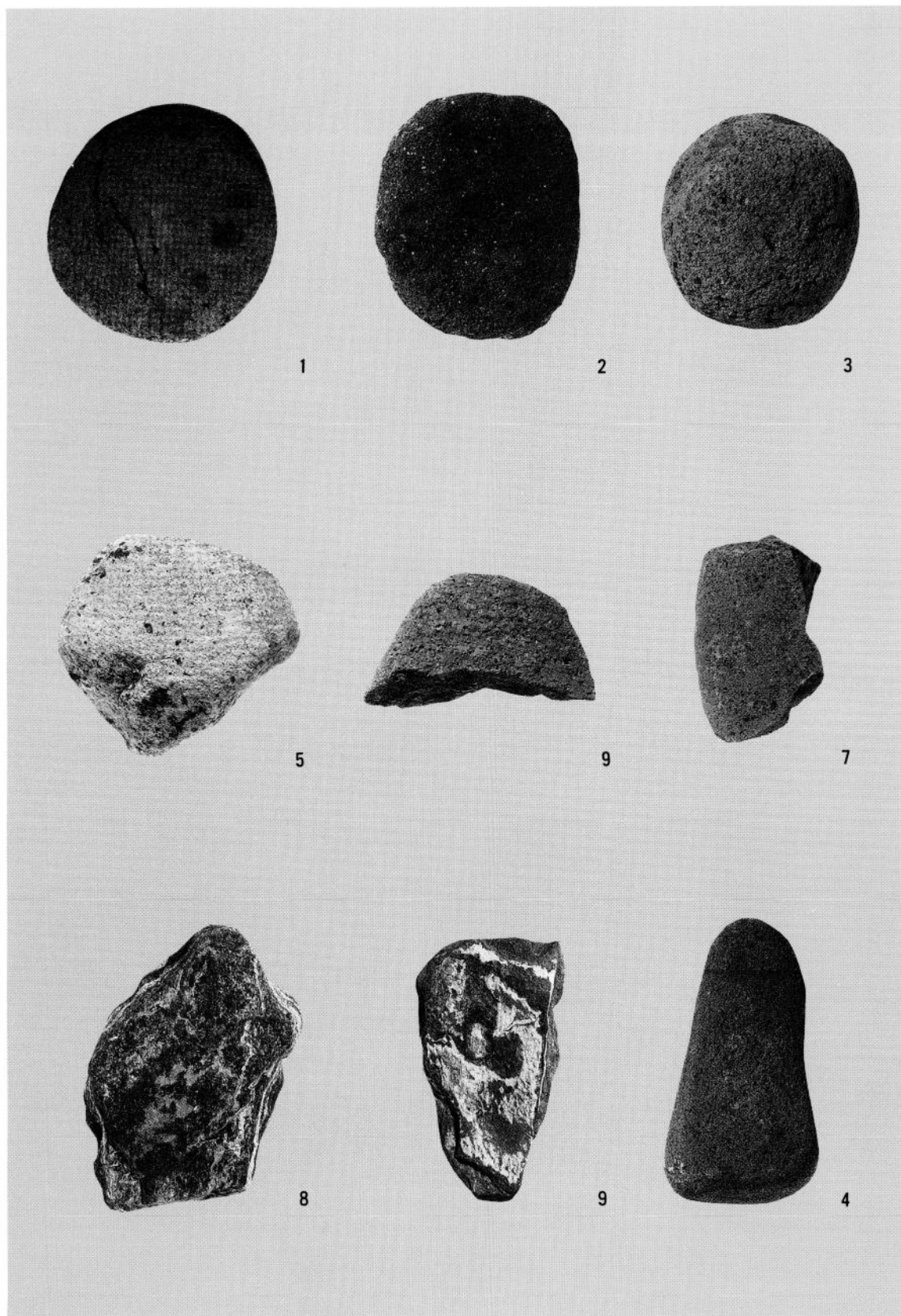
102



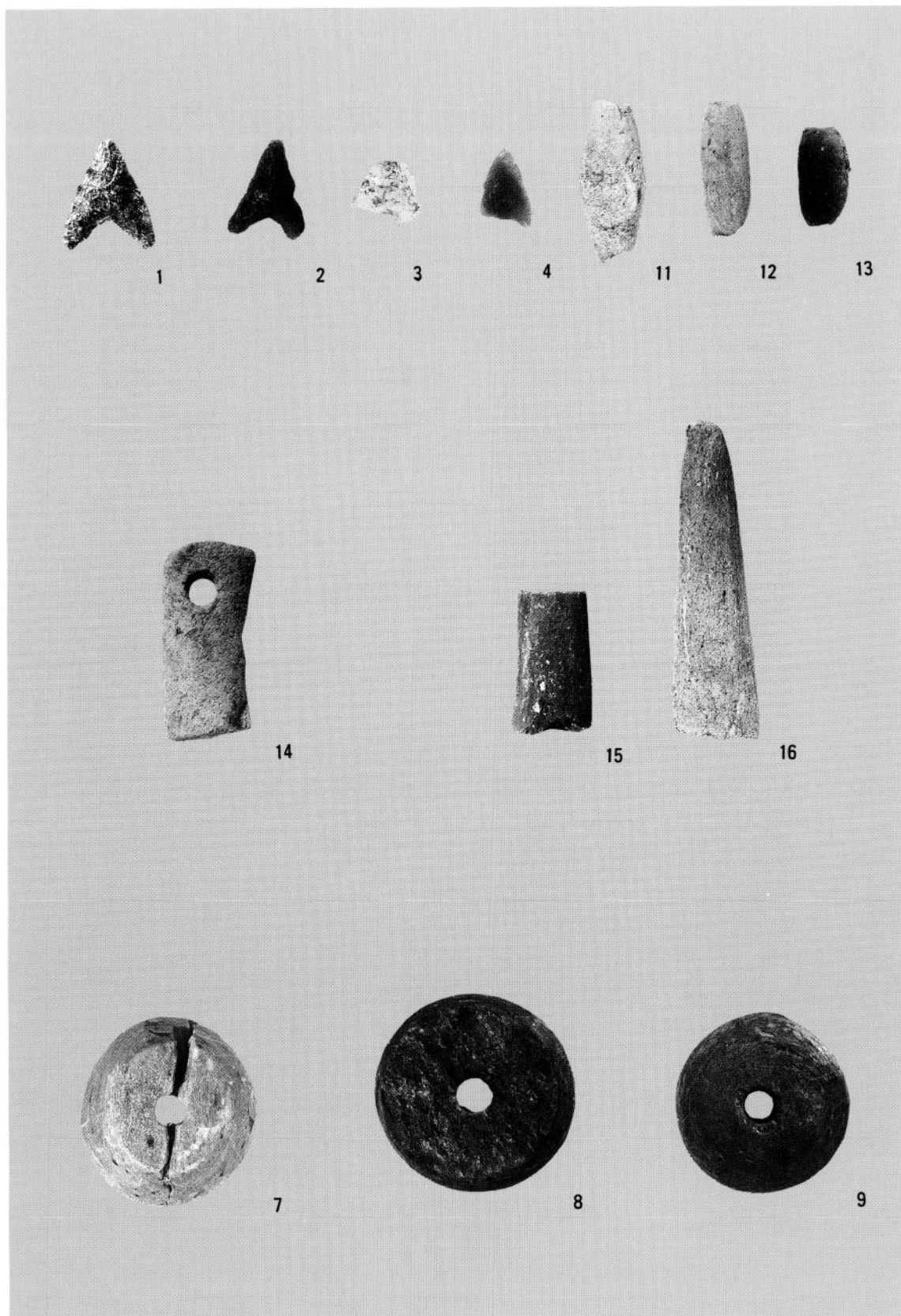
103



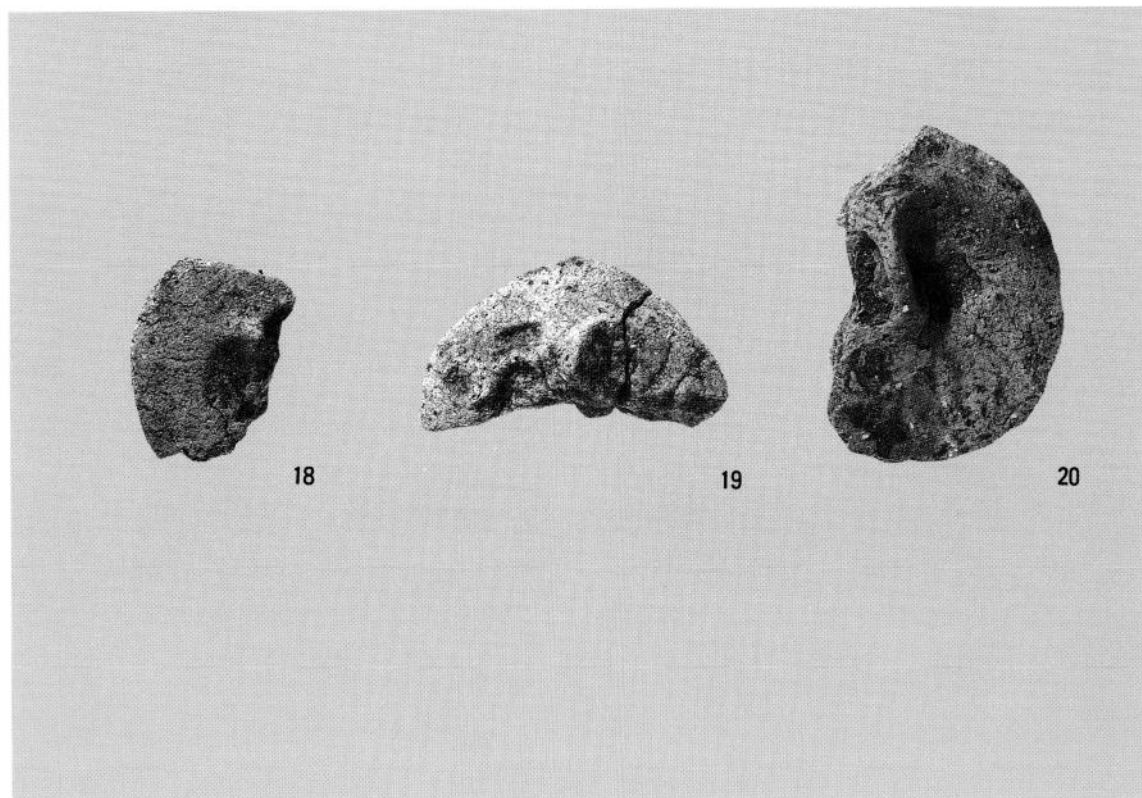
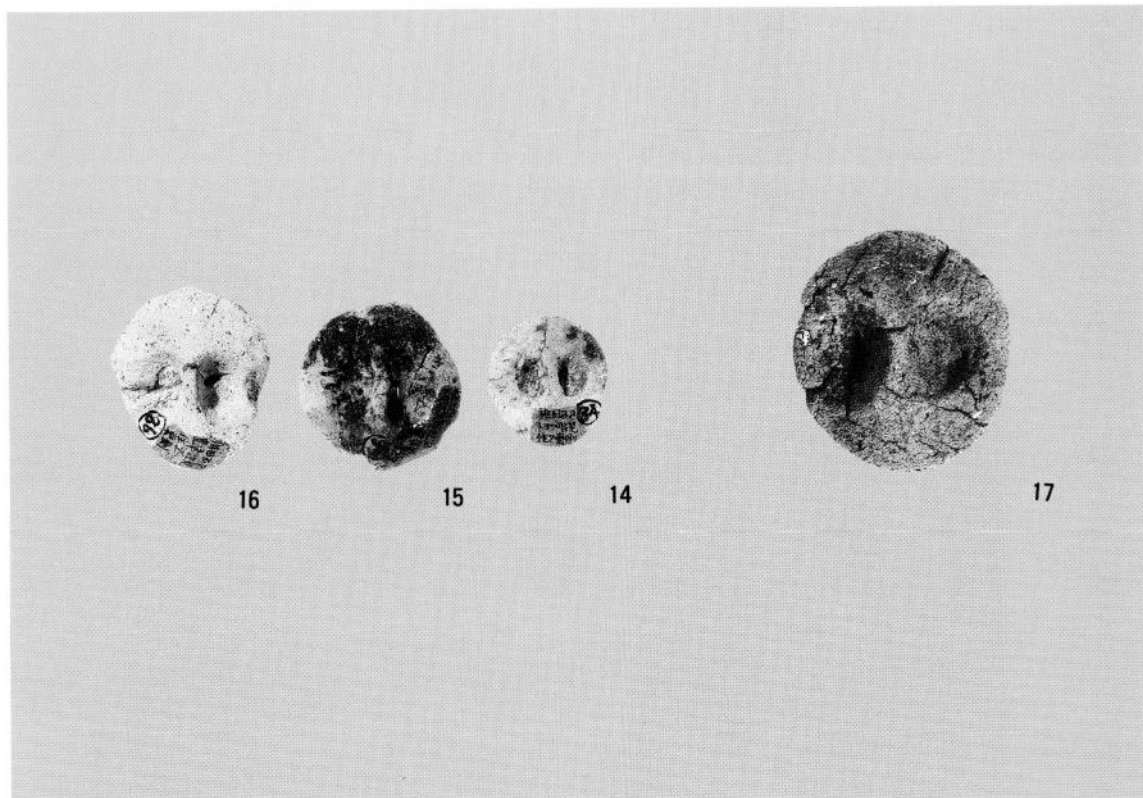
皆見遺跡出土土器 6、石製品 1 (土器は土器通し番号、石器は第45図中の番号と対応する)



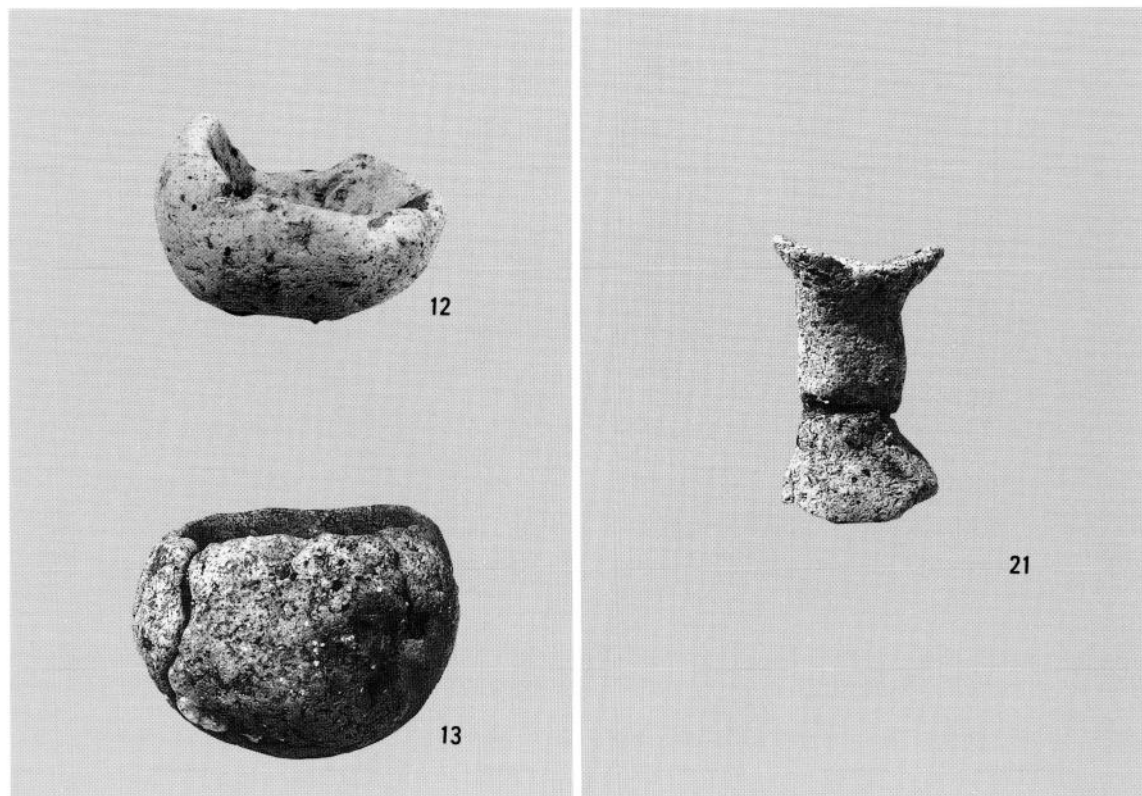
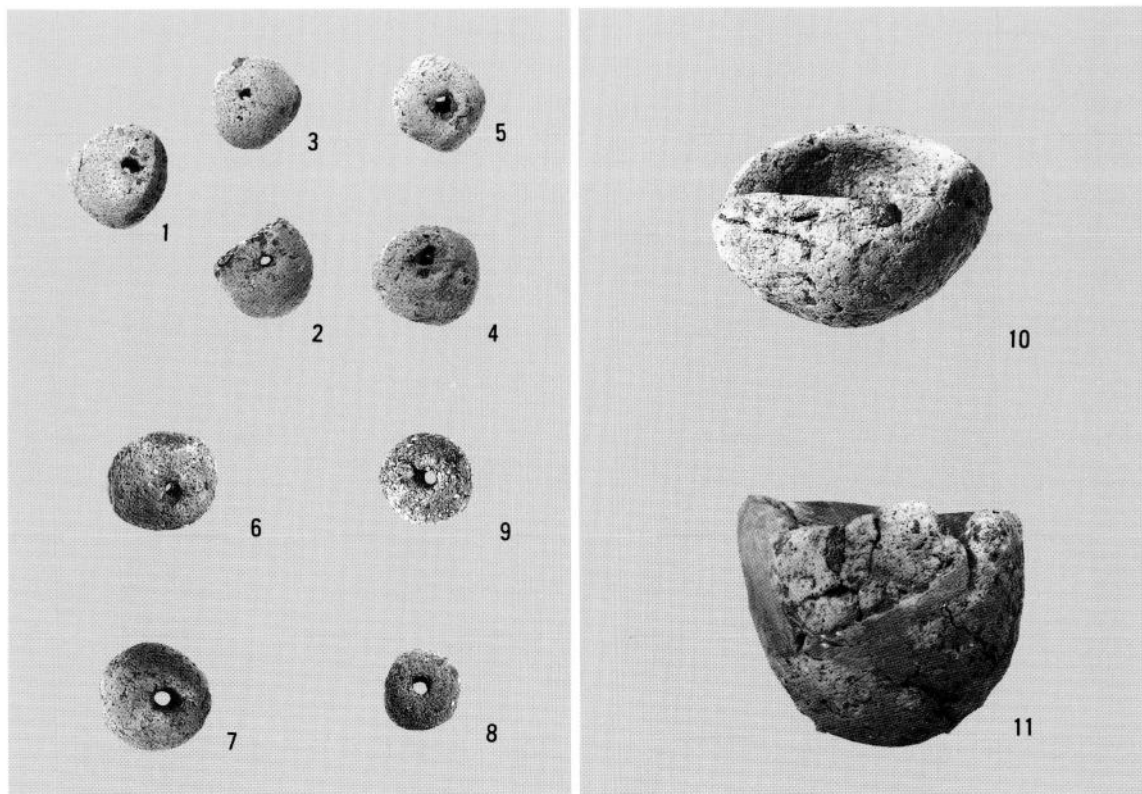
皆見遺跡出土石製品 2 (番号は第45図中の番号に対応する)



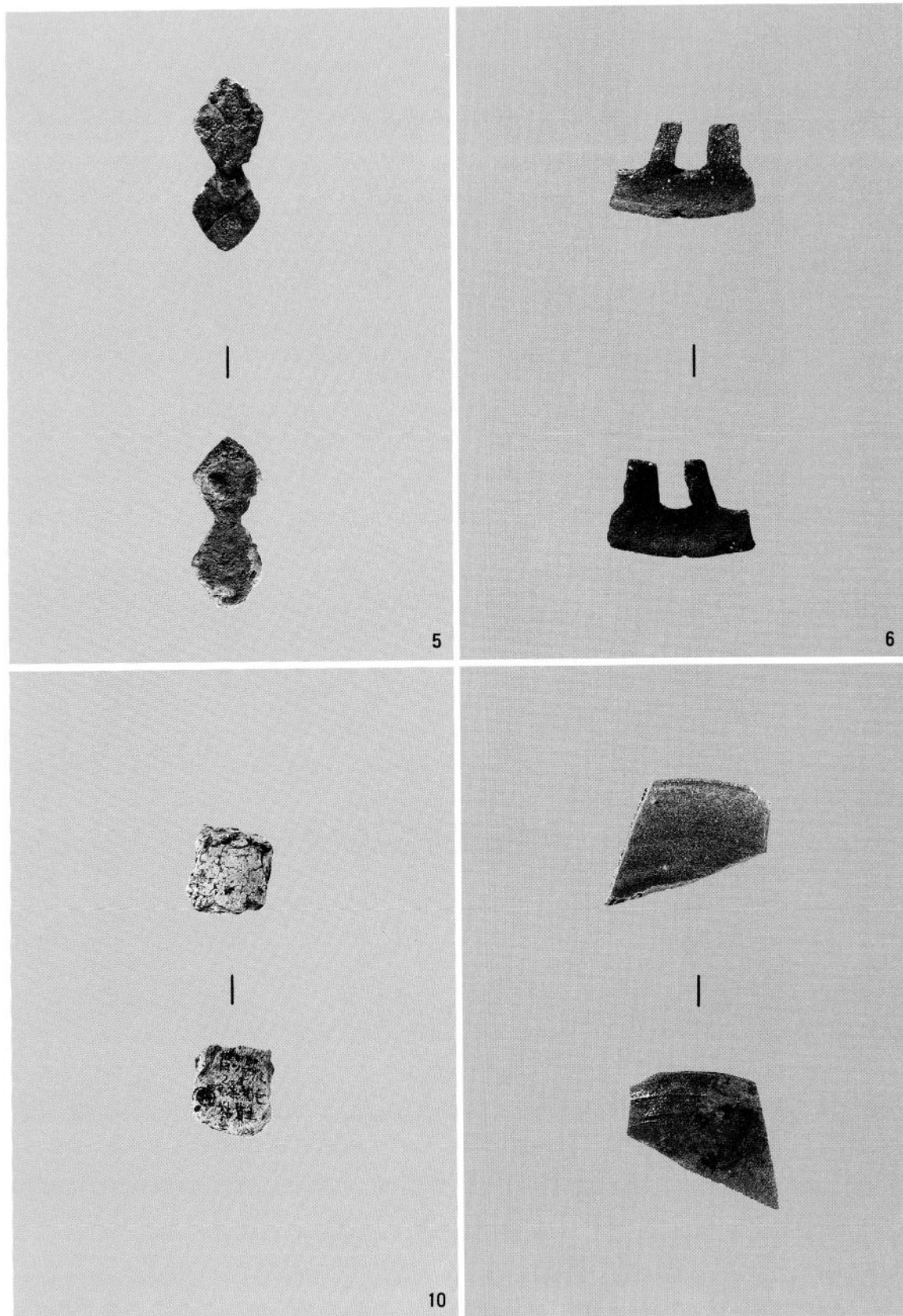
皆見遺跡出土石器3、土製品1（番号は第42図中の番号に対応する）



皆見遺跡出土土製品 2 (番号は第44図中の番号に対応する)



皆見遺跡出土土製品 3 (番号は第44図中の番号に対応する)



皆見遺跡出土青銅製品、硯、製塩土器、陶器（番号は第42図中の番号に対応する）



1) 椎田バイパス建設に伴い破壊される皆見遺跡、神手遺跡（北東から）



2) 皆見遺跡の発掘調査に参加したみなさん



1) カワラケケ田遺跡全景(南から)



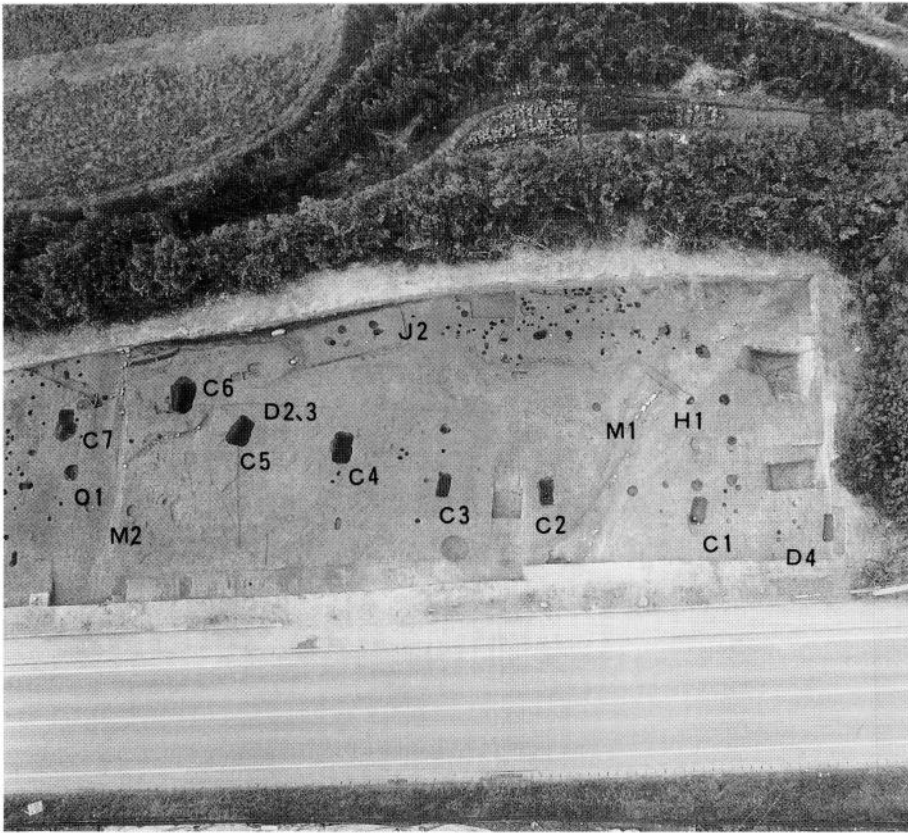
2) カワラケケ田遺跡全景(真上から)



1) カワラケケ田遺跡全景と皆見遺跡（南から）



2) カワラケケ田遺跡近景と皆見遺跡（南から）

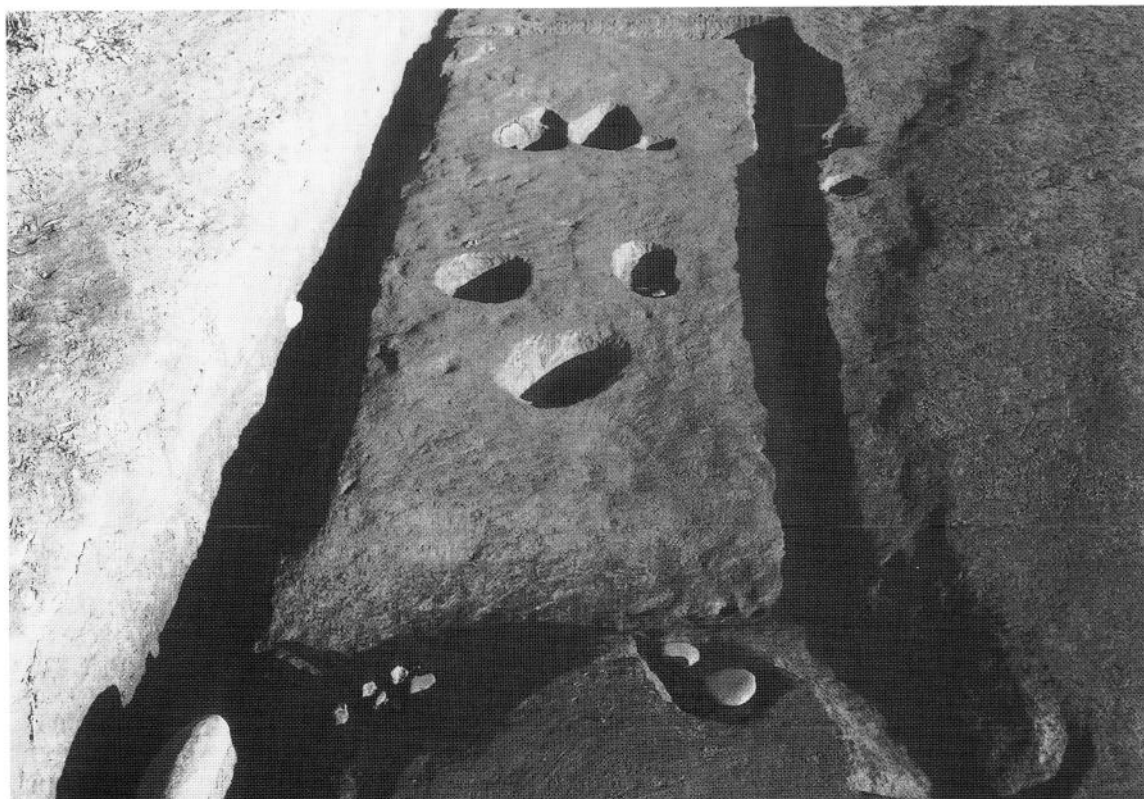


1) カワラケケ田遺跡調査区北半部(真上から)

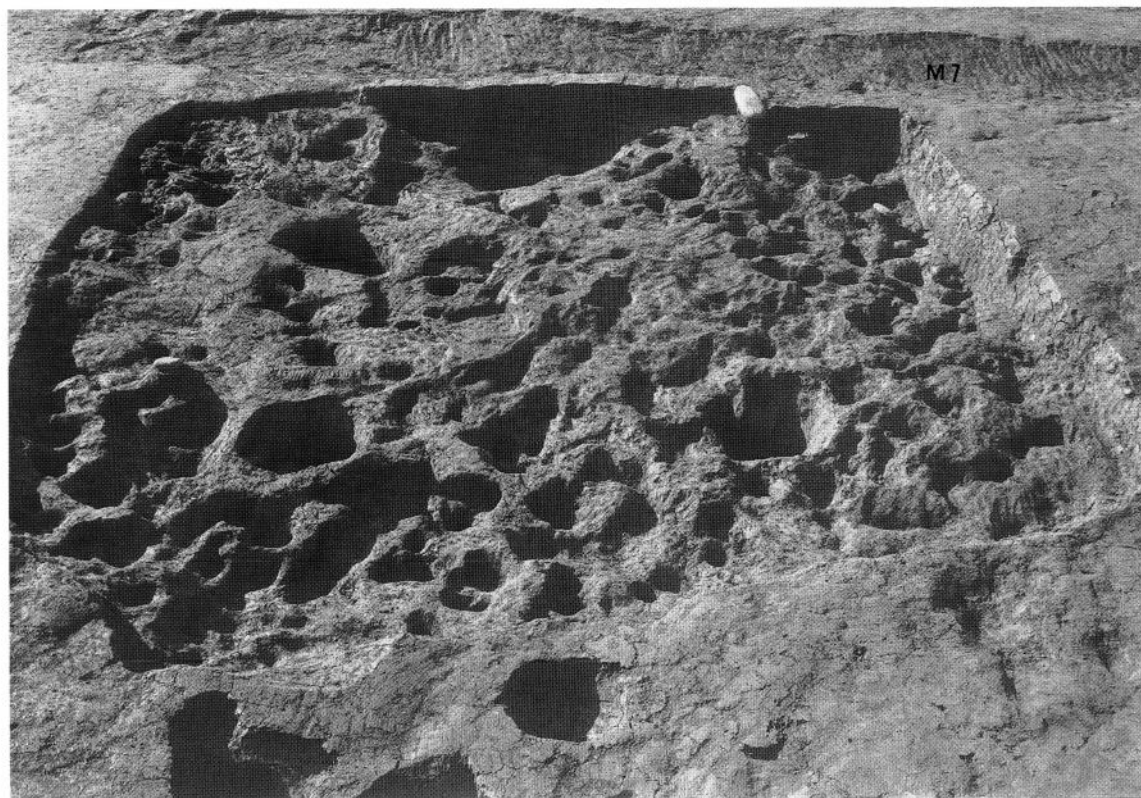
M2 || 2号溝状遺構
 C1 || 1号貯蔵穴
 J2 || 2号竪穴住居跡
 O1 || 1号落とし穴状遺構
 D1 || 1号土壇墓
 H1 || 1号掘立柱建物



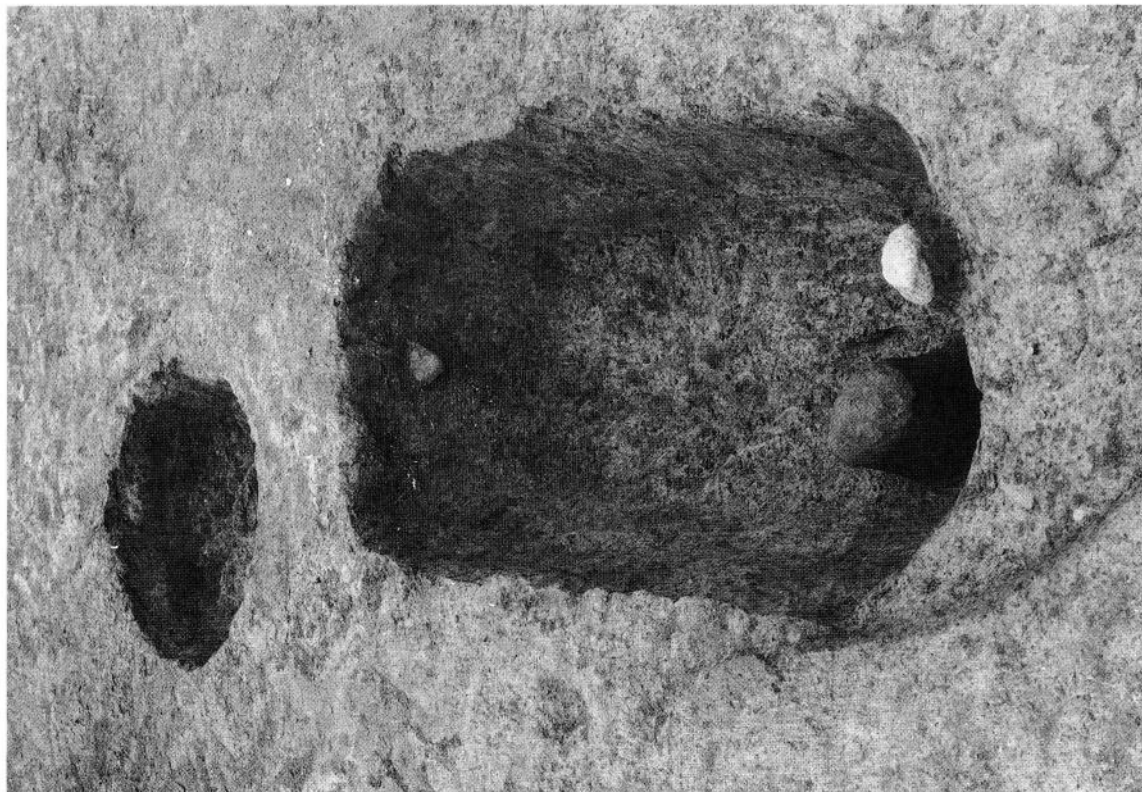
2) カワラケケ田遺跡調査区南半部(真上から)



1) 2号竖穴住居跡(南から)



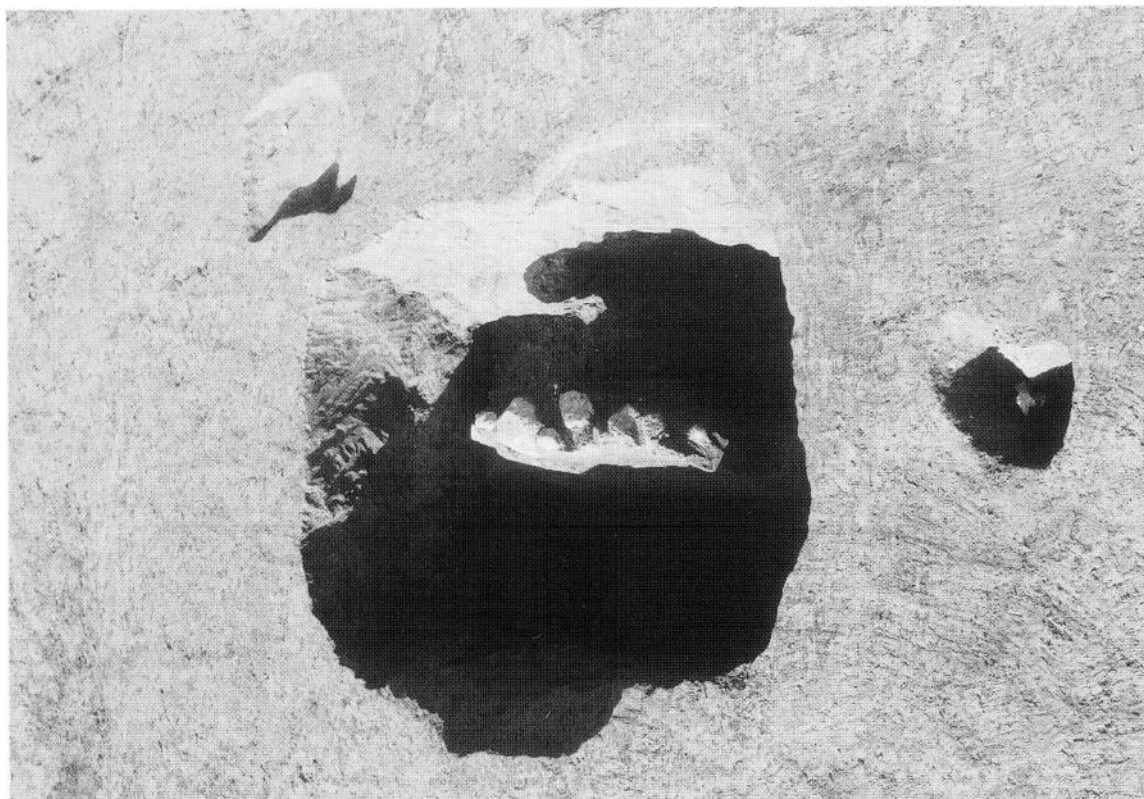
2) 3号竖穴住居跡下層(東から)



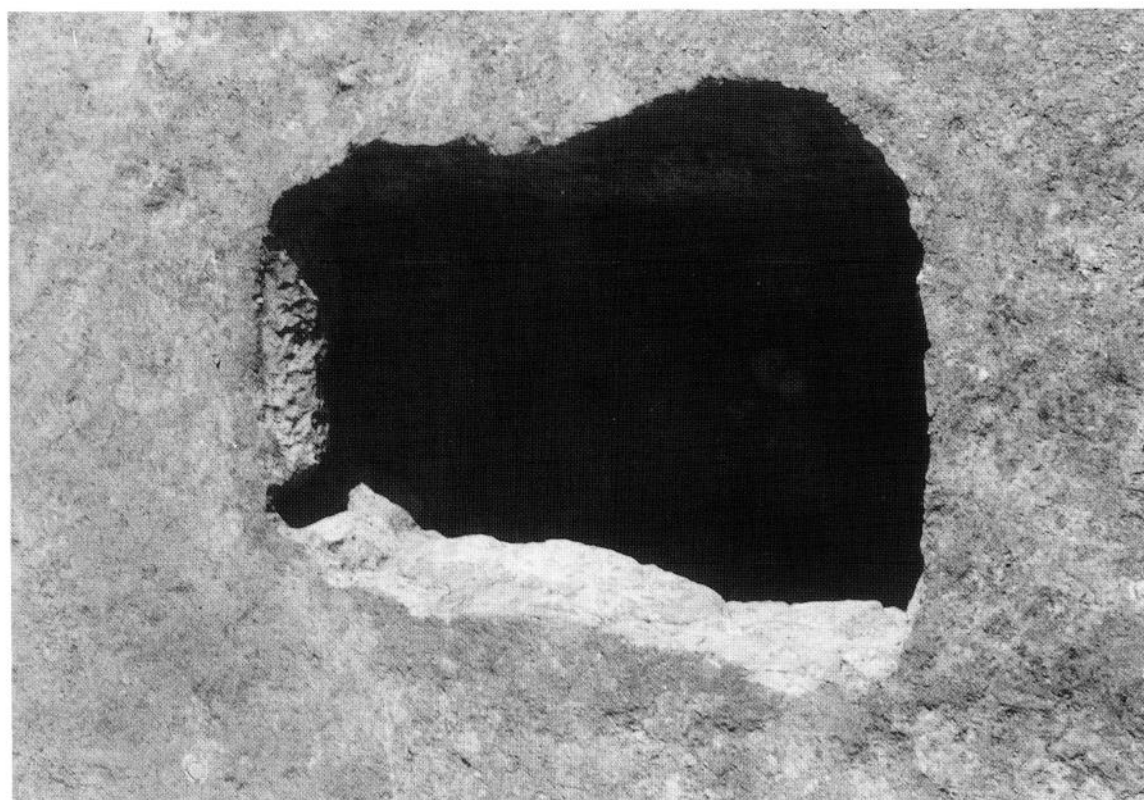
2) 1号貯蔵穴 (東から)



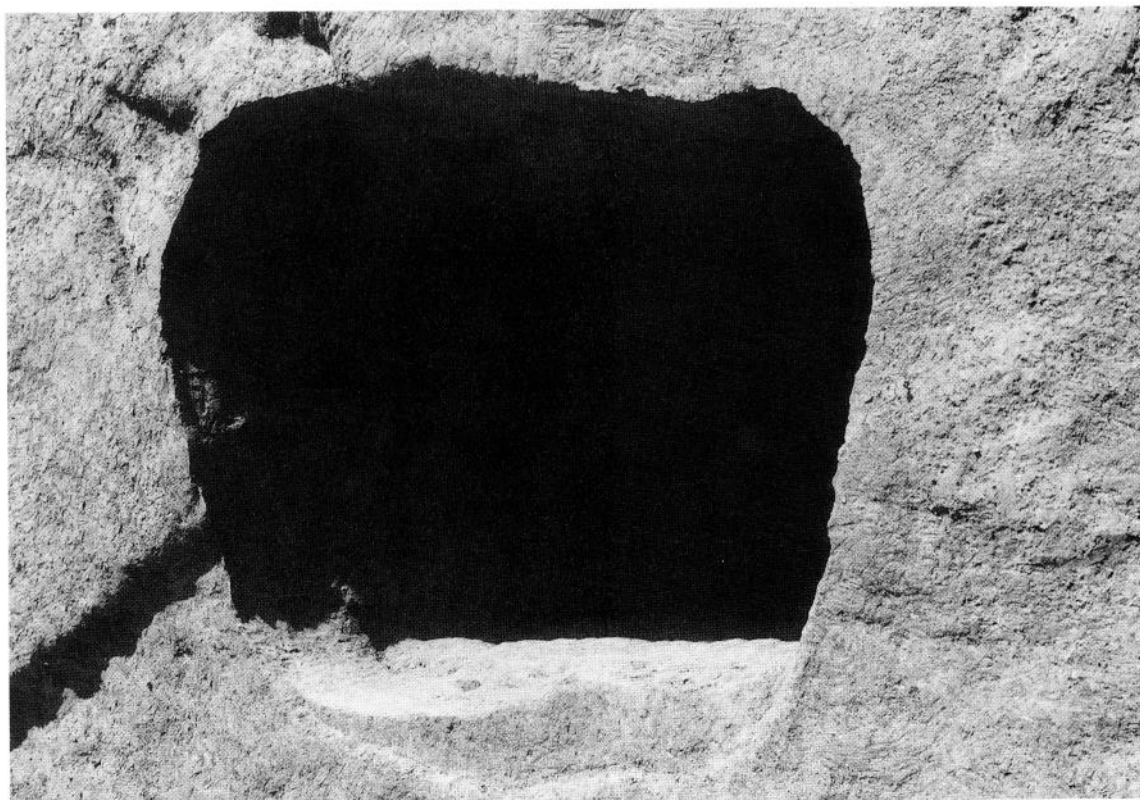
1) カワラケケ田遺跡貯蔵穴群 (東から)



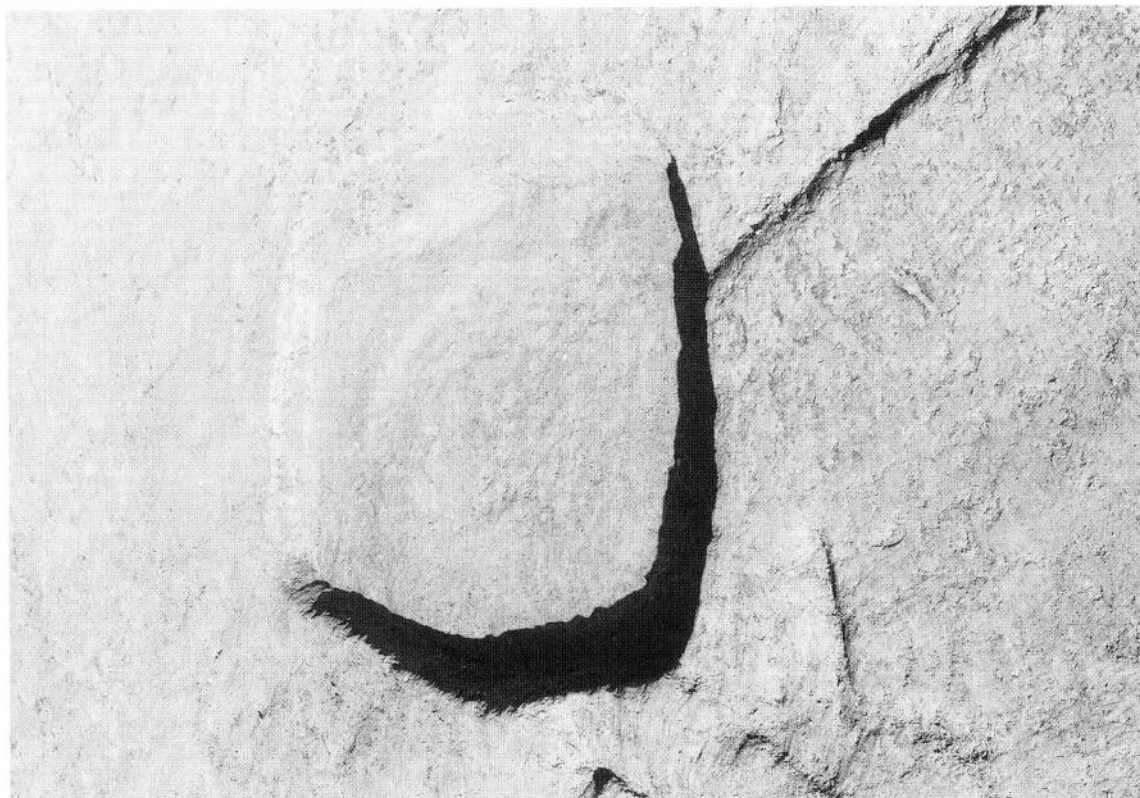
2) 3号貯蔵穴(東から)



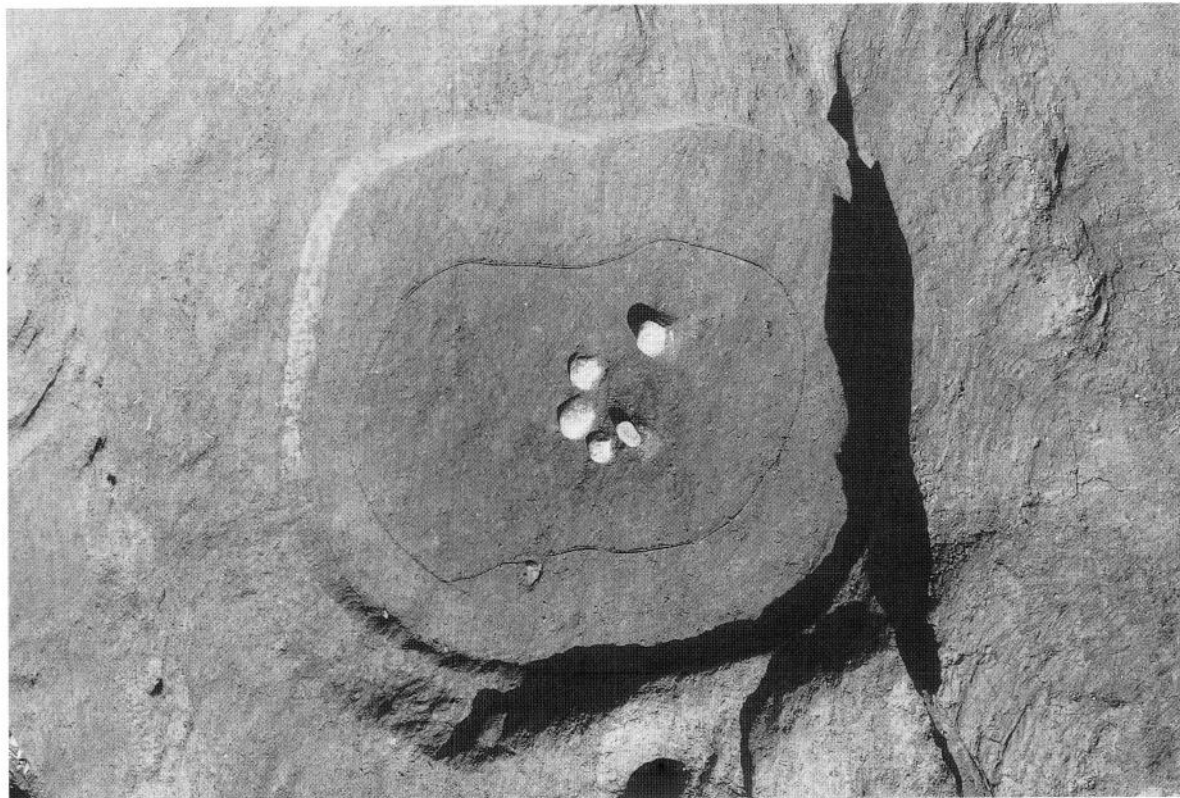
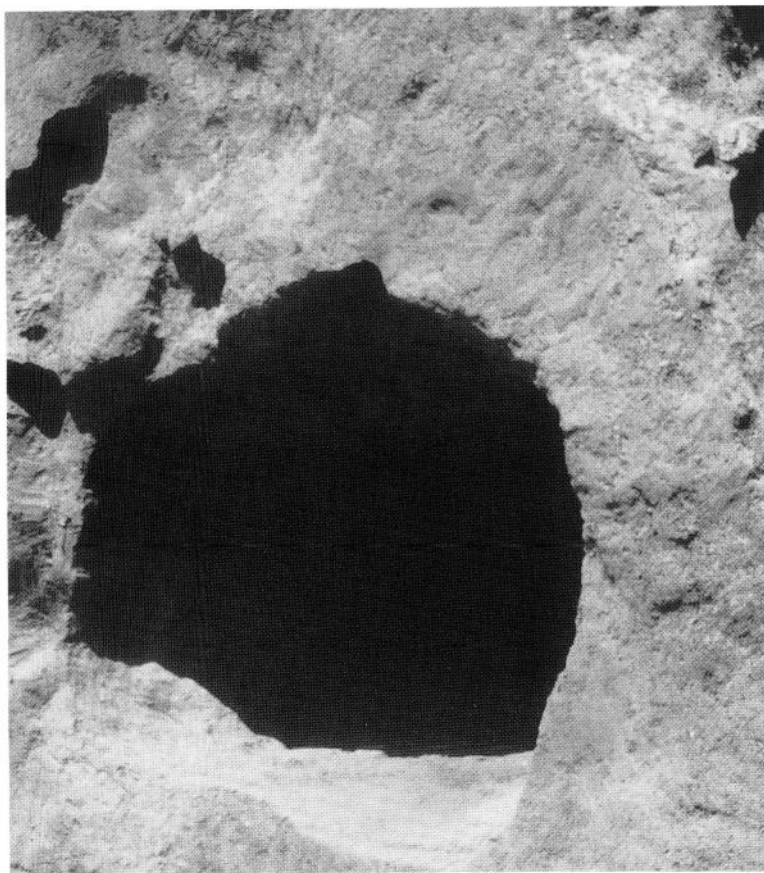
1) 2号貯蔵穴(西から)



2) 4号貯蔵穴（西から）



1) 4号貯蔵穴検出状況（東から）

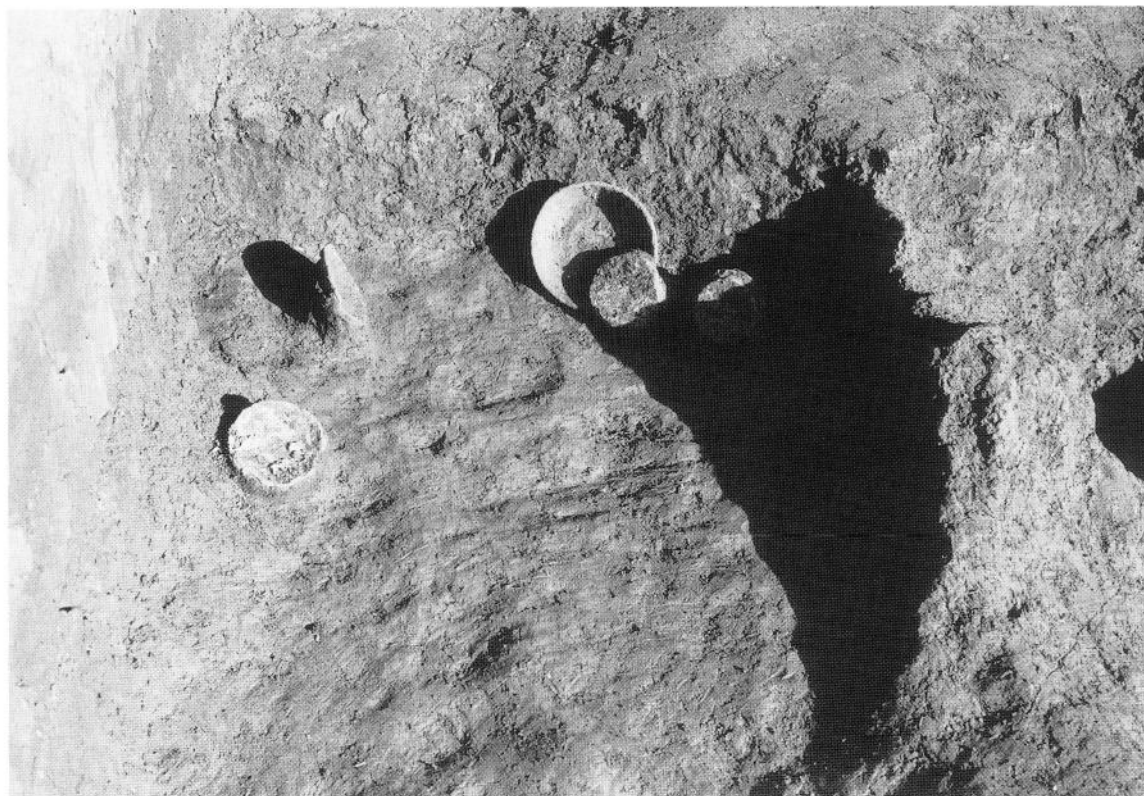




2) 2号・3号土壙墓 (南から)



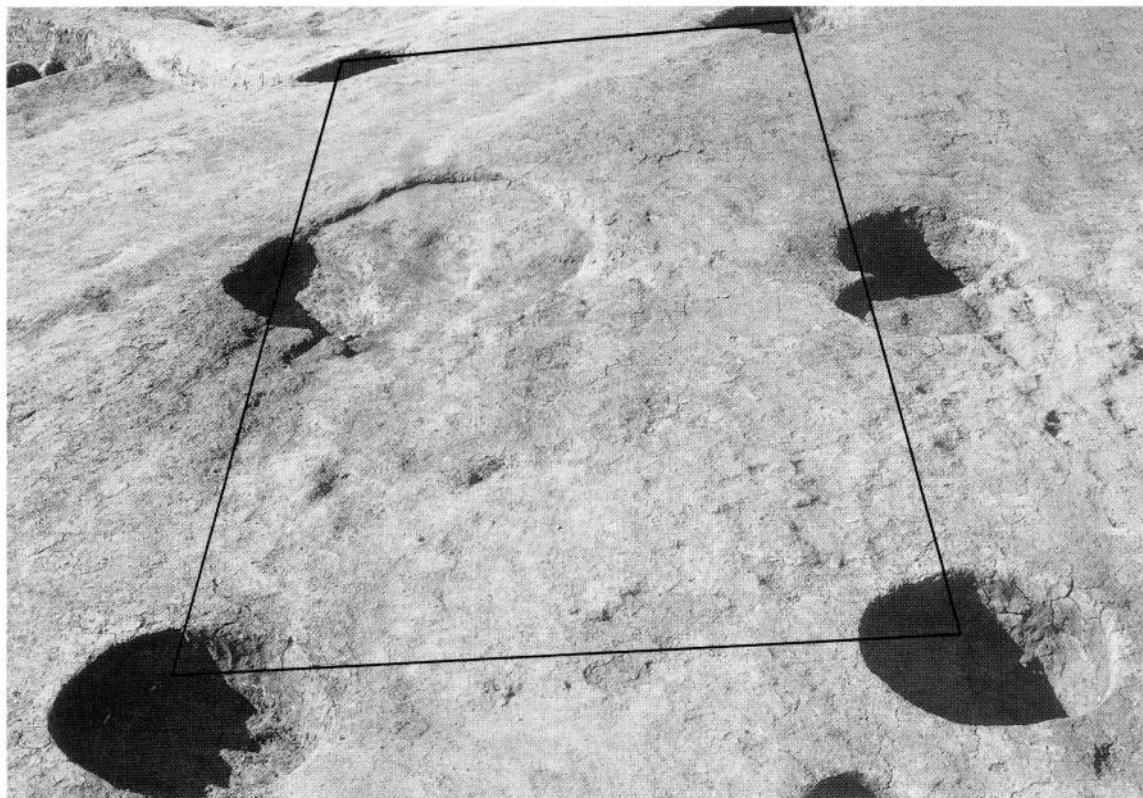
1) 4号土壙墓 (東から)



1) 1号土壙墓遺物出土状況(南から)



2) 1号土壙墓遺物出土状況(東から)



1) 1号掘立柱建物（東から）



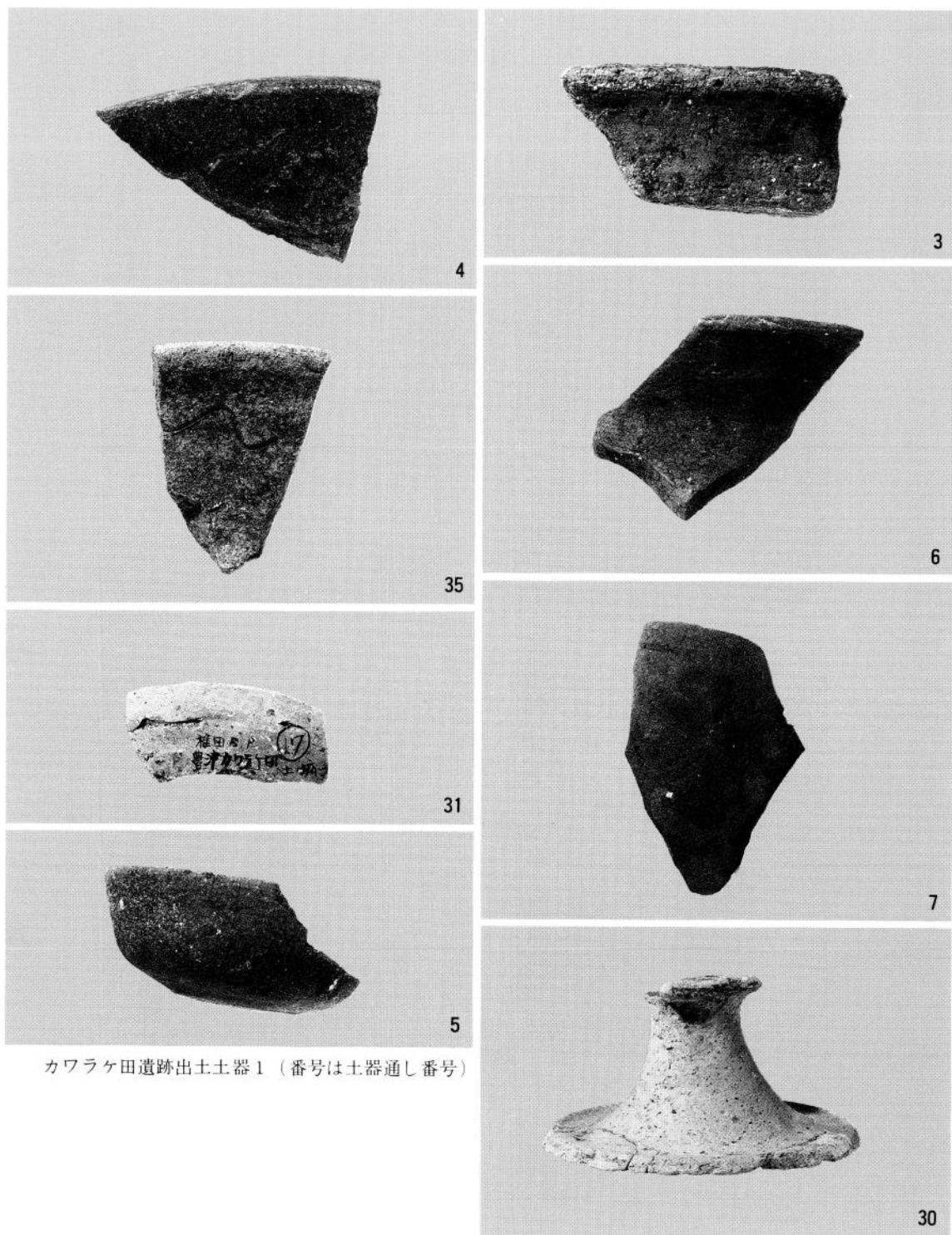
2) 8号溝状遺構とピット44（南から）



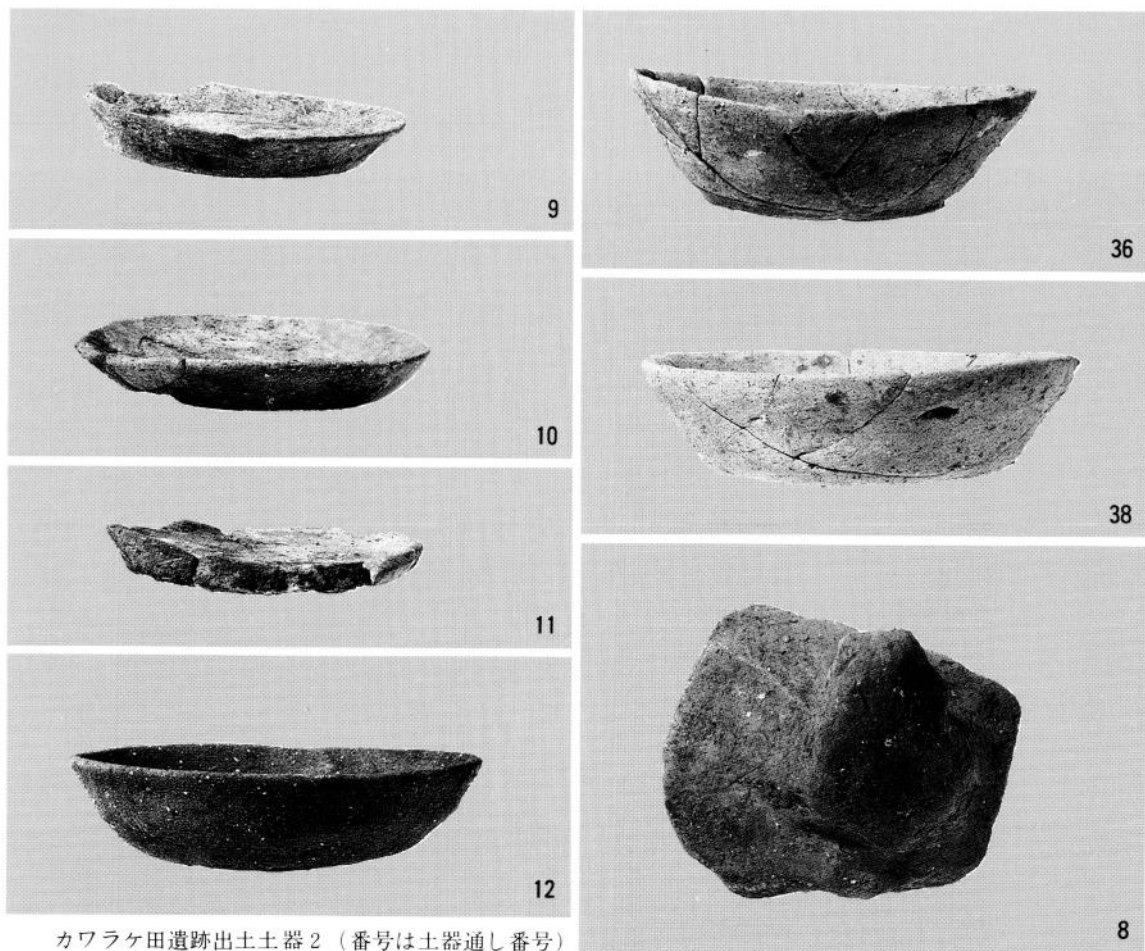
1) 1号溝状遺構全景（南東から）



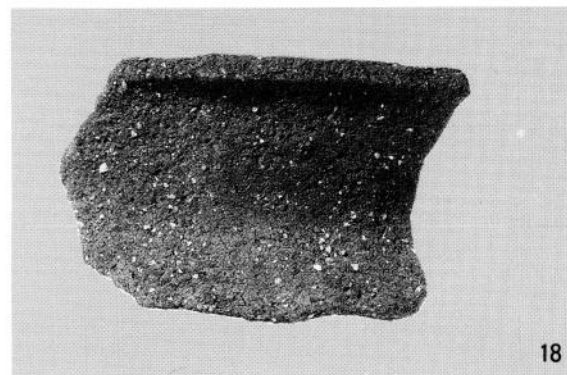
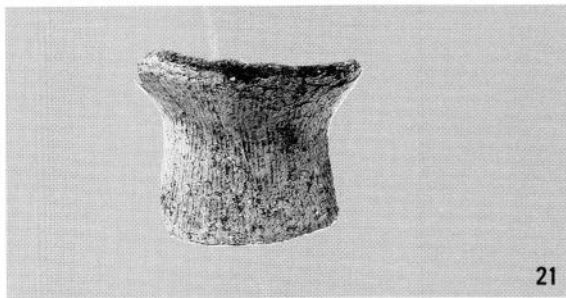
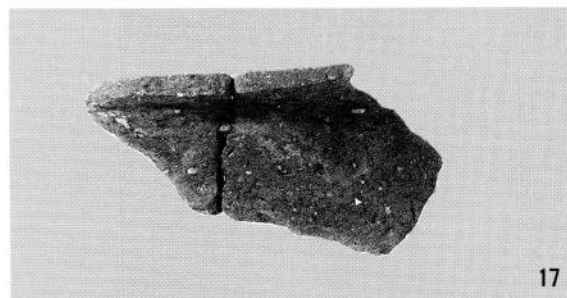
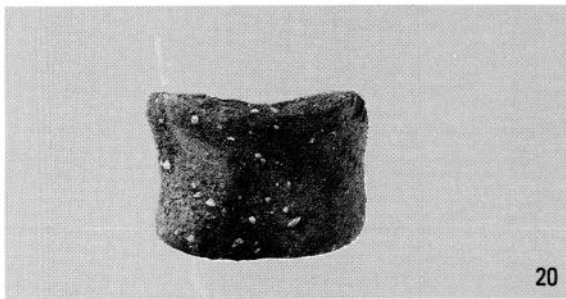
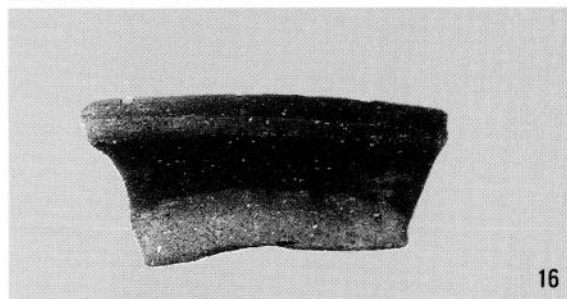
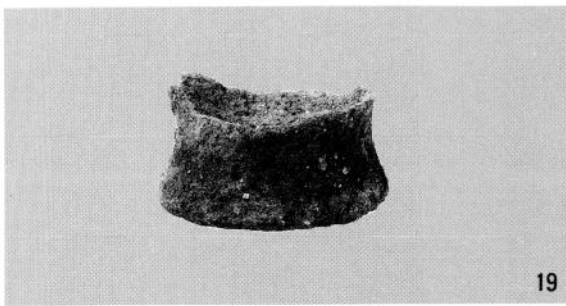
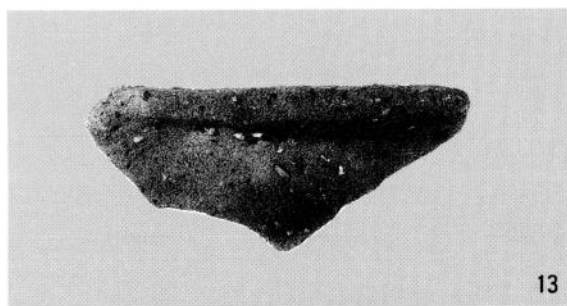
2) 1号溝状遺構近景（南東から）



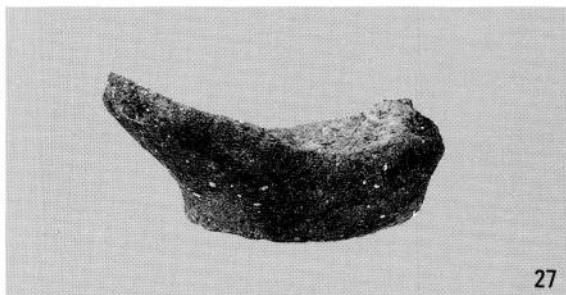
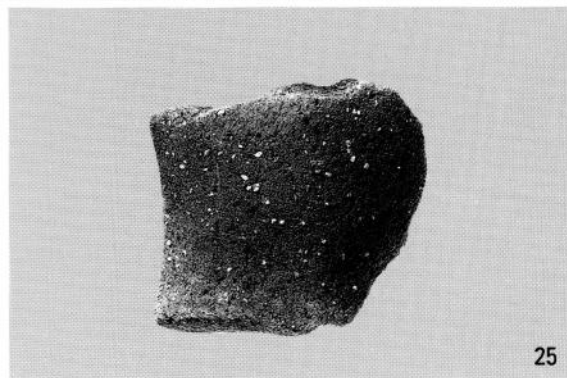
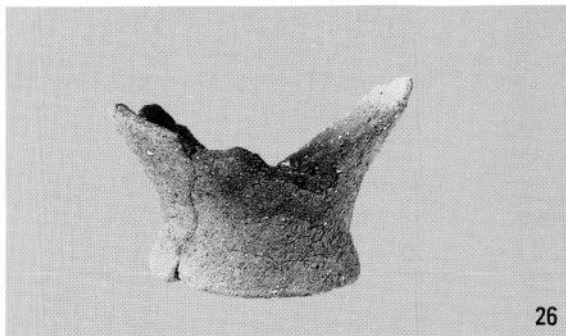
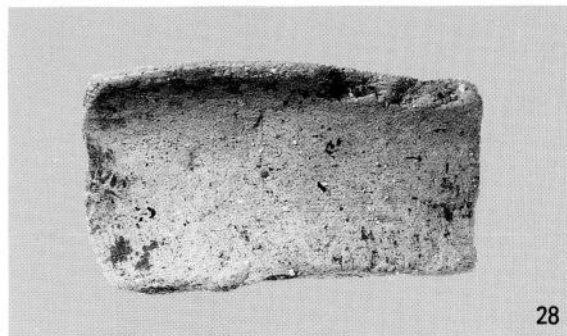
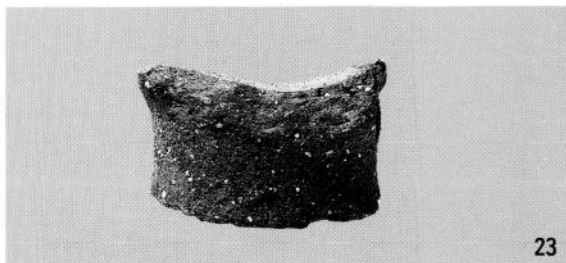
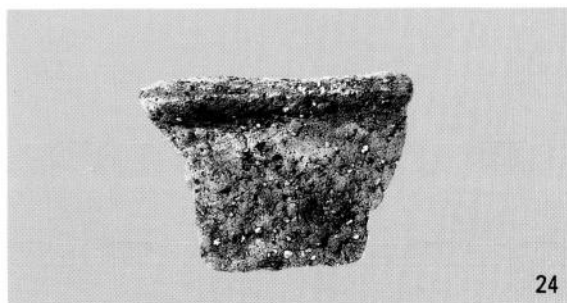
カワラケ田遺跡出土土器 1 (番号は土器通し番号)



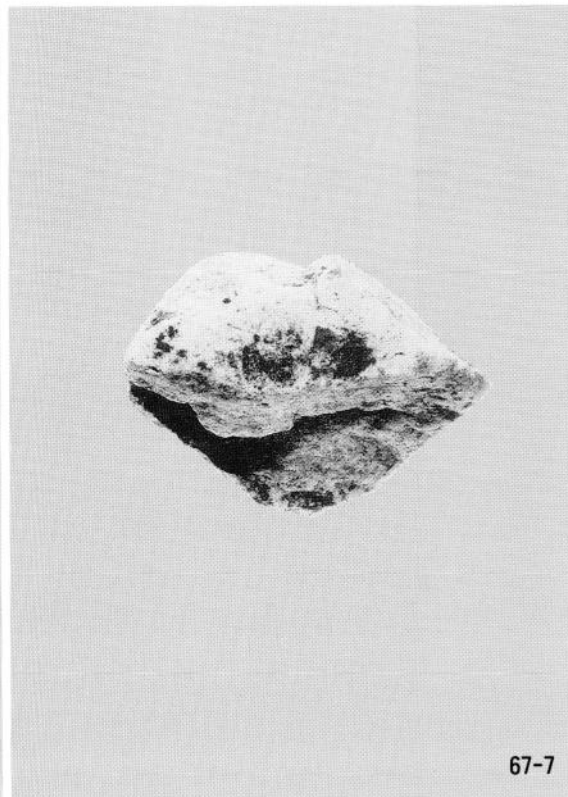
カワラケ田遺跡出土土器 2 (番号は土器通し番号)



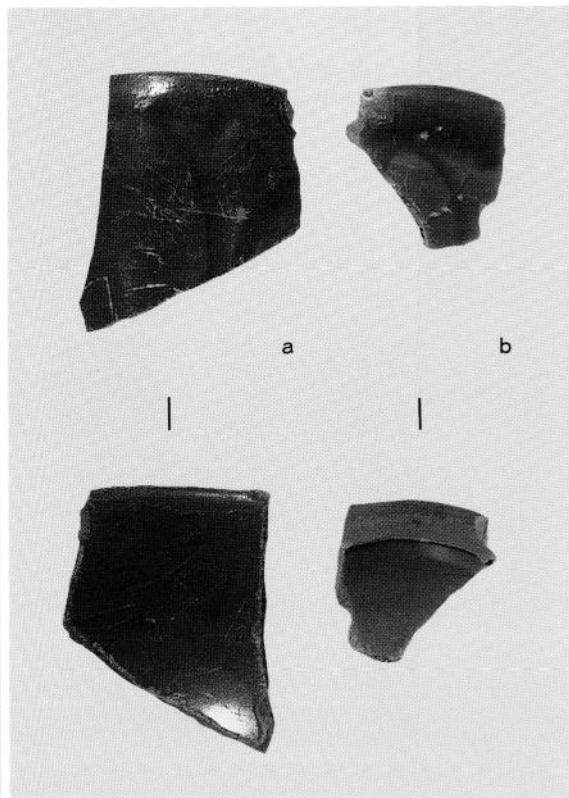
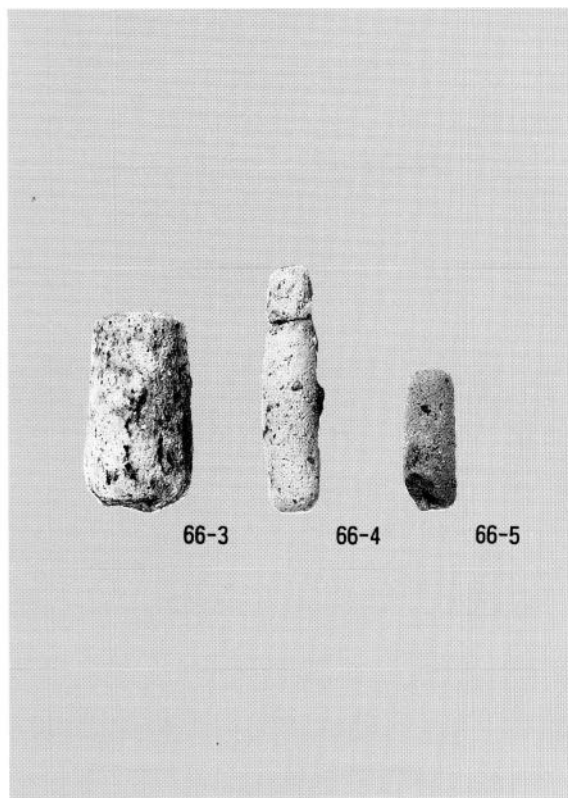
カワラケ田遺跡出土土器 3 (番号は土器通し番号)



カワラケ田遺跡出土土器4（番号は土器通し番号）



カワラケ田遺跡出土石製品（番号は挿図番号と一致する）



カワラケ田遺跡出土磨製石器、土錘、青磁（番号は挿図番号と一致する）



1) 下原遺跡全景（北西から）



2) 下原遺跡全景（南東から）



1) 下原遺跡近景（北西から）



2) 下原遺跡近景（南東から）

椎田バイパス関係
埋蔵文化財調査報告

— 3 —

平成 3 年 3 月 31 日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園 7 番 7 号

印刷 (株) 天地堂印刷製本所
北九州市小倉北区大手町 10 番 18 号

福岡県行政資料

分類番号 JH	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 2	登録番号 1

一般国道
10号線 椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告

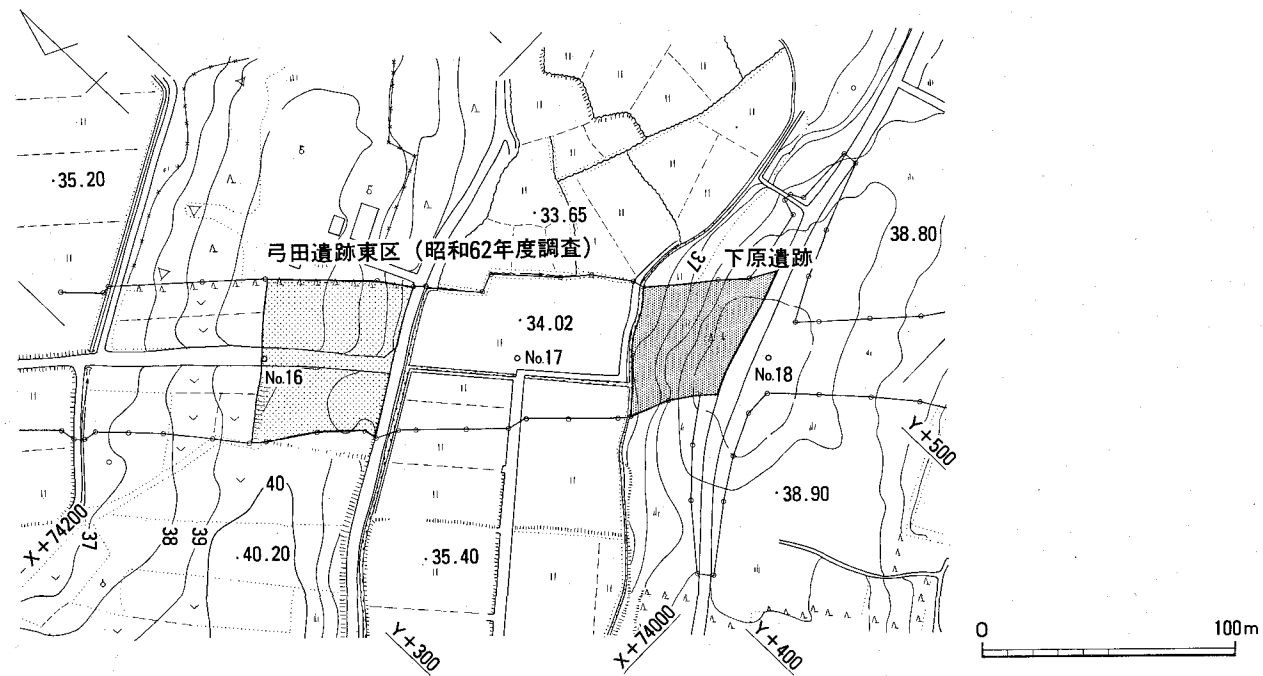
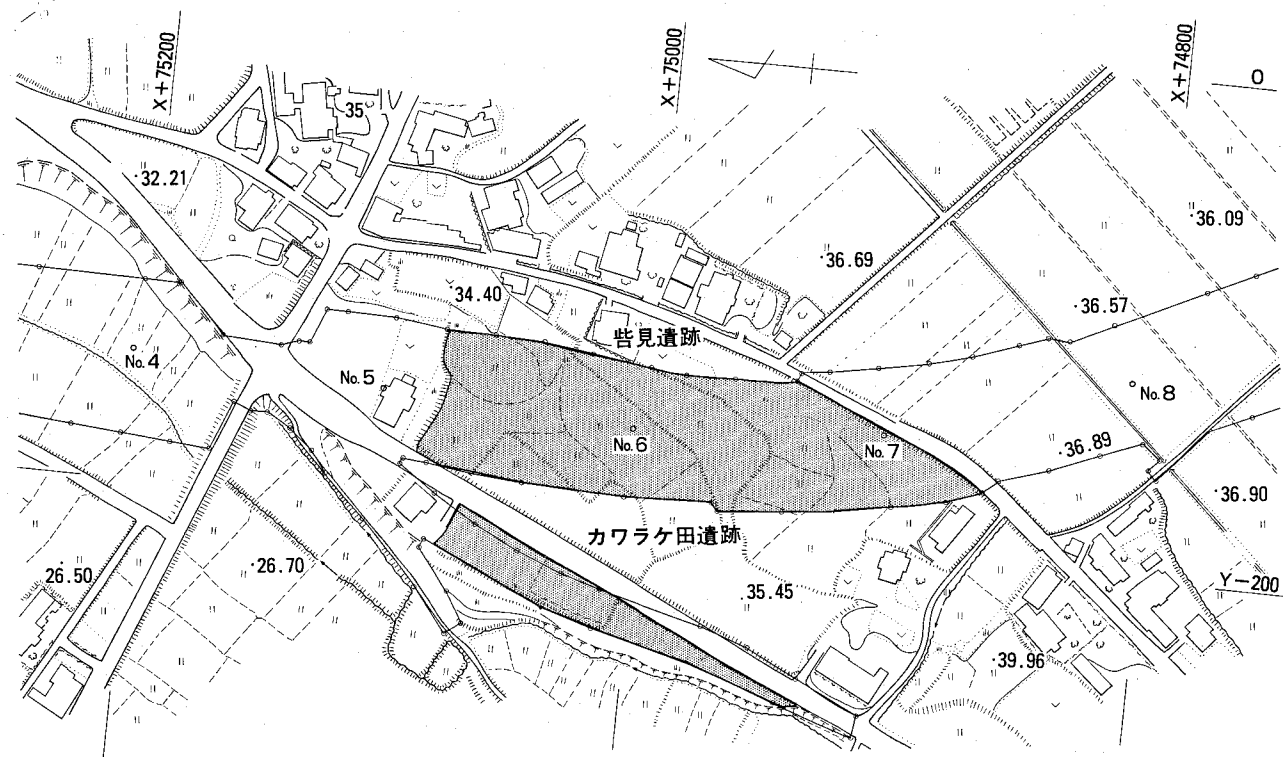
第 3 集

皆 見 遺 跡
カワラケ田遺跡
下 原 遺 跡

福岡県京都郡豊津町所在遺跡の調査

付 図

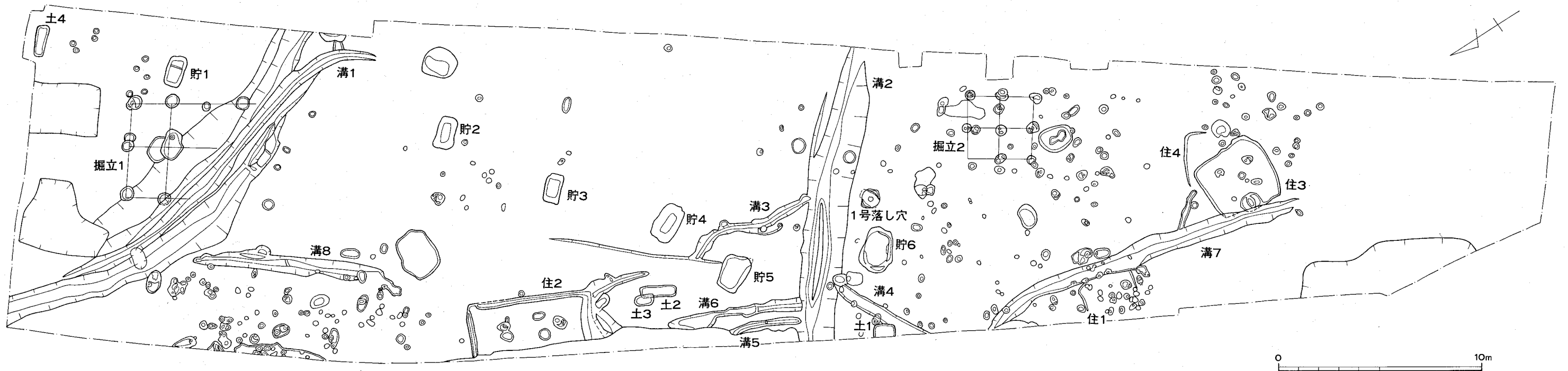
- 付図 1 皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡発掘区地形図 (1/2,000)
- 付図 2 皆見遺跡遺構配置図 (1/250)
- 付図 3 カワラケ田遺跡遺構配置図 (1/200)
- 付図 4 下原遺跡遺構配置図 (1/200)



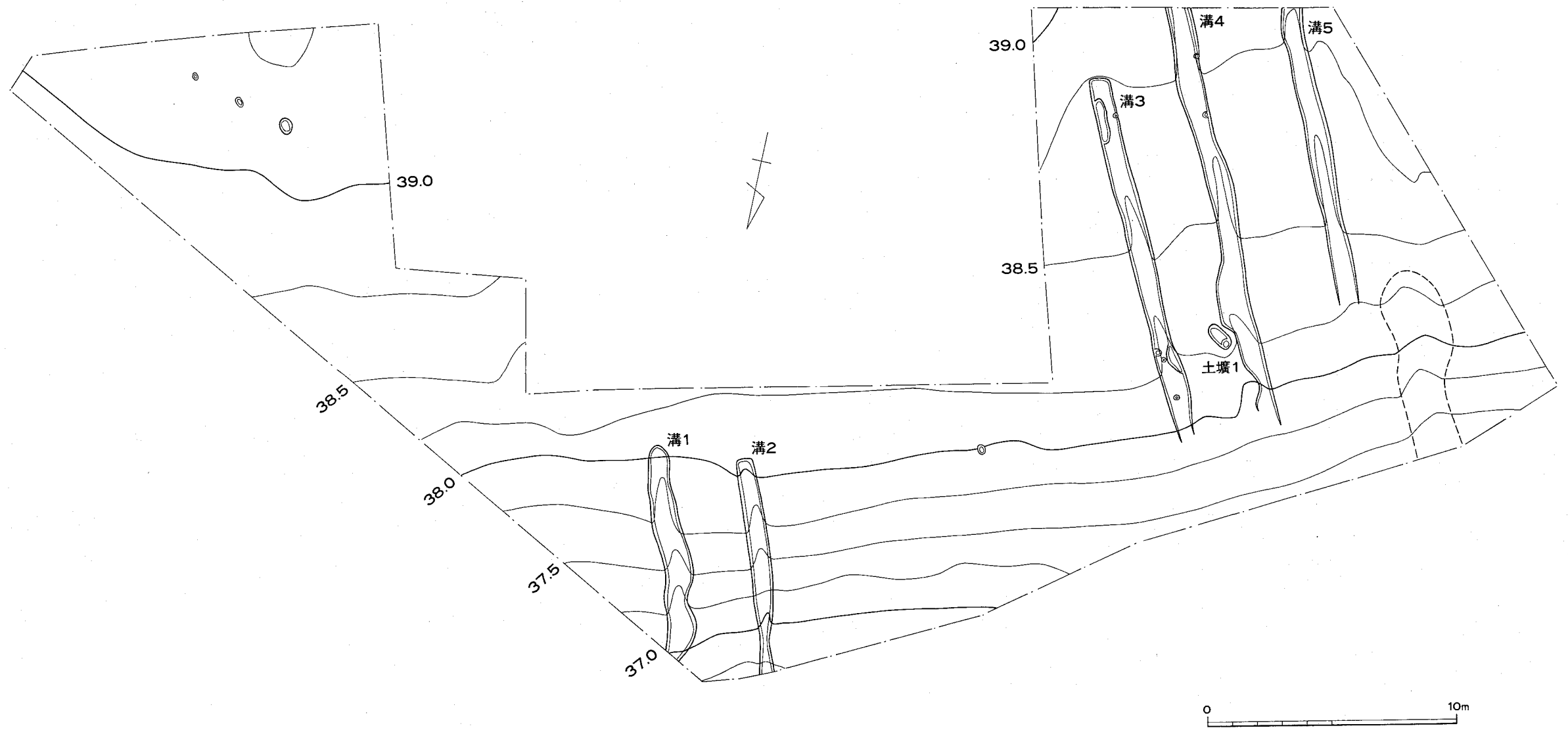
付図1 皆見遺跡、カワラケ田遺跡、下原遺跡発掘区地形図 (1/2,000)



付圖2 營兒遺跡遺構配置圖(1/250)



付図3 カワラケ田遺跡遺構配置図 (1/200)



付図4 下原遺跡遺構配置図 (1/200)